

郡家遺跡

第83次発掘調査報告書

2008

神戸市教育委員会

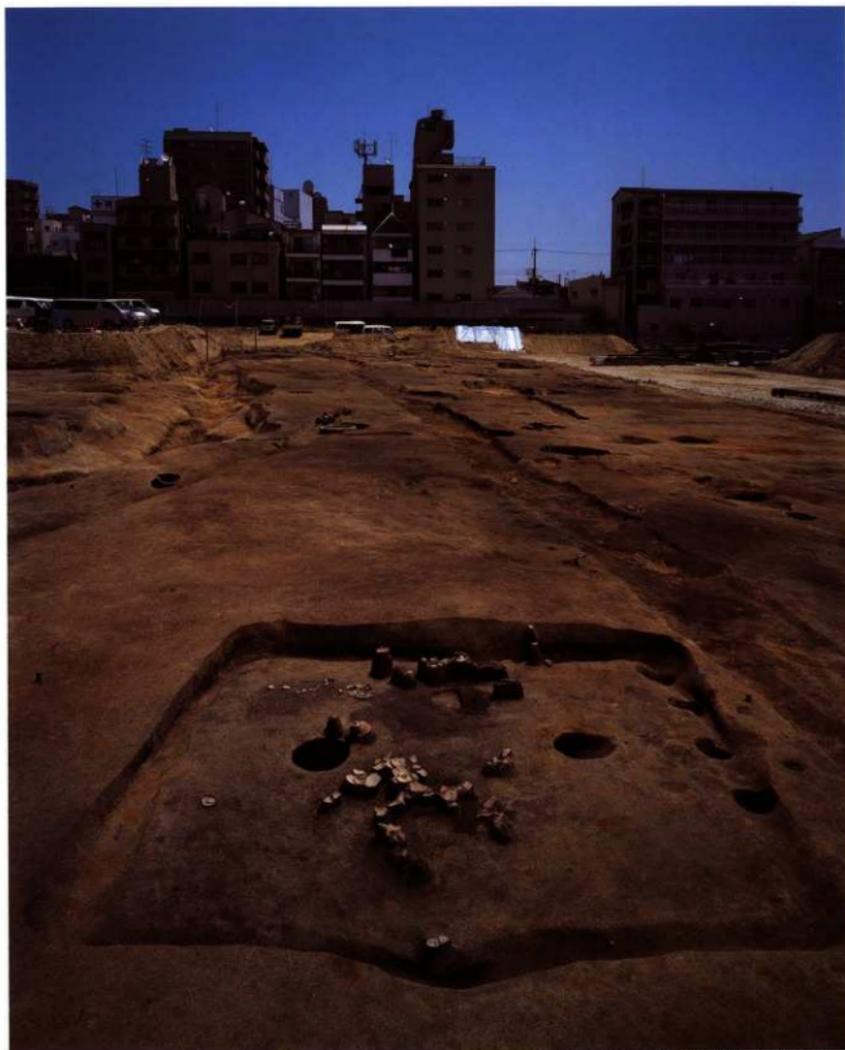


写真1 Ⅲ区竪穴建物201（手前）水路（左）西から



写真2 水路検出状況 西から



写真3 洪水砂による水田埋没状況 西から



写真4 洪水砂による水田埋没状況 北から



写真5 水田検出状況 北西から



写真6 水田検出状況 南から



写真7 II区土坑群検出状況 西から



写真8 土坑201土器出土状況 南から



写真9 IV区古墳時代遺構面全景 北東から



写真10 竪穴建物202検出状況 北東から



写真11 竪穴建物202かまど検出状況 南西から

郡家遺跡

第83次発掘調査報告書

2008

神戸市教育委員会

序文

東灘区にある阪神御影駅のホームに降り立って北を見渡すと、立ち並ぶビル群のかなたに、六甲山系の壮大なパノラマが広がっていることに皆さんはお気づきでしょうか？

名だたる高峰の神々しさとはまた異なる、柔らかくすべてを懐にかき抱くようなその姿は、わたしたちのふるさと神戸にとって六甲山こそ母なる山であると気付かせてくれます。しかしこののびやかにして静謐な風景も、街並みの進化とともにやがて見えなくなっていくのかもしれない。

はるか千数百年の昔、この六甲山の南麓を舞台にどのように人々の暮らしが営まれていたのかは、当時まだ文字で歴史を残す習慣がなかったため文献として知るすべはありません。しかしふるさとの大地は、いにしえの人々がつむいだ足跡を遺跡という形で長い時を超えて守り続けてきました。

遺跡が語る遠い昔の物語は、時に私たちの想像をはるかに超える邂逅と融和の物語であり、時に苦難と再生の物語でもあったようです。今を生きる私たちは、そこに多文化共生都市神戸の原風景を見出すことができるでしょう。それこそ文化財が持つ力なのです。

皆さんの心が何かを感じた時、遺跡という有限の産物は、文化財という無限の息吹をもった存在にはじめて生まれ変わることができるのです。

私たちの街神戸が、さらに懐の深い風格のある都市となるよう、そこに暮らすひとりひとりがもっと心豊かに暮らすことができるように、文化財の持つ力を昇華させることもまた、自治体にとって重要な役割と考えます。

「歴史を学ぶ」のではなく、「歴史に学ぶ」という視点で、はるか遠い時を超えて私たちの祖先が残したものを楽しみ、慈しんでくださることを願って本書を刊行いたしました。本書が皆さんのふるさと神戸の、未来へとつながる力を創り出す一助になれば、これ以上の幸いはありません。

例言

1. 本書は現住所・兵庫県神戸市東灘区御影中町3丁目地区の埋蔵文化財発掘調査報告書です。当該地区およびその周辺は、現在神戸市教育委員会文化財課によって「郡家遺跡」として認定および周知されています。
2. 本報告の調査は住友商事株式会社による商業施設建設を原因とするもので、神戸市教育委員会が平成19年4月9日から、平成20年3月31日まで実施したものです。
3. 本書で使用した方位は座標北を示し、水準値（標高）は東京湾中等潮位（T.P.）を表わしています。国立座標は世界測地系を用いています。
4. 本書に掲載されている出土遺物写真は、杉本和樹氏に撮影作業を委託して撮影されたものです。現地での遺構写真は主に文化財課主幹 丸山潔が撮影し、一部を調査担当学芸員 石島三和が撮影しました。
5. 本書の執筆・編集は神戸市教育委員会文化財課 学芸員 石島三和が担当し、木質遺物の項については中村大介が執筆しました。自然科学分析および第6章の執筆については俣バリノ・サーヴェイに作業を委託して行いました。
6. 調査全般にわたり丸山潔より指導・協力・教示を得ました。
現地での調査および出土遺物整理に際して、安田滋・黒田恭正の両名から協力と教示を得ました。六甲南麓の占環境および自然科学分析に関して、中村大介から教示を得ました。
7. 現地での発掘調査及び出土品の調査・修理作業は、調査原因者である住友商事株式会社および同社代理人である株式会社島田組の費用負担によって行われました。両社より文化財保護に関する理解と協力を得られましたことをここに記して、厚く御礼申し上げます。

目次

巻頭図版

扉

序文

例言

第1章 はじめに

1. 郡家遺跡が語るもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
3. 調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第2章 郡家遺跡の概要

1. 発掘調査の歴史と成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2. 遺跡周辺の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第3章 基本層序

1. 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
2. 第1遺構面・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
3. 第2遺構面・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第4章 遺構

1. 第2遺構面の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
2. 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
3. 水路・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
4. 水田・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
5. 土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (1) 土坑201・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (2) 土坑202・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (3) 土坑205・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (4) 土坑206・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (5) 土坑207・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (6) 土坑208・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
 - (7) 土坑209・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (8) 土坑210・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (9) 土坑211・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (10) 土坑213・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (11) 土坑214・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (12) 土坑215・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (13) 土坑216・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (14) 土坑217・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
6. 建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - (1) 竪穴建物201・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
 - (2) 竪穴建物202・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
 - (3) 竪穴建物203・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

(4) 竪穴建物204	29
(5) 竪穴建物205	29
(6) 平地式建物201	29
(7) 平地式建物202	29
(8) 平地式建物203	33
(9) 平地式建物204	33
(10) 平地式建物205	33
7. 溝状遺構	35
8. 第1遺構面の遺構	36
(1) 掘立柱建物101	36
(2) 方形区画101	37
9. I区の遺構	39

第5章出土遺物

1. 第2遺構面出土の土器	41
2. 上坑出土の土器	41
(1) 土坑201	41
(2) 土坑202	42
(3) 土坑間接合資料	44
(4) 土坑205	48
(5) 土坑203・土坑207・土坑208・土坑210	48
(6) 土坑206	49
(7) 土坑214	50
(8) 土坑215	50
(9) 土坑216	50
(10) 土坑217	52
(11) 土坑218	53
(12) その他の土坑等	53
3. 建物址出土の土器	54
(1) 竪穴建物201	54
(2) 竪穴建物202	54
(3) 平地式建物204	56
(4) 平地式建物205	56
(5) その他の建物址	58
(6) 建物址内の混入品	58
4. 溝状遺構出土の土器	58
(1) 溝状遺構201	58
5. 水路出土の土器	59
(1) 水路北岸土器群	62
(2) 水路内堆積層	62
6. その他の土器	63
(1) 第1遺構面出土の土器	63
(2) 包含層および洪水性堆積層	63
(3) 韓式系土器	63
(4) 製塩土器	64

(5) 器台	64
7. 土器以外の遺物	64
(1) 玉類	64
(2) 砥石	66
(3) 木質遺物	83

第6章 自然科学分析 (パリオ・サーヴェイ株式会社)

はじめに	85
1. 試料	85
2. 分析方法	85
3. 結果	86
4. 考察	98
5. 小結	102

第7章 結語

1. 一括出土資料に見る六甲南麓古墳時代土師器の様相	117
(1) はじめに	117
(2) 土師器の形式および型式	118
(3) 器種構成	124
(4) 時間的併行関係	125
(5) 段階ごとの様相	125
(6) 変化と画期	127
(7) 小結	128
2. 郡家遺跡における古墳時代集落の形成と発展	129
(1) はじめに	129
(2) 祭祀か、投棄か-土坑の機能-	129
(3) 住居か、それ以外か-建物の機能と年代および時期差-	135
(4) 集落の変遷-水田、植生、自然災害-	138
(5) 韓式系土器-結びにかえて-	140

巻頭図版目次

巻頭図版 1

写真 1 竪穴建物201(手前)水路(右)ほか 東から

巻頭図版 2

写真 2 水路検出状況 西から

巻頭図版 3

写真 3 洪水砂による水田埋没状況 西から

写真 4 洪水砂による水田埋没状況 北から

巻頭図版 4

写真 5 水田検出状況 北西から

写真 6 水田検出状況 南から

巻頭図版 5

写真 7 II区土坑群検出状況 西から

巻頭図版 6

写真 8 土坑201 土器出土状況 南から

巻頭図版 7

写真 9 IV区古墳時代遺構面全景 北東から

巻頭図版 8

写真10 竪穴建物202検出状況 北東から

写真11 竪穴建物202かまど検出状況 南西から

写真図版目次

P.L. 1

写真12 II区水路(左)竪穴建物201(右)検出状況
西から

写真13 II区水路内木質遺物出土状況 北西から

P.L. 2

写真14 III区水路検出状況 南から

写真15 IV区水路北岸検出状況 西から

P.L. 3

写真16 II区土坑201土器出土状況 南から

写真17 II区土坑202(手前)土坑205(奥)土器出土状況
東から

P.L. 4

写真18 II区土坑202土器出土状況 東から

P.L. 5

写真19 II区水路(右)溝状遺構201(左)検出状況
東から

写真20 III区竪穴建物201土器出土状況 西から

P.L. 6

写真21 IV区竪穴建物202検出状況 南から

写真22 IV区竪穴建物203検出状況 南西から

P.L. 7

写真23 IV区土坑215 韓式系土器出土状況 北から

P.L. 8

写真24 III区溝状遺構201 土器出土状況 北東から

P.L. 9

写真25 調査地全景(空中写真・モザイク)

P.L.10

写真26 第2遺構面出土土器

P.L.11

写真27 土坑201出土土器

写真28 土坑202出土土器

P.L.12

写真29 土坑214出土土器

写真30 土坑215出土土器

P.L.13

写真31 土坑206出土土器

写真32 溝状遺構201出土土器

P.L.14

写真33 竪穴建物201出土土器

写真34 竪穴建物202出土土器

P.L.15

写真35 III区水路 木質遺物出土状況 南西から

P.L.16

写真36 IV区水路北岸土器群出土状況 南西から

写真37 IV区水路北岸土器群出土状況 西から

写真38 IV区水路北岸土器群出土状況 北西から

写真39 IV区水路北岸土器群出土状況 北西から

P.L.17

写真40 IV区水路北岸土器群検出状況 南西から

写真41 IV区水路北岸土器群検出状況 南西から

P.L.18

写真42 III区水田 畦畔および水口検出状況 北西から

P.L.19

写真43 V区水田検出状況 北西から

写真44 V区水田大畦畔検出状況 南から

P.L.20

写真45 III区水田 畦畔検出状況 北東から

写真46 III区水田 畦畔検出状況 北東から

写真47 III区水田 畦畔検出状況 北東から

写真48 III区水田 人足跡痕検出状況 北西から

P.L.21

写真49 III区水田 水口検出状況 北東から

写真50 V区水路内堆積状況(北壁) 南から

P.L.22

- 写真51 III区竪穴建物201(手前)水路(中)水田(奥)
西から

P.L.23

- 写真52 III区竪穴建物201土器出土状況 北から
写真53 III区竪穴建物201完掘状況 東から

P.L.24

- 写真54 IV区竪穴建物202かまど及び炭化材検出状況
北西から

P.L.25

- 写真55 IV区竪穴建物202かまど検出状況 南西から
写真56 IV区竪穴建物202かまど 支脚柱出土状況
南西から

P.L.26

- 写真57 IV区竪穴建物203炭化材検出状況 北西から
写真58 IV区竪穴建物203完掘状況 北から

P.L.27

- 写真59 IV区竪穴建物204完掘状況 西から
写真60 IV区竪穴建物205完掘状況 南から

P.L.28

- 写真61 IV区平地式建物201・202(左奥・左)竪穴建物
203(右)土坑215(右奥)検出状況 西から
写真62 IV区平地式建物201検出状況 北から

P.L.29

- 写真63 V区平地式建物205土器検出状況 北西から
写真64 V区平地式建物205完掘状況 北西から

P.L.30

- 写真65 V区平地式建物205土器出土状況 北から
写真66 V区第2遺構面全景 東から
写真67 V区水田検出状況 西から
写真68 II区土坑群検出状況 西から

P.L.31

- 写真69 II区土坑202(手前)土坑205(奥)検出状況
東から
写真70 II区土坑202完掘状況 南から
写真71 II区土坑206土器出土状況 西から

P.L.32

- 写真72 II区土坑207土器出土状況 西から
写真73 II区土坑211土器出土状況 南東から
写真74 IV区土坑214土器出土状況 南東から

P.L.33

- 写真75 IV区土坑214・土坑213検出状況 南から
写真76 IV区土坑216土器出土状況 北東から
写真77 IV区土坑217土器出土状況 南から

P.L.34

- 写真78 IV区第1遺構面全景(手前は掘立柱建物101)
南から

P.L.35

- 写真79 IV区掘立柱建物101-22 土器出土状況 東から
写真80 IV区第1遺構面 南東から
写真81 V区第1遺構面全景 東から

P.L.36

- 写真82 V区方形区画土器出土状況 南東から
写真83 I区第1遺構面全景 南から
写真84 I区第2遺構面全景 南から

P.L.37

- 写真85 土坑201出土土師器 甕
写真86 土坑201出土土師器 甕
写真87 土坑201出土土師器 甕
写真88 土坑201出土土師器 甕
写真89 土坑201出土土師器 甕
写真90 土坑201出土土師器 甕

P.L.38

- 写真91 土坑201出土土師器 甕
写真92 土坑201出土土師器 甕
写真93 土坑201出土土師器 甕
写真94 土坑201出土土師器 甕
写真95 土坑201出土土師器 甕
写真96 土坑201出土土師器 甕
写真97 土坑201出土土師器 甕
写真98 土坑201出土土師器 甕

P.L.39

- 写真99 土坑201出土土師器 甕
写真100 土坑201出土土師器 甕
写真101 土坑201出土土師器 鉢
写真102 土坑201出土土師器 鉢
写真103 土坑201出土土師器 小型丸底甕
写真104 土坑201出土土師器 小型丸底甕
写真105 土坑201出土土師器 小型丸底甕
写真106 土坑201出土土師器 小型丸底甕

P.L.40

- 写真107 土坑201出土土師器 小型器台
写真108 土坑202出土土師器 甕
写真109 土坑202出土土師器 甕
写真110 土坑202出土土師器 甕
写真111 土坑202出土土師器 甕
写真112 土坑202出土土師器 甕
写真113 土坑202出土土師器 甕

P.L.41

- 写真114 十坑202出土土師器 壺
 写真115 十坑202出土土師器 壺
 写真116 十坑202出土土師器 壺
 写真117 十坑202出土土師器 壺
 写真118 十坑202出土土師器 壺
 写真119 十坑202出土土師器 壺

P.L.42

- 写真120 十坑202出土土師器 壺
 写真121 十坑202出土土師器 高坏
 写真122 十坑202出土土師器 鉢
 写真123 十坑202出土土師器 鉢
 写真124 十坑202出土土師器 小型丸底壺
 写真125 十坑202出土土師器 小型丸底壺
 写真126 十坑202出土土師器 小型器台
 写真127 十坑202出土土師器 小型鉢
 写真128 十坑202出土土師器 小型台付鉢

P.L.43

- 写真129 十坑201-202接合資料 土師器壺
 写真130 十坑201-202接合資料 土師器壺
 写真131 同上 底部穿孔
 写真132 十坑202-205接合資料 土師器壺
 写真133 十坑201-202接合資料 土師器壺
 写真134 七坑201-202接合資料 土師器壺

P.L.44

- 写真135 十坑206出土土師器 壺
 写真136 十坑206出土土師器 高坏
 写真137 十坑206出土土師器 高坏
 写真138 十坑206出土土師器 無頸壺
 写真139 十坑214出土土師器 小型丸底壺
 写真140 十坑214出土土師器 小型丸底壺
 写真141 十坑214出土土師器 鉢

P.L.45

- 写真142 十坑214出土土師器 小型土器
 写真143 十坑214出土土師器系土器 壺
 写真144 十坑214出土土師器系土器 壺
 写真145 十坑205出土土師器 壺
 写真146 十坑206出土土師器 壺
 写真147 十坑208出土土師器 壺
 写真148 十坑208出土土師器 壺 (近江系)

P.L.46

- 写真149 十坑216出土土師器 壺
 写真150 十坑216出土土師器 高坏
 写真151 十坑216出土土師器 高坏
 写真152 十坑217出土土師器系土器 鉢

- 写真153 十坑216出土土師器 ミニチュア土器
 写真154 十坑217出土土師器 鉢
 写真155 十坑217出土土師器 鉢
 写真156 堅穴建物201出土土師器 壺

P.L.47

- 写真157 堅穴建物201出土土師器 壺
 写真158 堅穴建物201出土土師器 高坏
 写真159 堅穴建物201出土土師器 高坏
 写真160 堅穴建物201出土土師器 壺
 写真161 堅穴建物201出土土師器 鉢
 写真162 堅穴建物202出土土師器 壺
 写真163 堅穴建物202出土土師器 鉢

P.L.48

- 写真164 堅穴建物202出土土師器 高坏
 写真165 堅穴建物202出土 製塩土器
 写真166 堅穴建物204出土土師器 小型丸底壺
 写真167 堅穴建物204出土土師器 (混入品) 鉢
 写真168 堅穴建物204出土土師器 (混入品) 壺
 写真169 溝状遺構201出土土器 壺
 写真170 溝状遺構201出土土器 壺

P.L.49

- 写真171 溝状遺構201出土土器 壺
 写真172 溝状遺構201出土土器 壺 (近江系)
 写真173 溝状遺構201出土土器 高坏
 写真174 溝状遺構201出土土器 高坏
 写真175 溝状遺構201出土土器 小型丸底壺
 写真176 韓式系土器

P.L.50

- 写真177 平地式建物205出土紡錘車
 写真178 玉瓶
 写真179 堅穴建物202-1柱穴出土 砥石
 写真180 十坑214出土 砥石
 写真181 掘立柱建物101-22柱穴出土土師器
 写真182 方形区画出土須志器 提瓶
 写真183 方形区画出土須志器 提瓶
 写真184 方形区画出土須志器 瓶

P.L.51

- 写真185 第2遺構面出土韓式系土器
 写真186 水路出土木質遺物

第1章 はじめに

1. 郡家遺跡が語るもの

古墳時代の六甲南麓は、どんな社会だったのだろうか？

私たちの暮らす神戸市は、市域のちょうど中央を背骨のように六甲連山が東西に貫いている。この山々の南側は六甲南麓と呼ばれ、古来より一まとまりの文化圏を形成してきたと考えられている。

六甲山を境に南には大阪湾に向かって広がる沖積地が形成されているが、この大地も六甲山から幾筋も海に向かって南流する河川が、長い年月をかけて運んだ土砂の堆積作用によって形成されたものだ。

六甲南麓に人が住み始めたのは、はるか旧石器時代にまでさかのぼると言われている。当初人々は、山あいの森を中心に、獣を追い、森の幸を求めて木立の間を駆け抜ける暮らしをおくっていたらしい。やがて農耕技術を獲得するころには、次第に山地から低地へと人々の生活の場は移り、山間部から、麓および海までの間の低地へ向かって人々の生活圏は徐々に広がっていった。

現在の六甲南麓は神戸でも「旧市街地」と呼ばれ、早くに都市開発が進んだ一帯と認識されているが、大阪湾に面し、気候穏やかなこの地は近代のみならず、はるか大昔から人が暮らすのに適していたのかもしれない。

そして弥生時代を経て古墳時代—日本列島の広範な地域に覇権をおよぼす政治集団が大和、現在の奈良盆地のあたりに生まれたころ—には、早々にこの政治集団の勢力圏となっていたことが、六甲南麓に残されたいくつかの前期古墳の様相からわかっている。これは瀬戸内海と奈良盆地をつなぐ海路の中継地として、海上交通の要衝であったためであろう。

六甲南麓を勢力圏に治めることで、大和政権は大陸の先進技術や文化につながる西の海への交通網を掌握したのである。

本書は、古墳時代の六甲南麓に生きた人々が残した集落遺跡、郡家遺跡の発掘調査報告書である。

今日私たちのよって立つこの大地の奥深くには、さまざまな時代の遺跡が静かに眠っている。郡家遺跡もこれら六甲南麓の大地に残された祖先の足跡のひとつである。

早くに大和政権の勢力圏に組み込まれていたであろう六甲南麓地域ではあるが、そこには歴史の教科書に見るような、典型的ともいえる当時の社会状況をうかがわせる要素もあれば、一方でこの地域ならではの発展過程や歴史も刻まれていたことが、今回の発掘調査からは垣間見えた。

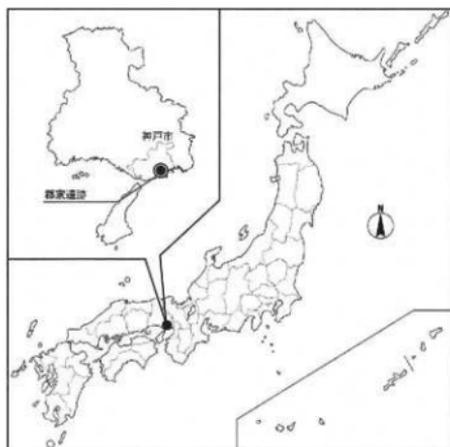


図1 郡家遺跡の位置

彼らは災害や天変地異に見舞われながら、懸命に生きた。また精力的に大地を耕し、集落を拡大していこうとしたようである。

今回の調査は広範な郡家遺跡の、そして六甲南麓の中のごく小さな点に過ぎないが、今から千数百年前の過去をうかがい知るための雄弁な窓であり、未来への羅針盤でもある。

古墳時代の六甲南麓は、どんな社会だったのだろうか？

この問いかけは単なる有閑な人物の知的好奇心を満たすための問いかけではない。私たちの暮らす神戸が、どのように成り立ち、過去に何が起こったかを常に意識することで、これから訪れる様々な困難に立ち向かい、都市の未来を形づくるための力を得ることができるだろう。

特に未来に生きる若い人々には、はるか千数百年の昔この地で何があったか知っていて欲しいと強く願う。遺跡が語る過去の物語は、未来を映す鏡である。そして若者たちからまた次の世代へと受け渡していくべきものだと感じてもらえるよう、自治体は当時の社会がどのような姿をしていたのか、発掘調査をおとして克明に描き出し、その価値を人々に伝える使命を帯びている。

本書がどれほど克明に当時の社会を描きだせたかについては、筆者の力量不足と、様々な制約下での行政発掘調査でもあり自信に欠けるむきはあるが、せめて本書が今そこに暮らす人々が、その地の過去に思いをいたす契機になればと思う。

古墳時代の六甲南麓は、どんな社会だったのだろうか？

今回の調査が語るその答えは、繁栄と衰退、技術革新と災害、そして異邦人との邂逅と、私たちの想像よりはるかに多様性に満ちた社会であったようだ。しかも今回の調査は、郡家遺跡のごく一部を解明したに過ぎない。この問いかけに対するさまざまな答えを内包しながら、今も郡家遺跡は華やかな市街地の地下深く、静かに眠っている。

	注記遺構番号	報告書掲載名		注記遺構番号	報告書掲載名	
土坑	2区SK201	上坑201	住居址	3区SB201	竪穴建物201	
	2区SK202	上坑202		4区SB206	竪穴建物202	
	2区SK203	上坑203		4区SB204	竪穴建物203	
	2区SK204	上坑204		4区SB205	竪穴建物204	
	2区SK205	上坑205		4区SB203	竪穴建物205	
	2区SK206	上坑206		4区SB202	平地式建物201	
	2区SK207	上坑207		4区SB201	平地式建物202	
	2区SK208	上坑208		4区SB207	平地式建物203	
	2区SK209	上坑209		5区SB201	平地式建物204	
	2区SK210	上坑210		5区SB202	平地式建物205	
	2区SK211	上坑211		溝	3区SD201	溝状遺構201
	3区SK212	上坑212			2区SD202	溝状遺構202
	4区SK205	上坑213		用途不明 遺構	2区SX201	SX201
	4区SK208	上坑215			2区SX202	SX202
	4区SK201	上坑216			2区SX203	SX203
	4区SK204	上坑217			2区SX204	SX204
	4区SK206	上坑218			4区SX201	SX205
	4区SK207	上坑219			5区SB203	SX206
	4区SK203	上坑214			5区SD201	SX207
	5区SK201	上坑221			2区SX205	SX208
	5区SK202	上坑222				
	5区SK203	上坑223				
	5区SK204	上坑224				
5区SK205	上坑220					

表1 郡家遺跡第83次調査 遺構番号対応表 (II~IV区第2遺構面)

2. 調査に至る経緯

本書で報告する郡家遺跡第83次発掘調査は、現住所神戸市東灘区御影中町3丁目において平成19年度に実施されたもので、同地に所在した市立御影工業高校跡地の売却および開発事業を契機とする。

神戸市教育委員会では工業高校跡地売却後の開発事業主である住友商事株式会社および同社代理人・株式会社島田組との間で平成16年より、工事対象地での埋蔵文化財調査に関する協議を行い、さらに試掘調査によって発掘調査が必要な範囲の確定作業を行った。その結果図2に示した範囲については埋蔵文化財が存在するため、開発行為の際は事前に記録保存のための発掘調査が必要であると決定した。工事対象地の内、調査が必要でないと回答した部分については、御影工業高校をはじめとする従前の建物、あるいは近世以降の耕作に伴いよりすでに文化財を包蔵する地層が失われている部分である。

現地での調査は平成19年4月9日～同年8月24日まで実施した。また現地調査と平行して西区靴台に所在する神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理および調査を行い、平成20年3月末日報告書の刊行をもって郡家遺跡第83次調査に関する全ての調査作業を完了した。



図2 調査地位置図 (S=1/2,500)

現地での調査は開発事業と同時進行で進められたため、工程の便宜上調査対象範囲を図3に示す通りⅠ～Ⅴ区までに5分割した上で順次行った。Ⅰ区については他の調査区と独立しており、Ⅱ～Ⅴ区に先行して行われたものだが、Ⅱ～Ⅴ区については連続する一つの範囲であるため本書ではⅡ～Ⅴ区については一括して報告している。遺構番号についても報告書編集の段階で整理作業を行い、Ⅱ～Ⅴ区をとおして一連の番号を改めて付した。したがって調査進行中の仮称と異なる番号で報告されている遺構も多いため、表1として遺構番号対応表を掲示しておく。

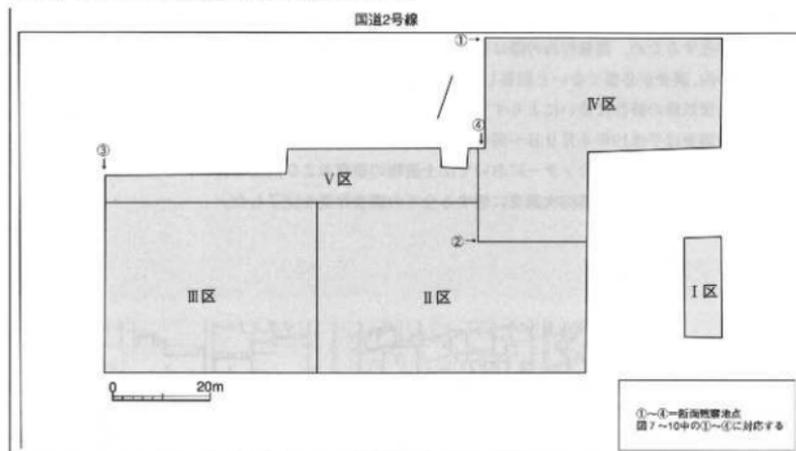


図3 調査区配置図 (S=1/2,000)

3. 調査組織

那家遺跡第83次調査における調査組織は以下の通りである。

神戸市文化財保護審議会

- 植上 重光 前神戸女子短期大学教授
- 工藤 善通 大阪府茨山池博物館館長
- 和田 晴吾 立命館大学教授

神戸市教育委員会事務局

- 教育長 小川 雄三
- 社会教育部長 黒住 幸久
- 参事 柏木 一孝 (文化財課長事務取扱)
- 主幹 丸山 薫 (埋蔵文化財指導係事務取扱)

文化財課 埋蔵文化財調査係

- 係長 千種 浩
- 調査担当学芸員

石島 三和 (Ⅱ～Ⅴ区) 阿部 功 (Ⅱ～Ⅴ区) 中谷 正 (Ⅰ～Ⅱ区)

出土品調査・整理担当学芸員 保存科学担当学芸員

黒田 基正・石島 三和 中村 大介

第2章 郡家遺跡の概要

1. 発掘調査の歴史と成果

郡家遺跡という遺跡が世に知られるようになった歴史は古く、初めて発掘調査が行われたのは1978年（昭和53年度）にまで遡る。以後30年余り、主に土地開発事業に伴って中・小規模な発掘調査が繰り返されてきた。本書で報告する発掘調査は初回から数えて83次日にあたる。

現在神戸市教育委員会では図5に示した部分に埋蔵文化財が包蔵されているものとして、これを「周知の遺跡の範囲」として扱っている（2008年度現在）。その規模南北1,000m、東西1,200m、約1,200,000㎡を測り、市内でももっとも大規模な集落遺跡の一つであるといえよう。

「ぐんげ」遺跡というその名が示すごとく、はじめて発掘調査が行われた当時、奈良時代の官衙遺跡なのではないかと予測されていた。しかし今日までの発掘調査成果から明らかになってきた郡家遺跡とは、奈良時代の遺構よりも、古墳時代を中心とした遺構のほうが多いことがわかってきている。

郡家遺跡に残された集落の萌芽がいつであったのかを確定することは難しいが、これまでの調査結果を総合すると、少なくとも弥生時代中期～後期には一定規模の集落としての形成をすでにみていると考えてよいだろう。

郡家遺跡では遺跡中の広い範囲で、弥生時代後期の住居址が発見されている例が複数ある。おなじく弥生時代後期の方形周溝墓も御影町御影中町および御影町御影城ノ前などを中心に見つかっており、今後既述の調査成果を総合して、弥生時代の居住域や墓域といった生活空間の復元を試みるべきであろう。

古墳時代の遺構はさらに数が多く、やはり御影町御影中町および御影町御影城ノ前付近を中心に古墳時代中期～後期の住居址などが発見されている。このことから集落は弥生時代中期以降発展の方向をたどり、古墳時代中期～後期にかけて最盛期を迎えたと考えられる。

またこの時期郡家遺跡の東に隣接する住吉町遺跡で大規模な古墳群が造営されているが、郡家遺跡の集落の発展と住吉町遺跡の古墳群の造営期間とがほぼ軌を一にすることから、両者は同一集団による居住域と墓域として密接な関係にあり、遺跡群としての包括的な視点でとらえるべきものであると思われる。

奈良時代、中世などの遺構も見つかっていることから、集落自体は長期にわたり存続したようだが、集落の規模は古墳時代中期頃がもっとも大きかったと見てよいだろう。

ただし古代山陽道が近く兎原郡衙の推定所在地と考えられているため、今後の古代遺構の発見にも期待が残るが、官衙遺構のものはまだみつかっておらず、今のところ候補地にとどまるものである。

2. 遺跡周辺の歴史

上記のように、これまでに行われた発掘調査の成果から、弥生時代中期～後期には一定程度集落としての形成をみていると考えられる郡家遺跡だが、本節ではこの時期の日本社会、ひいては郡家遺跡が位置する六甲南麓がどのような様相を呈していたかと照らし合わせてみよう。なお六甲南麓とは、広域には神戸市域を超えて東は芦屋市までも包括するが、本章ではとりあえず市内を中心に見ていくこととする。

弥生時代中期から後期は、古代国家形成期の前段階として、日本の社会にある種の騒乱が発生していたと見る研究が数多くなされている。いわば広域な規模で覇権争いが各地で起こっていたと考えられるが、その過程で「高地性集落」と呼ばれる特異な集落が多く営まれたといわれている。

大規模な水田経営による収穫の安定が社会を飛躍的に発展させた弥生時代の開始（従来の研究では紀元前300年頃。最新の研究では紀元前750年頃とも言われる）から数百年たった弥生時代中期ごろ、低湿地を選んで水田経営を続けていた人々が、標高数百m級の枯れた土地、およそ水田には向かない高地に集団で移動した痕跡が、この高地性集落であると言われている。人々は相次ぐ集団間の武力抗争に備え、防備のため地の利のある高地に集落を営んだのではないかと考えられおり、このような集落が弥生時代中期以降西日本を中心に広がり、徐々に東日本から北日本へと分布していったとみられる。この現象から、当時西から東へ全国規模で覇権をめぐる戦乱が広がっていった証であるとされている。

神戸市内にもこの時期多くの高地性集落が残されているが、邪家遺跡の位置する六甲山南麓も特に分布が顕著な地域である。現在わかっているだけでも伯母野山遺跡、桜ヶ丘B遺跡、荒神山遺跡、金島山遺跡、保久良神社境内遺跡、東山遺跡と6ヵ所もの高地性集落が確認されている。また高地性集落の消長と軌を一にして六甲山南麓では銅鐸や銅矛などの青銅器が埋納された痕跡が多く見つっている。青銅器は弥生時代、集団の祭器として用いられたものと考えられており、多数の青銅器がまとめて山中に葬られたのは、複数の集団があらたに合体してひとつにまとめられたことの証ではないかと見る向きがある。これらの現象から、六甲山南麓では、弥生時代中期から後期にかけて、汎日本的な国家形成にむけての社会騒乱の例に漏れず、集団間の抗争と再編成が起きていたのではないかと見られている。

この現象を集落立地という視点から見ると、弥生時代前期に海岸線に近い低地を中心に営まれていた集落が、中期以降高地性集落と平地の拠点集落に別れ、山中と海岸線付近での青銅器の埋納現象が起こり、やがて古墳時代に至るという流れである。

弥生時代に続く「古墳時代」とは「古墳」に象徴される時代、すなわち古墳が築かれた時代を指すが、ここでいう古墳とは、単なる死者の奥つ城ではなく、大和地方に成立した権力集団の規制の下に展開された墓制であり、社会構造の一端を示すものとしてとらえられる。つまり前方後円墳という形態の墓を営む行為自体が、大和政権の構成員である身分を誇示することに他ならない。六甲山麓地域にも古墳時代前期の早い段階で、西求女塚古墳、処女塚古墳、東求塚古墳、ヘボソ塚古墳など、多数の前方後円墳、あるいは前方後方墳が造営されており、この地方が弥生時代の騒乱を経て台頭してきた大和政権の勢力化に、早い段階で組み込まれていたことの証とみてよいだろう。

これらの前期古墳からは三角縁神鏡と呼ばれる青銅鏡が出土しており、これもまた大和政権から勢力下の地方豪族首長に下賜された品であるといわれている。以上のことから古墳時代の六甲山麓では弥生時代の集団間抗争のち大和政権というさらに大きな権力構造の下に認められた人物が、統治者として存在するようになったと考えられるのである。

この時期の集落立地を追ってみると、弥生時代後期の集落分布と比較して、集落そのものの数は減少していることがわかる。これは人口の減少ではなく、複数の集落が集約され大規模化したもので、集落立地からも集団の再編成の過程が読み取れるとみてよい（図4）。

六甲山麓の主な古墳時代前期集落としては、本書で報告する邪家遺跡をはじめ、住吉宮町遺跡、日苅遺跡などがあげられる。これらの集落は弥生時代から継続して存在するものだが、集団の統合により古墳時代以降は発展段階に入っていく集落である。

以上のように早くより大和政権の勢力化にあった古墳時代の六甲山麓だが、その理由のひとつには、奈良盆地から難波を経て武庫津へ、さらに瀬戸内海航路から西国へいたる海路の中継地を擁していた事が上げられる。大和政権にとってこの地を掌握することが、西から来る先進的な文物の取得に欠かせなかった。古墳時代以前から六甲山麓は、海を隔てた大阪湾沿岸との情報・物流の往来が盛んであり、西国から半島・大陸への海路もすでに確立していたと考えられる。しかし古墳時代社会の形成には、この

海を越えてやってくる存在こそが大きく作用し原動力となった。特にこの時代、文物・情報以外にも、多くの人間が海を越えて列島を訪れたといわれている。「渡来人」あるいは「帰化人」と呼ばれる人々がそれである。

もちろん大陸・半島からの人間の移動は古墳時代にかぎらず不断にあった。しかし古墳時代の移動はそれまでの個人的あるいは小集団での移住ではなく、半島内での政治的緊張という圧力に押し出される形で氏族単位の集団移動であり、受け入れる列島の側でもまた、大和政権による組織的な受容という現象が起こっているのである。

8世紀に編纂された『日本書紀』によると、古墳時代の日本列島には大きく分けて三回、①心神紀②雄略・欽明紀③天智・天武・持統紀に、半島からの集団移動が集中する時期があったとされている。実年代で①4世紀末②5世紀末～6世紀初頭③7世紀後半にあたるが、彼らは大和政権に対し集団で臣下に帰附し、自らの持つ先進的な知識・技術を列島内に広く定着させることに寄与したといわれている。

これは人間の公的な大規模移住という形で大和政権が大陸文化を吸収していく過程であり、西日本各地に広く残る渡来人伝承はその名残である。彼らは帰化の後、ふたたび渡来系氏族として各地に分散していったと考えられているが、文献学的、考古学的にもその足跡を追うことができる。

渡来系氏族の移住地として知られるのは河内や大和、近江などが代表的であるが、これらの地域では韓式系土器ほか渡来人の痕跡を濃厚に示す遺跡も多く発見されている。六甲南麓の近在では播磨国風土記、摂津国風土記逸文などにその足跡が記されており、やはり韓式系土器の出土や渡来系の構造をもつ建物址などの発見される遺跡がある。特に古墳時代中期末～後期初頭に特に韓式系土器を出土する遺跡の存在が顕著で、郡家遺跡、森北町遺跡、本山北遺跡などが当該時期の韓式系土器を出土することで知られている。これら六甲南麓に残された渡来系文化の痕跡には、ある程度集団での移住が背景にあるものと見られているが、それが渡来系一世なのか、帰化ののち世代を経た二世や三世であるのか、はたまた私的な流入によるものかは定かではない。しかし出土するのは河内あるいは大和のような直輸入ではなく、「韓式」を模倣して在地で作られた「韓式系」土器が主体であることから、河内・大和とは異なる形で渡来系文化受容の形が存在したのではないかと考えられる。

本書で報告する郡家遺跡第83次発掘調査においても、これまでとおなじく、あるいはこれまで以上に濃密な韓式系土器の出土をみた。その時期は②の5世紀末～6世紀初頭に該当すると考えられる。このことから公的か私的はともかく、おそらくは半島での社会的圧力に押し出されたある集団が、一定の渡来系文化を保持したまま六甲南麓にたどり着き、古墳時代集落の形成・発展に関わったと考えるに足らないだろうか。六甲南麓に渡来系集団が現れる現象をどのように捉えるかを突き詰めると、研究者によって解釈の分かれるところであろうが、ここまで述べたように、六甲南麓の弥生時代・古墳時代の発展過程は大和地方を震源地とする汎日本的な社会変革との密接な関わりによって形成されてきたものである。海を隔てて彼地と向かい合い、また海を通じて西国から半島・大陸にまで通じているという地理的条件が、六甲南麓の古墳時代社会を形成する上で大きく作用した。そしてそれはこの時代に限らず、その後も此地の運命を左右する要因であり続ける。

〈参考文献〉

- 石野 博信『古墳時代を考える』2006 雄山閣
 平野 邦男『帰化人と古代国家』2007 吉川弘文館
 神戸市教育委員会『西求女塚古墳 発掘調査報告書』2004

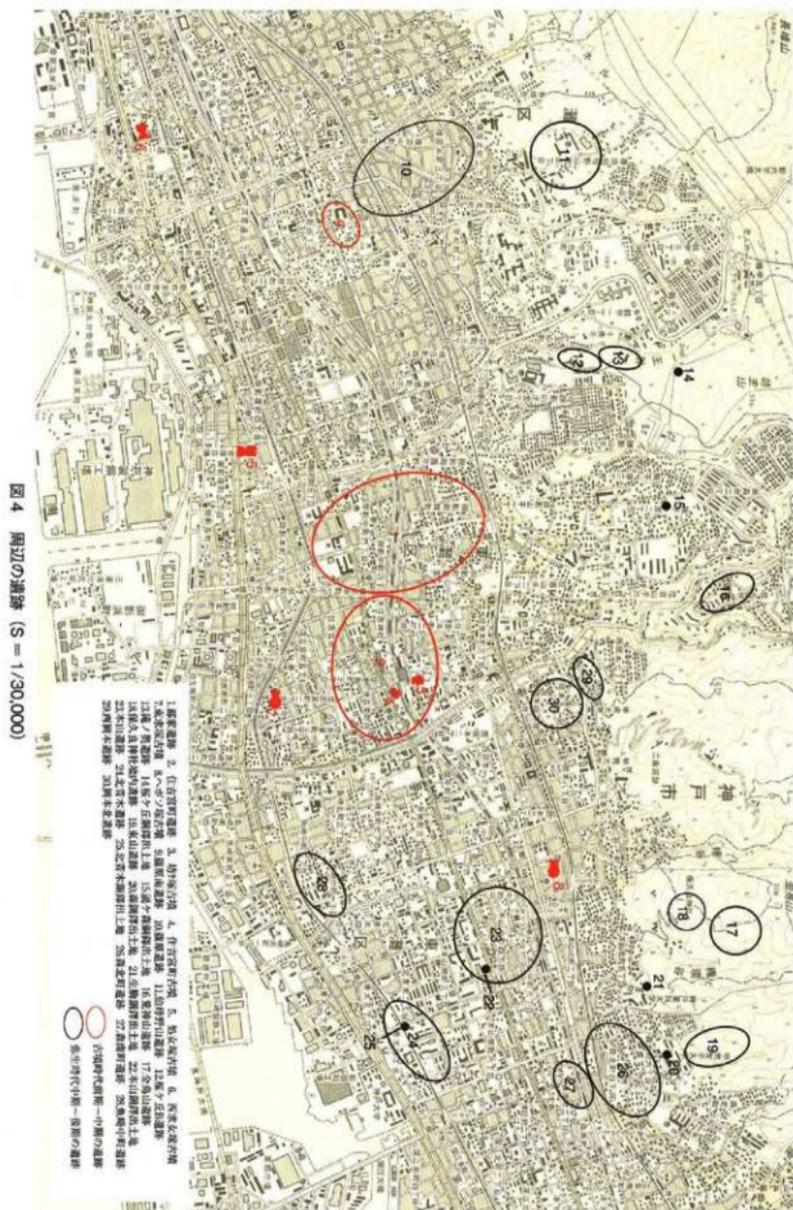
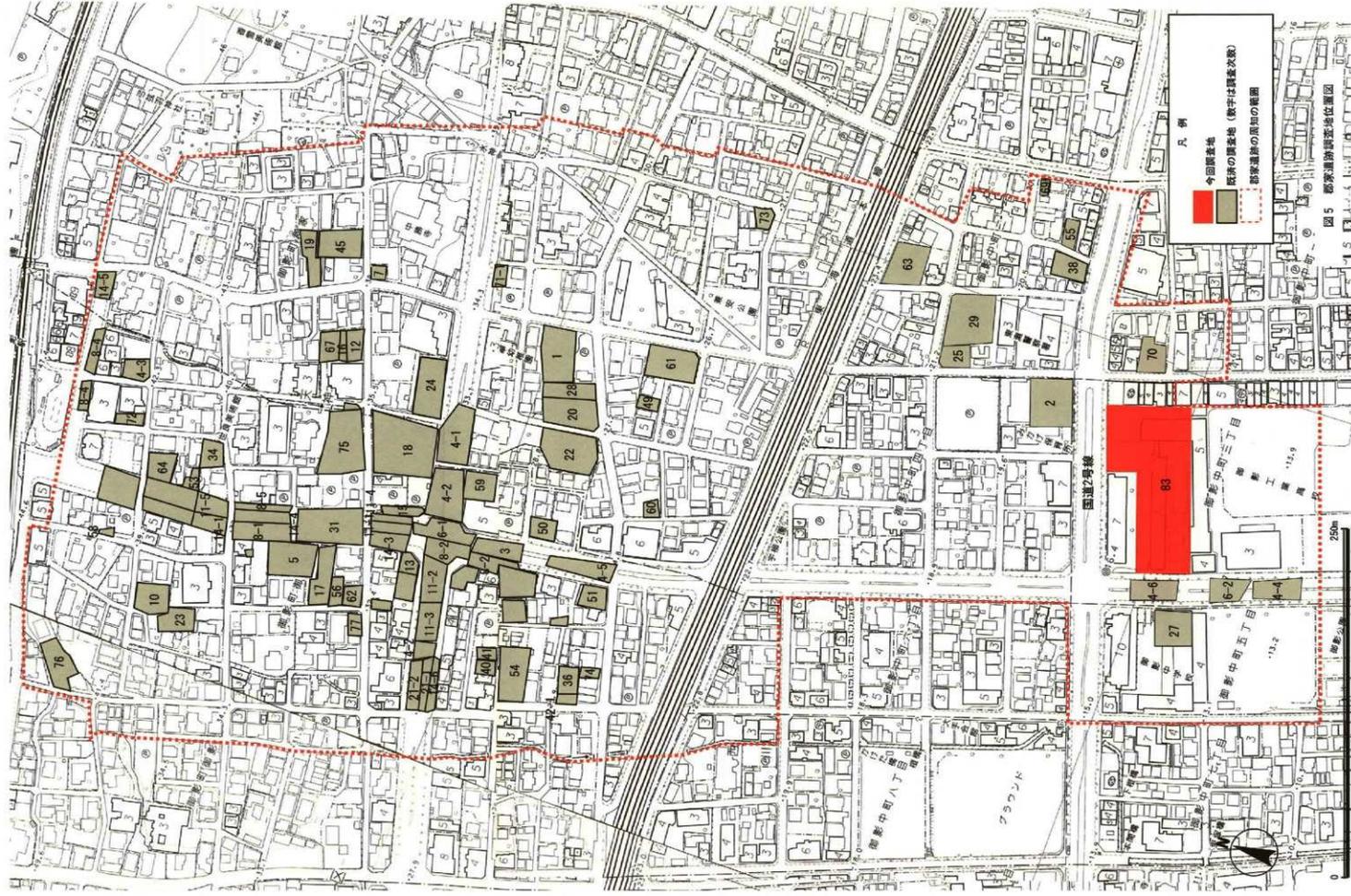


図4 周辺の遺跡 (S=1/30,000)



凡例

- 今回調査地
- 既往の調査地 (数字は調査次数)
- 調査区域の原町の範囲

図5 都営浅草線並立地区

0 25m

第3章 基本層序

1. 概要

今回の調査区は六甲南麓という立地上、南へ傾斜する斜面地形の上にある遺跡となる。斜面地であるがゆえに調査対象範囲の中でも、調査区の北端部と南端部では大きく地層堆積状況が異なり、また比高差も大きい。図6は調査区全体のうち、特徴的な堆積層を示す地点を柱状模式図で表したものである。

今回の調査では2面の遺構面を確認しており、上位のものを第1遺構面、下位のものを第2遺構面と呼称することとした。

基本層序としては、図6が示すように、調査区全体に調査区内の現在地表面をなす現代盛土（御影工業高校に伴う）が厚く堆積している。その厚さは場所によって異なるが、基本的には西南ほど厚く、北東ほど薄くなる。

現代盛土直下には、調査地北側では近世～中世までの旧耕作土（図6第6～22層）を確認しており、西および南側では旧耕作土ではなく古墳時代後期の洪水性堆積層（図6第24、42～160層）となる。この洪水性堆積層あるいは旧耕作土を除去した地点で調査区西側を除くほとんどの場所で古墳時代の遺物包含層である黒色粘土系の層が露呈する（図6第27層）。その上面で近世～古墳時代後期までの幅広い時期の遺構を確認しており、第1遺構面とした。この包含層が堆積していない部分には、明瞭な第1遺構面は確認できなかった。特に調査区西側では、洪水砂層直下で第2遺構面に相当する水田層に達するという単純な地層の堆積状況を示す。

第1遺構面を形成するこの層自身は弥生時代末～古墳時代中期までの遺物包含層でもあるが、調査区北側ではこの層の直下にもさらに遺物包含層が堆積しており、上位のものを第1包含層、下位のものを第2包含層とした。2層の包含層をすべて除去した地点で無遺物層（地山層）に達し、今回はこの無遺物層上面で古墳時代中期・古墳時代前期初頭・弥生時代末・弥生時代中期などの遺構を確認したため第2遺構面とした。2遺構面となる無遺物層上面で、調査区北端部と南部との比高差は約1.2m程度を測る。

この無遺物層より下層では、調査区全体が粘質シルト層・砂層・粘土層が互層をなしており、今回の調査地付近の地山層は、広域な河川などの水流がもたらした沖積作用によって形成されたものとわかる。

2. 第1遺構面

標高1580m付近の、主に調査区北東側に集中して堆積している層上で確認した。31基の土坑、多数の溝状遺構、独立柱建物1棟、古墳の可能性のある方形の溝がめぐる区画などの遺構を検出したが、これらの遺構の時期は出土遺物から見て近世・中世・奈良時代・古墳時代後期と多岐にわたり相互に関連性が乏しいものと考えられる。第1遺構面の遺構がこのように多岐にわたることの原因としては、近世・中世の地層は後世の削平や耕作土への置換現象などによってすでに失われているため、その残滓だけがより深い地層に残されたものである可能性が高い。奈良時代の遺構についても浅いため、やはりある程度上部が削平を受けているのではないかと考えられる。本来近世・中世・奈良時代などの遺構面が個別に存在したものが、削平されて1面に集約されてしまっているのではなかろうか。

3. 第2遺構面

第2遺構面として今回遺構を検出したのは、基本的には上記の遺物包含層を完全に除去し標高1625m～1380m付近の無遺物層に達した地点である。弥生時代中期・弥生時代末・古墳時代前期初頭・

古墳時代中期の遺構を確認しており、これらの遺構は互いに有機的に構成された、当該時期の集落遺跡であると考えられる。調査区西側では地山層上に形成された水田土壌が第2遺構面に該当する。水田土壌内にはごく細片の土器が含まれているが、その土器自身の時期は不明である。水田の経営された時期以前の土器であると考えられる。

第1遺構面から第2遺構面までの間には、2層の遺物包含層の堆積を確認しており、上位の層が古墳時代中期のものであり、下位の層が古墳時代前期ないしそれ以前のものである可能性が高いが、両者は近似の黒色系バイラン土層であり、調査過程では目視による緻密な分層が困難であったため、最終的に無遺物層上面、明瞭に遺構の平面形を確認できた地点での遺構検出作業となった。

今回の第2遺構面の遺構検出状況から鑑みるにおそらくこの第1包含層（図6第27層＝第1遺構面）を除去した、第2包含層（図6第30層）上面が本来古墳時代中期の遺構面となり、さらに下位の包含層も除去して無遺物層に達した地点が弥生時代中期～古墳時代前期初頭の遺構面だったのではないかと考えられる。つまり2面の遺構面（第2遺構面＝古墳時代中期、第3遺構面古墳時代前期初頭～弥生時代中期）としてそれぞれ検出すべきものを、バイラン土壌により不明瞭なため第2遺構面として一面で一括検出した可能性が高い。なお、2層の遺物包含層の堆積が明瞭に確認できたのは、遺構が集中して検出された調査区北半部で、調査区南側では薄く第2包含層のみが堆積しているのを確認している。このことから古墳時代中期の遺構は調査地南側に行くほど分布密度が薄くなる可能性が高い。

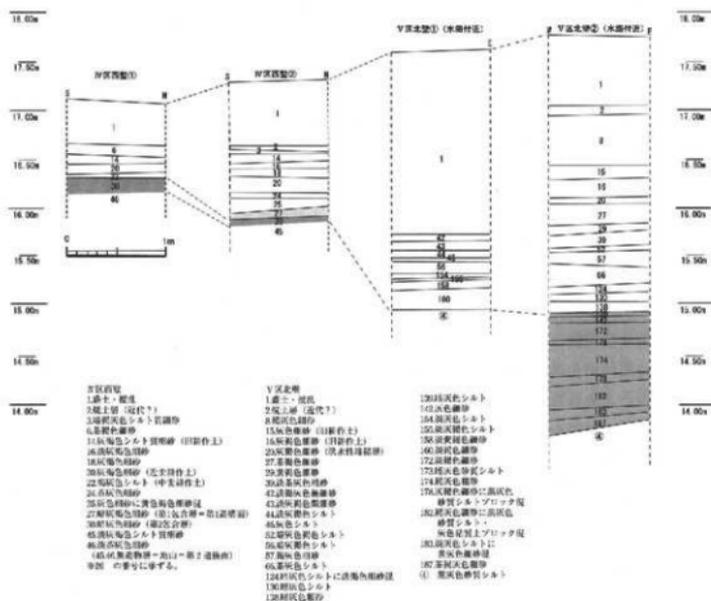
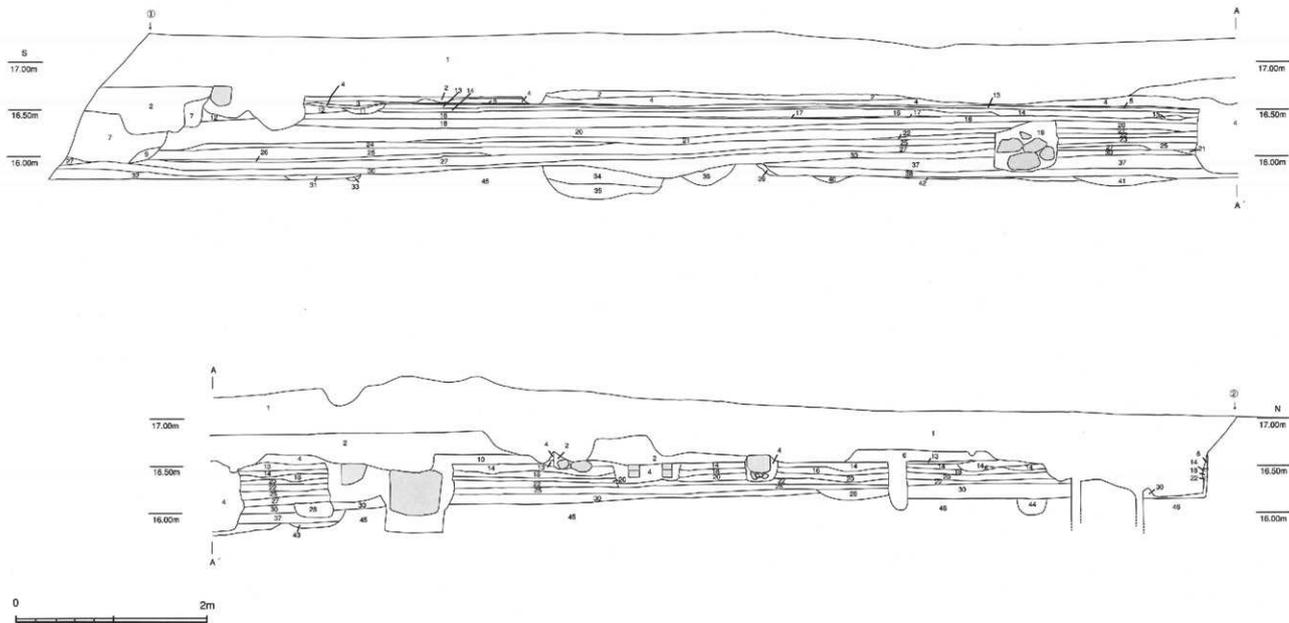


図6 調査区堆積層 柱状模式図



- 1.盛土・掘込
- 2.塙土層（昭和20年神戸大空襲に伴う?）
- 3.暗灰色シルト質細砂
- 4.灰色細砂
- 5.炭層
- 6.米褐色細砂
- 7.暗灰褐色シルト質細砂
- 8.灰褐色シルト
- 9.灰褐色細砂
- 10.暗灰褐色砂質シルト

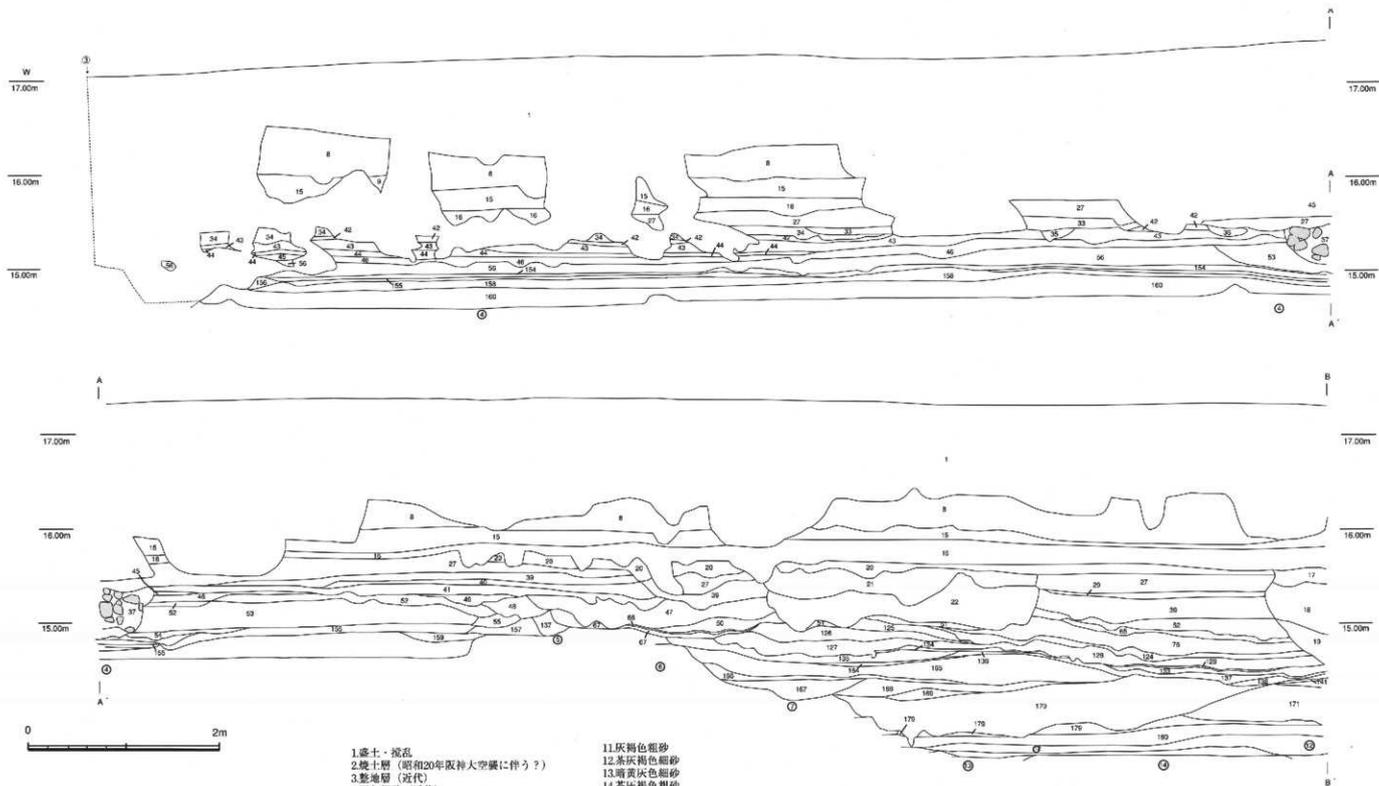
- 11.灰色砂質シルト
- 12.暗灰色微細砂
- 13.灰色シルト質細砂（旧耕作土）
- 14.灰褐色シルト質細砂（旧耕作土）
- 15.灰褐色泥質シルト
- 16.淡灰褐色細砂
- 17.暗灰色砂質シルト
- 18.灰褐色細砂
- 19.淡灰褐色細
- 20.灰褐色細砂（近世耕作土）

- 21.暗灰色細砂（近世耕作土）
- 22.暗灰色シルト質細砂（中世耕作土）
- 23.暗赤灰色細砂（中世耕作土）
- 24.灰色細砂
- 25.灰色細砂に黄褐色細砂混
- 26.灰色細砂に淡灰色細砂混
- 27.暗灰褐色細砂（古墳時代前期～中期遺物包含層＝第1遺構面）
- 28.暗灰褐色砂質シルト
- 29.明灰色細砂
- 30.暗灰色細砂（弥生時代末～古墳時代前期遺物包含層? = 古墳時代中期遺構面?）

- 31.暗灰色細砂
- 32.灰褐色砂泥砂質シルト
- 33.暗灰褐色シルト質細砂（31～33.形穴建物205埋土）
- 34.暗黄灰色砂質シルト
- 35.暗灰色細砂（34.35.上坑216埋土）
- 37.暗褐色シルト質細砂
- 38.暗灰褐色細砂
- 39.暗灰褐色砂質シルト
- 40.暗灰褐色細砂

- 41.灰褐色細砂に淡灰褐色砂質シルト混
- 42.暗灰褐色シルト質細砂
- 43.暗灰色細砂（39～43.平地式建物203埋土）
- 44.暗灰色細砂
- 45.淡灰褐色シルト質細砂
- 46.淡灰褐色細砂（45.46.形2遺構面被出層）

※ 図中の①、②は図3中の①、②と対応する



1. 盛土・掘込
2. 礎土層 (昭和20年阪神大空襲に伴う?)
3. 整地層 (近代)
4. 灰色粗砂 (近代)
5. 灰色シルト質礫砂 (旧耕作土)
6. 茶灰色シルト
7. 灰色細砂
8. 褐色細砂
9. 灰褐色細砂
10. 灰青色粗砂 (6.~9.旧耕作土)

11. 灰褐色粗砂
12. 茶灰褐色細砂
13. 暗赤褐色細砂
14. 茶灰褐色粗砂
15. 灰色細砂
16. 灰褐色細砂
17. 赤褐色細砂
18. 淡褐色粗砂
19. 灰色細砂に黒褐色砂質シルトブロック混
20. 灰褐色細砂
- (10.11.洪水堆積層)
- (12.~16.旧耕作土)
- (17.~19.洪水性堆積層)

※ 图中②は図3中の②と対応する

図8 V区北壁断面図(1)

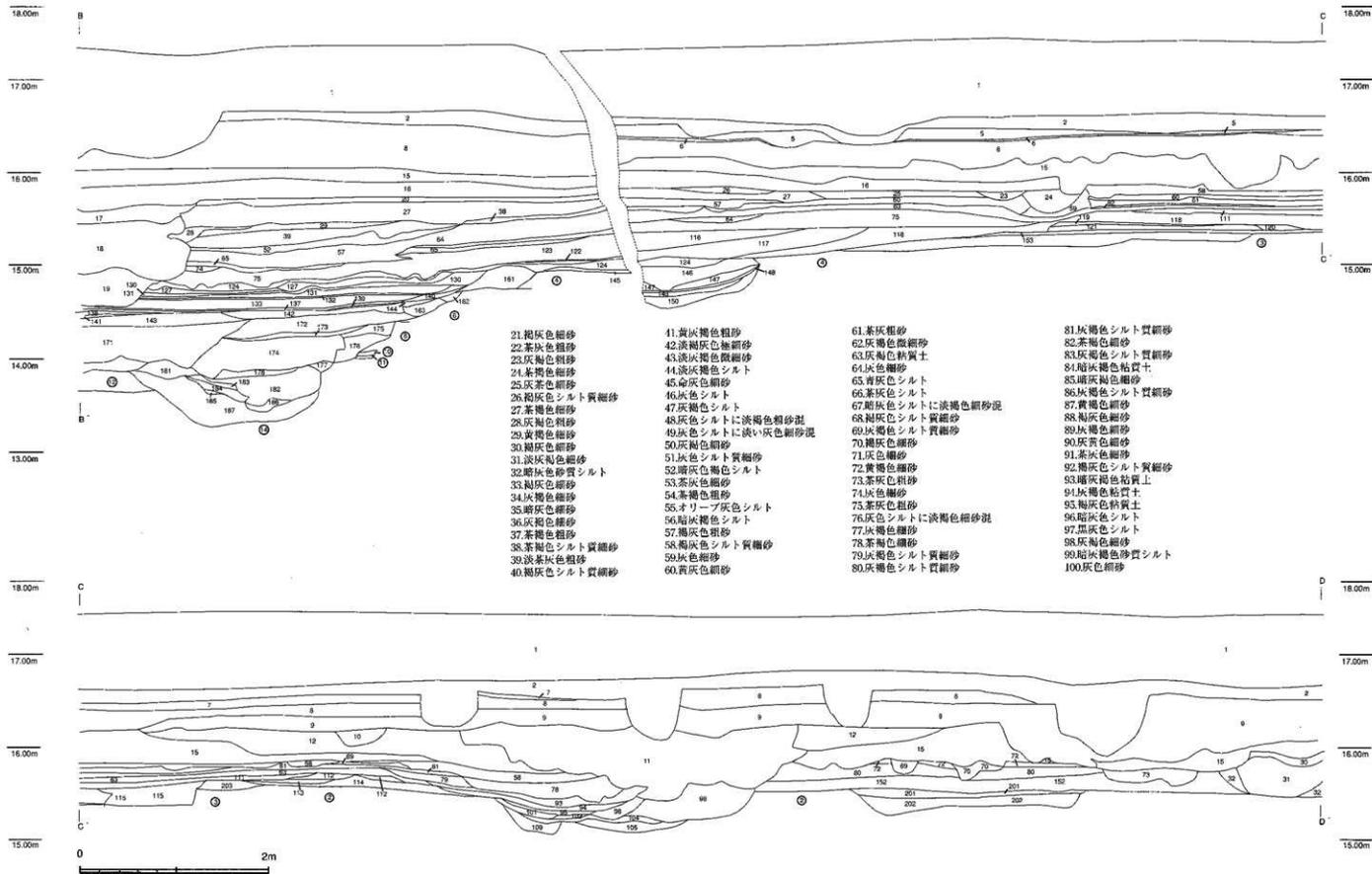
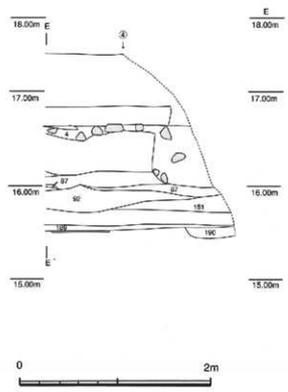
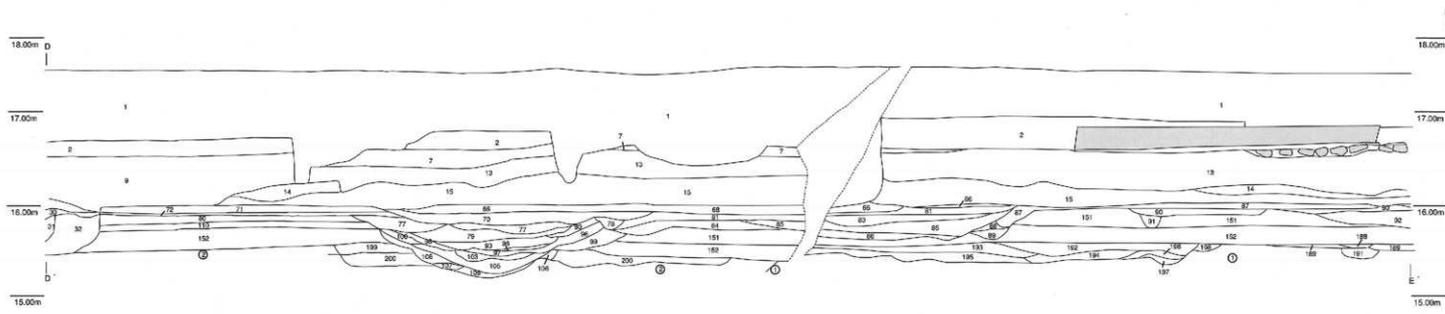


図9 V区北壁断面図(2)



- 101.褐灰色砂質シルト
- 102.黒灰色シルト
- 103.黒灰色シルトに淡茶灰色微細砂混
- 104.黒灰色シルト質細砂に茶灰色微細砂混
- 105.暗灰色シルト質細砂
- 106.暗灰色微細砂
- 107.淡褐色微細砂
- 108.灰褐色粗砂
- 109.暗褐色シルト質細砂に茶褐色細砂混
- 110.暗褐色微細砂
- 111.暗褐色砂質シルト
- 112.灰色細砂
- 113.灰黄色砂質シルト
- 114.灰褐色砂質シルト
- 115.灰褐色粗砂
- 116.灰色微細砂
- 117.褐色灰微細砂に灰色シルト帯状混
- 118.灰褐色シルト質細砂に淡褐色細砂ブロック混
- 119.灰色シルト
- 120.灰褐色砂質シルト
- 121.明灰黄色微細砂
- 122.灰色シルト
- 123.淡褐色微細砂
- 124.暗灰色シルトに淡褐色微細砂混
- 125.茶灰色微細砂
- 126.灰色シルト質細砂
- 127.灰褐色砂質シルト
- 128.灰褐色粗砂
- 129.灰色シルト
- 130.暗灰色シルト
- 131.淡褐色粗砂
- 132.暗灰色シルト
- 133.灰褐色微細砂に淡褐色粗砂混
- 134.灰褐色シルト質微細砂
- 135.灰色シルトに淡黄灰色シルト混
- 136.黒灰色シルトに淡黄灰色シルト混
- 137.黒灰色シルトに灰色シルト混
- 138.暗灰色粗砂
- 139.暗灰色シルト
- 140.灰色シルト

- 141.灰褐色微細砂
- 142.灰色微細砂
- 143.灰褐色微細砂
- 144.黒灰色粗砂
- 145.茶灰色微細砂
- 146.茶灰色粗砂に灰色シルト帯状混
- 147.暗褐色シルト質細砂に淡褐色粗砂帯状混
- 148.暗褐色シルトに茶灰色シルト帯状混
- 149.明褐色シルト
- 150.灰色シルトに黒褐色砂質シルトブロック混
- 151.暗褐色微細砂
- 152.暗褐色シルト
- 153.黒褐色砂質シルト
- 154.淡灰色シルト
- 155.淡褐色シルト
- 156.黄褐色微細砂
- 157.暗褐色砂質シルトに淡褐色砂質シルト混
- 158.淡黄褐色微細砂
- 159.黄灰色砂質シルト
- 160.淡褐色微細砂
- 161.黒灰色砂質シルト
- 162.黒灰色シルトに灰色シルト混
- 163.淡褐色粗砂
- 164.灰色微細砂
- 165.褐灰色微細砂
- 166.灰褐色微細砂
- 167.茶灰色微細砂
- 168.オリブ灰色シルト
- 169.褐灰色粗砂
- 170.茶褐色粗砂に黒灰色シルトブロック混
- 171.灰褐色粗砂に黒灰色砂質シルトブロック混
- 172.淡褐色微細砂
- 173.暗褐色砂質シルト
- 174.褐灰色粗砂
- 175.灰色シルト
- 176.黒灰色砂質シルト
- 177.黒褐色砂質シルト
- 178.灰褐色微細砂に黒灰色砂質シルトブロック混
- 179.灰黄色微細砂
- 180.黒灰色砂質シルト

- 181.オリブ灰色シルトに灰色砂質シルト・淡褐色微細砂混
 - 182.褐灰色微細砂に黒灰色砂質シルト・灰色粘質土ブロック混
 - 183.淡灰色シルトに黄灰色微細砂混
 - 184.灰色シルト
 - 185.淡灰褐色微細砂
 - 186.灰色微細砂に黄灰色微細砂混
 - 187.茶褐色微細砂
 - 188.灰褐色微細砂
 - 189.黒灰色砂質シルト
 - 190.暗褐色砂質シルト
 - 191.暗褐色砂質シルト
 - 192.褐灰色微細砂
 - 193.暗褐色微細砂
 - 194.暗褐色砂質シルト
 - 195.黒灰色砂質シルト
 - 196.茶褐色砂質シルト
 - 197.黒灰色砂質シルト
 - 198.暗褐色砂質シルト
 - 199.暗褐色シルト質細砂
 - 200.黒灰色微細砂
 - 201.暗褐色シルト質細砂
 - 202.暗灰色砂混砂質シルト
 - 203.黒灰色砂質シルト
- ①.褐灰色砂質シルト
 - ②.褐灰色微細砂
 - ③.暗褐色砂質シルト
 - ④.黒灰色砂質シルト
 - ⑤.オリブ灰色シルト
 - ⑥.灰褐色粗砂
 - ⑦.灰色シルトに淡褐色微細砂混
 - ⑧.黄褐色微細砂
 - ⑨.灰褐色微細砂
 - ⑩.黄褐色微細砂
 - ⑪.黒灰色砂質シルト
 - ⑫.灰色微細砂
 - ⑬.淡褐色微細砂
 - ⑭.暗褐色微細砂

- 201. 21.洪水性堆積層
- 202. 33~70.洪水性堆積層
- 203. 99~109.方形区埋裡土
- 204. 110,116.洪水性堆積層
- 205. 117~126.洪水性堆積層
- 206. 151.古墳時代前期~中期遺物包含層
- 207. ①.第1遺構面
- 208. 152.弥生時代末~古墳時代前期?遺物包含層
- 209. 古墳時代中期遺構面?
- 210. 153.弥生時代末~古墳時代前期?遺物包含層
- 211. 154~160.洪水性堆積層
- 212. 186~191.平地式建物204埋土
- 213. 192~197.平地式建物205埋土
- 214. ①~④.池山層・第2遺構面検出面

※図中④は図3中④と対応する。
(断面観察ポイント)

図10 V区北壁断面図(3)

第4章 遺構

1. 第2遺構面の遺構

前章で述べたように、今回の調査地では2面の遺構面を確認した。そのうち、上位に堆積するものを第1遺構面、下位に堆積するものを第2遺構面とする。

各遺構面で検出した遺構の時期は、出土遺物から判断しておおむね第1遺構面が近世、中世、奈良時代および古墳時代後期であり、第2遺構面が古墳時代前期～中期を中心として部分的に弥生時代中期あるいは弥生時代後期～末にかけてのものと考えられる。

第1遺構面の遺構について様々な時代のものがまとまりなく存在するように感じるのは、おそらく本来異なる層上で時代ごとに確認できるべき遺構が、堆積層の上部が後世に削平され、あるいは耕作土に置換されているため、今回第1遺構面とした層上に集約される形で検出されているためであろう。

そういった意味では、第1遺構面の遺構は、第2遺構面の遺構群のような互いに有機的な結びつきを感じさせないものである。

一方で、第2遺構面の遺構群には、多少の時間差は認められるものの、互いの間にある種の統一性があり、部分と全体とが必然的な関係性を有している。これは、第2遺構面で検出した遺構は、弥生時代から古墳時代にかけての集落址という共通性があるためと考えてよいだろう。本章では主にこれら第2遺構面の遺構について詳述する。

2. 概要

第2遺構面で確認できた遺構は、その属性から水路、水田、建物、土坑、溝状遺構の5種類に大別できる。そのほか不定形で浅く、遺構の属性もよくわからない用途不明のものも9ヶ所確認しているが、これらは用途不明の遺構の総称としてすべてSXの遺構番号を付しておく。

調査区の南端部については、後世に地層が削平されており、遺構の残存状態が極めて悪かった。調査区南部分では、近代あるいは現代の水田に伴う段差状の地形が確認されていることから、おそらく近現代に削平を受けたものと考えられる。

今回の調査区は、調査区中央を横断する形で検出された水路を挟み、西に水田、北東に建物址を中心とした居住域という構成をとっている。

この水路は北から南流するものと、東から西流するものとが、ちょうど調査区の中心やや西よりの地点で合流する部分にあたる。水路の二段の形状は、北からの1条の流れが、2方向に分岐する分岐点であるようにも見えるが、地形的に調査区東端のほうが、水路中央から西よりの地点より標高が10m近く高いことから考えて、東からの水路と北からの水路の、2条の合流点であると判断した。

住居址と考えられる建物址群は、この水路北岸の標高16.10m～15.00mの微高部分に集中しており、水路を跨いで南岸にある建物址は全10棟の内わずかに1棟のみである。住居址床面からもある程度の量の土器が一括出土している。

土坑は26基を確認したが、形状、規模などはさまざまであり規則性は乏しい。ただし多くの土坑には破砕した土器類が多量に集積されている点に共通性が認められる。これら土坑からは良好な一括遺物が多く得られた。

溝状遺構はわずかに2ヶ所である。水路と並行するように、水路南岸に東西に走るが、その西端部分は水路に切られる形で重なり合っており、水路より古い時期の遺構であると考えられる。この溝内にも

まとまった量の土器が出土している。

水田は、南流する水路の西岸部分で確認した。水路と並行の大畦畔と、その内側に方形の小畦畔で区画されたものである。

これらの遺構について、以下属性ごとに詳述する。

3. 水路

東西に長い本調査区のほぼ中央をY字状に貫く水路である。水路は北から南流するものと、東から西流するものが水田址の東正面で合流する形態となっている。

基本層序の章で述べたように、本調査区周辺地域は六甲山を源として南流する河川が多く、その氾濫や沖積作用で形成された土地であり、本調査区全体も大きな流水性の堆積層からなる土壌で形成されていると考えられる。今回検出した水路も、基本的には過去の大きな河川が沖積作用により埋没した後形成された中規模自然河川の、水路化利用であると考えられる。

ただし水路内流部分については、地形の高低に必ずしもそった形成となっておらず、また南流部の水路は断面がU字状を呈するなど、ある程度人工的に手が加えられた可能性が高い。

これも基本層序の章で述べたが、水路や水田ほか第2遺構面の遺構の多くが細砂で覆われた状態で発見されており、集落が洪水災害に見舞われたことを物語っているが、水路内埋土の洪水砂層内からは多数の木質遺物が集積した状態で出土している。この木質遺物の詳細な調査から、これらは堰、護岸施設の材などで、おそらく水路周辺で使用されていた木材が洪水による急な水流で押し流され、水路同士の合流点付近に集積したものと考えられる。この点からも、水路は自然河川にある程度人工的に手が加えられ、水源として集落の住人に利用されていたと考えられるが、今回の調査地では水路から水田に導水する取水口は見つかっていない。水田畦畔の水門が全て南北に開口していることから、今回の調査地よりさらに上流域に水路からの導水口が存在するものと考えられる。

今回の調査地で確認できた水路の規模は、南流部で長さ約37.0m、幅7.0～12.0mを測り、深さは最深部で約1.6m、平均で1.4m程度である。南側ほど幅が細くなっている。南流部の南断面はU字状を呈しており、北壁断面と南断面で大きく埋土の堆積状況が異なるが、これは北側が水路同士の合流点に近く水流の方向が一定でなかったためと考えられる。

南流部北断面および西流部西側断面の観察からは、2～3回の洪水性の急な流れによる砂層の堆積とその後の緩やかな流れによって形成された粘土層の堆積が繰り返されていることがわかり、水路が機能していた時代に、2～3回以上の洪水災害が起こり、しだいに水路は深度を失い、最終的に起こった洪水が水田まで覆いつくしたと考えられる。木質遺物は、断面で確認できる範囲で2回目の洪水砂層内から出土しており、後に述べる水田上面を覆っている6世紀後半の洪水砂層とは時代が異なると考えられる。3度の洪水災害の間どれほどの時間差があったかは、洪水砂層には複数の時期の土器が混入しており正確な時期の判定が難しい。

今回確認できた範囲での水路西流部の規模は、南流部に取付く地点までの検出全長が約65.0m、幅5.0～8.0mを測り、深さは1.2m前後である。調査区の北東部にあたる、西流部北岸には建物址が集積する範囲があり、これらの建物の住人が廃棄したと考えられる土器片が水路北岸で集中して出土したため、これを上器群と呼称して一括で取り上げている。

また西流部水路内には、これらの集落が廃絶する過程で形成された遺物包含層が緩やかに流れ込むように堆積しており、居住域の廃絶後も水路は一定の深度を保っていたことがわかる。

西流部にも洪水砂層は堆積しているが、南流部のように複数回の堆積は確認できず、南流部の最終段

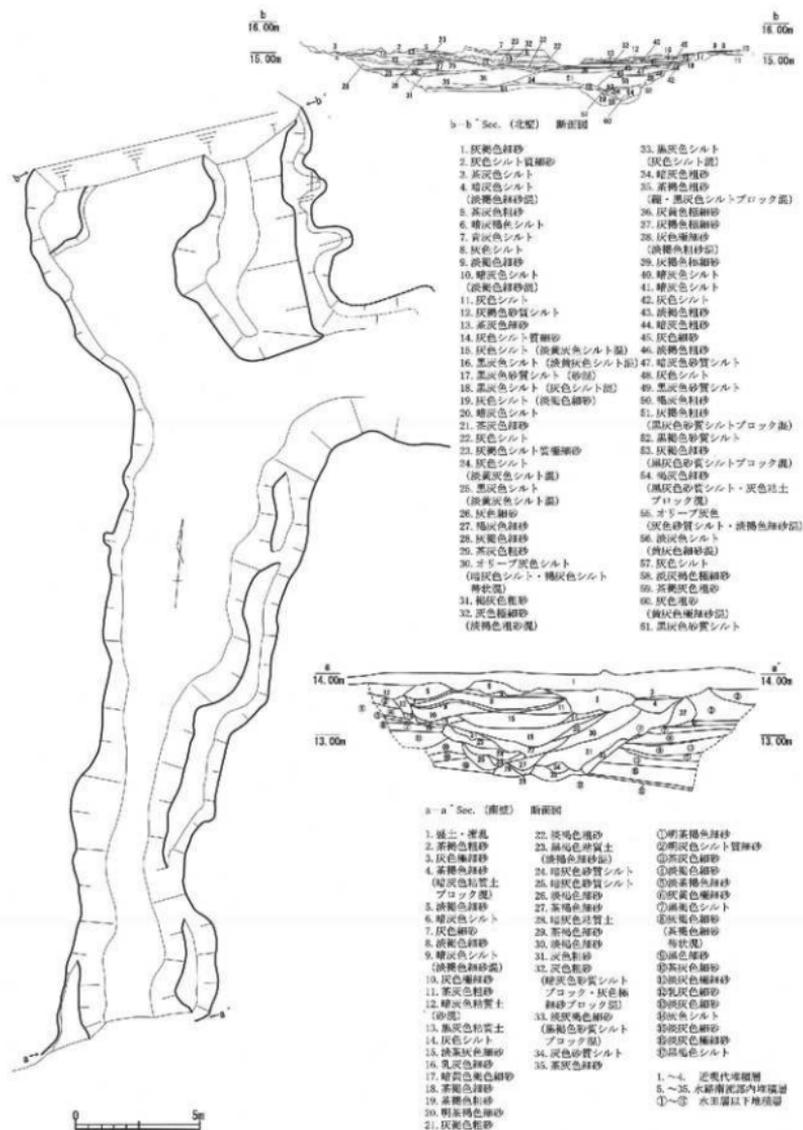
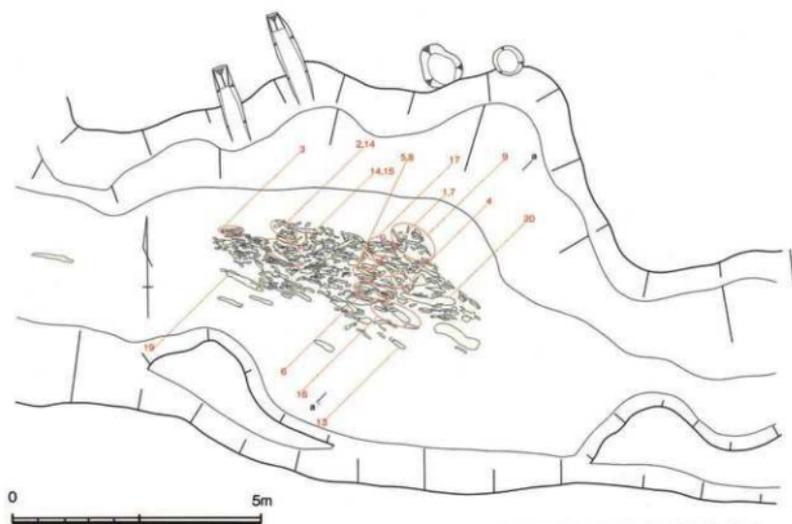
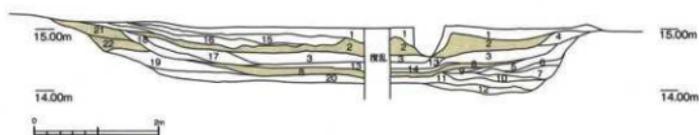


図12 水路南流部 平面・断面図



図中の番号は図74の木質遺物実測図番号と対応する

図13 水路西流部 木質遺物出土状況 平面図



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1.淡黄灰色粗砂 | 12.淡灰色砂礫 |
| 2.黒色粘土 | 13.淡青灰色シルト |
| 3.淡黄色シルト(木質遺物出土層) | 14.淡青灰色粘質シルト |
| 4.淡灰色粗砂に灰色粘土ブロック混 | 15.灰色粘土に黄褐色粗砂帯状混 |
| 5.緑灰色粗砂 | 16.黄褐色白色粗砂 |
| 6.黒灰色砂 | 17.黄白色砂 |
| 7.緑灰色砂 | 18.灰色砂質粘土 |
| 8.黒灰色粘土 | 19.黄白色粘土 |
| 9.緑灰色粘質シルト | 20.灰色砂 |
| 10.淡黄褐色粗砂 | 21.黒灰色粘質粘土 |
| 11.灰色砂 | 22.淡灰色粘質粘土 |

図14 水路西流部 a-a' 断面図

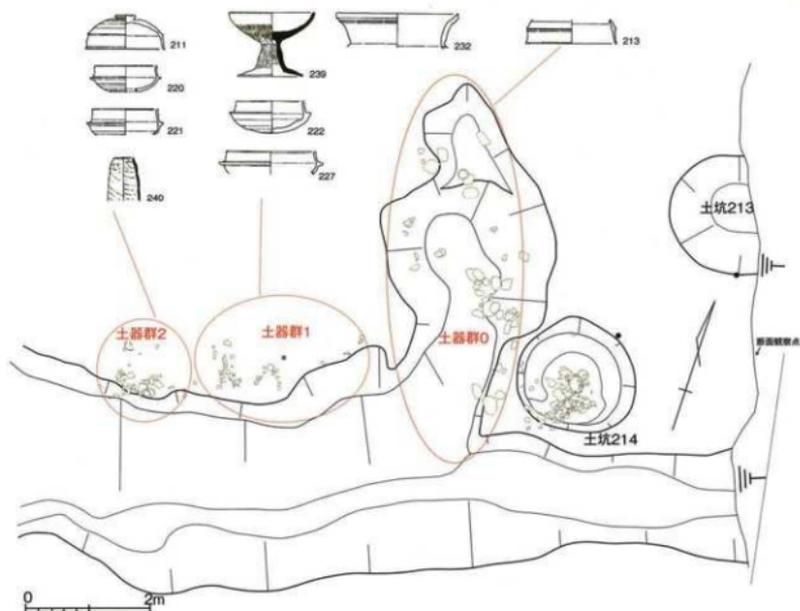


图15 水路西流部北岸 土器群 土器出土状况

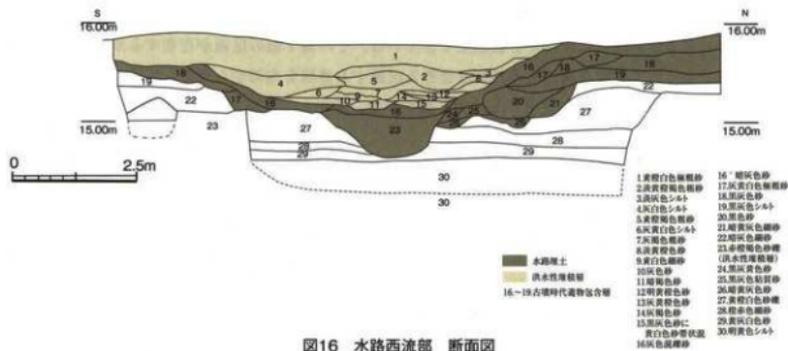


图16 水路西流部 断面图

階で起こった洪水砂層とおぼしきものを堆積層上層で確認している。

この洪水砂層は居住域の遺構面を覆う遺物包含層を覆うようにして堆積していることから、水田を襲った最後の大規模な洪水災害が、居住域の廃絶の要因ではないこともわかる。

水路埋土からは多量の土器、木質遺物が出上している。木質遺物については別章で詳述するとおりである。土器については、洪水砂層から出土したもの、包含層から出土したもの、北岸土器群の3つに大別し後述した。

4. 水田

水田址は南流する水路の西側に位置し、約700mほどの範囲を確認した。

郡家遺跡の古墳時代集落において広域に水田址が発見されることは、今回の調査地の西に隣接する御影中学校敷地内で1990年に行われた第27次調査の結果からも予測されたことだが、今回の調査によって、郡家遺跡の古墳時代集落における水田域の広がりや東限を確定することができたと考えてよいだろう。

水田への導水には先に述べた幅7.0～12.0mの水路を利用していると考えるのが自然だが、今回の調査範囲内に大水路からの取水口は認められなかった。

今回確認した水田は、水路西岸に沿って幅約80.0～100.0cm、高さ10.0～20.0cmの大畦畔を設けている。大畦畔の高さにばらつきがあるのは、一部後世に削平され本来より低くなっていると考えられる。

大畦畔の方向はほぼ水路と並行に走り、水田の西を限り、水路からの意図しない水の浸入にも備えたものと考えられる。大畦畔の内側（西）には、整然とした方形の小区画が形成されており、今回の調査範囲では畦畔西側に方形区画が18面、不整形あるいは三角形の区画が2面確認できた。小区画の南北の軸方向は、座標北に対しほぼ0°に近い。南北の畦が幹線畦畔となり、東西の畔は文線でアミダ状を呈する。大畦畔は南端部で西へ向かって緩やかに湾曲している。

一小区画あたりの面積は、東西幅がどの区画もほぼ5.0mと一定だが、南北幅が6.0～3.0mとばらつきがあり、30㎡～15㎡程度となる。

各小区画の東西畦畔には、幅20cm前後の広さでそれぞれ畔をかきとって水口が設けられており、基本的に南北の各列ごとに北から南に配水していく構造であると考えられる。

大畦畔の外にあたる水路と小区画水田にはさまれた範囲には明確な畦畔は部分的にしか確認できず、水路に向かって下がる段状の区画が3面確認できている。その他7面の区画が存在するが、不整形で、水口も明瞭でなく、大畦畔を境にその外側は整然と区画する意図を当初から放棄しているようである。

小区画一枚あたりの平均比高差は5cm未満と緩やかで、検出した範囲南北36.5m間での比高差は最大84cm程度を計る。

この大畦畔の外範囲で顕著な人足痕を複数確認している。足跡はばらついているが、全体的には東から西へ、大畦畔に向かう方向を指向している。足跡は不明瞭で成人等の区別はできなかった。

水田層全体が水路最上層と同じ洪水砂層で覆われており、洪水災害によって水田が埋没し、集落から放棄されたと考えられるが、洪水砂層から出土する土器の時期から、水田が放棄されるきっかけとなった洪水が起こったのは6世紀末段階と考えられる。

一方水田の初源に関しては水田土壌内から水田の形成時期を示すような遺物が確認されなかったことから、直接的な証拠を欠くが、水路の利用時期にはほぼ並行する可能性が高いのではないかと考えている。なお水田土壌に関しては植物珪酸体分析および人型植物遺体分析を実施し、別章に詳述する。

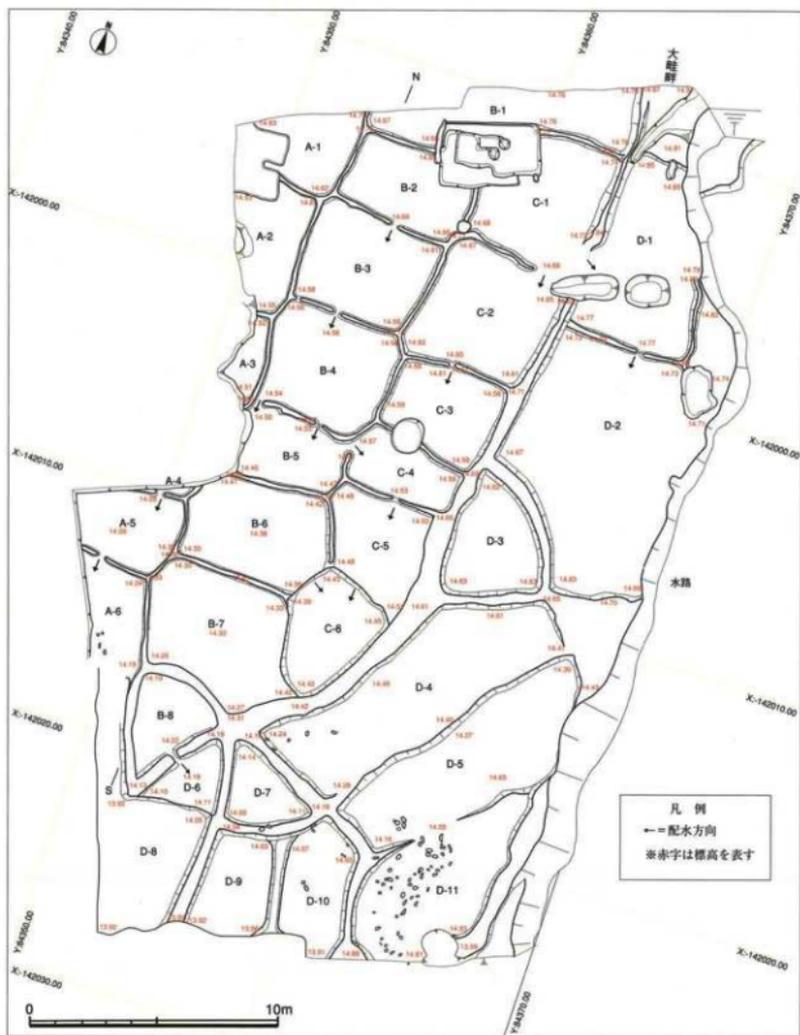


図17 水田址平面図

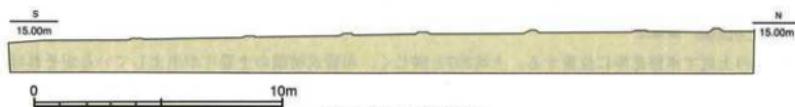


図18 水田址南北断面図

5. 土坑

調査区全体で26基確認したが、そのうち10基からは良好な一括遺物が出土した。本節では良好な一括資料を出土した土坑を中心に記述し、個々の規模などの記載は表8に譲る。

(1) 土坑201 図版19

不整形形の土坑であるが、多量の布留式初頭の土器が破砕された状態で集積していた。また成人の頭ほどもある花崗岩も伴っていた。自然混入したとは考えにくいので、この石も土器とともに投入されたと考えられる。土器以外の人工遺物は出土していない。出土した土器片のうち、隣り合う土坑202から出土した土器片と接合するものもあり、土坑201と土坑202の間には同時性が認められる。

(2) 土坑202 図版20

南北に長い楕円形の土坑で、今回の調査区中最も大きく、出土遺物も多かった。多量の布留式初頭の土器が破砕された状態で集積しており、出土状況なども土坑201と酷似している。

土坑201のほか、土坑205から出土した土器片と接合するものもあり、土坑201と土坑202、土坑205の間には同時性が認められる。

(3) 土坑205 図版21

不整形形の土坑で、布留式初頭の土器が破砕された状態で集積しており、出土状況なども土坑201と酷似しているが、遺物の出土量は前者の2基ほどではない。土坑205から出土した土器片が一部土坑202出土の土器片と接合する。

(4) 土坑206 図版22

土坑201、202、205と隣接しており、土器を埋納した痕跡であるという点で共通しているが、前掲の3基の土器が、破砕された後埋められた可能性が高いの 비해、土坑206の出土状況はおそらく完成品のまま土器を埋納した可能性が高いものである。

また前者3基が布留式初頭の時期であるのに対し、土坑206は古墳時代中期、須恵器登場遺構の時期のものである。ただし土坑206からは須恵器は出土しておらず、土師器だけであるため、選択的に土師器のみを用いたと考えられる。また前の3基が土坑の底から上まで満遍なく土器片が投入されていたのとくらべ、こちらはいったん穿った穴ある程度埋められた後土器を置いたのではないかと考えられる相違点もある。

(5) 土坑207 図版22

東西にやや長い楕円形の土坑である。土坑201、202、205と同じく布留式初頭の土器片が出土している。ただし前3基ほどの出土量はない。出土状況からは、破砕した後投入したものか、完形のまま納められたものかは判断できなかった。

(6) 土坑208 図版22

円形の土坑で水路北岸に位置する。土坑207と同じく、布留式初頭の土器片が出土しているがそれほどの出土量はない。出土状況からは、破砕した後投入したものか、完形のまま納められたものかは判断できなかった。

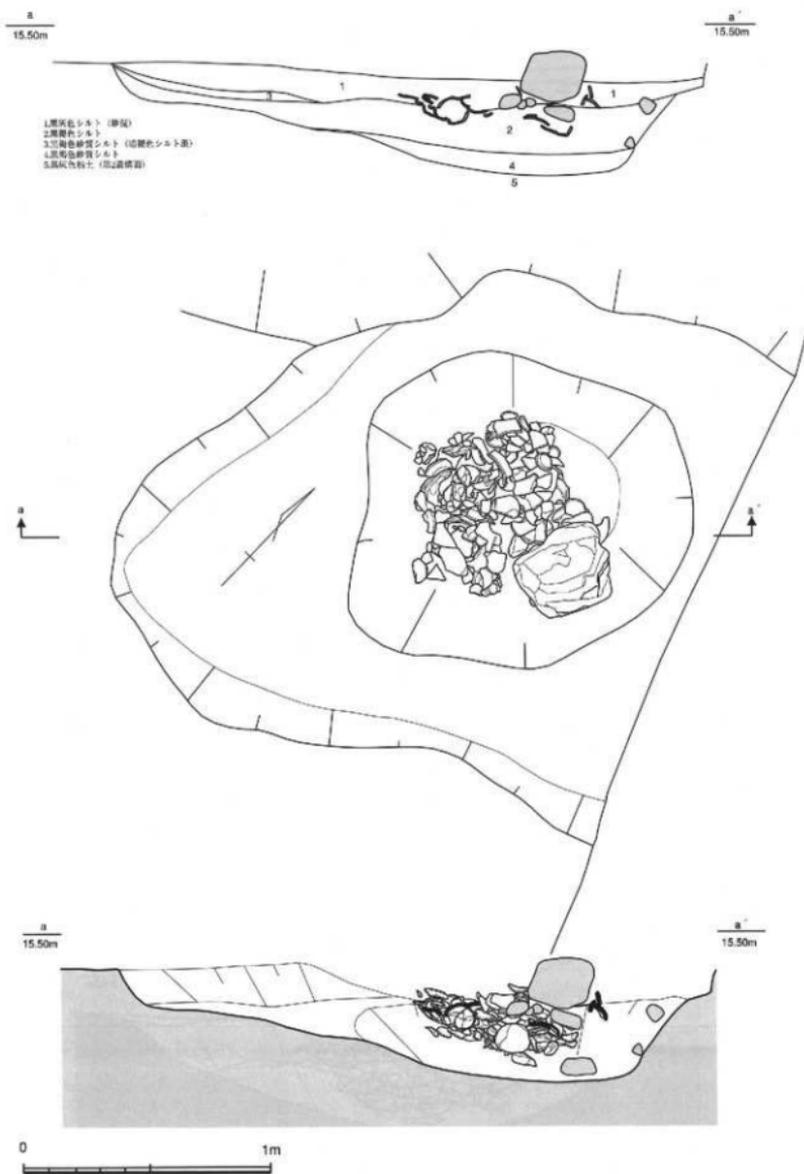


図19 土坑201 平面・断面・立面図

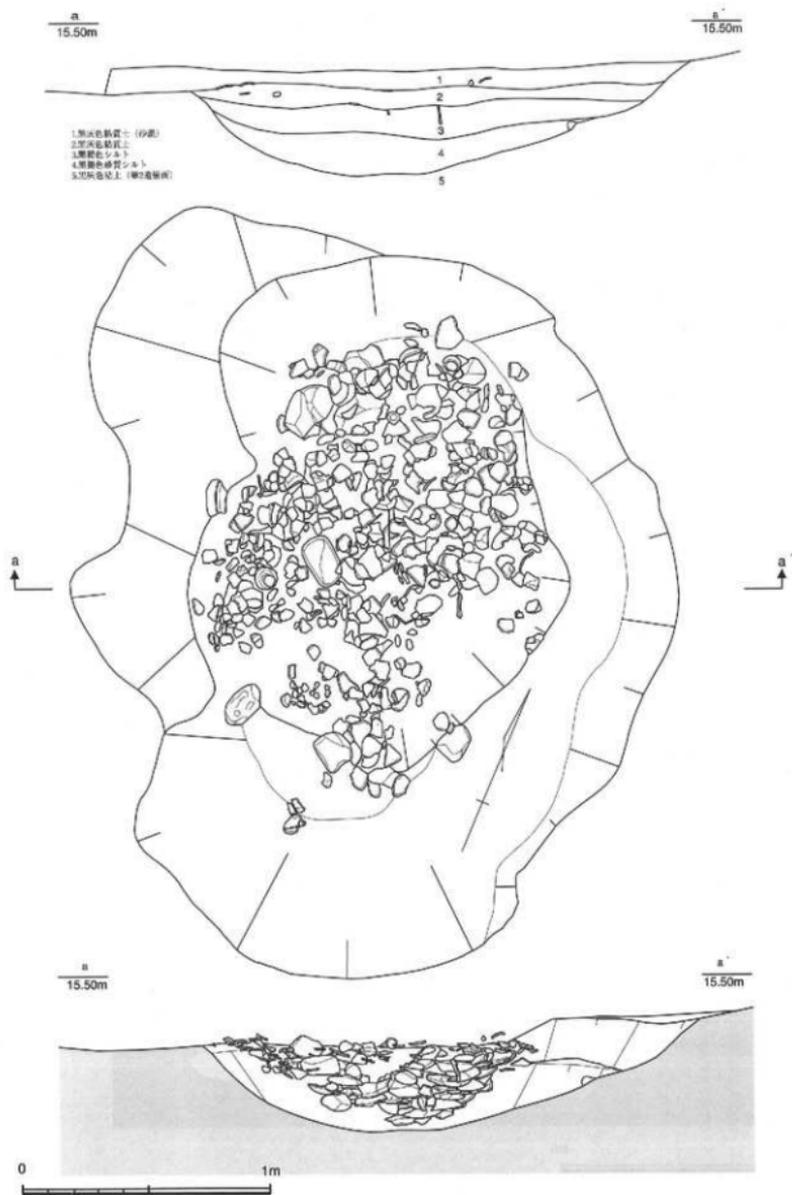


図20 土坑202 平面・断面・立面図

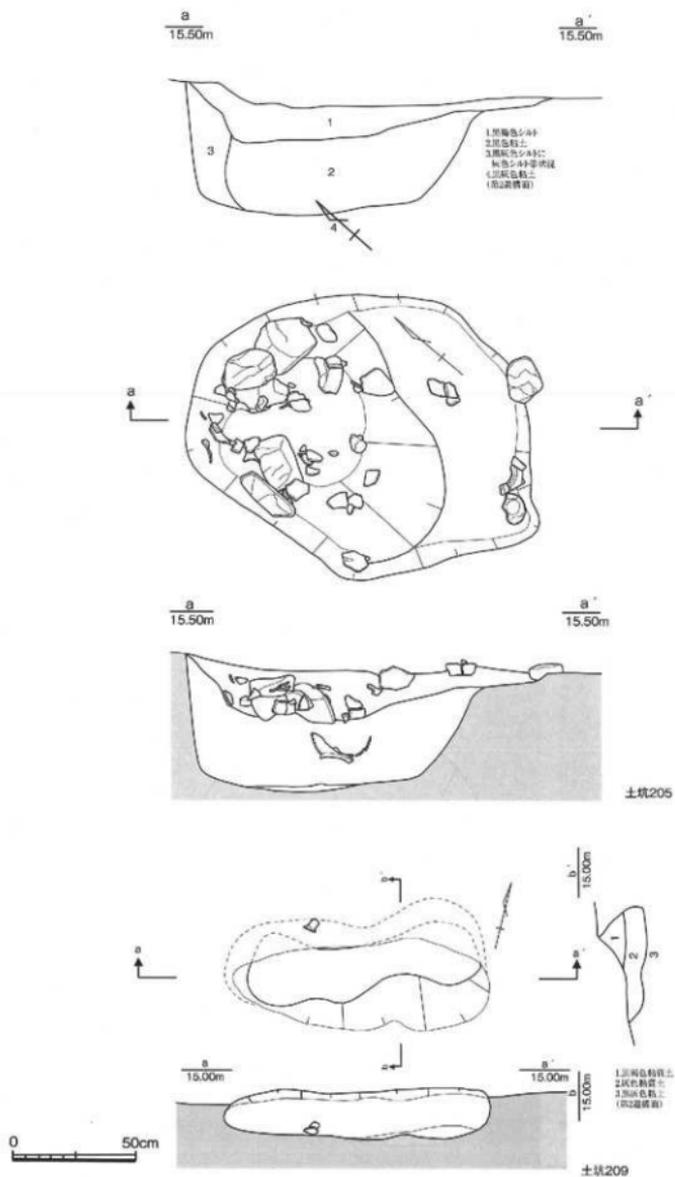


图21 土坑205-209 平面·断面·立面图

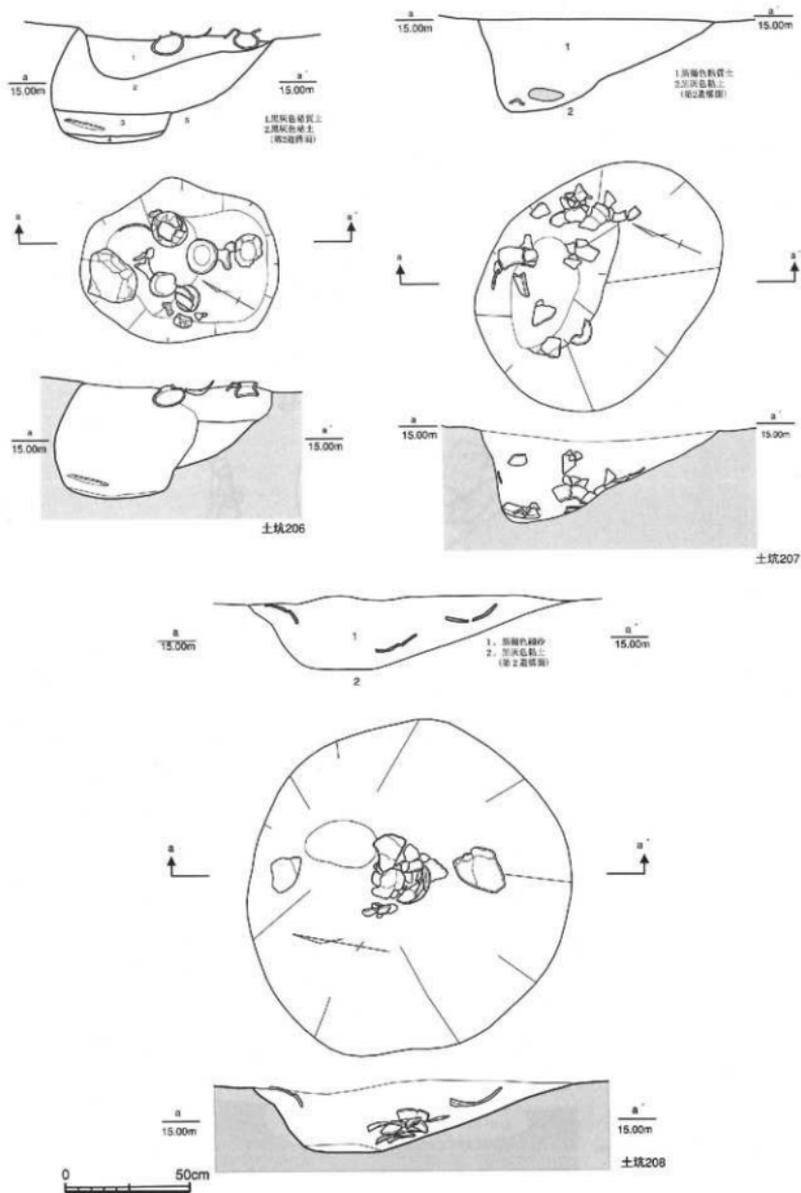


图22 土坑206·207·208 平面·断面·立面图

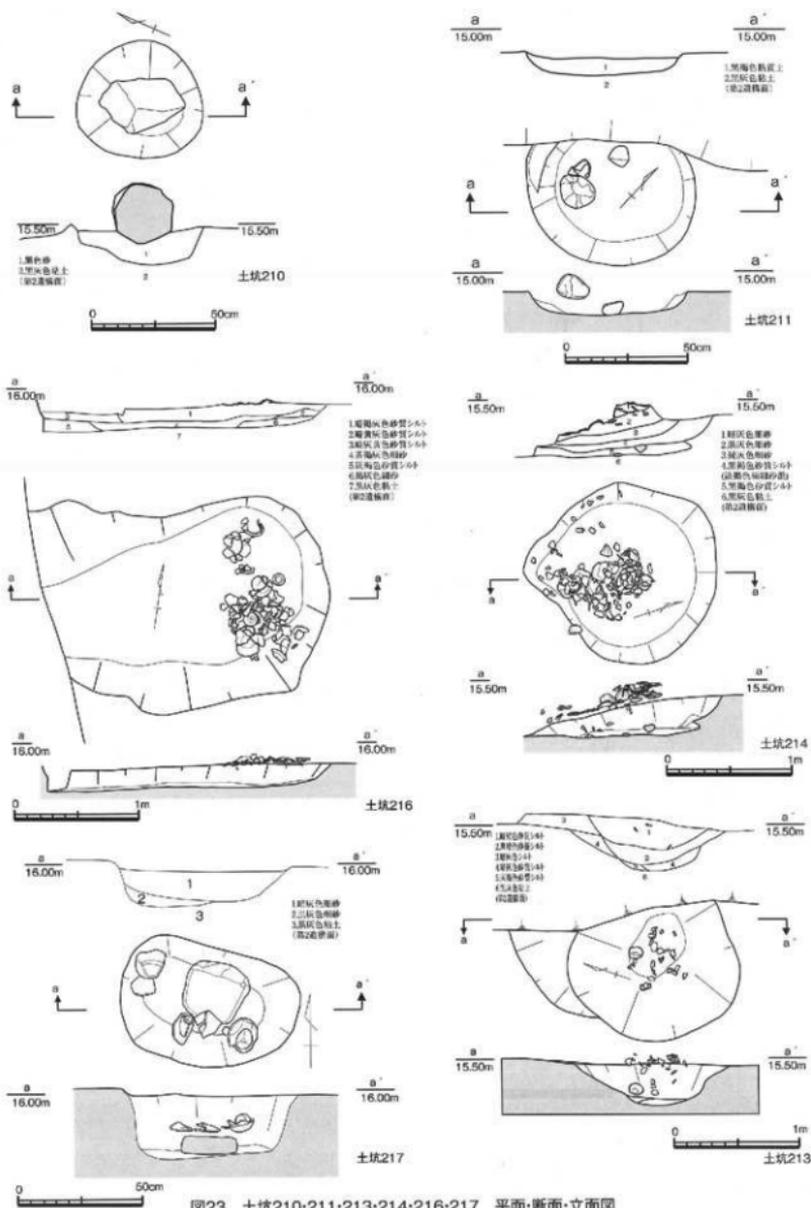


图23 土坑210-211-213-214-216-217 平面·断面·立面图

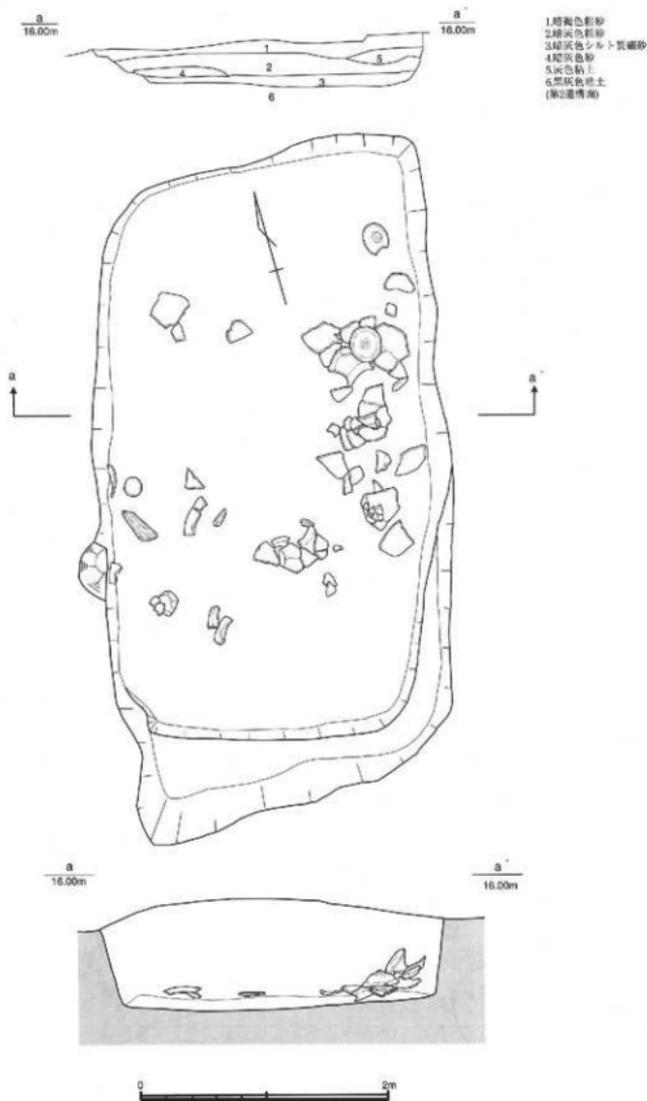


図24 土坑215 平面・断面・立面図

(7) 土坑209 図版21

溝201を切るように重なり合っている。東西に長い楕円形だが、北側の壁部分が内傾して袋状断面を呈する。出土遺物はごくわずかだが、おそらく布留式初頭頃と考えられる。

(8) 土坑210 図版23

円形の土坑内に成人の頭大の花崗岩を据えたような状態で検出した。この石を取り除くと布留式初頭と考えられる土器片が出土した。土坑201と同じく、自然混入したとは考えにくい。

(9) 土坑211 図版23

水路に切られる形で重なりあって検出した。出土土器は少ないが布留式初頭の可能性が高く、水路形成の時期を示唆するものである。

(10) 土坑213 図版23

東側が後世の削平により欠損しているため正確な規模等は不明であるが、検出した範囲では円形を呈する。布留式初頭頃と思われる土器を複数出土しており、土器の出土状況などからは土坑201などに近い性質を有するのではないかと考えられる。

(11) 土坑214 図版23

水路に切られるように重なり合っただけで検出したもので、布留式初頭の土器片が多く破砕した状態で投入されていた。出土状況からは土坑201などに近い性質であると考えられる。この遺構との切りあい関係から、土坑211と同じく水路の形成期を示す資料となると考えられる。

(12) 土坑215 図版24

韓式系土器を中心とした良好な一括遺物が出土した長方形の土坑である。土器は破片の状態で出土したが、どの土器にも炭化した木質片が付着していた。あるいはなんらかの構造物上に土器が据えられていた可能性も考えられるが詳細は不明である。

(13) 土坑216 図版23

東西に長い不定楕円形の土坑である。一部が調査区外となるため正確な全体像が不明だが、一括土器が比較的良好的状態で出土している。須恵器登場以降の時期の土師器だが須恵器は伴わない。

(14) 土坑217 図版23

平地式建物202を切るようにして重なり合う状態で検出した。楕円形の土坑から、須恵器甕の体部片とともに韓式系土器壺、土師器壺、高坏などが出土している。

6. 建物

今回の調査で確認できた建物址は全部で10棟あり、その大半が水路北東岸に集中している。建物の構造からこれら10棟は竪穴建物と平地式建物に二分できると考えられる。竪穴建物からは比較的残存状態のよい土器が多く出土し、建物の時期を判定するのに役立つが、平地式建物はどれも遺物の残存状態が悪く、時期の判定も竪穴建物より苦慮した。

これら建物址は、1棟をのぞいて互いに密集して近接した位置で確認されている。上部構造の規模を考えるとすべてが同時並存していたとは考えられないため、数棟ずつ時期差をもって建てられていたと考えられる。個々の建物址の規模などの記載は表9に譲る。

(1) 竪穴建物201 図版25

10棟のうち、1棟だけほかと離れた位置で検出されている方形の住居址で、西側の周壁溝が一部張り出している。張り出しの内側の床面が若干低く下がるが、ごくわずかである。

東壁中央部分にかまど痕と考えられる凹みがあり、その前面に焼土の堆積した箇所が認められる。床面全体に土師器片が残されており、1点だけ須恵器が含まれていた。2本柱の構造である。

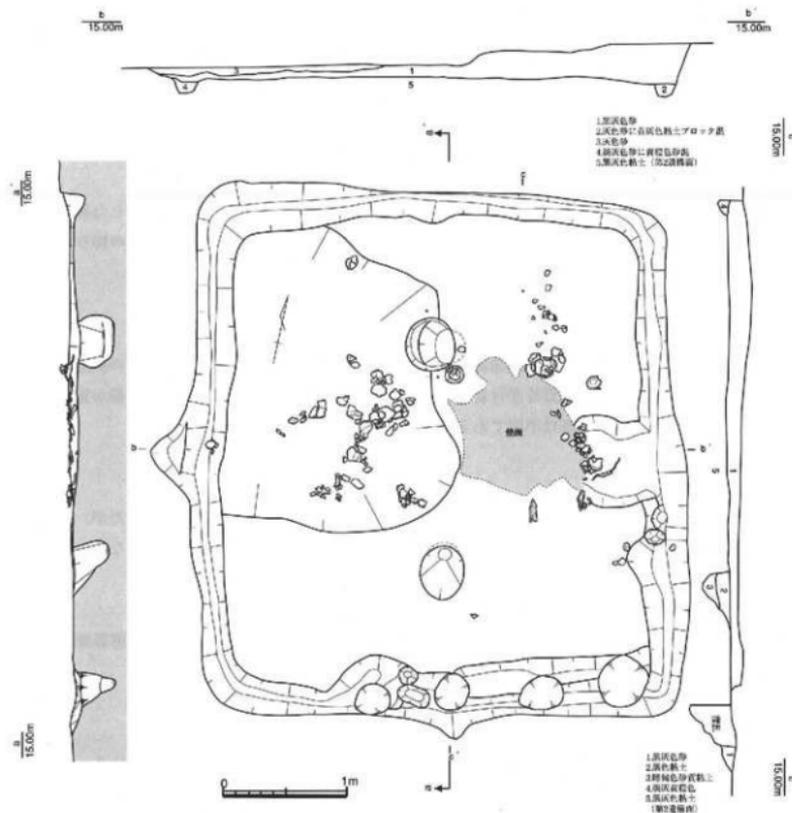


図25 竪穴建物201 平面・断面・立面図

(2) 竪穴建物202 図版26～28

水路北岸の住居址群の中でもっとも規模が大きく、床面上の遺物の残存状態も良好である。中央部分が現代の建物基礎によって破壊されているが、方形の住居址で、北側壁面にカマドが付随する。かまどの壁体およびカマド内の炭層、高坏を用いた支脚柱などが残されていた。

カマド周辺には炭化した植物遺体が面状に広がっていたため、席等の敷布ではないかと考えられたが、確定にいたらなかった。また炭化層とともに製塩土器も3点以上個体を確認しており、住人がカマドの周辺で焼き塩を作っていたことがわかる。

4本の主柱のほかに、3本の東柱らしきものが認められる。P1と番号を付した主柱穴からは、土器とともに小型の砥石も出土しており、あるいは抜柱時の埋納か廃棄にともなうものであると考えられる。

(3) 竪穴建物203 図版29

竪穴建物202より南側に位置する小型の方形建物址で、検出当初床面全体に炭化層が広がっていた。炭化層の上面に若干の土器が残されており、また炭化層を取り除いたところ床面に1ヵ所のみピットが確認できた。ピットは浅く、柱穴ではないと考えられるため、柱以外の壁等で屋根を支える構造と考えられる。

(4) 竪穴建物204 図版30

竪穴建物203より東側に位置する方形の建物址で、北側の角が後世の掘乱により欠損している。本来は4本柱の構造であると考えられる。他の住居址に比べ、出土遺物が比較的少なかった。

(5) 竪穴建物205 図版31

竪穴建物202に切られるように重なり合って確認されたもので、大半が調査区外のため、全体像が不明である。確認できた部分では、周壁溝が二重になっており、柱穴と思われるピットは2ヶ所確認できた。

(6) 平地式建物201 図版32

調査区の東側で確認したもので、建物東部分が後世に削平され欠損しているため、全体の規模などは不明である。浅い周壁溝がやや東西方向に長い形状にめぐると考えられるが、3基のピットが南北に直列している。

このピットが柱穴である可能性も残され、壁立ち構造なのか柱立ち構造なのかは、周壁溝内には顕著な痕跡も確認できなかったため不明である。床面は地面と同じ高さを保ち、周壁溝だけがわずかに下がる点で、床面全体を掘り下げている竪穴建物とは明らかに構造が異なる。西の壁に沿って床面のやわらかく下がった部分が認められる。

(7) 平地式建物202 図版33

平地式建物201と竪穴建物205の間に位置する東西に長い長方形の建物である。平地式建物201と同様、地面を掘りくぼめないで周壁溝だけがめぐると考えられる。土坑217に切られるように重なり合っており、土坑217より先行する時期の建物であると考えられる。土屋を支えるための柱穴が確認できなかったため、壁立ち構造である可能性が高いが、周壁溝内からは壁立ちの証拠となる痕跡等は確認できなかった。

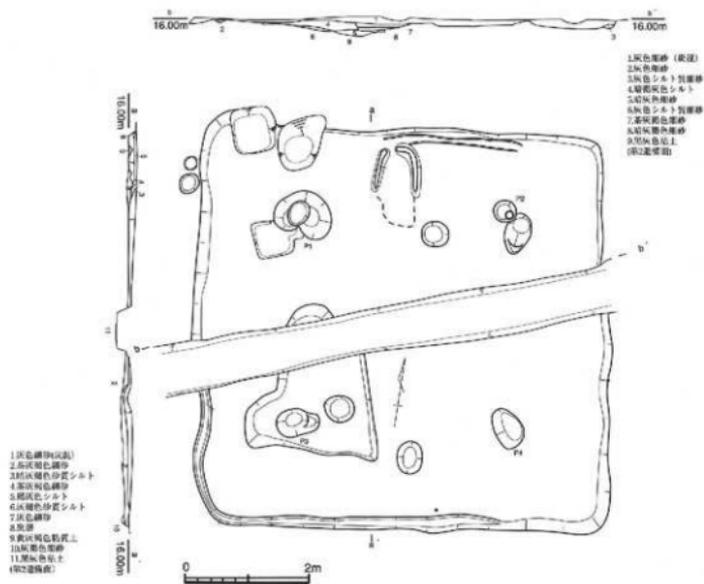


図26 竪穴建物202 平面・断面図

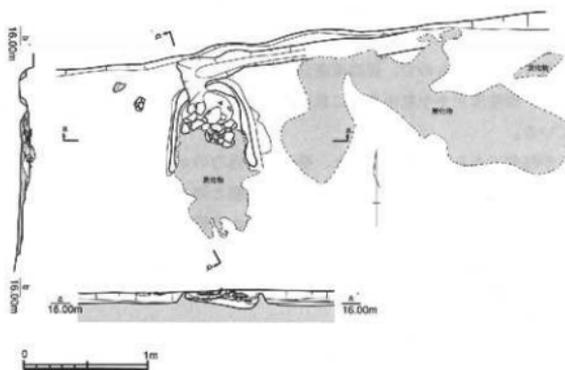


図27 竪穴建物202かまど検出状況 平面・立面図

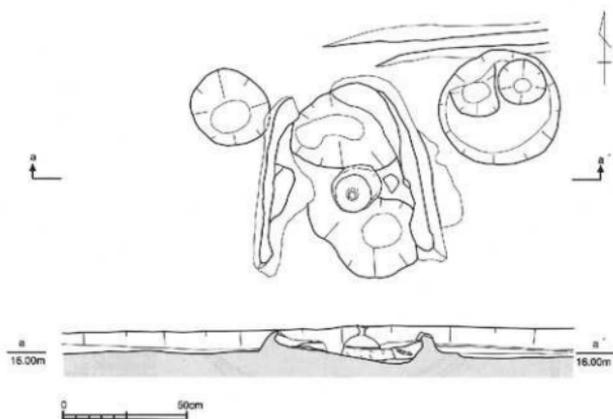


図28 竪穴建物202かまど 支脚柱出土状況 平面・立面図

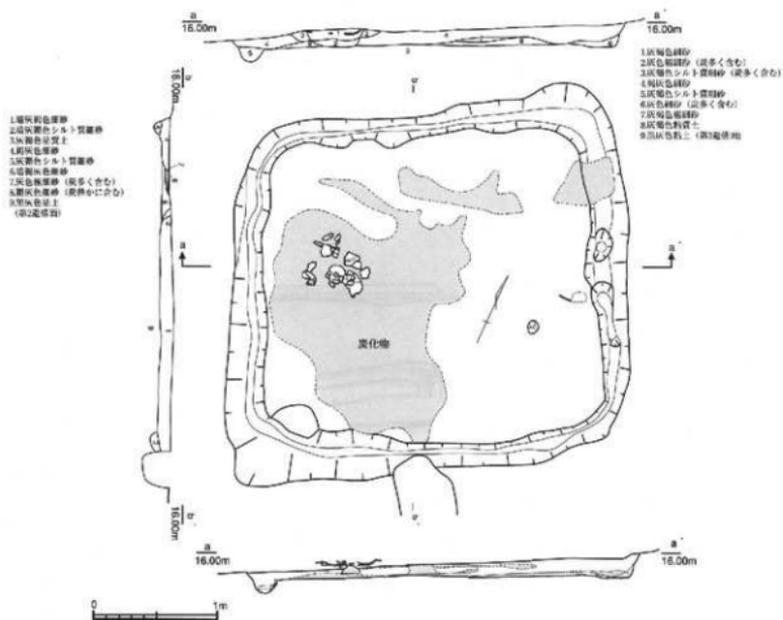


図29 竪穴建物203 平面・断面・立面図

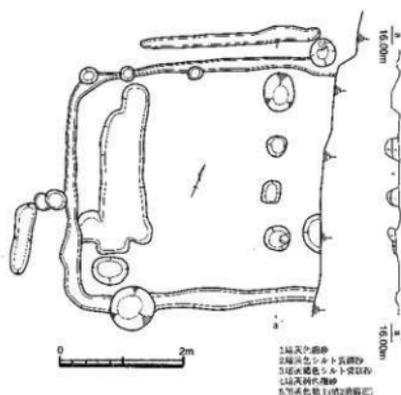


図32 平地式建物201 平面・断面図

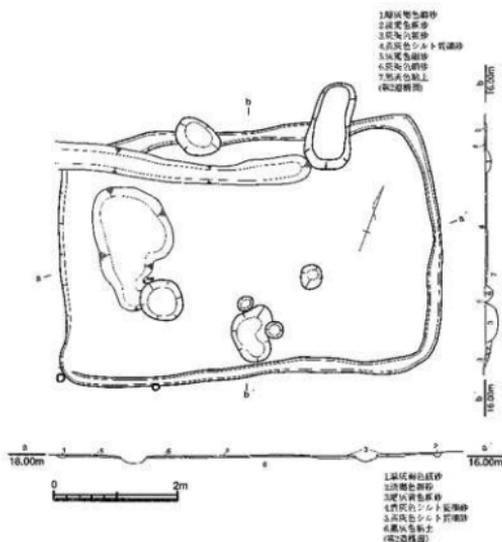


図33 平地式建物202 平面・断面図

(8) 平地式建物203 図版34

壁の西側が調査区外となるため、正確な全体像が不明である。床面が掘り下げられていないことから平地式としたが、あるいは壁穴建物の残欠である可能性も考えられる。建物内に3基のピットを確認しており、柱立ちの上部構造であると考えられる。

(9) 平地式建物204 図版34

壁の北側が調査区外であるため、これも正確な全体像は不明だが、北側にカマド痕と思われる焼十面が認められる。

これが北壁に付随するものなら、おそらく建物のほぼ全体を検出したと考えられる。

地面を掘りくほめないで周壁溝だけがめぐるため平地式住居と考えているが、上屋を支える柱穴などは認められず、壁立ちの可能性が高い。ただし周壁溝内からは壁立ちの証拠となる痕跡等は確認できなかった。

(10) 平地式建物205 図版35

北側の周壁溝が明瞭でなく、全体の大きさが確定できないが、東周壁溝の残存状態から南北に長い建物である可能性が考えられる。

床面に多数の上器を残した状態で検出されているが、中央付近に土坑状の窪みが認められる。また床面の一括土器中の高坏内部に滑石製紡錘車が納められた状態で出土している。

床の平面形が不明瞭であるため長方形ではなく正方形に近い可能性も残る。

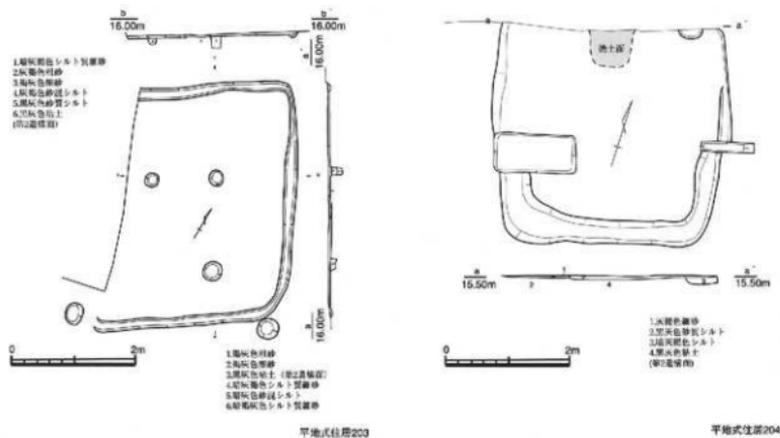


図34 平地式建物203・204 平面・断面図

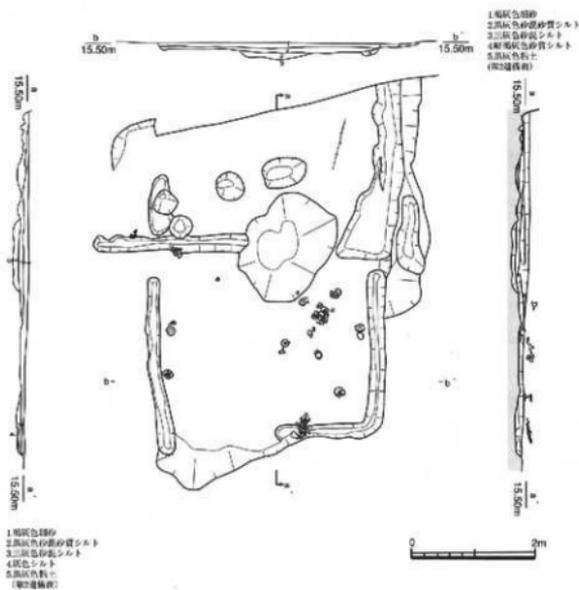


図35 平地式建物205 平面・断面・立面図

7. 溝状遺構

溝状遺構は水路とはほぼ平行に東西に伸びる2ヶ所のみである。

本来は1条の溝であったものの残欠が2条に別れている可能性が高いが、今回はそれぞれに溝201と溝202と番号を付けて区別することとした。

溝202からはほとんど遺物が出土しなかったが、溝201からは良好な状態の弥生時代末頃の土器が一括で出土している。

溝201の西端部分は、水路に切られるようにして重なり合っており、このことからこの遺構が水路形成より前の時期のものであることがわかる。溝の初源期の形状は不明であるが、水路を越えて北側では溝は確認されていないことから、水路に切られているのは溝の端部分であると考えられる。

今回検出した範囲では、溝201は長さ約19.0m、幅約1.0mで深さは15.0cm未満、溝202は長さ約7.0m、幅約1.0m深さ5.0cm程度である。

今回の調査区内で弥生時代末の土器を出土する遺構はこの1ヶ所だけである。土器の出土状況から判断して、土器は自然流入したものではなく、人為的に溝内部に土器を納める行為があったと考えるほうが自然である。先述の上坑群同様、土器を用いた祭祀遺構である可能性が考えられるが、なぜ溝の形状なのかなど疑問も多く残る。

出土した土器の中には近江系壺も含まれており、そのことにも何らかの意味を見出すべきかとも考えられるが、遺構の形状からはその用途について証明できるものはなかった。

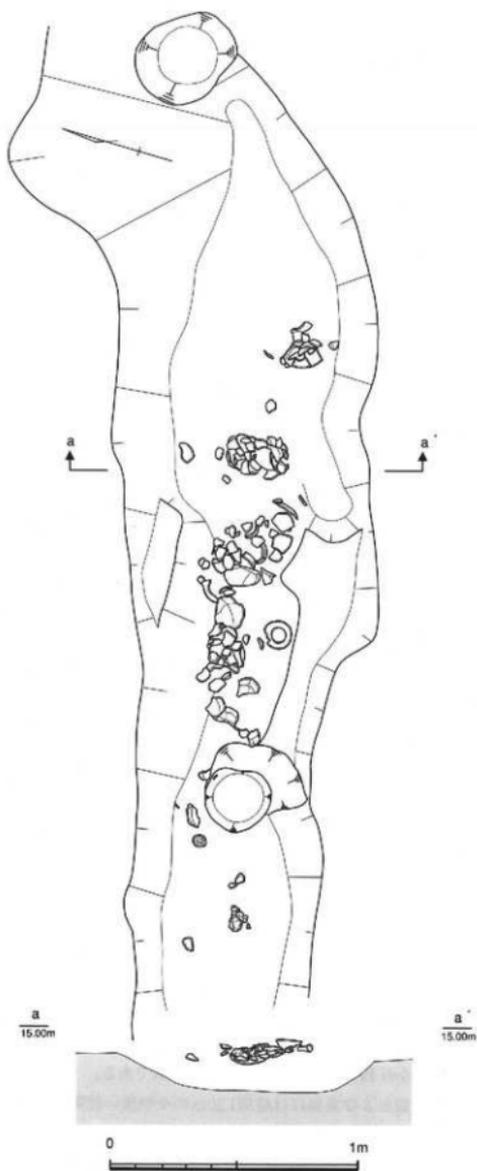


図36 溝201 平面・立面図

8. 第1遺構面の遺構

ここまで報告した第2遺構面の直上位に堆積する第27層上面には、近世～古墳時代後期までの多岐にわたる時代の遺構が残されている。これを第1遺構面として第2遺構面に先行して検出した。複数の時代の遺構が同時に検出された理由としては、本来各時期の層に残されていた遺構が後世にさまざまな理由で削平され、同一面で検出されているものと考えられる。たとえば近世遺構などは第1遺構面として検出した層より上位の層で形成されたものが、後世の耕作に伴う整地作業などで失われたと考えられる。今回第1遺構面上で検出したのはその残滓であろう。

なお第1遺構面を形成する基盤層は、第2遺構面直上位に堆積している古墳時代前期～中期の遺物包含層でもある。この層は今回の調査区の北東を中心に堆積しているが、調査区南端および、西半部では確認できなかった。包含層が確認できない範囲では第2遺構面直上に6世紀後半の土器を出土する洪水性堆積層、あるいは無遺物層が堆積していた。これら包含層の認められない部分では、北東側の第1遺構面に相当する時期の遺構は確認できず、またその状態が後世の地層の置換によるものか本来の状態かも確認できなかった。西側については、洪水砂層の直上で現代の盛上りが認められた。

第1遺構面では多数の遺構を確認したが、そのうちで特筆すべき遺構は、調査区北側で確認した方形区画状の溝1ヶ所および掘立柱建物1棟である。出土遺物から判断して掘立柱建物は奈良時代、方形区画は古墳時代後期と考えられる。

その他の遺構の概略としては、同一軸方向でほぼ平行に走る南北方向の浅い溝を14条（溝101～114）調査区北側で確認したが、近世あるいは中世の耕作痕と考えられる。溝107と番号を付したものについては、出土遺物から近世溝と特定できた。そのほかの溝からは顕著な遺物は出土しなかった。

それ以外に北東から南東に走る不整形の溝状のもの（溝120、124ほか）を複数確認しているが、これらはいわゆる地震による「地割れ痕」あるいは「噴砂痕」等地震災害の痕跡であると考えられる。これらの地震痕は、第1遺構面以上の層では視認できず、第1遺構面上ではじめて部分的に観察可能となり、もっとも明瞭になるのは第2遺構面の層まで掘り下げた地点である。

このことから地震が発生したのは第2遺構面が形成された後から、包含層が堆積するまでの機関、古墳時代中期～後期の可能性が最も高いと考えられる。地割れ状痕跡の内部には直上位に堆積していた粗砂層と同質の粗砂が堆積しているが、この粗砂は非常に深くまで堆積しており、底を確認できない。

第1遺構面では他に土坑状の落ち込みも31基、中世の非戸と（井戸101）確認しているが、上坑について出土遺物が細片のため、近世、中世、奈良時代の可能性が高いが確定は出来ず、用途なども判定できないものばかりである。いずれにせよ、調査範囲全体を通して見ると、第1遺構面は遺構密度が第2遺構面と比較して極端に低いことが指摘できる。

(1) 掘立柱建物101 図版37

掘立柱建物101は、調査区中央やや北側で確認したもので、4間×3間分の柱穴列である。この建物は柱間1.80m程度が基本だが北から四列目および五列目の東西列間は80.0cmと極端に狭い。これは構造上のものか柱列をやりかえたものかは不明である。

また北側および東側には柱間1.20mのやや狭い間隔で南東隅を欠く柱列が付随しており、庇の可能性が考えられる。北側の庇列は雨落溝状の溝を伴っているが、溝は柱穴に切られるようにして重なり合っており、また建物よりかなり東西に長いことからみて、建物とは直接関係がなく、掘立柱建物に先行する遺構である可能性も残される。ただし二つの遺構は軸方向が同一なため、両者の関係性が推測される。

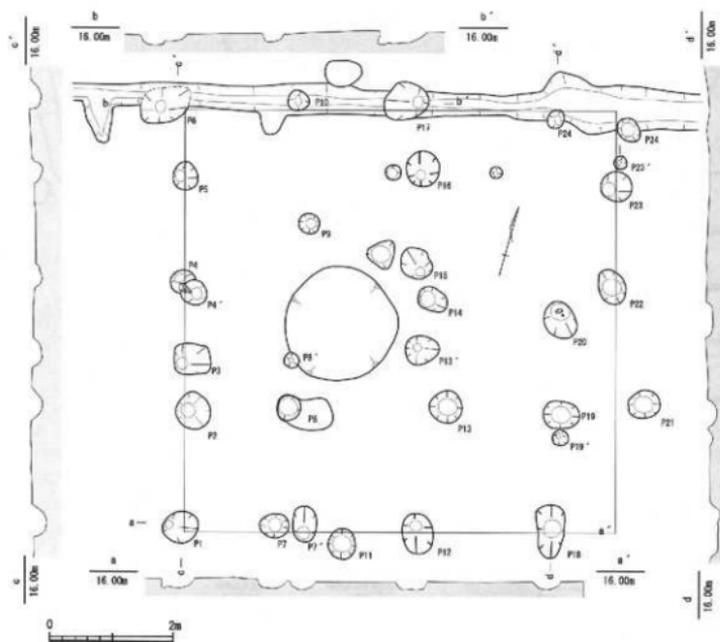


図37 掘立柱建物101 平面・断面図

建物の軸方向はN-15°-Wとなり、南北方向に長い建物の可能性が高い。

これらの柱穴からは、ほとんど土器が出土しておらず細片ばかりだが、1点だけ奈良時代の土師器塚がほぼ完形で出土している。このことから奈良時代の建物であると考えられるが、調査区全体を通じて、奈良時代の遺構が他に認められないことから、多少の違和感はある。

(2) 方形区画101 図版38～39

大半が調査区外になり、今回確認できたのは一部分のため、実際の形状や規模は不明の遺構である。確認できた範囲では、幅2.5m深さ100.0～80.0cm程度の溝が四角くめぐることによって方形に区画された台状の遺構となると推測される。区画は大半が調査区の外であるため、正確な形状や規模は不明である。確認できた範囲では東西方向に一边が約8.0m程度であると考えられる。南北方向の長さは不明である。区画の軸方向は座標北に対しほぼ0°となる。

この区画全体を上から洪水砂が覆っており、水田を埋没させたのと同じ洪水で最終的に覆われたと考えられるが、溝そのものは洪水砂ではなく、黒灰色粘土系を主体としており区画は一定期間露出して、ゆるやかに埋没したと考えられる。周囲にめぐる溝は、内からは古墳時代と考えられる土器片が多数出土したが、破片ばかりである。ただし区画の南東角付近でTK43併行期に該当すると思われる提瓶3点

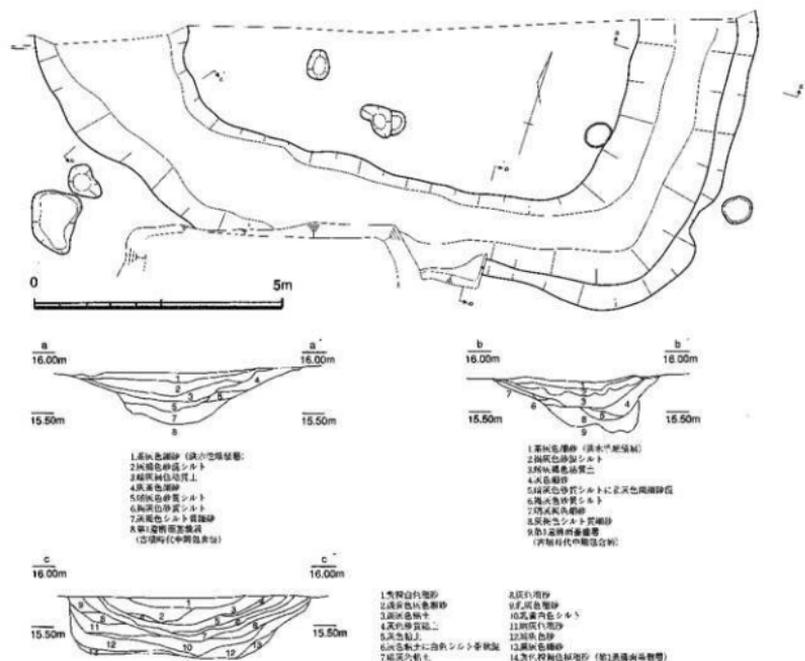


図38 土坑201 平面・断面図

が置かれた状態で検出しており、遺構にともなう土器である可能性が高い。したがってこの遺構の時期もこの須恵器の時期のものである可能性が考えられる。

この遺構の全体像は不明だが、方形の溝を持つ区画で、提瓶等の須恵器が供献されていたと考えるならば、古墳の可能性が高いが、今回検出した範囲だけではそれを証明あるいは否定するようないかなる証拠も得る事ができなかった。これまでも郡家遺跡の随所で後期古墳が散発的に発見されており、立地的には否定できないものではあるが、以下に述べるような埋没過程を経ていると考えると古墳以外の可能性も十分あると思われる。

溝内部の埋土の最上層には薄く洪水性堆積層が残されており、同質の砂層が区画全体を覆っている。もしこの遺構が、古墳であるとすれば、洪水で覆われる以前にすでに墳丘部分は削平されて失われており、その後緩やかに溝内部が埋没し、最後に洪水砂で覆われたことになる。洪水砂層から6世紀紀範の土器が出土しており、墳丘構築→削平→溝埋没→洪水までのスパンが非常に短期間だった事になる。溝が埋没する以前に墳丘が失われるという過程に不自然さを感じざるを得ない。

また溝の断面形も、基本的区画側の壁が垂直に落ちる凹字型に近く、墳丘の裾部の構造としては非常に不自然である。区画内に建物などが建っていた痕跡も、今回検出された範囲内では確認できなかった。

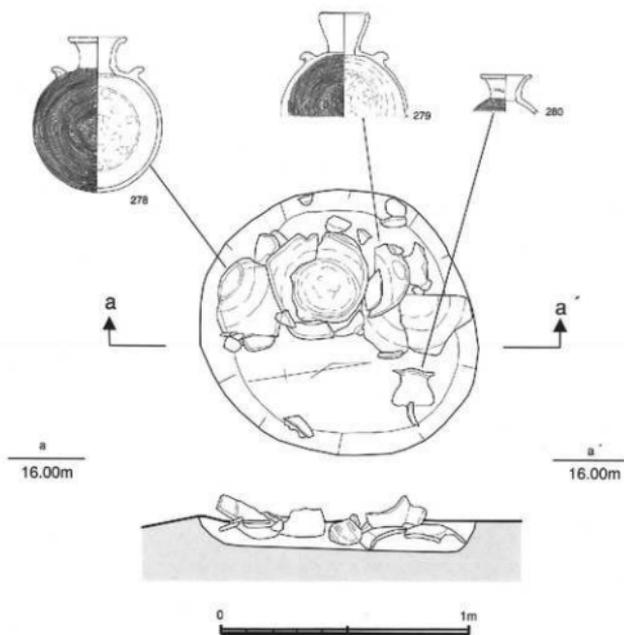


図39 供献土器1 平面・立面図

9. I区の遺構

今回の調査では、ここまでに報告したⅡ～Ⅴ区と呼称した調査区については連続するひとまとまりの範囲であるため一括で報告したが、I区に関しては、調査区が独立しており、以下で別に報告しておく。

I区の基本層序も本質的にはⅡ～Ⅴ区に準ずるもので、確認した遺構面2面もそれぞれⅡ～Ⅴ区の第1遺構面、第2遺構面に相当する層である可能性が高い。しかしI区の各遺構面で検出した遺構は、Ⅱ～Ⅴ区と連続するもの、あるいは共通する属性を持ったものは認められなかった。

特に第2遺構面の遺構に関しては、Ⅱ～Ⅴ区の遺構の有機的な構成からするとこの結果には違和感を感じ得ないが、I区の部分はすでに古墳時代前期～中期の集落の範囲外とも考えられる。I区に関しては調査面積が限られているため、確定的なことが報告できない。

第1遺構面では東西方向に走る浅く細い溝を複数確認しているが、Ⅱ～Ⅴ区までの耕作痕とは方向が異なる。その他土坑2基も検出したが、出土遺物も少なく時期などは不明である。これらの遺構に切られる形で浅い落ち込み状の遺構も部分的に検出しているが、調査範囲が狭いため全体像は良くわからなかった。

第2遺構面ではピットが数基確認できたが、特に配置に規則性もなく建物などを構成するものではないと考えられる。その他調査区南辺にそって溝状の落ち込みも確認しているが、これも調査区が狭いために全体像がわからず、遺構の性質や形状などは不明である。

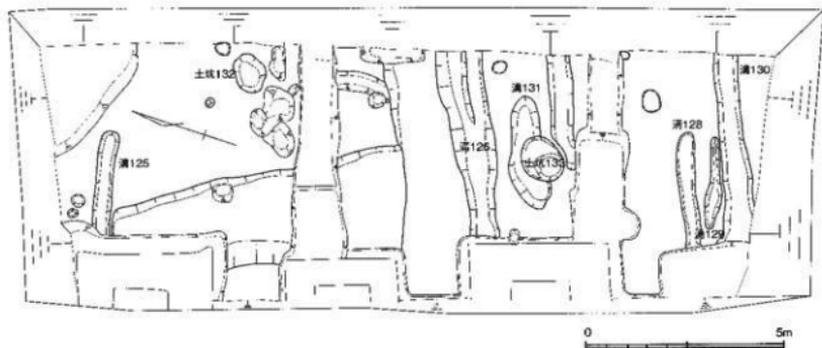


図40 I区第1遺構面 平面図

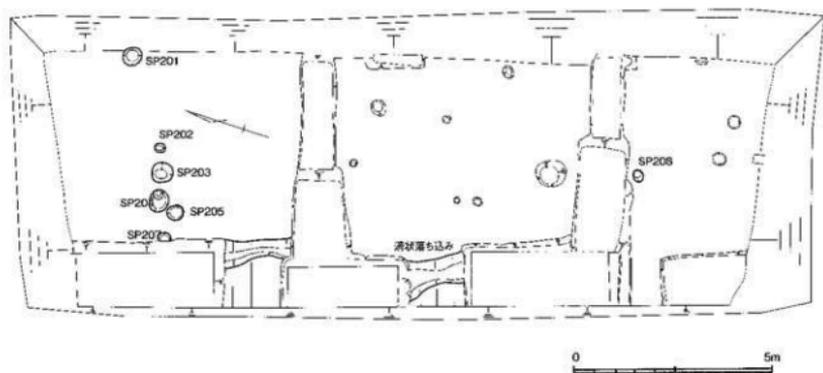


図41 I区第2遺構面 平面図

第5章 出土遺物

1. 第2遺構面出土の土器

今回の調査では、包含層、洪水砂層、遺構内などから、多くの遺物が出土した。これらの出土遺物の大半は土器で、そのほか砥石、玉類などの石製品、水路内から一括で出土した木質遺物、住居址床面から出土した炭化材などの植物遺体がある。

木質遺物については自然化学分析の章に詳細をゆずることとし、ここでは土器、特に第2遺構面を中心とした遺構からの一括出土資料を中心に報告する。

前章で述べたとおり、本調査区の第2遺構面で発見した遺構はその属性から、大きくは①土坑②住居址③溝④水路⑤水田の5つに大別できる。水田遺構を除くそれぞれの遺構からは、良好な土師器の一括資料が多く得られたため、本章では、これら一括資料の土師器全体を大まかに形式および型式分類した上で、遺構の属性に沿って順次記述する。

2. 土坑出土の土器

本調査区の第2遺構面上で確認した土坑25基のうち、良好な一括資料を出土したものは9基である。その他の土坑で、ある程度固化作業に耐え、遺構の時期を確定できるものが6基あった。

また、本調査区で確認した土坑において、最も特筆すべき特徴として、多量の土器片が折り重なって、投棄されたような状態で出土していることがあげられるが、これら各土坑からの出土遺物を詳細に検討した結果、複数の異なる土坑から出土した破片同士が接合している例が5点確認された。今回固化に至らなかった細片状のものもふくめれば、あるいはさらに土坑間接合の例は増える可能性も残る。

以下にそれらの土坑からの出土遺物について詳述しておく。なお、各形式の型式分類および甕の口縁部形態分類については第7章第1節を参照のこととする。

(1) 土坑201 図版42～43

土坑201からは多くの良好な土器が一括資料として出土したが、その内固化できたものは33点である。1～16は甕である。壺Ⅱ型式およびⅢ形式の資料が顕著だが、固化できないもののうちには壺Ⅰ型式底部なども含まれていた。

1、3は単純くの字のa1口縁部に、体部外面をタテハケで調整しており、4、5は単純くの字が肥厚したa2口縁部に体部外面上半を右上がりタタキで、下半をヨコハケで仕上げられており、より強く庄内甕の影響を感じさせるが、口縁部の形態そのものは弥生的である。

6は直線的な口縁部cにつまみ上げた口唇部で、体部が球形に近づいている。

7は直線的な長い口縁部cを有し、壺と甕の中間形態である。

8、9は内湾し唇部を丸くおさめる口縁部d1にやや下彫れ気味の胴部が付随する。

10～15は内湾する口縁部で端面が外傾する(d3)が、15は肩部に横位のハケを施しており、古留式甕の影響を感じさせる。

16は口縁部だけの破片だが、内湾する口縁部に内傾する端面d4と、形状は布留式的である。17～19は広口甕だが、大型品、中型品どちらも丁寧なヘラミガキとハケで精緻に仕上げている。

20、21は二重口縁壺、22は無稜外反高杯の坏部である。

23は二重口縁鉢、24、25は浅鉢である。いずれも丁寧なヘラミガキとハケで精緻に仕上げている。

26～29は小型丸底甗だが、口径が器高を凌駕するタイプの26～28と、器高が口径を凌駕する29とが混在している。30、31の小型器台は受け部が浅く立ち上がり、体部に円孔が貫通するタイプである。裾が広がる脚台の形状である

34は小型鉢、いわゆるミニチュアの手握土器である。

(2) 土坑202 図版44～46

土坑201に西隣する土坑202は、本調査区で確認され土坑の中で最も大きく出土遺物量も多かったため、良好な状態で多数の土器を一括遺物として取り上げることができた。そのうち44点を図化することができた。

35、36は単純くの字a1口縁部に、体部外面をタタキとハケで調整する甗である。36は単純口縁ながら、端部をわずかにつまみあげている。

37～41は単純くの字が肥厚したa2口縁部をもつタイプで、40は体部内面をヘラケズリで整え、体部外面上半は縦位のヘラミガキで、下半は斜位のヘラミガキで調整し、その境となる肩部に横位のハケを一周させている。肩部のハケなどあきらかに布留式甗を意識した調整でありながら、器形的には弥生～庄内甗を踏襲している。

42～49は外反する口縁部bに球形の体部が付随するものである。外面の調整は上半をタテハケで、下半をヨコハケで整えるが、肩部に横位のハケは施さない。

46、47は内湾し端部を丸くおさめる口縁部d1に球形の胴部が付随する。内面をヘラケズリで整えるなど、布留式甗の影響を強く感じさせる器形だが、口縁部にヨコハケを施すなど弥生式的要素も残す。

48は内湾する口縁部につまみあげた端面が水平に仕上げられているd2タイプである。

49～52は内湾する口縁部で端面が外傾するd3である。

53、54は内湾する口縁部に内傾する端面d4で、体部内面をヘラケズリで仕上げ、外面全体をタテハケで調整し、肩部にのみヨコハケを施すなど布留式影響下の甗ではあるが、尖底気味の器形、口縁部のヨコハケなど弥生式的要素も残す。53は緩慢な二重口縁を呈している。

56～59は広口甗である。外面はいずれも精細なハケを施し、内面も丁寧なナデあるいはヘラケズリで美しく仕上げている。

60は大型の二重口縁甗で、やや尖底である。外面全体をヘラミガキで光沢のほど仕上げられており、美しい精製品である。

61は小型の二重口縁甗だが、精細なハケで全体を仕上げている。

62は直口甗だが甗に近い器形を呈する。外面をヘラミガキとハケで、内面をヘラケズリとユビナデで仕上げている。63、64は中型の直口甗である。65、66は外反無稜高坏だが、65の坏部は直線に近い。

67～69は鉢だが、67は二重口縁甗で、精細なヘラミガキで外面を仕上げている。

70～72は小型丸底甗だが、口径が器高を凌駕するタイプの70と、器高が口径を凌駕するタイプの71とが混在している。73～75は小型器台で、体部に円孔が貫通するタイプとしないタイプの両方が混在している。受け部は立ち上がらない。

76は台付鉢あるいは器台の脚部である。

77～79はいわゆるミニチュア土器で、それぞれ碗、台付鉢、甗の小型品である。

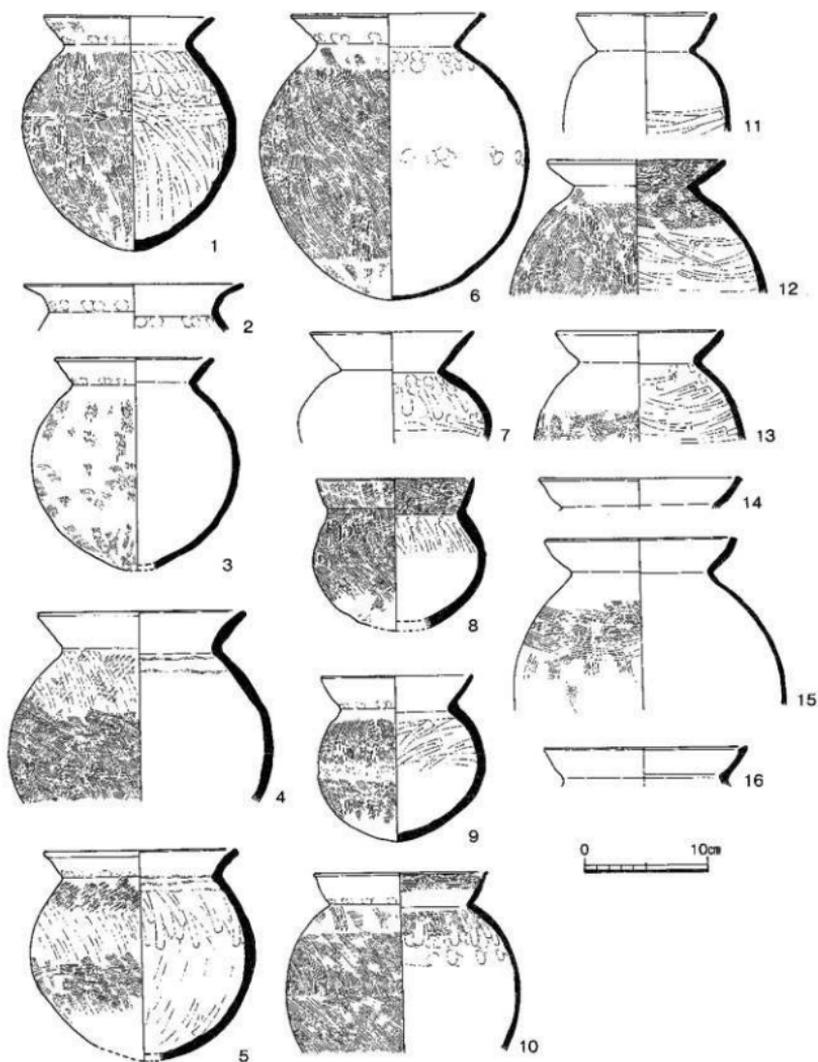


図42 土坑201一括出土土器実測図(1)

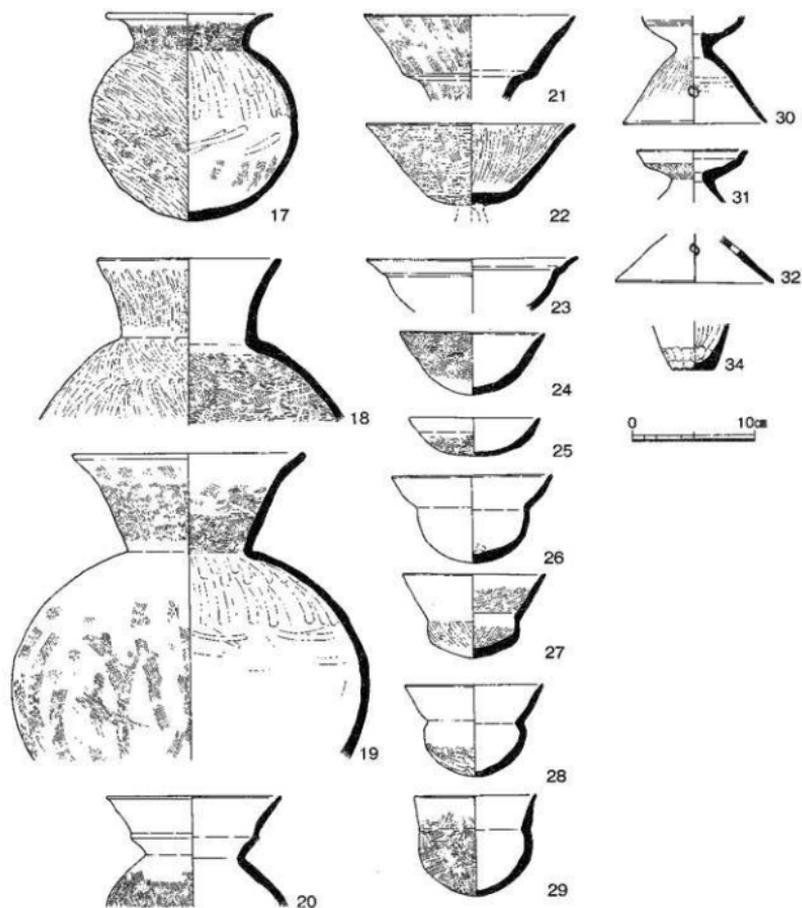


図43 土坑201—一括出土土器実測図 (2)

(3) 土坑間接合資料 図版46

異なる土坑から出土した土器片同士が接合し、1個体の土器となる例が5点確認できた。そのうち4点は土坑201と土坑202から出土した土器片同士が接合したものである。1点は土坑202と土坑205の資料が接合した。

80～82は甕だが、80、82は単純くの字が肥厚するa2Li縁部のもので、82は外面に右上がりタタキを施している。83は内湾する口縁部で端面が外傾するd3で、球形の体部の内面はヘラケズリ、外面はタテハケで肩部にのみヨコハケを施すなど本調査区で確認できる布留系甕の典型である。

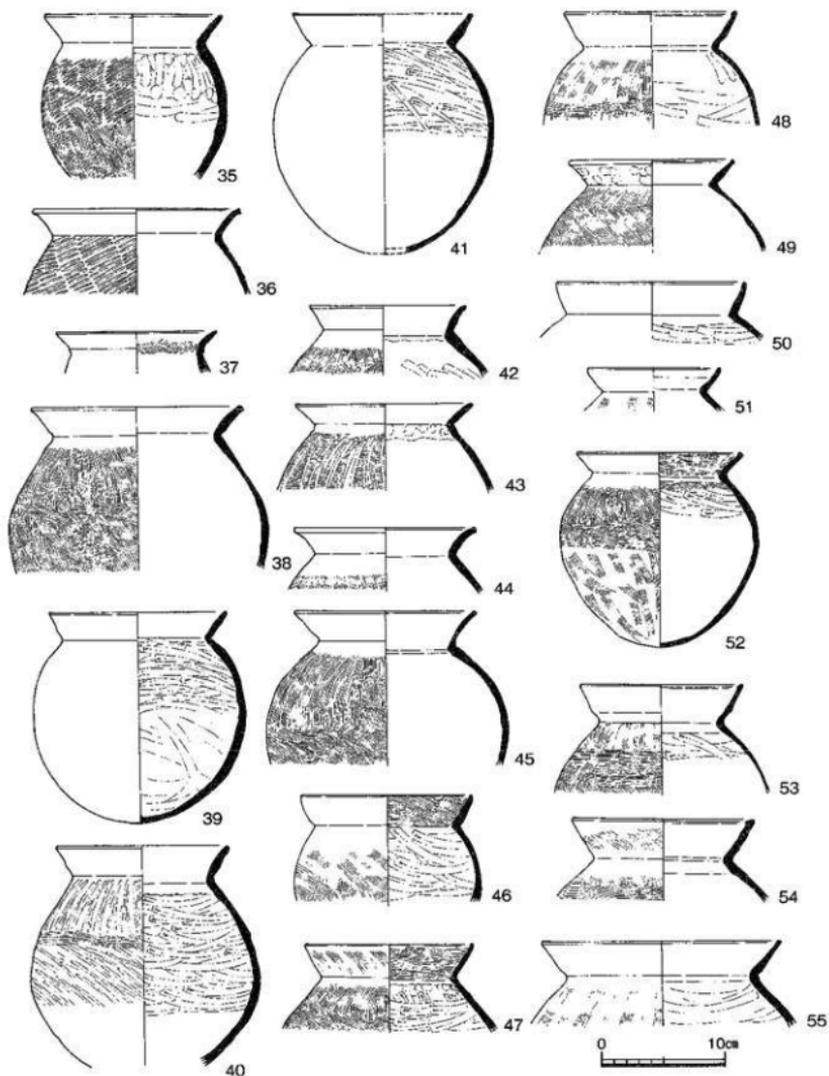


図44 土坑202—一括出土土器実測図(1)

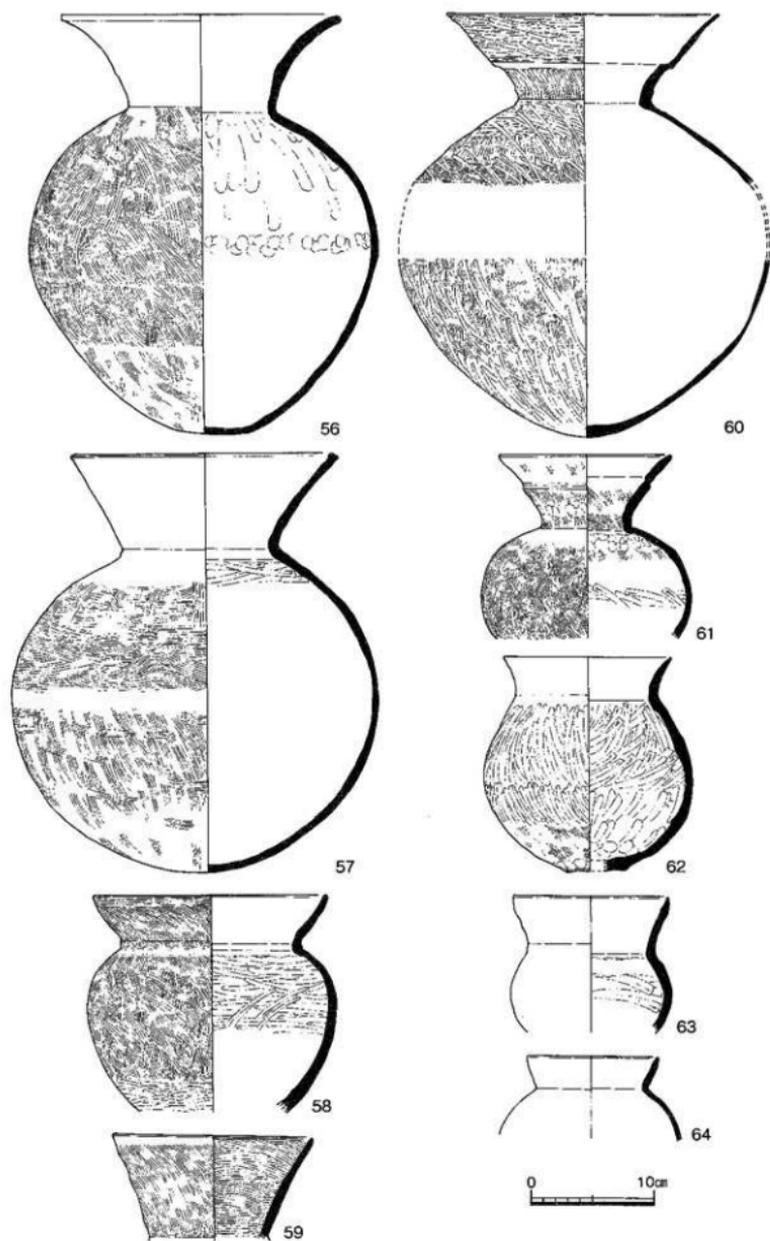


图45 土坑202—括出土土器实测图(2)

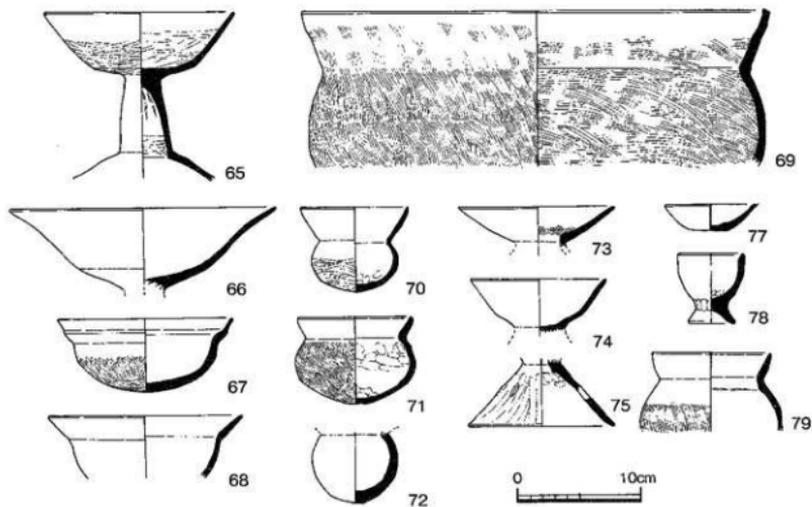
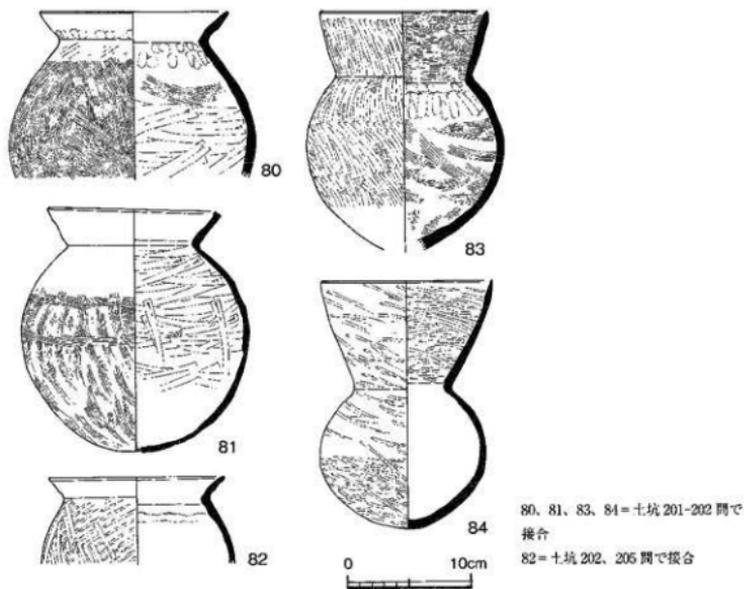


図46 土坑202—一括出土土器実測図 (3)



80、81、83、84 = 土坑 201-202 間で
接合
82 = 土坑 202、205 間で接合

図47 土坑間接合資料実測図

(4) 土坑205 図版47

土坑202に西隣する土坑205からも一括で投棄されたような状態の土器が出土している。量的には土坑201、202ほどではないが、5点が図化できた。

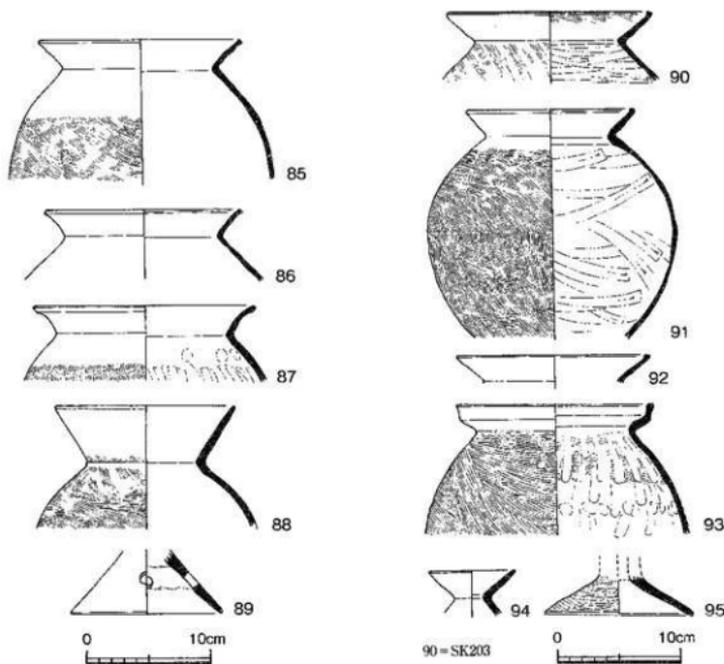
85～87は甕だが、外反する口縁部の口唇部を積み上げたもの (b2) が多く認められた。口縁部のみの破片ばかりで、全体的な器形や調整などは不明な点が多い。

88は広口壺、89は小型器台の脚台部である。

(5) 土坑203・土坑207・土坑208・土坑210 図版48

90～93は甕の口縁部である。90は土坑203から出土したもので、91、92は土坑208から出土した。90、91は内湾する口縁部で端面が外傾するd3のタイプで内面をヘラケズリでごく薄い器壁に仕上げている布留式の要素が強い甕である。93は受け口状口縁に、厚い器壁の体部外面をX状に交差する、非常に粗いヨコハケで仕上げている。近江産土器あるいはその影響下に模倣された他産地系譜の甕である。

94は土坑210から出土した小型器台の受け部、95は土坑207から出土した高坏の脚部軀である。



90 = SK203

91, 92 = SK208

93, 95 = SK207

94 = SK210

図48 土坑205一括出土土器実測図

図49 その他 II～Ⅲ区土坑出土土器実測図

(6) 土坑206 図版49

土坑206も先述の土坑同様に良好な一括資料が出土しているが、(1)～(5)に示した土坑とは、土器の出土状況、および土器の示す時期に差異が認められる。この一括資料の示す時期は、須恵器登場以降のどこかであると考えられるが、土坑内からは須恵器はまったく出土していない。

96は甕である。体部外面は粗いハケを全体に施し、内面はユビオサエとユビナデのみで仕上げている。そのため内面は全体に著しく凹凸し、粗裂という表現がふさわしく、布留系甕の執念的なまでの精製ぶりとは対極をなす。分厚いくの字あるいは肥厚ぎみに直線または内湾し、端面がやや内傾する口縁部をもつ。外面のハケの方向は肩部までが横位で胴部以下が縦位となる。

このタイプは寛V型式と分類したもので、須恵器登場以降の土師器甕である。肩部に張りのある球体にちかい胴部で、底部に向かって急にすぼまる。内湾気味の分厚い口縁部、球体に近い器形など、布留式甕の名残をのこしつつ半島系甕の影響下にあるものとする。

97は無形壺である。内面のユビナデは96の甕同様だが、外面はハケやヘラミガキで比較的精緻に仕上げようという意思が伺える。

98、99は直口壺の頸部である。

100～103は高坏である。円錐状の脚柱部からくの字に屈曲して広がる裾部という脚部の構造はすべてに共通している。102、103は有稜の坏部だが口縁部は外反せず塊状に近い。

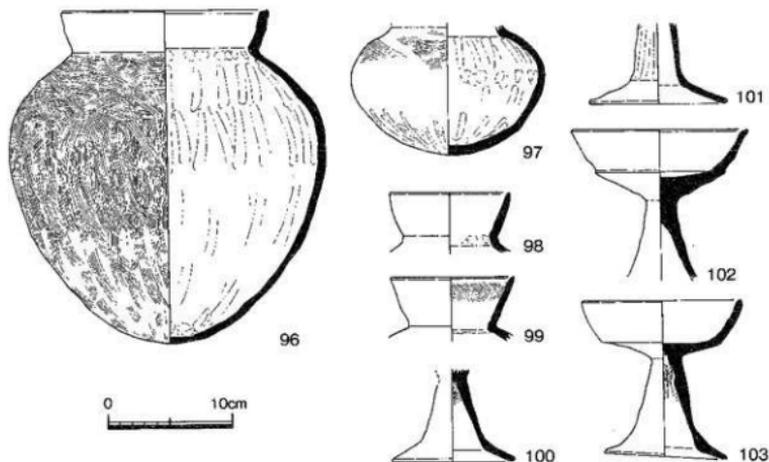


図50 土坑206一括出土土器実測図

(7) 土坑214 図版50

土坑214からは小型製品を中心とした一括資料が出土した。

104は甕の口縁部の破片である。104と108の直口壺、110の鉢以外はすべて小型土器である。

105～107は小型丸底壺だが、器高が口径を凌駕する、短い口縁部のもののみである。

109と111は小型の甕あるいは壺である。

110は直口の鉢で、やや尖り底気味である。

112は手捏のミニチュア鉢、113は小型の台付き鉢の脚台部である。

(8) 土坑215 図版51

土坑215からは韓式系土器と思われる壺2点が、格子目文タタキの韓式系土器の破片および、おそらく韓式系土器と思われるヘラミガキを施した平底の土器の底部とともに出土している。これらの韓式系土器は、土師器の甕、高坏などを伴っていた。

114、115は韓式系土器の軟質の壺である。どちらも体部外面は精緻なヨコナデで磨き上げられており、列島の土器の調整技法の定石からは異質な感がある。内面も丁寧なナデおよび部分的にユビオサエで仕上げられており精製品である。褐色系の色調を示し、この点でも在地産土器とは一線を画すが、肉眼では胎土内に在地産と大きく異なる鉱物は確認できなかった。

114は韓式系土器の格子目タタキの軟質系壺の器形に類似しており、115は同じく韓式系土器の瓦質扁球系丸底短頸壺に近い器形である。

これら半島系諸の土器の影響下に製作されたものではないかと考えられる。

116は土師器甕の口縁部だが、甕Ⅳおよび甕Ⅴ型式としたものの口縁部の典型である。

117～119は外反無稜高坏の坏部だが、口縁端部が短く外反するものである。119は高坏の脚部である。

120は軟質土器の平底の底部だが、外面をヘラミガキで仕上げている。

底部のみの破片のため詳細は不明だが、在地の調整技法、器形の文脈の中に該当するものがないため、韓式系土器の可能性を指摘したい。

(9) 土坑216 図版51

土坑216からは、土坑206に類似した土師器甕などが出土している。この一括資料の示す時期は、須恵器登場以降のどこかであると考えられるが、土坑内からは須恵器は1点しか出土していない。土師器が量的に圧倒的に優位である。

121は体部外面に粗いハケを全体に施し、内面はユビオサエとユビナデのみで仕上げている。そのため内面は全体に著しく凹凸する。口縁部は欠損している。甕Ⅴ型式と分類したもので肩部に張りのある球体にちかい胴部で、底部に向かって急にすままる。

122は二重口縁の甕である。体部内外面の調整技法は121の甕とほぼ同様だが、口縁部の形態が異なる。外面のハケの方向は肩部までが横位で胴部以下が縦位となる。

123、124も土師器甕の口縁部だが、甕Ⅴ型式と分類したものの典型である。

125、126は広口壺の頸部である。

127～130は高坏だが、127は塊形の坏部の口縁部がやや受け口状に屈曲する。129、130は塊形高坏で、円錐の脚柱部から、くの字に屈曲してひらく裾部が付随するといった共通点が挙げられるが、129は坏

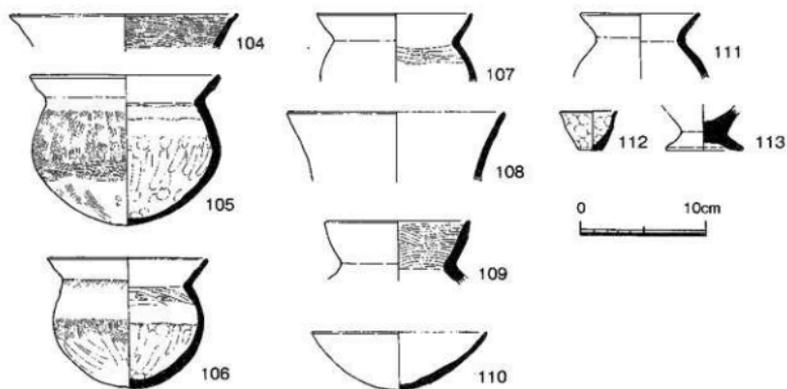
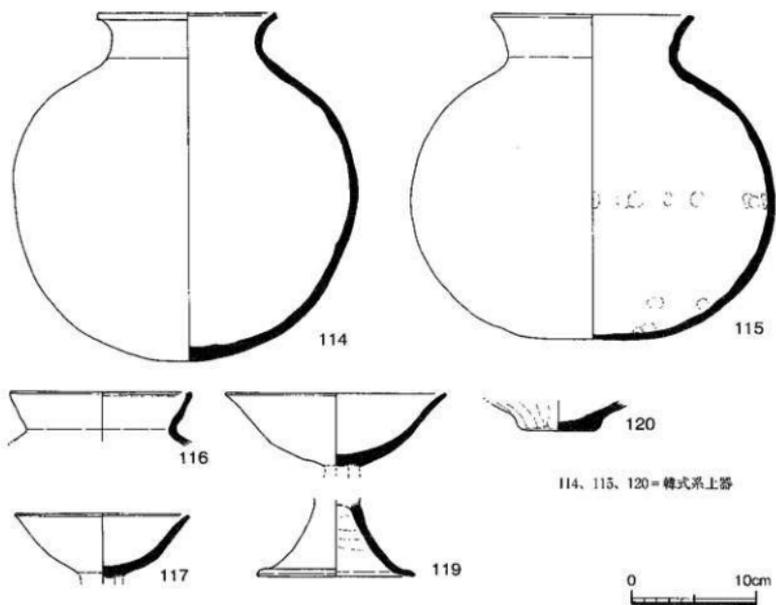


図51 土坑214—括出土土器実測図



114、115、120 = 韓式系土器

図52 土坑215—括出土土器実測図

口径に比してアンバランスに脚柱部が長く、130は円錐部分が太短く肥大している。

131は小型丸底壺の口縁部である。

132は須恵器高坏の脚部である。この1点だけが須恵器である。

(10) 土坑217 図版53

土坑217からは韓式系土器の軟質平底鉢と、土師器壺、高坏などが共伴した状態で出土している。内面の同心円文タタキ目をすり消した須恵器甕の体部片も伴っていたが、図化できる破片ではなかったため、共伴していた事実を明記しておく。

133は土師器壺の体部だが、口縁部が欠損している。外面はハケ、内面はユビオサエ・ユビナデで全体に著しく凹凸するなど、この時期の土師器に共通する技法で調整されている。

134、135は口縁部端部が短く外反する無後外反高坏である。

137は手捏のミニチュア鉢である。

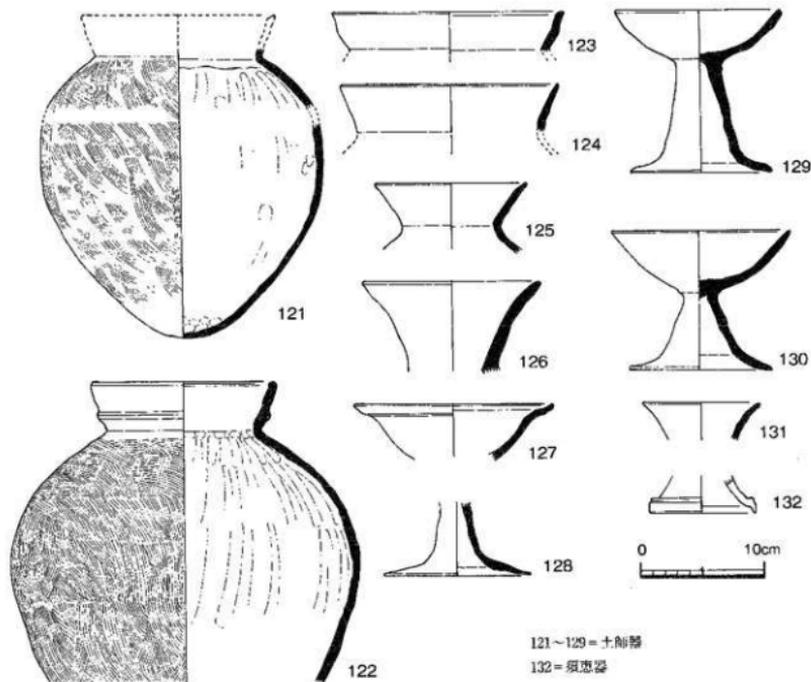


図53 土坑216—一括出土時実測図

(11) 土坑218 図版53

上坑218からは布留式系甕口縁部の破片ほか土師器が数点出土している。

138は内湾する口縁端部をつまみ上げた甕である。139は直口壺の口縁部と思われる。

140、141は鉢だが、直門口縁のものと屈曲する口縁のものが混在する。

(12) その他の土坑等 図版54

その他、破砕した土器の破片を投棄したと思われる土坑のうち、土坑222および土坑223からは単純く字口縁部にタタキ目をほどこした甕Ⅰ型式の甕が出土している。

145、146は土坑ではなく浅い落ち込み状の遺構だが、それぞれ弥生土器が出土している。146は弥生Ⅳ様式の高坏脚部と考えられる。

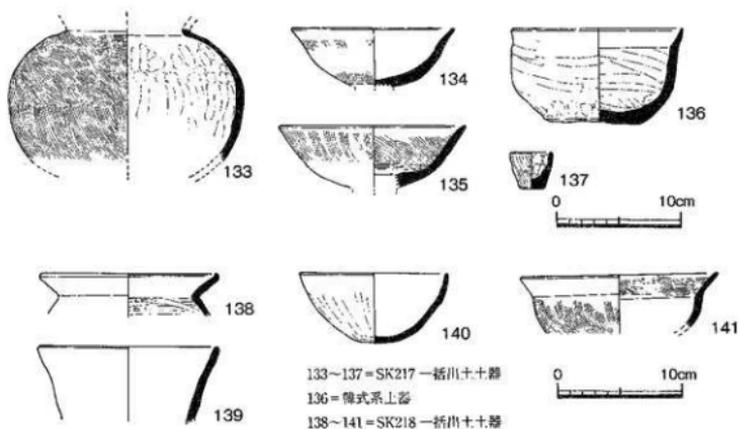
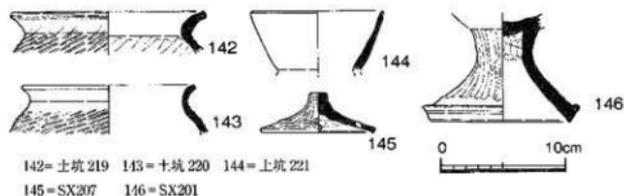


図54 土坑217・218一括出土土器実測図



142=土坑219 143=土坑220 144=土坑221
145= SX207 146= SX201

図55 その他の遺構出土土器実測図

3. 建物址出土の土器

本調査区では11ヶ所の住居址を確認しているが、そのうち竪穴建物201、竪穴建物202および平地式建物7とした3つの住居址床面から良好な一括資料を得た。その他の住居址からも一定量の図化可能な土器が出土している。住居址からの出土遺物の特筆すべき点としては、どれも須恵器登場以降の時期の遺物と考えられるが、共存する須恵器が極めて少量である点である。

(1) 竪穴建物201 図版55

竪穴建物201の床面直上に散乱した状態で確認された一括遺物のうち須恵器片はわずかに1点である。その他はすべて土師器であった。図化可能な13点を掲載する。

147～153までは甕である。口縁部みの破片も多いが、確認できたものはすべて甕Ⅳあるいは甕Ⅴ型式の分厚いくの字あるいは肥厚ぎみに内湾し、端面がやや内傾する口縁部である。

147、148は肩部が確認できたが、ややなで耐気味で、150は完全になで腐化しており甕Ⅴ型式の肩が張り、底部に向かって急速にすぼまる器形ではなくなっている。のちの長期化につながる変化を感じさせる。体部外面に粗いハケ、内面はユビオサエとユビナアで内面が著しく凹凸するという調整技法は甕Ⅳ、甕Ⅴの両型式に共通している。

156～159は高坏である。坏部の確認できる157、158はともに有稜で口縁端部が短く外反するが、丸みを帯びた塊形に近い坏部形態である。

159は小型丸底甕だが、器高が口径を凌駕するものである。ただし直線的な口縁部が長く伸び、縦長の器形をなしている。

160は大型の鉢である。くの字に屈曲する口縁部をもつタイプだが、口縁部は短い。

161は、竪穴建物201の一括資料中唯一の須恵器片である。朝顔形に外反する甕の口縁部で、端部は鋭い稜をもつ。口端近くに沈線1条と断面三角形の凸帯1条をめぐらす。TK208からTK23に該当する時期のものと考えられる。

(2) 竪穴建物202 図版56

竪穴建物202は、建物床にかまどを有するタイプの住居址である。かまど内からは支脚柱として用いられた高坏が、倒置された状態で出土している。

またかまどの周辺には炭化した植物屑、製塩土器、甕の破片などが散乱しており、住居内の生活痕跡が良好な状態で原位置を保っていたものである。図化できなかったものも含め出土土器のほとんどが土師器である。須恵器は2点のみ出土した。

また柱穴から小型の砥石も出土しており、住居の廃絶後、抜柱行為に際して投棄した可能性が考えられるなど、遺物から見ても本調査区内で確認した住居址中、もっとも濃厚に当時の生活痕跡を残している。

162は長期化した甕である。体部外面に粗いハケ、内面はユビオサエとユビナアで内面が著しく凹凸し、分厚いくの字が肥厚ぎみに内湾し、端面は内傾する口縁部をもつ。かまどに据える煮沸具として用いられたと考えられる。

163～165は甕の口縁部片である。

166、167は塊形高坏だが、167はかまどの支脚柱として倒置されていたものである。

168は托鉢状に口縁端部がゆるやかに内湾した器形の鉢である。

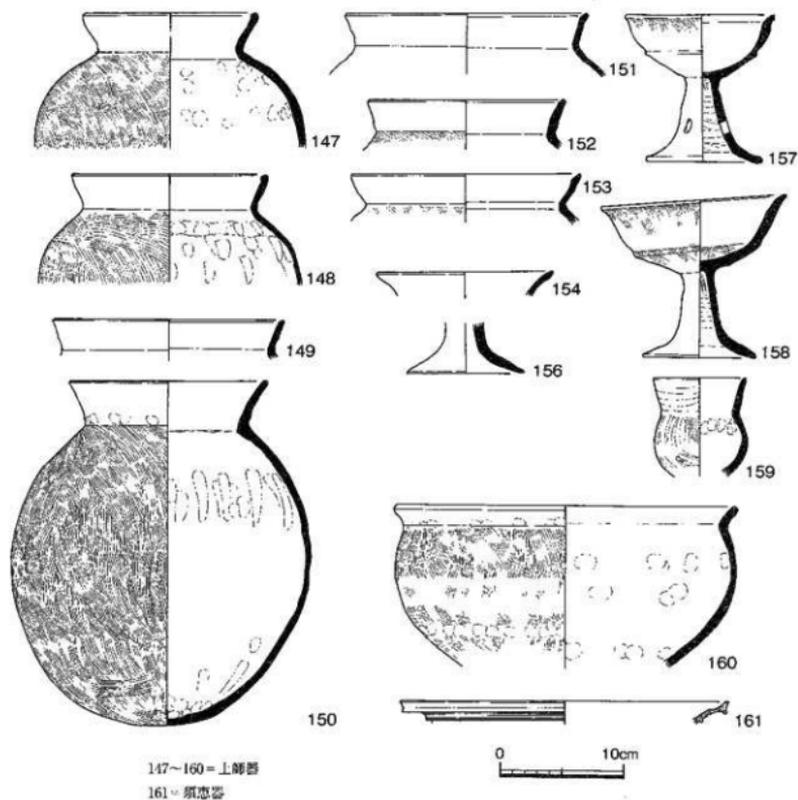


図56 竪穴建物201一括出土土器実測図

169, 170は製塩土器である。0.1cm以下のごく薄い器壁は手捏で調整されているが、斜めに巻き上げたような粘土の接合痕を有する。棒状のものに粘土緋を巻き上げて手捏で整形した可能性が高い。底部は欠損している。かまどの直近から出土しており、住居内で焼き塩を作っていたと考えられる。

171は埋土中から出土した須恵器坏である。内傾する立ち上がりの端部は丸く取まる。短い受け部の先端は丸く、体部全体にヘラケズリをほどこし、外面底部は不定方向のヘラケズリである。TK216かその前後の時期に該当すると考えられる。

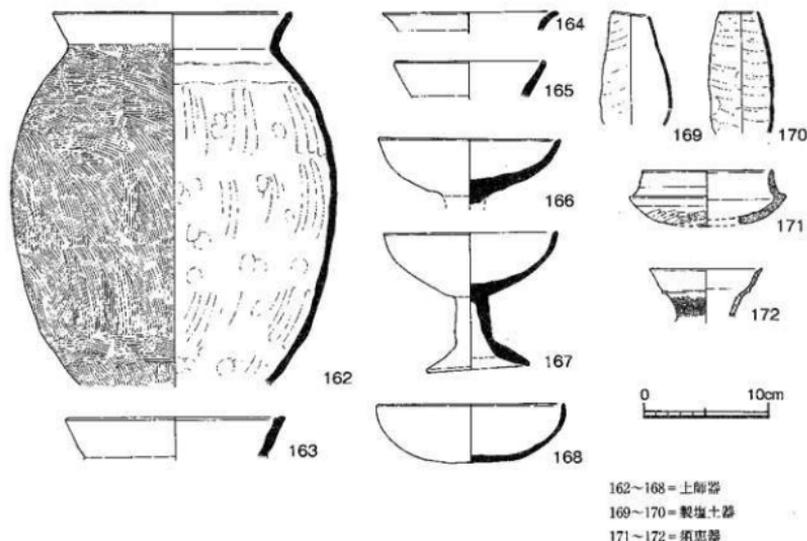


図57 竪穴建物202一括出土土器実測図

(3) 平地式建物204 図版58

平地式建物204の埋土からわずかに土器が出土しているが、図化できた3点の内183は近江系の甕の破片で、185、184と時代的に整合性を欠き、混入品であると考えられる。

184は極端に浅い有稜高坏だが、口縁端部が短くわずかに外反する。

185は甕の口縁部で分厚いくの字が肥厚ぎみに内湾し、端面は内傾する口縁部をもち、外面肩部はヨコハケで、内面はユビオサエ・ユビナデで調整している典型である。

(4) 平地式建物205 図版58

平地式建物205の床面直上で出土した一括遺物はすべて土師器であったが、建物床中央に土坑状に落ち込み部分が確認されており、その内部から須恵器が出土している。この住居址の一括遺物の特徴としては、高坏が多いことがあげられる。高坏内に滑石製紡錘車が1点納められており、何らかの祭祀行為の痕跡の可能性が考えられる。

186は甕の口縁部で分厚いくの字が肥厚ぎみに内湾し、端面は内傾する口縁部をもち、外面肩部はヨコハケで、内面はユビオサエ・ユビナデで調整している典型である。

187~192は高坏だが、187、189は有稜外反高坏、190、191は口縁端部がわずかに外反する無稜高坏、192は塊形高坏である。

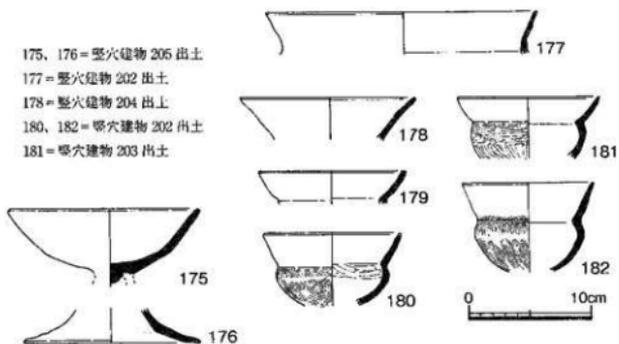


図58 IV区その他建物址出土土器実測図

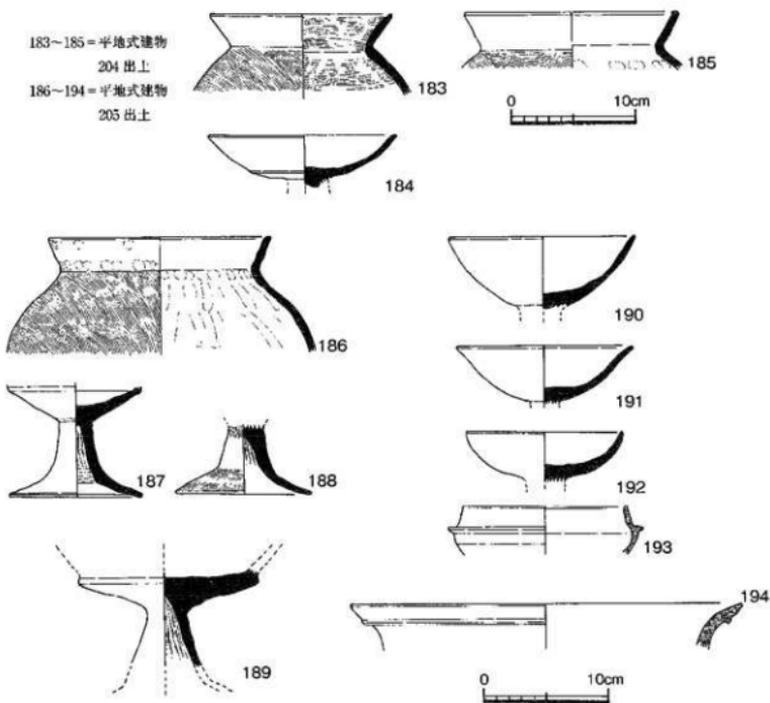


図59 平地式建物204・205-括出土土器実測図

193, 194は建物床中央に土坑状に落ち込み部分から出土した須恵器である。

193の坏は立ち上がりの端部が内傾し、水平に直線的のびる受け部を有する。TK23～TK47に該当すると思われる。

194の須恵器壺の端部は稜が甘く、口端近くに断面三角形の凸線を有する。TK208～TK231に該当すると思われる。

(5) その他の住居址 図版57

その他竪穴建物203、竪穴建物204、竪穴建物205、平地式建物101、平地式建物103の各住居址からも陶化可能な遺物が床面直上位、柱穴等から出土している。

173, 177の甕は分厚いくの字が肥厚ぎみに内湾し、端面は内傾する口縁部をもつ。これは典型的な甕Ⅳ、Ⅴ型式の口縁部である。

174, 175は埴形高坏だが、175はやや外反する坏部である。176の脚部は円錐状の脚柱にくの字に屈曲する裾が広がる。

179～182は小型丸底壺だが、どれも口径が器高を凌駕するタイプである。

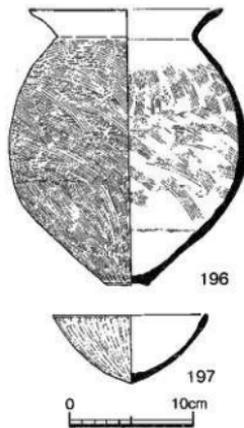


図60 平地式建物204混入土器実測図

(6) 住居址内の混入品 図版59

平地式建物204の床面直上位出土一括資料の中に、明らかに时期的に整合性を欠く資料が2点確認されている。

196の近江系甕と197の尖底鉢で、古墳時代中期後半の一括資料と異なり、古墳時代初頭～古墳時代前期の土器であると考えられる。

平地式建物7の床面検出時に切り合い関係にあった別時代の遺構（土坑？）未検出のまま建物址だけを検出したため、遺構内部の土器が平地式建物7の一括遺物とともに取り上げられた可能性が高い。

4. 溝状遺構出土の土器

本調査区で確認できた溝状の遺構のうち、溝201からは、良好な一括資料が出土している。これらの土器は溝内に並べられていたものと考えられる。

(1) 溝状遺構201 図版60

198～201は甕である平底の底部に体部外面にタタキ目、内面にハケで調整を施す甕Ⅰ型式のものだけを純粋に出土する遺構である。

201は受け口状口縁部で、厚い器壁の体部外面をX状に交差する、非常に粗いヨコハケで仕上げている。近江産土器あるいはその影響下に模倣された他産地系譜の甕である。

202は直口壺の口縁部、203, 204は高坏である。

どちらの高坏も中実の棒状脚柱に開く裾が付随する。

203は有稜外反高坏で内外面、脚部まで丁寧にはらミガキで仕上げた精製品である。

204は木調査区唯一の有段高坏で内外面、脚部まで丁寧にはらミガキで仕上げた精製品である。

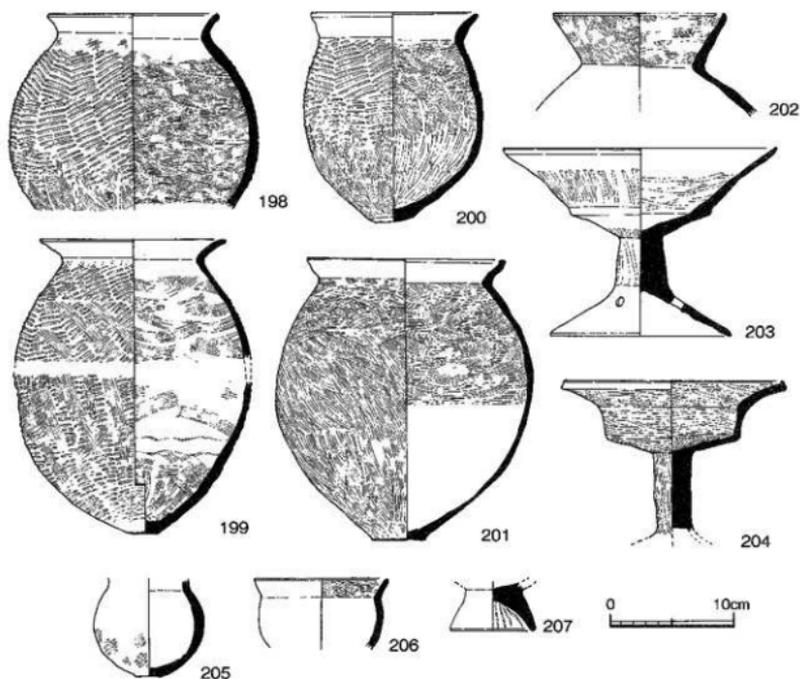


図61 溝状遺構201一括出土土器実測図

205、206は小型丸底壺、207は小型台付鉢の脚台部である。

206は器高が口径を凌駕し、短い口縁部を有する。

5. 水路出土の上器 図版61～62

本調査区を東西に貫く水路内の堆積層は多岐に渡るが、大きくは洪水性の粗い堆積物と、第2遺構面直上に堆積していた遺物包含層と同質の黒色粘土質系の堆積層に二分できる。

洪水性の粗砂層から出土した遺物に関しては、急流が他所から押し流して運んだ様々な時代の土器が混在しているものである。

一方で黒色粘土質系の堆積層は、遺物包含層と同様の堆積過程を経ていると考えられる。すなわちこの堆積層は本調査区内に残された集落遺跡が経営されていた当時から廃絶後の一定期間にいたるまでの間隔でゆるやかに形成されていったものと考えてよい。

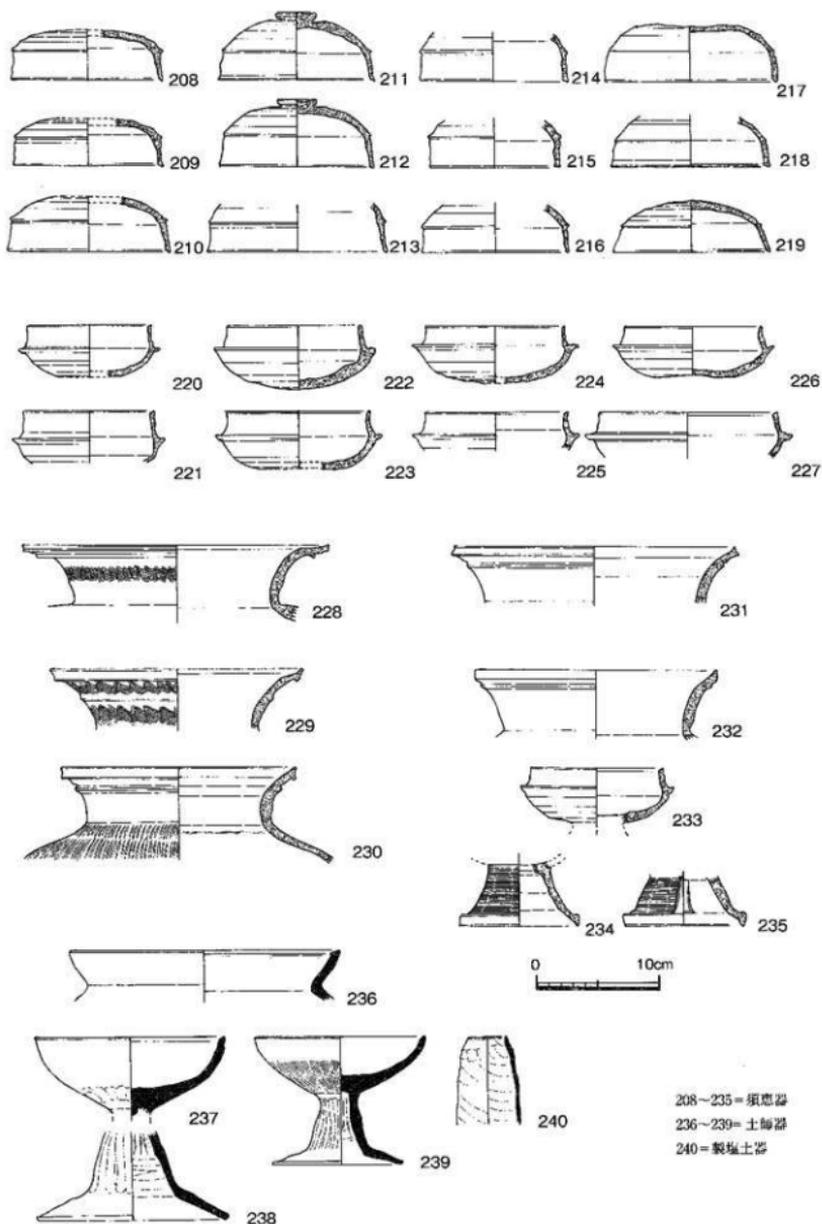


图62 5区水路北岸土器群 土器实测图

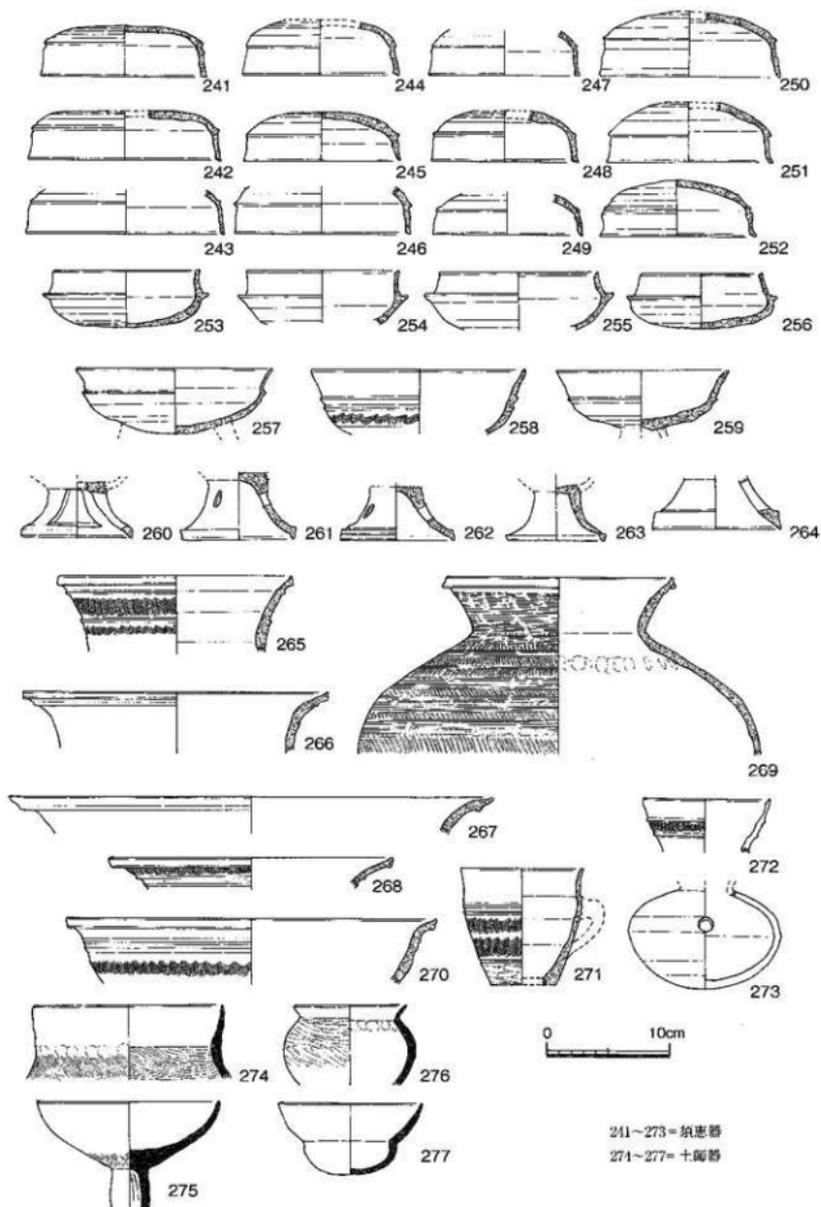


図63 水路内埋土出土土器実測図

洪水性堆積層があくまで2次堆積であるのに対し、黒色粘土系堆積層は1次堆積層と考えている。

特に調査区域北部で住居址が集中して検出された部分、すなわち居住域直近の水路北岸部では、多数の土器片が散乱した状態で出土している。これは集落の住人がその生活の過程で投棄したものを中心とした堆積と捉えてよいと判断し、水路北岸土器群としてひとくくりに扱うものである。遺構内の一括遺物とは異なり、長期的自然堆積によるものであるため、水路北岸土器群個々の土器が示す時期の総体は、上坑、住居址などの遺構が示す時期幅よりかなり広い。厳密な時期判定は難しいがおおよそ本調査区内で検出した遺構群の存続期間に近い時期を示唆する遺物群と捉えてよいと考えられる。

出土量が膨大であるため、任意に抽出した一部の図化にとどまるが、全体を概観した上で堆積層の時期を明瞭に示すと考えられるものを中心に図化している。また水路内の1次堆積層出土遺物の特徴としては、先述の遺構群の一括資料がどれも圧倒的に土器器量の出土量であるのと対照的に須恵器が多数含まれていることである。

(1) 水路北岸土器群 図版61

208～219は須恵器蓋、220～227は須恵器坏、228～232は須恵器甕である。TK216～TK47までの時期幅におさまると考えられる。上記の須恵器に伴う土器器として236の甕、237～239の高坏、240の製塩土器などがある。

(2) 水路内堆積層 図版62

水路内堆積層の内、1次堆積と判断される黒色粘土質系の層から出土した遺物の一部を図化したものである。241～252は須恵器蓋、253～256は須恵器坏、257～259は無蓋高坏である。265～268は須恵器甕口縁部、269は須恵器甕、270は器台口縁部である。271は取手付塊、272、273は提瓶である。

これらの須恵器にともなう土器器は274～277で、TK216～TK47までの時期幅におさまると考えられ、時期的には水路北岸と同質である。

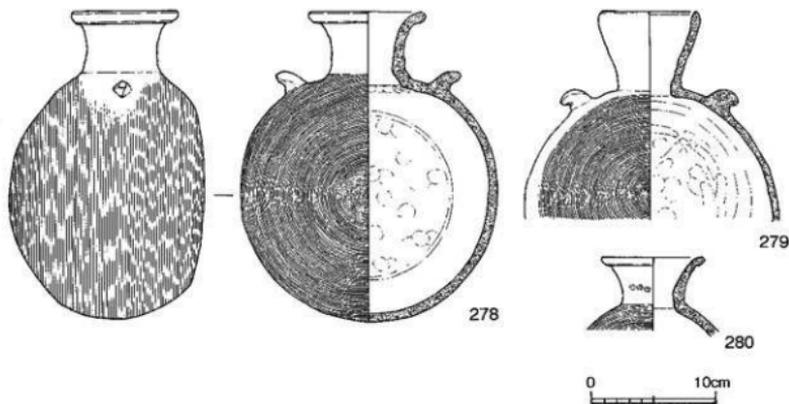


図64 第1遺構面方形区画 土器実測図

6. その他の土器

(1) 第1遺構面出土の土器 図版63、64

第1遺構面からもさまざまな時代の土器が出土しているが、方形区画と呼称した遺構に伴う可能性が高く、供献土器ではないかと考えられる須恵器と、掘立柱建物101とした奈良時代の建物の柱穴から出土した土師器について報告しておく。

278～280はすべて須恵器の埴版である。これらは方形区画と呼称した遺構の南東角でまとまって出土したもので、すべて破砕していたが、土器片と地面との間に薄い淡灰色の粘土層が見とめられ、土器を据え置いた痕跡である可能性が高い。意図的にこの場所に土器を据えたものであるとすれば、供献土器であり、この方形区画は占墳である可能性も高くなると思われる。

281は掘立柱建物101の柱穴22から出土した土師器で、奈良時代のものである。この土器の出土をもって掘立柱建物の時期をおよそ奈良時代と考えている。

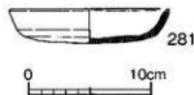


図65 第1遺構面掘立柱建物柱穴出土 土器実測図

(2) 包含層および洪水性堆積層 図版65

その他第2遺構面の上位に堆積する遺物包含層、洪水砂層などから出土した遺物のごく一部を図化した。出土量が膨大であるため、任意に抽出した一部の図化にとどまるが、全体を概観した上で堆積層の時期を明瞭に示すと考えられるものを中心に図化している。特に282の土師器壺は、包含層出土土器として取り上げているが、内部に白玉、管玉が納められている状態で出土しており、浅い遺構を未検出のまま遺物だけを取り上げている可能性が高い。出土位置は平地式建物204の東隣1mほどの地点であるが、遺構面上ではこの土器に伴う遺構の平面形を検出する事が出来なかった。

203の小型丸底壺も包含層出土としているが、出土地点は竪穴建物205付近であるため、遺構に伴う可能性もある。284～293は第2遺構面の上位に堆積する洪水砂層および水路内の洪水性堆積層からの出土遺物である。TK10～TK43の時期幅におさまると考えられる。

(3) 韓式系土器 図版68

韓式系土器は、土坑の内、前掲の土坑215、217は完形に近い状態で出土しているが(114、115、120、136)その他格子Hタキ文の軟質土器の破片も出土している。

韓式系土器のほとんどは土師器が共伴しており、土坑217のものだけが体部内面をすり消した須恵器壺の破片も伴っていた。韓式系土器だけを純粹に出土した遺構はない。その他の韓式系土器としては、甕の牛角状把手に切りこみをいれたものが4点確認できたが、大半が水路埋土内からのもので、307だけが近世溝から混入品として出土したものである。

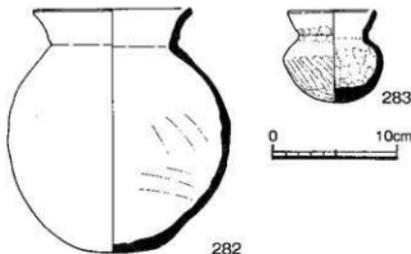


図66 包含層出土 土器実測図

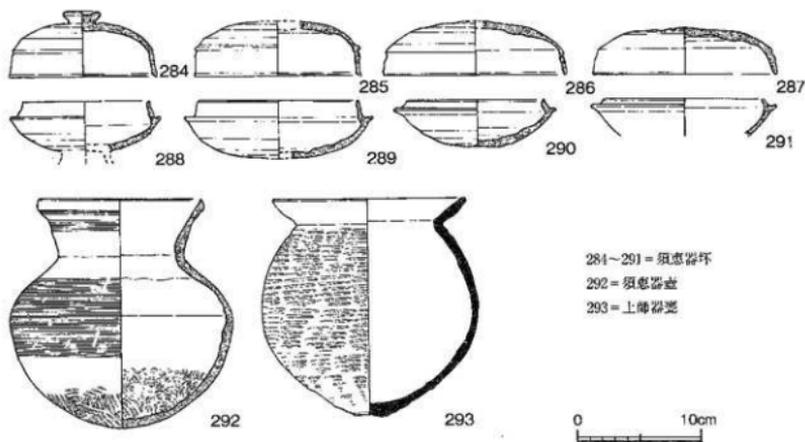


図67 洪水性堆積層出土 土器実測図

(4) 製塩土器

製塩土器は前掲の竪穴建物202で、かまど横の位置から出土した2点があるが、この2点は住居内で使用されていた当時の原位置を保っていると考えられる。それ以外に水路埋土からも多数出土している。全て小さな破片であるため図化できなかったが、集落内の住居でさかんに焼き塩が行われた可能性が高い。

(5) 器台 図版69

須恵器の器台片は、水路内堆積層および包含層中から10点確認できた。どれも小さな破片で、水路埋土や包含層の出土である。

7. 土器以外の遺物

(1) 玉類 図版71

滑石製玉類は、平地式住居205の一括土器に伴う紡錘車が1点、包含層出土関係土師器壺内に納められていた白玉6点、管玉1点および包含層中から出土した白玉が3点ある。紡錘車と土師器壺から出土した白玉、管玉に関しては、何らかの祭祀行為に伴う遺物である可能性が高い。

320は滑石系の石材を用いた紡錘車である。直径3.7cm、厚さ約11mm、表裏とも成型痕が残らないよう研磨しているが、外縁斜面部には工具痕が残る。線刻は認められず、無文である。

322～329は滑石製の白玉である。325～329は包含層中から出土したもので、322～324は包含層川上の土師器壺282の中に納められた状態で出土した。321の管玉も322～324の白玉に伴って出土したものである。本来は何らかの祭祀遺構に伴った可能性が高く、浅い遺構の平面形を未確認のまま土器だけを取り上げた可能性が高い。

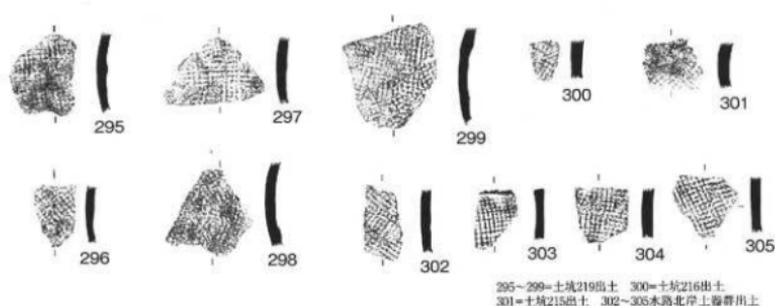


図68 轆式系土器

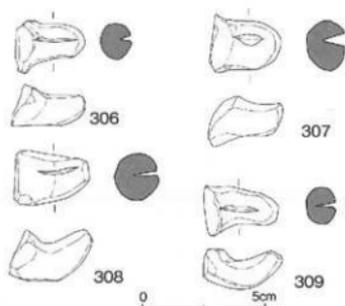


図69 轆式系土器 実測図

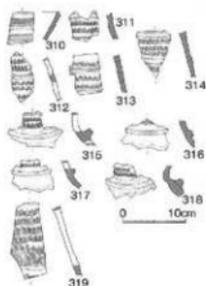


図70 器台 実測図

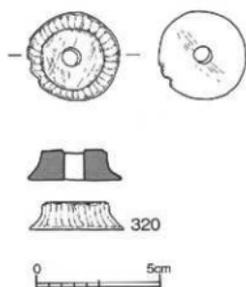


図71 滑石製紡錘車 実測図

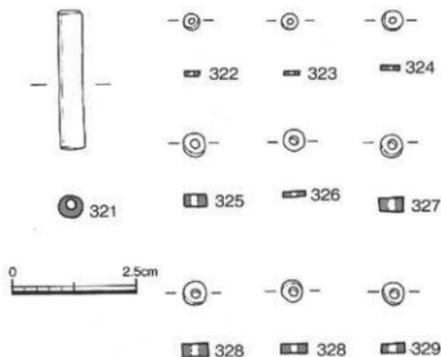


図72 管玉・白玉・実測図

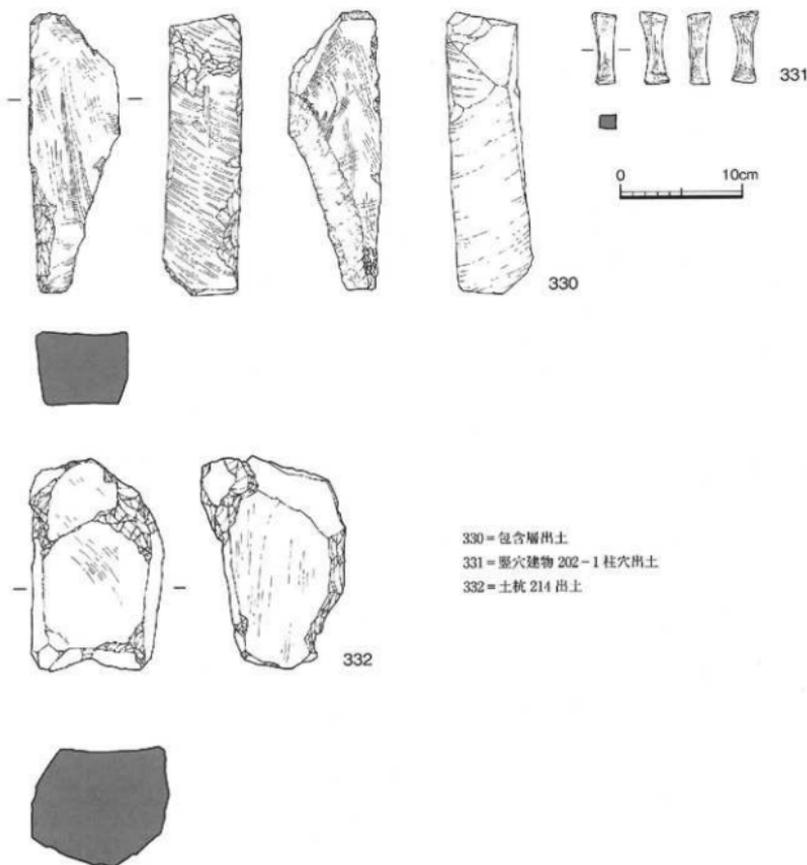
(2) 砥石 図版72

砥石は竪穴建物202-1柱穴から出土した小型のものが1点、土坑214から出土した砂岩質のものが1点の他、かく乱から出土した頁岩質のもの1点がある。

331は小型品で、竪穴建物202の柱穴から出土しており、建物の廃絶に伴う抜柱に際して投棄された、あるいは意図的に納められた可能性が考えられる。

332は土器と共に破片の状態で出土している。使用後土坑に入れられた時点で破砕されたものかすでに使用に耐えなくなったものが投棄されたのかは判断しがたい。

330はかく乱内から出土したものだが、深くえぐれるような研磨痕が多数残されており、鉄器などを研磨するための砥石である可能性が高い。



330 = 包含層出土
 331 = 竪穴建物 202-1 柱穴出土
 332 = 土坑 214 出土

図73 砥石実測図

土器観察表 (1)

() 内は復元値あるいは検存数

調査号	出土地点	器種	形式	法量 計測 部位 (単位)	口頸部	調整部	肩部 (首部)	色調	胎土	実量 (g)
1	土坑201	甕	a 外反	138 192	内面ヨコナデ 外面タテハケのちヨコ ナデ頸部エビオサエ	内面肩部エビナデ体部 ヘラズリ外面タテハケ 肩部ヨコハケ1条	内面ヘラケズリ 外面タテハケ	内面10YR7/3 に赤い黄褐色 外面10YR6/2 灰青褐色	石英・長石	1
2	土坑201	甕	外反	(17.6) (3.7)	内外面ナデ・エビオサエ	欠損	欠損	内面10YR6/2 に赤い黄褐色 外面10YR6/2 灰青褐色	石英・長石	176
3	土坑201	甕	a2 単純肥厚	(12.6) 17.3	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ — 頸部エビオサエ	内面ヨコナデ 外面タテハケのちナデ	内面ヨコナデ 外面タテハケのちナデ	内面5YR5/4 に赤い黄褐色 外面5YR5/3 に赤い黄褐色	石英・長石 霏母	6
4	土坑201	甕	a2 単純肥厚	(16.4) (15.6)	内外面ナデ	内面ナデ 外面肩部タタキのちナデ 体部不定方向ハケ	欠損	内面7.5YR7/3 に赤い黄褐色 外面7.5YR7/3 に赤い黄褐色	石英・ 赤色酸化土粒	16
5	土坑201	甕	a2 単純肥厚	15.4 17.1	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ — 頸部エビオサエ	内面エビナデ 外面肩部タタキ体部上半 ナデ下半タテハケ	ナデ	内面7.5YR6/3 に赤い黄褐色 外面7.5YR6/3 浅黄褐色	石英・長石	2
6	土坑201	甕	b 直線	(15.2) 23.4	内外面ヨコナデ	内面肩部エビオサエ体部 ナデ外面肩部ナデ体部 タテハケ	内面ナデ 外面タテハケのちナデ	内面10YR3/2 黒褐色 外面10YR5/3 に赤い黄褐色	石英・長石 霏母	8
7	土坑201	甕	b 直線	(13.0) (9.0)	内外面ヨコナデ	内面エビナデ・エビオサエ 外面ヘラミガキ	欠損	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR7/3 に赤い黄褐色	石英・長石	14
8	土坑201	甕	b 直線	12.4 (12.2)	内面ヨコハケ 外面タテハケのちナデ	内面肩部エビナデ 体部ナデ 外面肩部タテハケ 体部タタキのちハケ・ナデ	欠損	内面10YR5/1 黒灰色 外面10YR6/2 灰青褐色	石英・長石	5
9	土坑201	甕	C1 内湾	12.1 13.5	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ — 頸部エビオサエ	内面肩部ヘラケズリ 外面タテハケ	内外面ナデ	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR7/3 に赤い黄褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	4
10	土坑201	甕	C4 内湾	14 (14.6)	内面ヨコハケ 外面ヨコナデ	内面肩部ヨコハケ・エビ オサエ・エビナデ 外面ナメ方向ハケ	欠損	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR5/3 に赤い黄褐色	長石・霏母	21
11	土坑201	甕	C4 内湾	(11.2) (9.8)	内外面ヨコナデ 内湾	内面肩部ヨコナデ 体部横方向エビナデ	欠損	内面10R6/8 赤褐色 外面10R6/8 赤褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	22
12	土坑201	甕	C 内湾	(14.4) (9.8)	内面ヨコハケ 外面ヨコナデ	内面肩部ヨコハケ体部 ヘラケズリ 外面タテハケ	欠損	内面10YR6/2 灰青褐色 内面10Y17/3 に赤い黄褐色	石英・長石 霏母	19
13	土坑201	甕	C5 内湾	(13.4) (9.0)	内外面ヨコナデ 内面肩部エビオサエ	内面ヘラケズリ 外面肩部ナデ 体部タテハケ	欠損	内面7.5YR7/3 に赤い黄褐色 外面7.5YR5/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	15
14	土坑201	甕	内湾	(16.4) (2.5)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR7/2 に赤い黄褐色	石英・長石	178
15	土坑201	甕	内湾	15 (14.0)	内外面ヨコナデ 内面肩部ヘラケズリ	内面ナデ 外面肩部ヨコハケ 肩部タテハケ	欠損	内面10YR3/2 黒褐色 外面10YR6/3 に赤い黄褐色	石英・長石	18
16	土坑201	甕	内湾	(16.3) (3.2)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR2/1 褐色 外面10YR6/1 褐色	石英・長石 霏母	177
17	土坑201	甕	短直線	13.3 17	内面ヨコナデ — 頸部ヨコハケ — 外面ヨコナデ — 頸部ヨコハケ	内面エビナデ 外面ヨコハケのち ナメ方向ヘラミガキ 体部タテハケ	内面ナメ方向ハケのち ナデ 外面ヨコハケのち ナメ方向ヘラミガキ	内面10YR5/3 に赤い黄褐色 外面10YR6/3 に赤い黄褐色	石英・長石・ 霏母	3
18	土坑201	甕	直口杵	14.6 3.3	内面ヨコナデ 外面向口縁部ヨコナデ — 頸部ヘラミガキ	内面ヨコハケ 外面ヘラミガキ	欠損	内面7.5YR8/4 浅黄褐色 内面7.5YR8/4 浅黄褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	20

土器観察表 (2)

() 内は復元値あるいは残存値

図版番号	出土地点	器種	形式	法量 (口径) (器高) (底径)	口頸部	胴腹部	底部 (脚部)	色調	胎土	実測番号
19	上坑201	壺	広口壺	(18.6) (25.0)	内面山縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ — 外面山縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	内面唇部エビナデ 各部横方向ナデ 外面唇部ハケ後ナデ 各部タテハケ	欠損	内面7.5YR8/2 灰白色 外面7.5YR8/2 灰白色	石英・長石	17
20	七坑201	壺	二重口壺	(14.0) (9.0)	内外面ヨコナデ —	内面ナデ 外面唇部ナデ 各部タテハケ	欠損	内面10YR6/3 にぶい黄棕色 外面10YR6/3 にぶい黄棕色	石英・長石・ 雲母 赤色酸化土粒	12
21	上坑201	壺	二重口壺	(17.0) (7.0)	内面ヨコナデ 外面タテハケ	欠損	内 面2.5Y7/2 灰青色 外 面2.5Y7/2 灰黄色	石英・長石	163	
22	十坑201	高杯	外反	(16.7) (6.6)	内面ヘラミガキ 外面タテハケ	内面ナデ 外面ヘラミガキ	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄棕色 外面10YR7/2 にぶい黄棕色	石英・長石 赤色酸化土粒	160
23	上坑201	鉢	—	(17.0) (4.2)	内外面ヨコナデ —	内外面ヨコナデ	欠損	内面10YR6/2 灰黄褐色 外面10YR6/2 灰黄褐色	石英・長石	159
24	上坑201	小壺鉢	—	11.6 5.1	内面ナデ 外面ヨコハケ	内面ナデ 外面ヨコハケ	内外面ナデ	内面10YR5/3 にぶい黄褐色 外 面2.5Y6/2 灰黄色	長石・石英	9
25	十坑201	小型	—	(10.8) 3.3	内外面ナデ —	内面ナデ 外面エビオサエ・ヨコハケ	内外面ナデ 外面エビオサエ・ヨコハケ	内面10YR6/2 灰黄褐色 外面10YR7/4 にぶい黄褐色	石英・長石・ 雲母	7
26	上坑201	小型丸底壺	—	(12.8) 6.3	内外面ヨコナデ —	内外面ヨコナデのため不明 —	内面エビオサエ 外面破滅のため 不明	内 面10R6/6 赤褐色 外 面10R5/4 赤褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	10
27	七坑201	小型丸底壺	—	(11.8) (6.9)	内面ヨコナデ・ヘラ ミガキ — 外面ヨコナデ	内面ヨコナデ・ヘラ ミガキ 外面ヘラミガキ	内面エビオサエ —	内面10YR7/2 にぶい黄棕色 外面10YD6/2 灰黄褐色	石英・長石	49
28	上坑201	小型丸底壺	—	11.2 7.5	内外面ヨコナデ —	内面ナデ 外面ヘラタテズリ	内面ナデ 外面ヘラタテズリ	内面7.5YR8/3 浅黄褐色 外面5YR7/4 にぶい棕色	石英・長石	11
29	十坑201	小型丸底壺	—	(9.8) 8.2	内面ヨコハケ 外面ヨコナデ	内面ナデ 外面ヨコハケ	内面ナデ 外面横方向斜り縦方向 ハケ	内面7.5YR8/1 灰白色 外面10YR6/2 灰黄褐色	石英・長石	13
30	上坑201	小型器台	—	(9.3) 13.7 (11.8)	内外面ヨコナデ —	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内 面5YR6/3 にぶい棕色 外面7.5YR5/4 にぶい褐色	石英・雲母	186
31	七坑201	小型器台	—	9 (4.4)	内外面ヨコナデ 外面ヘラミガキ	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内外面ナデ	内面10YR7/2 にぶい黄棕色 外面10YR7/3 にぶい黄棕色	石英・長石	157
32	上坑201	小型器台	—	(3.9) (9.0)	欠損 —	欠損	内外面ナデ	内面10YR6/1 灰黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄棕色	石英・長石	164
34	十坑201	ミニチュア	—	(3.0) (3.8)	欠損 —	内面エビナデ 外面ヨコナデ	内外面エビオサエ	内面10YR3/1 黒褐色 外面10YR3/2 黒褐色	石英・長石	158
35	上坑202	壺	単純口壺	(11.3) (13.3)	内外面ヨコナデ —	内面エビナデ 外面上テタテキ 外面ドサテハケ	欠損	内面10YR6/1 灰褐色 外面10YR8/3 浅黄棕色	長石	47
36	上坑202	壺	単純つつまみ	(16.7) (7.0)	内外面ヨコナデ —	内面ナデ 外面タテキ	欠損	内面10YR6/2 灰黄褐色 外面2.5YR7/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	152
37	十坑202	壺	単純口壺	(12.9) (3.5)	内面ハケのちヨコナデ 外面ヨコナデ —	内面唇部ナデ 外面唇部ナデ —	欠損	内面2.5YR5/1 黄灰色 外面2.5YR5/1 黄灰色	長石	153

土器観察表 (3)

() 内は復元値あるいは残存値

調査番号	川土地点	器種	形式	法量 (口径) (高さ) (底径) (底厚)	口縁部	調整部	底部(脚部)	色調	胎土	実測径× 高さ
38	上坑202	壺	単純肥厚 —	(17.0) (13.8)	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリのちナデ 外面タテハケ	欠損	内面10YR6/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい丹褐色	石英・長石	56
39	上坑202	壺	単純肥厚 —	14.3 17.2	内外面ヨコナデ	内面1半ヘラケズリ 下半ヘラケズリのちナデ 外面ナデ	内面ヘラケズリのちナデ 外面ナデ	内面10YR2/1 黒色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	39
40	土坑202	壺	単純肥厚 —	13.8 (18.1)	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリ 外面上半ヘラミガキ 脣部ヨコハケ 下半ヘラミガキ	内面ナデ 外面磨減	内面7.5YR5/4 にぶい褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石	41
41	土坑202	壺	単純肥厚 —	14.4 (19.5)	内外面ヨコナデ	内面上半ヘラケズリ 下半ヘラケズリのちナデ 外面ナデ	内面ヘラケズリのちナデ 外面ナデ	内面10YR2/1 黒色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	51
42	上坑202	壺	外反ぎみ —	(12.8) (5.5)	内面ヨコナデ	内面脣部ナデ 脣部ヘラケズリ外面脣部 ナデ・脣部タテハケ	欠損	内面10YR5/3 にぶい黄褐色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	43
43	土坑202	壺	直縁 —	14.3 (7.0)	内外面ヨコナデ	内面ナデ 外面ヨコハケのち ヘラミガキ	欠損	内面10YR8/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	37
44	上坑202	壺	外反ぎみ —	(15.8) (5.4)	内外面ヨコナデ	内面ナデ 外面脣部ナデ 脣部タテハケ	欠損	内面10YR6/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	142
45	土坑202	壺	外反つまみ —	14.6 (12.5)	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリ 外面上下タテハケ 瓶部斜め方向ヨコハケ	欠損	内面7.5YR6/1 灰褐色 外面7.5YR7/3 にぶい褐色	石英・長石	54
46	上坑202	壺	内溝 —	13.8 (8.7)	内面ヨコハケ 外面ヨコナデ	内面ヘラケズリ 外面脣部ナデ側傾斜め 方向ハケ	欠損	内面10Y7/2 にぶい黄褐色 外面10YR8/1 灰白色	石英	40
47	土坑202	壺	内溝つまみ —	(13.4) (6.8)	内面ヨコハケ頸部 外面ヨコハケ	内面ヘラケズリ 外面タテハケ	欠損	内面10YR6/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	29
48	上坑202	壺	内溝つまみ —	(14.4) (9.4)	内外面ヨコナデ	内面脣部エビオサエ 外面タテハケ脣部ヨコハケ 脣部欠損	欠損	内面10YR8/3 淡黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	141
49	土坑202	壺	内溝つまみ —	13.2 (7.5)	内面ヨコナデ	内面ナデ 外面タテハケ	欠損	内面7.5YR7/4 にぶい褐色 外面7.5YR7/4 にぶい褐色	石英・長石	59
50	上坑202	壺	内溝 —	(15.0) (4.8)	内外面ヨコナデ	内面脣部ヘラケズリ 外面磨減	欠損	内面2.5YR8/2 灰白色 外面2.5YR8/2 灰白色	石英・長石	143
51	土坑202	壺	内溝 —	10.8 (3.5)	内外面ヨコナデ	内面ナデ 外面タテハケ・磨減著しい	欠損	内面7.5YR8/2 灰白色 外面2.5YR7/3 淡赤褐色	石英・長石	25
52	上坑202	壺	内溝 外縁	(13.2) (8.9)	内面ヨコハケ	内面脣部ヨコハケ ヘラケズリ底部ナデ外面 上下タテハケ脣部ヨコハケ 下半タテハケのちナデ	内面ナデ 外面タテハケのちナデ	内面10YR5/1 褐色 外面10YR7/1 灰白色	石英	21
53	上坑202	壺	内溝つまみ 二重口縁 釜み —	(13.0) (8.9)	内外面ヨコナデ	内面脣部ヘラケズリ 外面脣部タテハケのち ナデ脣部タテ・ヨコハケ	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	52
54	土坑202	壺	内溝 嘴面水平	14.6 (7.8)	内面ヨコナデ	内面ナデ 外面脣部ナデ 脣部ヨコハケ	欠損	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英	58
55	土坑202	壺	内溝 階回水平	(19.2) (6.6)	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリ 外面タテハケ 脣部欠損	欠損	内面10YR2/1 黒色 外面10YR3/2 淡黄褐色	石英・長石	144

土器観察表 (4)

() 内は復元値あるいは残存値

図版番号	出土地点	器種	形式	法華(門径)器高(残存)	山腹部分	調整体部	底部(脚部)	色調	胎土	実測径
56	土坑202	壺	広口壺	(22.4) 34.1	内外面ヨコナデ	内面スピナデ・エビオサエ 外面タテハケ	内面ナデ 外面タテハケのちナデ	内面10YR6/3 褐色 外側5.5YR7/3 褐色 内面10YR6/3 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	28
57	土坑202	壺	広口壺	(30.4) 31.1	内外面ヨコナデ	内面肩部ヘラケズリ体部 磨滅 外面肩部ナデ体部 上半ヨコナデ下平タテハケ	内面ナデ 外面タテハケのちナデ	内面10YR6/3 褐色 内面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	31
58	土坑202	壺	広口壺	(18.8) (17.7)	内外面ハケ	内面上半ヘラケズリ下平 ナデ外面タテハケのち弱 め方向ハケ	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内面2.5YR4/1 黄灰色 外面10YR1/1 にぶい褐色	石英	53
59	土坑202	壺	廣口壺	16.1 (8.8)	内面ヨコハケ 外面タテハケ	欠損	欠損	内面7.5YR8/3 黄褐色 外側7.5YR7/4 にぶい褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	35
60	土坑202	壺	二重山縁壺	22.2 (34.5)	内面唇部外面門脚部 横方向ヘラミガキ頸部 縦方向ヘラミガキ	内面唇部内成脚部欠損 外面唇部認め方向ヘラ ミガキ 脚部欠損	内面ハケのちナデ 外面ハケのちヘラミガキ	内面2.5YR7/6 褐色 外面10R6/8 赤褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	43
61	土坑202	壺	二重山縁壺	13.7 (15.0)	内面ヨコナデ外面ナデ ハケのちヨコナデ体部 ナテハケ・エビオサエ	内面唇部エビオサエ・ナテ ハケ 脚部ヘラケズリ外面 肩部ナデ体部ナメハケ	欠損	内面10Y106/4 にぶい黄褐色 外面10YR6/2 灰黄褐色	長石	34
62	土坑202	壺	直口短頸壺	(13.5) 17.5 4.9	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリ 外面ヘラミガキ	内面エビナデ・エビオサエ 外面タテハケのちナデ エビオサエ	内面10YR5/3 にぶい黄褐色 内面10YR5/6 黄褐色	石英・長石	36
63	土坑202	壺	直口壺	(12.4) (11.0)	内外面磨滅	内面ヘラケズリ 外面磨滅	欠損	内面5.YR7/2 明褐色 外面5.YR8/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	42
64	土坑202	壺	短頸壺	(15.6) (5.6)	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリのちナデ 外面斜め方向ハケ?磨滅 深しい	欠損	内面5.YR6/6 褐色 外面5.YR6/8 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	23
65	土坑202	高杯	右段外反	15.3 (13.7)	内外面ヨコナデ	内面ヘラケズリのちナデ 外面ヘラミガキ	内面ナデ 外面ナデ	内面7.5YR4/3 褐色 外面7.5YR6/3 にぶい褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	35
66	土坑202	高杯	右段外反	(21.8) (6.7)	内外面ヨコナデ	内外面ナデ	欠損	内面10YR4/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 赤色酸化土粒	石英・長石	46
67	土坑202	鉢	—	14 6	内外面ヨコナデ	内面ナデ 外面縦方向ヘラミガキ	内面ナデ 外面縦方向ヘラミガキ	内面7.5YR6/4 にぶい褐色 外面7.5YR6/3 黄褐色 内面7.5YR6/3 黄褐色	石英・長石 赤色酸化土粒 黄母	26
68	土坑202	鉢	—	(15.7) (5.1)	内外面磨滅甚しい	内外面磨滅甚しい	欠損	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	150
69	土坑202	鉢	—	(37.5) (12.8)	内面ヨコハケのちナデ 外面タテハケのちナデ	内面ヨコハケ 外面タテハケ	欠損	内面10YR6/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	138
70	土坑202	小型丸底壺	—	8.7 6.9	内外面ヨコナデ	内面ナデ 外面肩部ナデ 体部ヘラケズリ	内面エビオサエ 外面ヘラケズリ	内面10YR6/2 灰黄褐色 外面10YR5/3 にぶい黄褐色	石英・長石 黄母	33
71	土坑202	小型丸底壺	短頸	9.2 7 7	内外面ヨコナデ	内面エビオサエ・スピナデ 外面タテハケ	内面エビオサエ 外面タテハケ	内面10YR5/1 にぶい褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英	30
72	土坑202	小型丸底壺	—	— (5.6)	欠損	内外面ナデ	内外面ナデ	内面10YR3/2 黒褐色 外面10YR6/3 にぶい黄褐色	長石	140
73	土坑202	小型磨内	—	(12.5) (2.8)	内面ナデ 外面ナデ	内面ハケ 外面ナデ	欠損	内面7.5YR6/3 にぶい褐色 外面10YR6/2 灰黄褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	149

土器観察表 (5)

() 内は復元値あるいは残存値

図式番号	出土地点	器種	形式	法量 (口径) (高) (底径)	口縁部	調整部	底部 (脚部)	色調	出土	実量 (口径)
74	土坑202	小型器台	—	(108) (40)	内外面ナテ	内外面ナテ	欠損	内面10YR7/3 に赤い黄褐色 外底10YR7/2 に赤い黄褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	148
75	土坑202	小型器台	—	(55) (118)	欠損	欠損	内面エビオサエ・ナテ 外面ヘラケズリ	内面7.5YR8/4 黄褐色 外面5YR6/8 褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	44
33	土坑202	小型器台	—	(49) (98)	欠損	欠損	内面エビオサエ・納蘭窯しい 外底エビオサエ・タテハテ	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR7/2 に赤い黄褐色	石英・長石	63
76	土坑202	ミニチュア	7.1 —	7.4 —	内外面ヨコナテ	内外面ヨコナテ	内外面ヨコナテ	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外底10YR6/1 灰白色	長石	38
77	土坑202	小型台付甕	—	(52) (5.7) (3.6)	内外面ナテ 外面納蘭	内面ナテ 外面納蘭	内面エビオサエ 外面ナテ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	147
78	土坑202	小型甕	平縁	(9.8) (6.3)	内外面ヨコナテ 外面タテハテ	内面ナテ 外面タテハテ	欠損	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR8/1 灰白色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	139
80	土坑201-202	甕	平縁肥厚	(15.2) (13.5)	内外面ヨコナテ 外面腹部エビオサエ	内面腹部エビオサエ 腹部ヘラケズリ 外面腹部タタキのちナテ 新縁タテハテ	欠損	内面7.5YR8/2 灰白色 外面7.5YR8/3 黄褐色	石英	50
81	土坑201-202	甕	内湾外縁	13.8 —	内外面ヨコナテ	内面ヘラケズリ 外面腹部ナテ・ヨコハテ 体部タテハテ	内面ナテ 外面タテハテ 穿孔	内面10YR6/3 に赤い黄褐色 外面10YR6/2 灰黄色	石英・長石	32
82	土坑202-203	甕	平縁肥厚	(14.0) (7.0)	内外面ヨコナテ	内面ナテ 外面腹部タタキ 体部ヘラミガキ	欠損	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR7/3 に赤い黄褐色	石英	48
83	土坑201-202	甕	広口蓋	13.4 19.5 —	内面ヨコハテ 外面口縁部ヨコナテ — 蓋部ヘラミガキ	内面腹部エビオサエ体部 ヨコハテ外面ヘラミガキ	内面タテハテ 外面ナテ	内面10YR6/2 灰黄色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	37
84	土坑201-202	甕	長頸家	13.7 30.2 —	内外面ヘラミガキ	内面ナテ 外面ヘラミガキ	内面ナテ 外面ヘラミガキ	内面5YR8/4 黄褐色 外面7.5YR8/4 黄褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	27
85	土坑203	甕	外反つまみ	(16.0) (11.5)	内外面納蘭	内面帯縁 外面腹部納蘭 蓋部斜め方向ハテ	欠損	内面10YR5/4 に赤い黄褐色 外面10YR6/4 に赤い黄褐色	石英・長石	61
86	土坑203	甕	外反つまみ	(13.6) (5.6)	内外面ヨコナテ	内面腹部・肩部ヘラケズリ 外面帯縁	欠損	内面10YR6/2 灰黄色 外面10YR3/3 暗褐色	石英・長石	62
87	土坑203	甕	外反	(18.0) (6.0)	内外面ナテ	内面ヘラケズリ 外面タテハテ	欠損	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR7/2 に赤い黄褐色	石英・長石	168
88	土坑203	甕	広口蓋	(14.5) (10.0)	内外面ヨコナテ	内面ナテ 外面腹部タテハテ 腹部ヨコハテ	欠損	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR7/4 に赤い黄褐色	石英・長石	167
89	土坑203	小型器台	—	(12.1) (3.3)	欠損	欠損	内外面ナテ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	170
90	土坑203	甕	内湾外縁	(16.6) (5.8)	内面ハケのちナテ 外面ヨコナテ	内面ヘラケズリ 外面斜め方向ハテ	欠損	内面10YR6/1 黄褐色 外面10YR6/2 灰黄色	石英・長石	171
91	土坑208	甕	内湾 つまみあり	(13.7) (10.5)	内外面ヨコナテ	内面ヘラケズリ 外面斜め方向ハテ	欠損	内面10YR4/1 暗灰色 外面10YR7/3 に赤い黄褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	65

土器観察表 (6)

() 内は復元値あるいは検存値

図 或 者	出土地点	器種	形式	法量 (口径) (高さ) (底径)	口縁部	調整部	底部 (脚部)	色調	胎土	実 測 寸 法
92	土坑208	甕	内筒 水子	(15.8) (2.1) —	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR6/2 灰青褐色	石英・長石	184
93	上坑207	甕 (近江系)	受け口	(15.7) (10.5) —	内外面ヨコナデ	内面肩部ヨコナデのち エビナデ 外面斜め方向 ハケ	欠損	内面2.5YR8/2 灰白色 外面10YR6/2 灰青褐色	長石	64
94	土坑210	小型器内:	—	(7.2) (3.8) —	内外面磨減	内外面磨減	欠損	内面7.5YR8/2 灰白色 外面7.5YR6/1 褐色	長石	165
95	土坑208	高杯	—	— (3.2) (12.8)	欠損	欠損	内面ナデ 外面ヘラミダキ	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR5/2 灰青褐色	石英・長石	185
96	上坑206	甕	—	16.6 27.2 —	内外面ヨコナデ 内面肩部エビナデ	内面エビナデ 外面肩部斜め方向ハケ 外部タナハケ	内面エビナデ 外面エビナデ	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR8/1 灰白色	石英・長石	75
97	土坑206	甕	無蓋	(10.5) —	欠損	内面エビナデ エビナデ外面肩部ヨコナデ 肩部ナデ	内面ヨコナデ 外面ヘラミダキのちナデ	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR8/1 灰白色	石英・長石	82
98	上坑206	甕	直口蓋	10 (4.8) —	内外面ヨコナデ 内面肩部エビナデ	欠損	欠損	内面10YR7/4 にぶい黄褐色 外面10YR7/4 にぶい黄褐色	石英・長石	81
99	土坑206	甕	直口蓋	10 (4.3) —	内外面ヨコナデ 内面タナハケ	欠損	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	80
100	上坑206	高杯	—	— (7.5) 9.9	欠損	欠損	内面ヨコナデ・赤褐色しい 外面磨減著しい	内面5YR7/6 褐色 外面3YR7/6 褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	78
101	土坑206	高杯	—	— (6.6) 11	欠損	欠損	内面磨減 外面ヘラミダキ	内面10YR8/2 灰白色 外面7.5YR8/3 灰青褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒	79
102	上坑206	高杯	有蓋	(11.3) (12.3) —	内外面磨減	内外面磨減	内外面磨減	内面10YR4/1 黒褐色 外面10YR3/2 灰青褐色	長石	83
103	土坑206	高杯	有蓋	12.8 13 10.2	内外面磨減	内外面磨減	内面ヨコナデ・新減著しい 外面磨減著しい	内面7.5YR6/1 にぶい褐色 外面5YR6/8 褐色	石英・長石・ 赤色酸化土粒・ 雲母	77
104	上坑214	甕	つまみあげ	(18.2) (2.7) —	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR3/1 黒褐色 外面7.5YR3/3 にぶい褐色	石英・長石	244
105	土坑211	甕	直縁	13.2 12.3 —	内外面ヨコナデ	内面肩部ヨコナデ外部 エビナデ・エビナデ 外面外部タナハケ・ ヨコナデ	内面エビナデ 外面ナデ	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/1 灰白色	長石	60
106	土坑211	甕	直縁	13 10.5 —	内外面ヨコナデ	内面肩部ヘラミダキ 外部エビナデ 外面肩部タナハケのちナデ 外部ハケのちナデ	内面エビナデ 外面ナデ	内面7.5YR5/1 灰褐色 外面5YR8/2 灰白色	長石	104
107	土坑211	甕	内筒	(12.8) (5.6) —	内外面ヨコナデ	内面ヘラミダキ 外面ナデ	欠損	内面2.5YR5/4 にぶい赤褐色 外面2.5YR3/4 にぶい赤褐色	石英・長石	237
108	上坑214	甕	直口蓋	(11.4) (6.5) —	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/3 灰青褐色	石英・長石	243
109	土坑214	甕	直口蓋	(11.6) (5.7) —	内面ヨコナデ 外面ナデ	欠損	欠損	内面2.5YR7/2 灰青色 外面10YR6/4 にぶい黄褐色	石英・長石	236

土器観察表(7)

()内は復元値あるいは検存値

図 記 号	出土地点	器種	形式	法量 (口径・ 高さ) (底径)	口縁部	胴体部	底縁(脚縁)	色調	胎土	実 測 号
110	上城214	鉢	—	14.2 4.8 —	内外面ヨコナデ	内外面ヨコナデ	内面エビオサエ・ナデ 外面不定方向ナデ	内面10YR5/2 灰青褐色 外面10YR5/2 灰青褐色	石英・長石	103
111	十城214	小皿蓋	—	(9.6) (5.3) —	内外面薄減着しい	欠損	欠損	内面7.5YR7/3 にぶい・橙色 外面10YR7/2 にぶい・黄褐色	長石	238
112	上城214	小皿土器	手柄	4.6 4.2 1.9	内外面エビオサエ	内外面エビオサエ	内外面ナデ	内面10YR5/2 灰青褐色 外面10YR7/2 にぶい・黄褐色	石英・長石	239
113	土城214	小皿付柄	—	— (3.6) 6.2	欠損	欠損	内面ナデ・エビオサエ 外面ナデ・エビオサエ	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR5/2 灰青褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	240
114	七城215	甕 (輪式系)	—	(14.4) 28.4 —	内外面ヨコナデ	内面ナデ 外面ヨコナデ	内外面ナデ	内面5YR6-1 灰褐色 外面2.5YR6/8 棕色	石英・長石	91
115	上城215	甕 (輪式系)	—	16.4 26.5 —	内外面ヨコナデ	内面ナデ・エビオサエ 外面ヨコナデ	内外面ナデ	内面10YR12/1 黒色 外面10YR12/1 黒色	石英・長石	95
116	十城215	甕	—	14.6 (4.3) —	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR7/3 にぶい・黄褐色 外面10R6/6 赤褐色	石英・長石	106
117	上城215	高杯	—	14 (5.2)	内面口縁部ヨコナデ 外面ヨコナデ	内面底部不定方向ナデ 外面ヨコナデ	欠損	内面2.5YR7/6 褐色 外面5R6/8 棕色	石英・長石	105
119	十城215	高杯	—	— (6.3) 12.8	欠損	欠損	内外面ヨコナデ	内面5YR5-8 明赤褐色 外面5YR5-6 明赤褐色	石英・長石	107
120	上城215	不明 (輪式系)	—	— (2.5) 6	欠損	欠損	内面割減 外面ヘラミガキ	内面2.5YR6/6 褐色 外面2.5YR6/4 にぶい・棕色	石英・長石	200
121	十城216	甕	—	— (23.7) —	欠損	内面エビオサエ・エビナデ 外面タナハケ	内面エビオサエ 外面ナデ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	235
122	上城216	甕	—	14.9 (21.6) —	内外面ヨコナデ	内面エビナデ 外面口縁部ヨコハケ 外面タナハケ	欠損	内面7.5YR8/4 浅黄褐色 外面7.5YR8/2 灰白色	石英・長石	189
123	七城216	甕	—	(18.6) (3.3) —	内外面ナデ	欠損	欠損	内面10YR7/3 にぶい・黄褐色 外面10YR7/2 にぶい・黄褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	202
124	土城216	甕	—	(17.6) (4.0) —	内外面薄減着しい	欠損	欠損	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR6/2 灰青褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	203
125	十城216	甕	—	(12.2) (5.4) —	内外面ナデ	欠損	欠損	内面2.5YR6/2 灰褐色 外面2.5YR6/4 にぶい・橙褐色	石英・長石	304
126	上城216	甕	—	(14.3) (7.5) —	内面ヘラミガキ 外面ヨコナデ ヘラミガキ	欠損	欠損	内面5YR8/2 灰白色 外面5YR8/3 淡棕色	石英・長石 赤色酸化土粒	201
127	七城216	高杯	瓶形	(16.2) (4.5) —	内外面ナデ	内外面ナデ	欠損	内面2.5YR6/8 棕色 外面2.5YR6/8 棕色	石英・長石 赤色酸化土粒	110
128	上城216	高杯	—	— (6.0) 12	欠損	欠損	内外面割減着しい	内面2.5YR6/4 にぶい・橙褐色 外面2.5YR6/4 にぶい・橙褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	183

土器観察表(8)

()内は復元値あるいは検存値

図録番号	出土地点	器種	形式	法量 (口径) (高さ) (底径)	口縁部	胴体部	底蓋(脚部)	色調	胎土	実測番号
129	十坑216	高坏	碗形	(13.0) 13.2 (11.4)	内外面ナデ	内外面ナデ	内外面ナデ	内面25YR6/8 褐色 外面25YR6/6 褐色	石英・長石	109
130	上坑216	高坏	碗形	14.5 11.3 11.4	内面磨減著しい 外面ナデ	内面磨減著しい 外面ナデ	内面ヘラケズリ 外面ナデ	内面25YR7/3 にぶい黄褐色 外面25YR6/8 褐色	石英・長石	108
131	十坑216	小型甕		9.4 (3.0) —	内外面磨減著しい	欠損	欠損	内面5YR6/6 褐色 外面5YR6/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土状	208
132	土坑216	高坏 (飯室器)		— (3.0) (8.4)	— 欠損	欠損	内外面口クロナデ	内面5Y/ 灰色 外面5Y/ 灰色	長石	206
133	上坑217	甕		— (11.0) —	— 欠損	内面エビオサエ・ユビナデ 外面ハケ	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面25YR8/2 灰白色	石英・長石	197
134	十坑217	高坏	碗形	13 (4.8) —	内外面ナデ	内面ナデ 外面脚部付近ハケ	欠損	内面25YR6/2 灰黄色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	116
135	上坑217	高坏	碗形	(15.0) (3.0) —	内外面ココナデ	内面タテハケ底部僅方内 ハコ外面タテハケ・ナデ	欠損	内面25YR6/2 灰黄色 外面10YR6/2 灰黄色	石英・長石	116
136	土坑217	鉢 (輪式系)	手捏	(13.7) 7.8 7.6	内外面エビナデ	内外面ヘラケズリ	内面ヘラケズリ 外面エビオサエ・ナデ	内面25YR6/3 灰黄色 外面10YR7/4 にぶい黄褐色	石英・長石 赤色酸化土状	117
137	上坑217	小型土器	手捏	(3.0) 3	内面エビオサエ 外面ヘラケズリ	内面エビオサエ 外面ヘラケズリ	内面エビオサエ 外面ナデ	内面10YR5/4 灰褐色 外面10YR5/2 灰黄色	石英・長石	209
138	十坑218	甕	内筒つまみ	(14.4) (3.3) — (6.5)	内外面ナデ	内面胴部ヘラケズリ 外面胴部ナデ	欠損	内面10YR5/3 にぶい黄褐色 外面10YR5/2 灰黄色	石英・長石 赤雲母	245
139	上坑218	甕	直口甕	(14.4) (6.5) —	内外面ナデ	欠損	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石	241
140	土坑218	鉢		12 3.6 —	内外面ナデ	内面ナデ 外面ヘラケズリのちナデ	内外面ナデ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	長石 赤色酸化土状	111
141	上坑218	鉢		15.9 5 —	内面ココハケ 外面ヨコナデ	内面ナデ 外面タテハケ	欠損	内面10YR7/4 にぶい黄褐色 外面10YR6/2 灰黄色	石英・長石	112
142	土坑219	甕	つまみあげ	(13.4) (3.3) —	内外面ナデ	内面胴部ヘラケズリ 外面胴部タテキ 胴部欠損	欠損	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	長石	287
143	上坑220	甕	単純	(14.0) 3.8 —	内外面ナデ	内面胴部ナデ 外面胴部タテキ 胴部欠損	欠損	内面10YR5/3 にぶい黄褐色 外面10YR6/3 にぶい黄褐色	石英・長石	288
144	土坑221	甕	(広口甕)	(10.8) (5.8) —	内外面ナデ	欠損	欠損	内面25YR8/3 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	212
145	SX207	甕 (出水器)		(9.6) 3.3 —	内面ナデ	内面ナデ 外面ヘラケズリ	—	内面10YR6/3 にぶい黄褐色 外面10YR6/3 にぶい黄褐色	石英・長石	291
146	SX201	高坏 (飯室上器)	IV様式	— (8.5) 10.4	— 欠損	欠損	内面エビオサエ・ナデ 外面ヘラミダキ・ナデ	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR6/3 灰黄色	石英・長石	284

土器観察表(9)

() 内は復元値あるいは残存値

図版番号	出土地点	母体	形式	法量 (口径・ 高さ・ 底径)	口頸部	胴体部	底唇(脚部)	色調	胎土	図版 番号
147	壺穴建物201	壺	138 (11.0)	内外面ヨコナデ	内面エビオサエ・ユビナデ 外面斜め方向ハケ	欠損	内面75YR6/2 灰褐色 外面75YR6/2 灰褐色	石灰・黒炭母	84	
148	壺穴建物201	壺	156 (11.0)	内外面ヨコナデ	内面エビオサエ・ユビナデ 外面斜め方向ハケ	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石灰・長石	85	
149	壺穴建物201	壺	(18.5) (3.0)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面75YR7/6 褐色 外面75YR6/6 棕色	石灰・長石	133	
150	壺穴建物201	壺	(16.8) 28.1 —	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ — 胴部エビオサエ	内面ユビナデ 外面タテハケ	内面エビオサエ 外面タテハケ	内面75YR6/2 灰褐色 外面75YR7/2 明褐色	石灰・長石	76	
151	壺穴建物201	壺	(19.5) (5.0)	内外面ヨコナデ	内外面胴部割減著しい 胴部欠損	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面75YR7/4 にぶい棕色	石灰・長石 黒炭母	132	
152	壺穴建物201	壺	(13.8) (3.9)	内外面ヨコナデ 外面胴部ハケ	欠損	欠損	内面710YR6/3 にぶい黄褐色 外面710YR3/1 黒褐色	石灰・長石 黒炭母	129	
153	壺穴建物201	壺	(18.5) (3.7)	内外面ヨコナデ	内面胴部ナデ 外面胴部ハケ — 胴部欠損	欠損	内面10YR6/2 灰黄褐色 外面10YR6/2 灰黄褐色	長石	128	
154	壺穴建物201	壺	(14.0) (1.9)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石灰・長石	134	
156	壺穴建物201	高杯	— (4.0) (9.4)	欠損	欠損	内面割減 外面ナデ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石灰・長石	125	
157	壺穴建物201	高杯	有段 (12.0) 12 (9.0)	内面ヨコナデ 外面タテハケのちナデ	内外面胴部ナデ	内面シヨリ目・ハケズリ 外面ナデ	内面25YR7/6 褐色 外面25YR7/4 淡赤褐色	石灰	87	
158	壺穴建物201	高杯	有段 (15.0) 13.4 (9.0)	内面ヨコナデ 外面タテハケのちナデ	内外面胴部ナデ	内面シヨリ目・ハケズリ 外面ナデ	内面10R5/8 赤色 外面10R6/6 赤褐色	石灰・長石	86	
159	壺穴建物201	小豆丸底壺	(7.4) (8.1)	内外面ナデ	内面ユビナデ 外面ハケ	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR8/2 灰白色	石灰・長石	124	
160	壺穴建物201	鉢	(27.2) (13.2)	内外面ヨコナデ 外面胴部エビオサエ	内面エビオサエ・ナデ 外面タテハケ・ユビオサエ	欠損	内面5YR7/3 にぶい棕色 外面5YR8/2 灰白色	石灰	120	
161	壺穴建物201	壺 (須恵器)	(26.3) (1.8)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面N6/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	127	
162	壺穴建物202	壺	(19.2) (30.4)	内外面ヨコナデ	内面ユビナデ 外面胴部ヨコハケ — 胴部タテハケ	欠損	内面75YR6/4 にぶい棕色 外面5YR7/6 褐色	石灰・長石	234	
163	壺穴建物202	壺	(17.6) (3.4)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面75YR7/4 にぶい棕色 外面75YR7/4 にぶい棕色	石灰・長石 黒炭母	218	
164	壺穴建物202-4	壺	(12.0) (3.0)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石灰・長石	249	
165	壺穴建物202	壺	(14.2) (1.4)	内外面ヨコナデ	欠損	欠損	内面75YR7/4 にぶい棕色 外面5YR7/4 赤色黄化土腔	石灰・長石	246	

土器観察表(10)

()内は復元値あるいは残存値

図録番号	出土地点	器種	形式	口径 (口径) (高さ) (底径)	Li面数	調整係数	底部(脚部)	色調	胎土	土器番号
166	壺穴建物202	高杯		14.8 (5.7) —	内外面ナテ	内外面ナテ	内外面ナテ	内面5YR6/6 棕色 外面5YR7/6 褐色	石英・長石	97
167	壺穴建物202	高杯		11 11.3 8.4	内外面ナテ	内外面ナテ	内外面ナテ	内面5YR7/6 褐色 外面7.5YR7/3 にぶい褐色	石英・長石	95
168	壺穴建物202	鉢		(13.0) 4.7 —	内外面ナテ	内外面ナテ	内外面ナテ	内面7.5YR6/2 明灰褐色 外面7.5YR6/2 明灰褐色	石英・長石	96
169	壺穴建物202	飯盛土鉢	平盤	(3.0) (9.2) —	内外面ユビナテ	内外面ユビナテ	内外面ユビナテ	内面7.5YR8/3 浅黄褐色 外面7.5YR8/3 浅黄褐色	石英・長石	123
170	壺穴建物202	製造土器	手捏	(3.0) (9.9) —	内外面ユビナテ	内外面ユビナテ	内外面ユビナテ	内面7.5YR5/6 明褐色 外面7.5YR5/6 明褐色	石英・長石	275
171	壺穴建物202	杯 (原器部)		(10.4) 4.4 —	内外面ロクロナテ	内面ロクロナテ 外面ロクロナテ 不定方向ヘラケズリ	欠損	内面NS/ 灰色 外面NS/ 灰色	石英・長石	98
172	壺穴建物202	はちう (原器部)		(9.0) (4.0) —	内外面ロクロナテ 外表飾部旋紋文		欠損	内面2.5YR6/1 黄灰色 外面N4/ 灰色 (内面片断付着)	石英	99
175	壺穴建物205	高杯	碗形	15.6 (5.3) —	内外面ナテ	内外面ナテ	欠損	内面7.5YR6/4 にぶい褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	213
176	壺穴建物205	高杯		— (2.7) (14.4)	欠損	欠損	内外面ナテ	内面7.5YR7/3 にぶい褐色 外面2.5YR6/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	211
177	壺穴建物202	甕		(21.8) (3.4) —	内外面帯減者しい	欠損	欠損	内面10YR2/1 黒色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石	210
178	壺穴建物204	甕	広口壺	(14.2) (5.5) —	内外面ナテ	欠損	欠損	内面5YR6/6 灰色 外面5YR6/6 褐色	長石 赤色酸化土粒	212
179	小形丸底甕			(2.0) (2.7) —	内外面ナテ	欠損	欠損	内面7.5YR7/4 にぶい褐色 外面7.5YR7/3 にぶい褐色	石英・長石	247
180	壺穴建物202	小形丸底甕		(11.0) (6.0) —	内外面ヨコナテ	内面ヘラケズリ 外面ハケ	欠損	内面5YR6/6 灰色 外面5YR7/4 にぶい褐色	石英・長石 赤色酸化土粒 黒雲母	118
181	壺穴建物203	小形丸底甕		(10.4) (5.0) —	内外面ヨコナテ	内面ナテ 外面ヘラミガキ	欠損	内面7.5YR6/6 褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英 赤色酸化土粒	174
182	壺穴建物202	小形丸底甕		(10.5) (7.4) —	内外面ヨコナテ	内面ナテ 外面タテハケ	欠損	内面5YR7/6 褐色 外面3YR7/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	119
183	平地式建物204	甕	単純	(14.6) (7.7) —	内面ヨコハケ 外面ヨコハケ (底入)	内面脚部ヨコハケ 外面脚部ハケ 底部欠損	欠損	内面2.5YR7/3 浅黄褐色 外面10YR6/3 にぶい黄褐色	石英・長石	296
184	平地式建物204	高杯	有段	15.4 (3.7) —	内外面ナテ	内外面ナテ	欠損	内面10YR8/3 浅黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石 黒雲母	91
185	平地式建物204	甕		(17.0) (4.8) —	内外面ナテ	内面脚部ユビナテ 外面脚部ハケ 底部欠損	欠損	内面2.5YR7/3 浅黄褐色 外面2.5YR7/3 浅黄褐色	石英	294

土器観察表 (11)

() 内は復元値あるいは残存値

調査番号	出土地点	群種	形式	法量 (口径 高)	口部形	調整体部	底漆(脚部)	色調	胎土	実測番号
186	平地式建物205	壘	—	17.6 (11.5)	内外面ナデ 外面底部エビオサエ	内面エビオサエ・エビナデ 外面斜め方向ハケ	欠損	内面10YR8/3 灰黄色 外面10YR8/3 灰黄色	石英・長石	281
187	平地式建物205	高坏	有段	— (9.1) (10.8)	欠損	内外面ナデ	内面シボリ目・ヘラズリ ナデ外面ナデ	内面5YR8/1 灰白色 外面10R6/6 赤褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	188
188	平地式建物205	高坏	—	欠損 (5.7) 11	欠損	内面シボリ目・ヨコナデ 外面タテハケのものナデ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/3 浅灰黄色	石英・長石 赤色酸化土粒	102	
189	平地式建物205	高坏	有段	— (8.7) —	欠損	内外面ナデ	内面シボリ目	内面5YR7/8 褐色 外面5YR7/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	187
190	平地式建物205	高坏	碗形	15 (5.6)	内外面ナデ	内外面ナデ	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	90
191	平地式建物205	高坏	外反	(11.0) (5.0)	内面磨滅 外面ナデ	内面磨滅 外面ナデ	欠損	内面7.5YR7/4 にぶい褐色 外面5YR7/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒 黒雲母	101
192	平地式建物205	高坏	碗形	12.5 (4.0) —	内外面ナデ	内外面ナデ	欠損	内面5YR7/6 褐色 外面7.5YR6/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	93
193	平地式建物205 (原巻部)	坏	—	(13.2) (4.0) —	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面R6/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	100
194	平地式建物205	壘 (原巻部)	—	(26.3) (1.3) —	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面10YR5/1 塩灰色 外面7.5YR6/1 黒褐色 内面内巻部打割	長石	121
196	平地式建物204	壘 (近江系) (説入)	受け皿	(15.7) 22.5 3.5	内外面ヨコナデ	内面何部ナデ・脚部タテ ハケ外面体部上平ヨコ ハケ・下平タテハケ	内面ナデ 外面ナデ・ハケ	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石	92
197	平地式建物204	鉢 (説入)	—	12.6 5.6 —	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内面ナデ 外面ヘラミガキ	内面10R5/8 赤色 外面2.5YR6/6 褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	89
198	溝状遺構201	壘	単純	(13.6) (13.9) —	内外面ヨコナデ	内面底部ヨコナデ 体部ヨコハケ 外面上平タタキ・下平 タテハケ・ヘラミガキ	欠損	内面10YR7/2 にぶい黄褐色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	66
199	溝状遺構201	壘	単純	14.8 (24.0) 1.9	内外面ヨコナデ	内面ヨコハケ 外面上平タタキ 下平タタキ・タテハケ	内面タテハケ 外面ナデ	内面10YR5/2 灰黄色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	長石	70
200	溝状遺構201	壘	単純	13.4 17.1 1.9	内外面ヨコナデ	内面体部上平ヨコハケ 下平ヘラミガキ 外面体部上平タタキ 下平タテハケ	内面ヘラミガキ 外面ナデ	内面10YR6/2 灰黄色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	68
201	溝状遺構201	壘 (近江系)	受け皿	16 23 4.8	内外面ヨコナデ	内面底部-脚部ヨコハケ 外面何部斜め方向ハケ 脚部タテハケ	内面ナデ 外面タテハケ・ナデ	内面10YR6/2 灰黄色 外面10YR8/1 灰白色 10YR8/1 灰白色	石英・長石	70
202	溝状遺構201	壘	広口壘	13.1 (8.0)	内面ヨコハケ 外面タテハケ	内外面磨滅著しい	欠損	内面10YR6/2 灰黄色 外面10YR7/2 にぶい黄褐色	石英・長石	67
203	溝状遺構201	高坏	外反有段	— 13.3 14.4	内外面ナデ	内面斜め方向ヘラミガキ 外面縦方向ヘラミガキ	内面ナデ 外面ヘラミガキ・ナデ	内面10YR8/2 灰白色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	72
204	溝状遺構201	高坏	有段	17.3 (12.8) —	内外面ヘラミガキ	内外面ヘラミガキ	欠損	内面10YR7/4 にぶい黄褐色 外面10YR6/3 にぶい黄褐色	石英・長石	69

土器観察表(12)

() 内は復元値あるいは残存値

調査番号	出土地点	器種	形式	法量 (口径) (容積) (底径)	口頸部	胴体部	底部(脚部)	色澤	胎土	調査番号
305	藤状遺構201	小型丸底甕	—	欠損 (8.1) 2.1	内面ナデ 外面タタキのちナデ	内面ナデ 外面ナデ	内面25YH4/1 赤灰色 外面25YR8/3 浅黄色	石灰・長石	73	
306	藤状遺構201	小型丸底甕	—	(9.6) (3.7) —	内面ヨコハケ 外面滑感著しい	内面ナデ 外面滑感著しい	内面10YR6/4 浅黄褐色 外面10YR6/2 灰白色	石灰・長石	180	
207	藤状遺構201	公器古竹筒	—	欠損 (2.8) (0.8) 6.6	欠損	欠損	内面シボリ具 外面ナデ	内面10YR6/1 黄灰色 外面10YR6/2 灰黄色	石灰・長石	179
308	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(12.2) 4.1	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	192
209	水路北岸上器群	蓋 (須恵器)	—	(11.2) (3.8) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ (外面自然亀付蓋)	欠損	内面N6/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	229
210	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(13.0) (4.0) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ (外面自然亀付蓋)	欠損	内面5Y7/1 灰白色 外面5Y7/1 灰白色	長石	216
211	水路北岸上器群	蓋 (須恵器)	—	(12.8) 5.6 —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面N5/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	191
212	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(12.5) 5.5 —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面N6/ 灰色 外面N7/ 灰色	長石	193
213	水路北岸上器群	蓋 (須恵器)	—	(14.6) (4.0) —	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面N4/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	226
214	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(10.2) (3.7) —	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面N5/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	227
215	水路北岸上器群	蓋 (須恵器)	—	(10.6) (3.8) —	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面5YR5/1 灰色 外面N4/ 灰色	長石	228
216	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(12.7) (3.9) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ (外面自然亀付蓋)	欠損	内面N7/ 灰色 外面7.5YR6/1 灰色	長石	221
217	水路北岸上器群	蓋 (須恵器)	—	(13.7) (4.7) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ (外面自然亀付蓋)	欠損	内面N7/ 灰色 外面7.5YR7/1 灰白色	長石	220
218	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(12.8) (4.2) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面7.5YR6/1 灰色 外面7.5YR5/1 灰色	長石	219
219	水路北岸上器群	蓋 (須恵器)	—	(12.5) 4.3 —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面10R1/1 暗赤灰色 外面N5/ 灰色	長石	198
220	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(10.0) (4.3) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面7.5YR7/1 灰白色 外面N4/ 灰色	長石	223
221	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	(10.6) (4.3) —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面N4/ 灰色 外面N4/ 灰色	長石	222
222	水路北岸上器群	壺 (須恵器)	—	10.8 3.2 —	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面N5/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	130

土器観察表 (13)

() 内は償元値あるいは残存量

調査番号	出土地点	器種	形式	口径 (口径) (高さ) (底径)	山間誌	調整形態	底器 (脚部)	色調	胎土	実測値
223	水跡北岸土器群	坏 (須恵器)	—	(11.8) (4.7)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面N6/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	191
224	水跡北岸土器群	坏 (須恵器)	—	(11.2) (4.7)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面25YR7/1 灰色 外面25YR7/1 灰色	長石	190
225	水跡北岸土器群	坏 (須恵器)	—	(11.6) (3.1)	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面25YR6/1 黄灰色 外面25YR6/1 黄灰色	長石	200
226	水跡北岸土器群	坏 (須恵器)	—	(11.0) (4.2)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面不定方向ナデ 外面回転ヘラケズリ	内面25YR7/2 灰黄色 内面25YR7/1 灰白色	石英・長石	203
227	水跡北岸土器群	坏 (須恵器)	—	(14.4) (3.7)	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	225
228	水跡北岸土器群	壺 (須恵器)	—	(24.0) (6.2)	内面ロクロナデ 外面ナデ・段状文	欠損	欠損	内面N6/ 灰色 内面N6/ 灰色	長石	217
229	水跡北岸土器群	壺 (須恵器)	—	(20.3) (5.0)	内面ロクロナデ 外面ナデ・段状文	欠損	欠損	内面N5/ 灰色 外面25YR6/1 灰色	石英・長石	200
230	水跡北岸土器群	壺 (須恵器)	—	(18.8) (7.9)	内外面ロクロナデ	内面肩部同心円文クタクキ のちスリケシ 外面肩部平行クタクキ 胴部欠損	欠損	内面N6/ 灰色 内面N7/ 灰色	石英・長石	218
231	水跡北岸土器群	壺 (須恵器)	—	(22.8) (4.7)	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面N6/ 灰色 内面N4/ 灰色	長石	232
232	水跡北岸土器群	壺 (須恵器)	—	(19.4) (5.5)	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面25YR3/1 灰色 外面N4/ 灰色 (内裏包帯層付着)	長石	199
233	水跡北岸土器群	有蓋高坏 (須恵器)	—	(15.8) (4.6)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面N5/ 灰色 外面N5/ 灰色	長石	215
234	水跡北岸土器群	突坏 (須恵器)	—	— (5.1) (9.8)	欠損	欠損	内面ロクロナデ 外面ホキ目・ロクロナデ	内面N4/ 灰色 外面N4/ 灰色	長石	196
235	水跡北岸土器群	高坏 (須恵器)	—	— (4.0) (9.6)	欠損	欠損	内面ロクロナデ 外面ホキ目・ロクロナデ	内面N5/ 灰色 外面N5/ 灰色	石英・長石	203
236	水跡北岸土器群	壺	—	(21.8) (4.1)	内外面ナデ	欠損	欠損	内面10YR8/3 浅黄褐色 外面10YR8/3 浅黄褐色	石英・長石	231
237	水跡北岸土器群	高坏	—	15.3 (6.2)	内外面ナデ	内面ナデ 外面エビオサエ	欠損	内面10YR8/3 浅黄褐色 外面10YR8/3 浅黄褐色	石英・長石 黒雲母	214
238	水跡北岸土器群	高坏	—	— (7.2) (5.6)	欠損	欠損	内面シボリ目・ナデ 外面ヘラケズリ・ナデ	内面25YR7/6 褐色 外面25YR7/6 褐色	石英・長石 黒雲母	213
239	水跡北岸土器群	高坏	—	13.5 (10.4) (9.8)	内外面ナデ	内面ナデ 外面タテハケ	内面シボリ目・ナデ 外面ヘラケズリ・ナデ	内面10YR7/4 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石	196
240	水跡北岸土器群	製塩土器	手捏	3.0 (7.2)	内外面エビオサエ・ エビナデ	内外面エビオサエ・ エビナデ	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石	226

土器観察表 (14)

() 内は復元値あるいは残存値

図録番号	出土地点	器種	形式	口径(口径/器高/底径)	口部	胴部	底部(脚部)	色	出土	実測番号
241	水路内埴積層	壺 (須恵器)	—	(12.4) 4.2	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面3Y5/1 灰色 外面5B/1 灰色	灰石	251
242	水路内埴積層	蓋 (須恵器)	—	(15.5) (4.0)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面2.5Y5/1 灰白色 外面N4/ 灰色	灰石	257
243	水路内埴積層	壺 (須恵器)	—	(16.0) (3.6)	内外面ロクロナデ	欠損	欠損	内面5Y6/1 灰色 外面3Y5/1 灰色	灰石	250
244	水路内埴積層	蓋 (須恵器)	—	(12.8) 4.3	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ (外面自然釉付着)	欠損	内面N5/ 灰色 外面N6/ 灰色	灰石	256
245	水路内埴積層	壺 (須恵器)	—	(12.6) 4	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面2.5Y7/1 灰白色 外面2.5Y7/1 灰白色	灰石	254
246	水路内埴積層	蓋 (須恵器)	—	(14.2) (4.0)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面N5/ 灰色 外面N5/ 灰色	灰石	258
247	水路内埴積層	壺 (須恵器)	—	(12.2) (3.7)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面10Y3/1 濃灰色 外面N5/ 灰色	灰石	262
248	水路内埴積層	蓋 (須恵器)	—	(10.8) (1.1)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面N7/ 灰色 外面N6/ 灰色	灰石	261
249	水路内埴積層	壺 (須恵器)	—	(12.2) (3.3)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ (外面自然釉付着)	欠損	内面3G/ 灰色 外面N6/ 灰色	灰石	259
250	水路内埴積層	蓋 (須恵器)	—	(14.6) 5.3	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面5Y5/1 灰色 外面5Y6/1 灰色	石典・灰石	169
251	水路内埴積層	壺 (須恵器)	—	(13.4) 4.8	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	灰石	265
252	水路内埴積層	蓋 (須恵器)	—	(12.6) (4.5)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面5Y7/1 灰白色 外面5Y7/1 灰白色	灰石	126
253	水路内埴積層	埴 (須恵器)	—	(11.8) 4.7	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	内面ロクロナデ 器心部分のみスリケ 外面回転ヘラケズリ	内面5Y7/1 灰白色 外面N4/ 灰色	石典・灰石	250
254	水路内埴積層	埴 (須恵器)	—	(12.5) (4.4)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面5Y6/1 灰白色 外面N3/ 灰色	灰石	263
255	水路内埴積層	埴 (須恵器)	—	(13.0) (4.7)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	欠損	内面10Y6/1 灰色 外面10Y3/1 灰色	灰石	265
256	水路内埴積層	埴 (須恵器)	—	(9.8) 4	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面ヘラケズリ	内面ロクロナデ 外面ヘラケズリ	内面3G/ 灰色 外面N5/ 灰色	灰石	131
257	水路内埴積層	有蓋高埴 (須恵器)	—	(15.8) (5.3)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ・ヘラケズリ	欠損	内面N5/ 灰色 内面N5/ 灰色	灰石	130
258	水路内埴積層	有蓋高埴 (須恵器)	—	(17.2) (5.3)	内外面ロクロナデ	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ・ヘラケズリ 流状文	欠損	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	灰石	264

土器観察表 (15)

() 内は復元値あるいは残存値

図版番号	出土地点	器種	形式	法算 (口径) (器高) (底径)	口縁部	胴体形	底形(底部)	色調	胎土	定数 (%)
229	水路内池縁部	有蓋空杯 (須恵器)	—	(15.0) (4.9) —	内外面口ロナデ	内面口ロナデ 外面口ロナデ・ヘラケツリ 隆状文	欠損	内面N7/ 灰色 外面N7/ 灰色	長石	252
230	水路内車轆轆	高坏 (須恵器)	—	— (15) (9.0)	欠損	欠損	内外面口ロナデ 長方形すかし	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	269
261	水路内池縁部	高坏 (須恵器)	—	— (5.5) 9	欠損	欠損	内外面口ロナデ 円形すかし	内面SYR6/1 灰色 外面SYR6/1 灰色	長石	136
262	水路内車轆轆	高坏 (須恵器)	—	— (15) 9	欠損	欠損	内外面口ロナデ 外面自然磨付着 円形すかし	内面N7/ 灰色 外面7SYR6/1 灰色	長石	137
263	水路内池縁部	高坏 (須恵器)	—	— (4.6) (7.8)	欠損	欠損	内外面口ロナデ	内面7SYR6/1 灰色 外面7SYR5/1 灰色	長石	253
264	水路内車轆轆	高坏 (須恵器)	—	— (4.2) (10.2)	欠損	欠損	内外面口ロナデ 長方形すかし	内面7SYR6/1 灰色 外面7SYR6/1 灰色	長石	270
265	水路内池縁部	壺 (須恵器)	—	(18.8) (6.7) —	内外面口ロナデ 外面底状2条 (内面自然磨付着)	欠損	欠損	内面7SYR6/1 灰色 外面N5/ 灰色	長石	268
266	水路内池縁部	壺 (須恵器)	—	(21.6) (4.6) —	内外面口ロナデ	欠損	欠損	内面N5/ 灰色 外面10YR4/1 褐色	長石	266
267	水路内池縁部	壺 (須恵器)	—	(39.0) (3.2) —	内外面口ロナデ	欠損	欠損	内面7SYR6/1 灰色 外面N4/ 灰色	長石	271
268	水路内池縁部	壺 (須恵器)	—	(23.0) (2.4) —	内外面口ロナデ 外面底状文 (内面自然磨付着)	欠損	欠損	内面7SYR6/1 灰色 外面SPB4/1 褐色灰色	長石	267
269	水路内池縁部	壺 (須恵器)	—	(18.4) (14.5) —	内外面口縁部口ロナデ 内面底部ナデ 外面底部カキ目	内面底部カキ目 額部ナデ外面平行タタキ カキ目	欠損	内面SYR7/2 灰白色 外面SYR7/2 灰白色	石英・長石	280
270	水路内車轆轆	器内 (須恵器)	—	(30.0) (5.3) —	内外面口ロナデ 外面底状文 (内面自然磨付着)	欠損	欠損	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	273
271	水路内池縁部	取手付鉢 (須恵器)	—	(10.0) (9.5) (5.2)	内外面口ロナデ 外面底状文 (外面自然磨付着)	内外面ナデ	欠損	内面N5/ 灰色 外面N6/ 灰色	長石	146
272	水路内車轆轆	はそう (須恵器)	—	(10.0) (1.3) —	内外面口ロナデ 外面底状文 (内面自然磨付着)	欠損	欠損	内面10Y6/1 灰色 外面10Y6/1 灰色	長石	272
273	水路内池縁部	はそう (須恵器)	—	— (8.1) —	欠損	内外面口ロナデ	内外面口ロナデ	内面N4/ 灰色 外面N3/ 灰色	長石	145
274	水路内車轆轆	壺 (須恵器)	—	(15.4) (6.0) —	内外面ナデ 外面底部ユビオキエ 胴部欠損	内面底部ユビオキエ 外面底部タテハケ 胴部欠損	欠損	内面SYR5/3 にぶい赤褐色 外面SYR5/4 にぶい赤褐色	石英・長石	277
275	水路内池縁部	高坏 (須恵器)	—	(11.8) (9.0) —	内外面ナデ	内面シボリ目 外面タテハケ・ナデ	欠損	内面10YR7/3 にぶい黄褐色 外面10YR7/3 にぶい黄褐色	石英・長石	276
276	水路内池縁部	小器丸底甕 (須恵器)	—	(9.0) (6.5) —	内外面ナデ	内面底部ユビオキエ・胴部 ナデ外面ヘラミガキ	欠損	内面10YR6/2 灰黄褐色 外面10YR6/2 灰黄褐色	石英・長石 赤色酸化土状	279

土器観察表(16)

()内は還元値あるいは残存値

図録 番号	出土地点	器種	形式	法量 (口径) (器高) (底径)	LJ測定	調整部位	痕跡(脚部)	色調	胎土	文 書 番 号
277	水踏内遺積層	小型丸底甕		(11.6) (5.9) —	内外面ナデ	内外面ナデ	欠損	内面7.5YR5/4 に赤い褐色 外面7.5YR5/4 に赤い褐色	石英・長石 赤色酸化土粒	274
278	方形区画	平瓶 (御座器)		9.2 23.3 —	内外面ナデ	内面ナデ・エビオサエ 外面カキ目	内面ナデ 外面キキメ	内面N6/ 灰色 外面N6/ 灰色	石英・長石	282
279	方形区画	平瓶 (御座器)		8.6 (17.2) —	内外面ナデ	内面ナデ・エビオサエ 外面カキ目	欠損	内面5Y7/1 灰色 外面5Y7/1 灰色	石英・長石	307
280	方形区画	平瓶 (御座器)		9.2 (6.0) —	内外面ナデ 外面竹管文	欠損	欠損	内面N7/ 灰色 外面N3/ 灰色	石英・長石	283
281	獨立柱礎物 101	皿		13 2.8 8.8	内外面ナデ	内外面ナデ	内面ナデ 外面エビオサエ	内面5YR7/8 褐色 外面7.5YR8/4 黄褐色	長石 赤色酸化土粒 赤褐色	285
282	包含層	甕		(12.6) 19.9 —	内外面ナデ	内外面ナデ	内外面ナデ	内面10YR7/2 に赤い黄褐色 外面10YR8/2 灰白色	石英・長石 赤色酸化土粒	286
283	包含層	小型丸底甕		7 7.5 —	内外面ナデ	内面エビオサエ 外面頸部エビオサエ 体部ヘラケズリ	内面エビオサエ 外面ヘラケズリ	内面10YR6/2 灰青褐色 外面10YR4/4 褐色	石英・長石	292

※色調については農林水産省監修『新版標準土色帖』による。

(3) 木質遺物

木質遺物は、水路出土のもの（図73）、竪穴建物に伴うものが出土している。水路に堆積していた木質遺物は水流方向に並行に、横倒しの状態で検出されており、本来機能していた状態を保存していないと考えられる。おそらく上流域に存在した施設が洪水等で流出したか、人為的に解体され廃棄されたものが再堆積したものであろう。器種は加工の不明瞭な矢板（333～338）や杭（339～342）、割材（343～342、19）・丸材（352）・角材（349・350）等がほとんどで、水稲耕作に伴う灌漑施設の構築材であると想像される。また、竪穴建物出土のものは柱材および炭化した構築材である。

加工痕の認められる木材に注日し、丸材はその直径、割材・角材等は年輪に直交する幅・厚さについてグルーピングを行ったところ、2.6～5.0cmを頂点に大型方向に散布している傾向が得られた（表3）。今回出土した構築材のほとんどがみかん割りにした材か、または角材であることから、単純に幅・厚さを2倍した直径5.0～10.0cm前後を中心に、これを越える直径の原木を利用していたことが推測された。

これより小型の材については、割材をさらに小型にしたものであり、ほかと同様の原木を使用していたと考えられる。また直径25.0cmを超える丸太材も出土している。なお、各遺物の加工痕については、表面の残存状況が総じて悪く観察が困難であったため、加工に使用された利器の種類を推定することはできなかった。

使用された樹種は、モミ属・ツガ属といった割裂性のよい温帯性の針葉樹に集中するが、一方でアカガシ亜属などの堅固な暖温帯常緑広葉樹も使用されている。またマツ属複雑管束亜属の使用については、原生林伐採の結果に伴う二次林化を示唆しており注日される。杭のような大量使用品を製作する際の用材選択は、生産性のよい針葉樹材を活用することは自明の理ではあるものの、周辺環境を色濃く反映しているものと考えられ、花粉分析等との比較においても、矛盾しない結果が得られている。これは六甲南麓の森林資源の利用を考える上で興味深い。なお、樹種同定結果および占環境の復元については、第6章に詳しい考察がなされているので参照されたい。（中村）

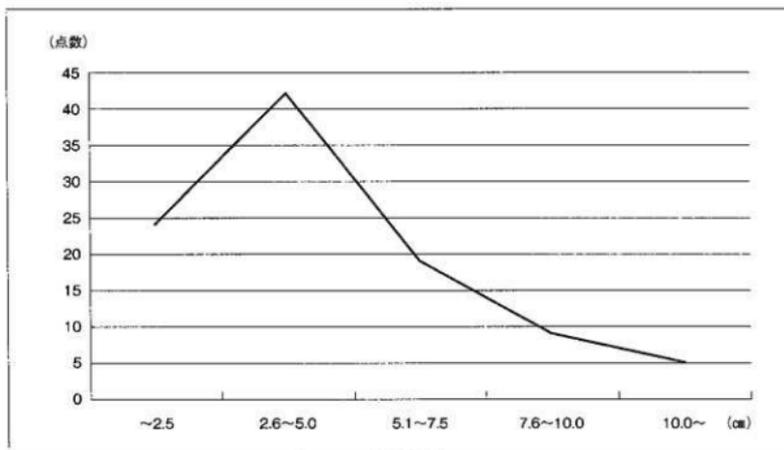


表3 水路出土木材の直径・幅の分布

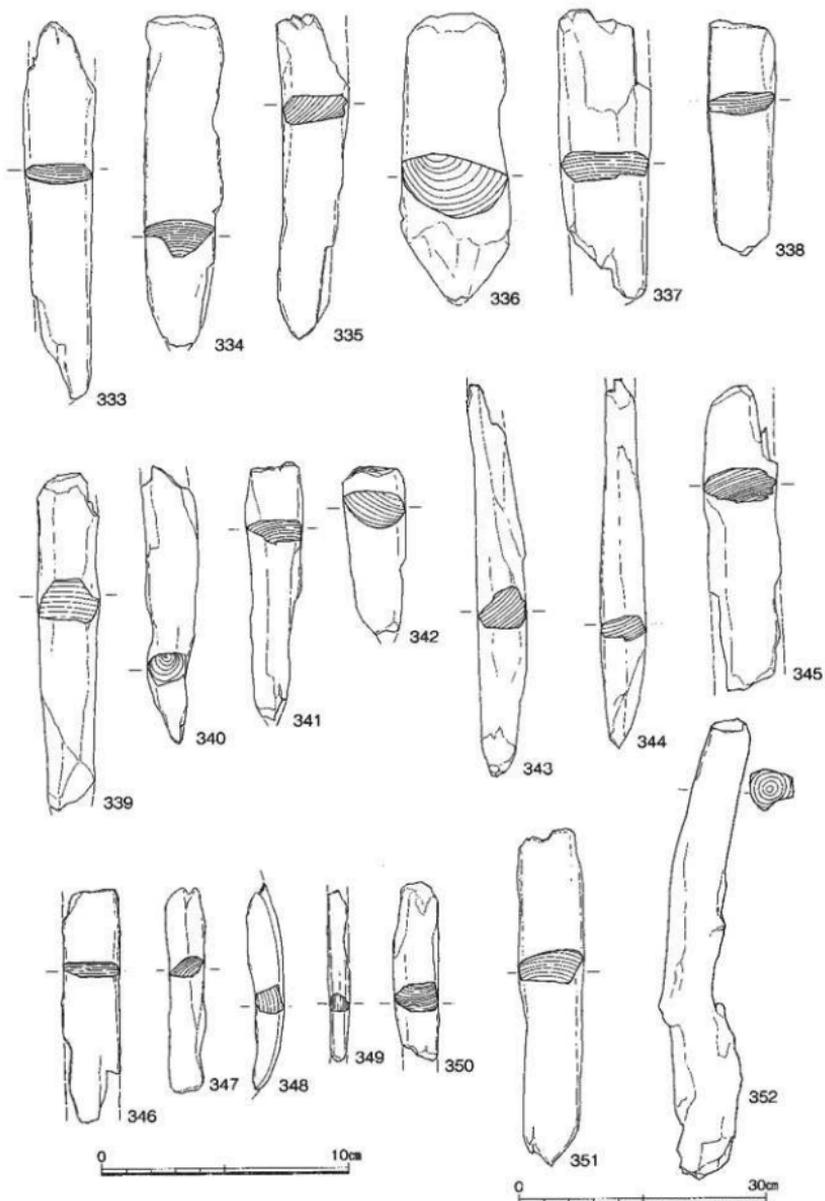


图74 水路出土木質遺物 実測図

第6章 自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、郡家遺跡の発掘調査に伴って検出された古墳時代中期の水路埋土の花粉分析および、古墳時代中期の水田上壤の植物珪酸体分析および大型植物遺体分析を実施し、古植物や栽培植物に関して検証する。また、古墳時代中期の水路や古墳時代の住居跡等から出土した木材や炭化材を対象として樹種同定を実施する。

1. 試料

(1) 花粉分析

試料は、古墳時代中期の水路埋土の第2層・第8層（図14）より採取した堆積物2点（サンプル番号p-1,2）である。

(2) 植物珪酸体

試料は、調査区西端部に位置する古墳時代中期の水田面において採取された西端畔畔（o-1）、大畔畔北端（o-2）の堆積物2点である。

(3) 大型植物遺体分析

試料は、古墳時代中期の水田面において採取された西端畔畔（s-1）、大畔畔北端（s-2）の堆積物2点であり、植物珪酸体分析を実施する試料と同一箇所から採取されたものである。

(4) 樹種同定

試料は、水路を中心とした遺構から出土した木製品など255点（S番号1～247.2-1～2.5.c-1～c-3）と、古墳時代の住居跡（竪穴建物201、平地式建物203）、水路内中層、土坑215から検出された柱根、加工木材、炭化材である。さらに、古墳時代の土坑（土坑215）、古墳時代の住居跡（竪穴建物202）で検出された炭化植物遺体についても同定を実施した。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、節別、重液（炭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.3）の順に物理・化学的処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で

全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機械細胞に由来した植物珪酸体（以下、機械細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表で示す。また、植物珪酸体の産生の層的变化から稲作の可能性や古植生について検討するために、出現率の層的变化を図示する。出現率は、短細胞珪酸体と機械細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

なお今回は、各分類群の含量の測定も試みた。分析の際に分析試料の乾燥重量、プレバート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレバートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、100個/g以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めな数字を合計した後に入れている。また、植物珪酸体含量の層的变化を図示する。

(3) 大型植物遺体分析

試料1000ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な種実や径4mm以上の炭化材などを抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後の種実は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し、返却する。

(4) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柘目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で木材組織を観察する。

炭化材は、自然乾燥させた後、双眼実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察する。これらの顕微鏡観察で確認された特徴を現生標本と比較して種類を同定する。試料が広葉樹の場合には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して同定を実施する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表4、図74に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。全体的に花粉が多く産出するが、保存状態のやや悪い花粉が多く含まれる。

水路の第8層は、木本花粉と草本花粉が同程度の割合で産出する。木本花粉ではマツ属が最も多く産出し、モミ属ツガ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属を伴う。その他ではイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シノキ属、ニレ属-ケヤキ属等も認められる。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属も多く認められる。

水路の第8層は、木本花粉の割合が高い。群集組成は下位の第8層と類似しており、マツ属が多産し、

モミ属、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多く産出し、ガマ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。

(2) 植物珪酸体分析

検鏡結果を表2、図2に示す。また、植物珪酸体含量を表3、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

試料番号o-1とo-2では、ともに栽培植物のイネ属が検出され、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。その出現率は、短細胞珪酸体が2%程度、機動細胞珪酸体が12%前後である。また含量は、短細胞珪酸体がともに約500個/g、機動細胞珪酸体が1,500-1,700個/gである。

この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。いずれも、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。

(3) 大型植物遺体分析

結果を表4に示す。木本1分類群(キイチゴ属)1個、草本11分類群(オモダカ科、イネ、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、スミレ属、チドメグサ属、イソコウジュ属、ナス科、キク科)206個、計207個の種実が検出され、栽培種のイネの類がs-1より1個、s-2より2個確認された。栽培種を除いた種実遺体群は、人里植物に属する草本主体の種類構成で、オモダカ科、ホタルイ属、イボクサなどの水生植物が確認された。以下に、同定された種実の形態的特徴等を記す。

<木本>

・キイチゴ属(Rubus)バラ科

核(内果皮)の破片が検出された。黄灰褐色、完形ならば長さ2mm、幅1mm程度の腹面方向にやや湾曲する半円形。破片は大きさ1mm程度。内果皮表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

種 類	地点・層位	
	水路	
	第2層	第8層
木本花粉		
マキ属	-	1
モミ属	20	26
ツガ属	11	31
マツ属甲種管束亜属	-	1
マツ属複種管束亜属	52	41
マツ属(不明)	70	54
コウヤマキ属	3	2
スギ属	11	19
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	6
	-	1
ヤマモモ属	1	2
サワグルミ属	2	3
クマシデ属-アサダ属	-	1
カバノキ属	5	-
ブナ属	6	3
コナラ属コナラ亜属	15	14
コナラ属アカガシ亜属	7	7
シイノキ属	-	5
ニレ属-ケヤキ属	1	-
ウコギ科	1	-
イボタノキ属		
草本花粉		
ガマ属	3	1
イネ科	28	113
カヤツリグサ科	3	49
	-	1
クワ科	2	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	3
タデ属	1	-
アカザ科	-	3
ナデシコ科	1	-
バラ科	-	2
マメ科	1	5
セリ科	1	-
オオバコ属	10	59
ヨモギ属	3	3
キク亜科	-	2
タンポポ科		
不明花粉	7	18
シダ類胞子		
ヒカゲノカズラ属	-	2
他のシダ類胞子	39	68
合 計		
木本花粉	205	217
草本花粉	53	242
不明花粉	7	18
シダ類胞子	39	70
総計(不明を除く)	297	529

表4 花粉分析結果

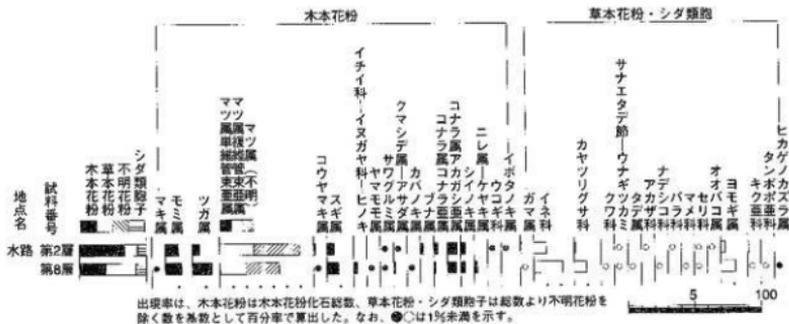


図75 花粉化石群集の層位分布

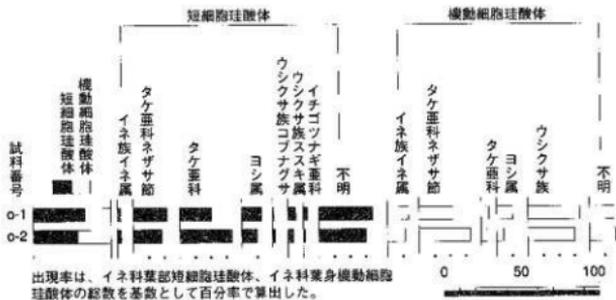


図76 植物珪酸体群集

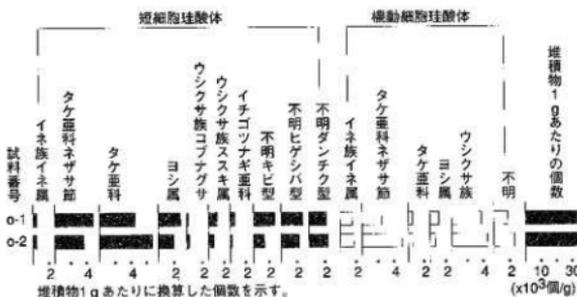


図77 植物珪酸体含有量

<草本>

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。淡褐色、長さ1~1.5mm、軸0.8~1mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で扁平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属

穎(果)の破片が検出された。淡-灰褐色、完形ならば長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ1~1.5mm程度のやや扁平な長楕円形。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲穂を構成する。破片は最大1.5mm程度。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

・ホタルイ属 (Scirpus) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、径2mm、厚さ1.3mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。果実頂部は尖る。背面正中線上は鈍稜。基部は切形で、刺針状の花被片が伸びる個体が見られる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。灰-黒褐色、長さ1~1.2mm、幅0.8mm程度の三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

・イボクサ (Aneilema keisak Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ1~1.5mm、径1~2.5mm程度の半楕長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面には円形の小孔が散在する。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (Potentilla-Duchesnea-Fragaria)バラ科核(内果皮)が検出された。淡-灰褐色、径0.9mm程度のやや扁平な腎形。内果皮は厚く硬く表面は粗面。

分類群	部位	状態	地点・試料番号・時代	
			水田西端 畦畔	大畦畔 北端
			s-1	s-2
			古墳中期	古墳中期
木本				
キイチゴ属	核	破片	-	1
草本				
オモダカ科	種子	完形	14	2
イネ	穎	破片	1	2
ホタルイ属	果実	完形	-	45
カヤツリグサ科	果実	完形	9	18
イボクサ	種子	完形	-	54
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属	核	完形	-	22
スミレ属	種子	破片	-	1
チドメグサ属	果実	完形	-	7
イヌコウジュ属	果実	完形	-	26
ナス科	種子	完形	-	3
クワ科	果実	完形	1	1
炭化材 (径4mm以上)			2	5
昆虫			4	66
分析量			1000cc (1930.2g)	1000cc (1903.5g)

表5 大型植物遺体分析結果

・スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子の破片が検出された。淡灰褐色、長さ1.2mm、径1mm程度の倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、表面には細い縦筋が走る。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。淡灰褐色、径1～1.2mm程度のやや偏平な半月形。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。黄灰褐色、径1.2～1.5mm程度の倒卵卵形。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科 (*Solanaceae*)

種子の破片が検出された。淡～茶褐色、径1.5mm程度の歪な腎臓形で偏平。基部のくびれた部分に臍点がある。種皮表面には微細な扇型網目模様が臍から同心円状に発達する。

・キク科 (*Compositae*)

果実が検出された。黒褐色、長さ2mm、幅1mm程度の偏平な倒狭皮針体。頂部は切形で円形の臍点がある。果皮表面には網目模様が観察される。タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) の果皮表面にあるスポンジ状の翼を欠損したものに似る。

(4) 樹種同定

樹種同定結果を表5に示す。木材・炭化材は、針葉樹9種類 (アカマツ・マツ属複雑管束亜属・モミ属・ツガ属・カラマツまたはトウヒ属・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科・カヤ) と広葉樹21種類 (カバノキ属・クマシデ属イヌシデ節・アサダ・コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・スダジイ・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ・ヤマグルマ・フサザクラ・タブノキ属・サカキ・ツルアジサイ・サクラ属・シラキ近似種・グミ属・クマヤナギ属・ノブドウ属・タニウツギ属・スイカズラ属・ガマズミ属) に同定された。なお、S番号65.81の2点は、保存状態が悪く、道管の配列等が観察できなかったため、広葉樹であることは明らかであるが、種類の同定はできなかった。

また、サンプル番号2～4は、微細片で観察範囲が狭いために道管配列が観察できず、広葉樹とした。S番号211は樹皮のみで木部細胞が観察できなかったため、種類の同定には至らなかった。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

・アカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.) マツ科マツ属

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

上記アカマツまたはクロマツや、アカマツとクロマツの雑種等が考えられるが、放射仮道管内の樹脂の保存状態が悪い試料を複雑管束亜属とした。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は基本的に仮道管のみで構成されるが、一部の試料で傷害樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

なお、S番号9.72の2点は、樹脂道を持たず、放射柔細胞の垂直壁にじゅず状の肥厚が認められることから、モミ属またはツガ属であることは明らかである。仮道管の早材部から晩材部への移行の状況や観察した範囲で放射仮道管が観察できなかったことからモミ属に近いが、ツガ属の可能性も残るためモミ属近似種とした。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。一部の試料で傷害樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い試料が多い。樹脂細胞は晩材部の年輪界付近に認められるが、顕著ではなく、観察した範囲で全く認められない試料もある。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・カラマツまたはトウヒ属 (*Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere and/or *Picea*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は柔細胞、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。放射柔細胞の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔は窓状でないことが確認できるが、保存が悪く形態の詳細は不明である。放射組織は単列、1~15細胞高。

カラマツまたはトウヒ属であるが、分野壁孔の形態や放射仮道管の有縁壁孔の形態などが観察できなかったため、両者を分けることができず、カラマツまたはトウヒ属とした。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1~5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~10細胞高。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・カバノキ属 (*Betula*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状~交互状に配列する。

放射組織は同性、1~3細胞幅、1~30細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。

道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状~交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~40細胞高のものと集合放射組織とがある。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。

道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~30細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。

放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。

道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・スタジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は接線方向に疎な3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~5細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

S番号	R番号	取上番号	出上部位	遺物名	時期	樹種	備考
1	142-1		水路	密杭	古墳時代中期	ツガ属	
2	142-2		水路	丸杭	古墳時代中期	モミ属	
3	143-1		水路	密材	古墳時代中期	カラマツまたはトウヒ属	
4	143-2		水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
5	143-3		水路	密材	古墳時代中期	スダシイ	
6	143-4		水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
7	143-5		水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
8	143-6		水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
9	143-7		水路	丸杭	古墳時代中期	モミ属近似種	
10	143-10		水路	丸材	古墳時代中期	スダシイ	
11	143-13		水路	密板	古墳時代中期	コウヤマキ	
12	143-14		水路	密板	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
13	143-15		水路	角材	古墳時代中期	マツ属椎輪管束亜属	
14	259-3		水路	角材	古墳時代中期	ツガ属	
15	268-1		水路	丸材	古墳時代中期	カヤ	
16	268-3		水路	密材	古墳時代中期	カヤ	
17	268-4		水路	密杭	古墳時代中期	ツガ属	
18	268-5		水路	密材	古墳時代中期	クマシデ属イヌシデ節	
19	269-1		水路	丸材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
20	269-3		水路	密材	古墳時代中期	カヤ	
21	269-4		水路	密材	古墳時代中期	マツ属椎輪管束亜属	
22	269-5		水路	密材	古墳時代中期	モミ属	
23	269-6		水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
24	269-7		水路	角材	古墳時代中期	ツガ属	
25	269-8		水路	密杭	古墳時代中期	ムクノキ	
26	269-9		水路	密材	古墳時代中期	ヒノキ	
27	269-11		水路	密材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
28	269-14		水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
29	269-15		水路	密材	古墳時代中期	ヒノキ	
30	281-1		水路	丸材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
31	282-2	C-②-2	水路	角材	古墳時代中期	クマシデ属イヌシデ節	
32	282-3	C-②-3	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
33	283-1	C-③-1	水路	密材	古墳時代中期	クマシデ属イヌシデ節	
34	283-2	C-③-2	水路	密材	古墳時代中期	アサダ	
35	283-3	C-③-3	水路	丸材	古墳時代中期	アカマツ	
36	283-4	C-③-4	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
37	283-5	C-③-5	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
38	283-6	C-③-6	水路	密材	古墳時代中期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
39	283-7	C-③-7	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
40	283-8	C-③-8	水路	密材	古墳時代中期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
41	283-9	C-③-9	水路	密材	古墳時代中期	カヤ	
42	283-10	C-③-10	水路	密材	古墳時代中期	ヒノキ	
43	284-1	C-④	水路	丸材	古墳時代中期	ツガ属	
44	285-1	C-⑤	水路	密材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
45	286-4	C-⑥-4	水路	密材	古墳時代中期	モミ属	
46	286-9	C-⑥-9	水路	丸材	古墳時代中期	カヤ	
47	286-10	C-⑥-10	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
48	286-11	C-⑥-11	水路	密材	古墳時代中期	モミ属	
49	286-12	C-⑥-12	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
50	286-13	C-⑥-13	水路	密材	古墳時代中期	ヒノキ科	
51	286-14	C-⑥-14	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
52	286-15	C-⑥-15	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
53	286-16	C-⑥-16	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
54	286-17	C-⑥-17	水路	密材	古墳時代中期	サクラ属	
55	286-18	C-⑥-18	水路	密材	古墳時代中期	サクラ属	
56	287-1	C-⑦-1	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
57	287-4	C-⑦-4	水路	丸棒	古墳時代中期	スイカズラ属	
58	287-5	C-⑦-5	水路	密材	古墳時代中期	カラマツまたはトウヒ属	
59	287-7	C-⑦-7	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
60	288-1	C-⑧-1	水路	密材	古墳時代中期	クマシデ属イヌシデ節	
61	288-2	C-⑧-2	水路	密材	古墳時代中期	カヤ	
62	289-1	C-⑨-1	水路	密材	古墳時代中期	アサダ	
63	289-2	C-⑨-2	水路	密材	古墳時代中期	アサダ	
64	289-3	C-⑨-3	水路	密材	古墳時代中期	ツガ属	
65	290-1	C-⑩-1	水路	割矢板	古墳時代中期	広葉樹	
66	291-4	C-⑩-4	水路	割矢板	古墳時代中期	ツガ属	
67	291-5	C-⑩-5	水路	割矢板	古墳時代中期	モミ属	

表6 樹種同定結果 (1)

S番号	R番号	取上番号	出土層位	遺物名	時期	樹種	備考
68	291-7	C-⑩-7	水路	割欠板	古墳時代中期	ツガ属	
69	291-8	C-⑩-8	水路	割欠板	古墳時代中期	ツガ属	
70	291-9	C-⑩-9	水路	割材	古墳時代中期	コウヤマキ	
71	292-1	C-⑩-1	水路	割欠板	古墳時代中期	ツガ属	
72	292-2	C-⑩-2	水路	割杭	古墳時代中期	モミ属近似種	
73	293-2	F-①-2	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
74	293-3	F-①-3	水路	割材	古墳時代中期	ケヤキ	
75	293-4	F-①-4	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
76	293-5	F-①-5	水路	割欠板	古墳時代中期	モミ属	
77	293-6	F-①-6	水路	割欠板	古墳時代中期	モミ属	
78	293-7	F-①-7	水路	割材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
79	294-2	F-②-2	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
80	294-3	F-②-3	水路	割杭	古墳時代中期	ガマズミ属	
81	294-4	F-②-4	水路	割欠板	古墳時代中期	広葉樹	
82	294-5	F-②-5	水路	角棒	古墳時代中期	ツガ属	
83	294-6	F-②-6	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
84	294-7	F-②-7	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
85	294-8	F-②-8	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
86	294-9	F-②-9	水路	割杭	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
87	294-10	F-②-10	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
88	294-11	F-②-11	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
89	294-12	F-②-12	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
90	294-13	F-②-13	水路	割欠板	古墳時代中期	ツガ属	
91	295-4	F-③-4	水路	割欠板	古墳時代中期	ツガ属	
92	295-5	F-③-5	水路	割欠板	古墳時代中期	カバノキ属	
93	295-6	F-③-6	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
94	295-7	F-③-7	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
95	295-8	F-③-8	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
96	295-9	F-③-9	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
97	295-10	F-③-10	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
98	295-11	F-③-11	水路	割材	古墳時代中期	ウルアジサイ	
99	295-12	F-③-12	水路	角棒	古墳時代中期	マツ属擬維管束亜属	
100	295-13	F-③-13	水路	割材	古墳時代中期	マツ属擬維管束亜属	
101	295-14	F-③-14	水路	割杭	古墳時代中期	モミ属	
102	295-15	F-③-15	水路	角棒	古墳時代中期	カヤ	
103	295-16	F-③-16	水路	丸杭	古墳時代中期	アサダ	
104	296-17	F-④-17	水路	丸杭	古墳時代中期	モミ属	
105	296-2	B-①-2	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
106	296-4	B-①-4	水路	割材	古墳時代中期	カバノキ属	
107	296-6	B-①-6	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
108	296-7	B-①-7	水路	割欠板	古墳時代中期	モミ属	
109	296-8	B-①-8	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
110	297-2	B-②-2	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
111	298-2	B-③-2	水路	割材	古墳時代中期	カヤ	
112	298-3	B-③-3	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
113	298-4	B-③-4	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
114	298-10	B-③-10	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
115	299-2		水路	割欠板	古墳時代中期	マツ属擬維管束亜属	
116	299-3		水路	加工丸材	古墳時代中期	エノキ属	
117	299-4		水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
118	299-5		水路	割材	古墳時代中期	マツ属擬維管束亜属	
119	299-6		水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
120	299-7		水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
121	299-8		水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
122	299-14		水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
123	300	B-④	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
124	301-2	B-⑤-2	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
125	301-3	B-⑤-3	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
126	301-5	B-⑤-5	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
127	301-7	B-⑤-7	水路	割材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
128	301-9	B-⑤-9	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
129	301-10	B-⑤-10	水路	割材	古墳時代中期	カヤ	
130	301-12	B-⑤-12	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
131	301-13	B-⑤-13	水路	割材	古墳時代中期	コナラ属アカガシ亜属	
132	301-14	B-⑤-14	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
133	302-1	B-⑥-1	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
134	302-2	B-⑥-2	水路	割材	古墳時代中期	アサダ	

表6 樹種同定結果(2)

S番号	R番号	取上番号	出土部位	遺物名	時期	樹種	備考
135	302-3	B-⑥-3	水路	割杭	古墳時代中期	アサダ	
136	302-4	B-⑥-4	水路	割材	古墳時代中期	アサダ	
137	302-5	B-⑥-5	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
138	303-2	B-⑦-2	水路	割杭	古墳時代中期	フサザクラ	
139	303-5	B-⑦-5	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
140	303-6	B-⑦-6	水路	割杭	古墳時代中期	クマシダ属 イヌシダ属	
141	303-8	B-⑦-8	水路	割材	古墳時代中期	コナラ属 アカガシ属	
142	303-9	B-⑦-9	水路	角材	古墳時代中期	クリ	
143	303-11	B-⑦-11	水路	割材	古墳時代中期	クリ	
144	303-12	B-⑦-12	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
145	303-13	B-⑦-13	水路	割材	古墳時代中期	フサザクラ	
146	303-14	B-⑦-14	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
147	303-16	B-⑦-16	水路	割材	古墳時代中期	サカキ	
148	303-17	B-⑦-17	水路	割材	古墳時代中期	スタジイ	
149	303-19	B-⑦-19	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
150	303-21	B-⑦-21	水路	割材	古墳時代中期	ヒノキ科	
151	303-22	B-⑦-22	水路	割材	古墳時代中期	クリ	
152	303-23	B-⑦-23	水路	割材	古墳時代中期	クリ	
153	303-24	B-⑦-24	水路	割材	古墳時代中期	クリ	
154	303-25	B-⑦-25	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
155	303-27	B-⑦-27	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
156	303-28	B-⑦-28	水路	角棒	古墳時代中期	スタジイ	
157	303-29	B-⑦-29	水路	角棒	古墳時代中期	クリ	
158	304-5	B-⑧-5	水路	割材	古墳時代中期	ヒノキ	
159	305-2	B-⑨-2	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
160	305-5	B-⑨-5	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
161	305-6	B-⑨-6	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
162	305-7	B-⑨-7	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
163	307-1	A-②-1	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
164	307-2	A-②-2	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
165	307-3	A-②-3	水路	割材	古墳時代中期	スタジイ	
166	307-4	A-②-4	水路	割材	古墳時代中期	スタジイ	
167	308-1	A-③-1	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
168	308-2	A-③-2	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
169	309-8	E-②-8	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
170	309-9	E-②-9	水路	割材	古墳時代中期	ヒノキ	
171	309-10	E-②-10	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
172	309-11	E-②-11	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
173	309-12	E-②-12	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
174	310-2	E-③-2	水路	割矢板	古墳時代中期	ツガ属	
175	310-3	E-③-3	水路	丸材	古墳時代中期	ケヤキ	
176	310-4	E-③-4	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
177	310-5	E-③-5	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
178	310-6	E-③-6	水路	割材	古墳時代中期	シラキ近似種	
179	310-7	E-③-7	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
180	310-8	E-③-8	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
181	310-9	E-③-9	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
182	310-10	E-③-10	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
183	310-11	E-③-11	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
184	310-12	E-③-12	水路	割材	古墳時代中期	カバノキ属	
185	310-17	E-③-17	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
186	312-2	E-⑤-2	水路	割杭	古墳時代中期	ツガ属	
187	312-3	E-⑤-3	水路	割矢板	古墳時代中期	モミ属	
188	312-4	E-⑤-4	水路	割材	古墳時代中期	アサダ	
189	312-5	E-⑤-5	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
190	312-6	E-⑤-6	水路	割材	古墳時代中期	ケヤキ	
191	312-7	E-⑤-7	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
192	312-8	E-⑤-8	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
193	312-9	E-⑤-9	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
194	312-13	E-⑤-13	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
195	312-16	E-⑤-16	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
196	312-19	E-⑤-19	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
197	312-21	E-⑤-21	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
198	313-2	E-⑥-2	水路	割板	古墳時代中期	モミ属	
199	313-3	E-⑥-3	水路	割矢板	古墳時代中期	モミ属	
200	313-4	E-⑥-4	水路	割矢板	古墳時代中期	モミ属	
201	313-5	E-⑥-5	水路	割杭	古墳時代中期	カヤ	

表6 樹種同定結果 (3)

S番号	R番号	取上番号	出土層位	遺物名	時期	樹種	備考
202	313-6	E-(6)-6	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
203	313-8	E-(6)-8	水路	丸材	古墳時代中期	タニウツギ属	
204	313-9	E-(6)-9	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
205	313-10	E-(6)-10	水路	割材	古墳時代中期	マツ属 複維管束亜属	
206	313-11	E-(6)-11	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
207	313-12	E-(6)-12	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
208	313-13	E-(6)-13	水路	割材	古墳時代中期	マツ属 複維管束亜属	
209	313-14	E-(6)-14	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
210	313-15	E-(6)-15	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
211	313-16	E-(6)-16	水路	割板	古墳時代中期	樹皮	
212	313-17	E-(6)-17	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
213	313-18	E-(6)-18	水路	割材	古墳時代中期	カバノキ属	
214	313-19	E-(6)-19	水路	割材	古墳時代中期	ヒノキ	
215	313-20	E-(6)-20	水路	割材	古墳時代中期	カヤ	
216	313-21	E-(6)-21	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
217	314	E-(7)	水路	割矢板	古墳時代中期	ツガ属	
218	315-2	E-(8)-2	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
219	315-3	E-(8)-3	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
220	315-4	E-(8)-4	水路	割材	古墳時代中期	タミ属	
221	315-6	E-(8)-6	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
222	315-9	E-(8)-9	水路	割材	古墳時代中期	コナラ属 アカガシ亜属	
223	315-11	E-(8)-11	水路	割材	古墳時代中期	マツ属 複維管束亜属	
224	315-14	E-(8)-14	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
225	315-16	E-(8)-16	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
226	315-18	E-(8)-18	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
227	316-2	E-(9)-2	水路	割板	古墳時代中期	ヤマグルマ	
228	316-3	E-(9)-3	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
229	316-4	E-(9)-4	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
230	316-5	E-(9)-5	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
231	316-6	E-(9)-6	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
232	316-7	E-(9)-7	水路	割材	古墳時代中期	マツ属 複維管束亜属	
233	316-8	E-(9)-8	水路	割材	古墳時代中期	コナラ属 アカガシ亜属	
234	316-9	E-(9)-9	水路	割材	古墳時代中期	タニウツギ属	
235	317-1	D-(1)-1	水路	割矢板	古墳時代中期	カヤ	
236	317-2	D-(1)-2	水路	割矢板	古墳時代中期	モミ属	
237	318-4	D-(2)-4	水路	割板	古墳時代中期	ツガ属	
238	318-11	D-(2)-11	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
239	318-12	D-(2)-12	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
240	318-13	D-(2)-13	水路	割材	古墳時代中期	マツ属 複維管束亜属	
241	318-14	D-(2)-14	水路	割材	古墳時代中期	カヤ	
242	319-7	D-(3)-7	水路	割材	古墳時代中期	クマヤナキ属	
243	319-8	D-(3)-8	水路	割材	古墳時代中期	ツガ属	
244	319-9	D-(3)-9	水路	割板	古墳時代中期	ヒノキ	
245	319-10	D-(3)-10	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
246	319-11	D-(3)-11	水路	割材	古墳時代中期	モミ属	
247			SB201	木材	古墳時代後期	モミ属	
2-1		R-331	SB207-4	柱根	古墳時代後期	カヤ	
2-2		R-346	SK208	加工木材	古墳時代	マツ属 複維管束亜属	
2-3		R-387	円溝内層	加工木材	古墳時代後期	マツ属 複維管束亜属	
2-4		R-346	SK208	草本?	古墳時代	広葉樹	炭化
2-5		炭化層サンプルA	SB206	炭化植物層	古墳時代後期	ノブドウ属	炭化
c-1			SB201	炭化材	古墳中期	スタジイ	
c-2			SB201	炭化材	古墳中期	コナラ属 コナラ亜属 クヌギ節	
c-3			SB201	炭化材	古墳中期	タブノキ属	

表6 樹種同定結果(4)

- ・ヤマグルマ (*Trochodendron aralioides* Sieb. et Zucc.) ヤマグルマ科ヤマグルマ属 軸方向組織は仮道管を主とし、道管要素を持たない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の仮道管壁は早材部に比較して厚くなる。仮道管内壁の壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1~8細胞幅、1~100細胞高を越えるものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。
- ・フサザクラ (*Euptelea polyandra* Sieb. et Zucc.) フサザクラ科フサザクラ属 散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った円~楕円形、単独または2~3個が複合して散在し、年輪界近くで径を減少させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状となる。放射組織は異性、1~10細胞幅、1~80細胞高。
- ・タブノキ属 (*Persea*) クスノキ科
散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2~3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。
- ・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属
散孔材で、小径の道管が単独または2~3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。
- ・ツルアジサイ (*Hydrangea petiolaris* Sieb. et Zucc.) ユキノシタ科アジサイ属
散孔材で、道管は単独または2~3個が放射方向に複合して配列し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~100細胞高以上となる。
- ・サクラ属 (*Prunus*) バラ科
散孔材で、管壁厚は中層、横断面では角張った楕円形、単独または2~6個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~30細胞高。
- ・シラキ近似種 (cf. *Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm.) トウダイグサ科シラキ属
試料は保存状態が悪く、一部収縮している。散孔材で、道管は単独または2~3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~30細胞高。散孔材で放射組織が単列となる種類の中で、上記組織に最も近い組織を有するのはシラキであるが、一部収縮するなど、組織の観察が十分でないため、近似種とした。
- ・グミ属 (*Elaeagnus*) グミ科
散孔材で、道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~10細胞幅、1~50細胞高。
グミ属は通常、孔圏部に大型の道管が配置することが多いが、ツルグミなど一部の種類では大型の道管が目立たない種類もあり、今回の試料もそうしたグミ属の可能性もある。
- ・クマヤナギ属 (*Berberchia*) クロウメモドキ科
散孔材で、道管は大径で単独または2~4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~60細胞高。
- ・ノブドウ属 (*Ampelopsis*) ブドウ科
環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外でやや急激に管径を減じた後、漸減しながら配列する。道管は単独のものが多い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1~7細胞幅、

1~100細胞高を越える。

・タニウツギ属 (Weigela) スイカズラ科

散孔材で、道管は単独または2~3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

・スイカズラ属 (Lonicera) スイカズラ科

散孔材で、小径の道管が単独または4~5個が複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

・ガズミ属 (Viburnum) スイカズラ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では円形~やや角張った楕円形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~40細胞高。

4. 考察

(1) 遺跡をとりまく森林植生について

今回分析を実施した古墳時代中期の水路埋土の花粉分析結果をみると、木本花粉化石群集ではマツ属(主に複雑管束亜属)の多産が特徴である。マツ属以外では、針葉樹のマキ属・モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属・シノキ属、落葉広葉樹のコナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属等を伴うが、概して種類構成は単調である。産出分類群の生態性をみると、アカガシ亜属・シノキ属は暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素である。針葉樹のうち、マキ属は暖温帯林に普通な要素であり、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、暖温帯要素を伴うことから、モミ・ツガ・コウヤマキ・スギなどの温帯性針葉樹に由来するものと判断される。また、落葉広葉樹の種類は暖温帯の二次林や河畔林などに普通な分類群である。このような木本花粉化石群集の産出から、古墳時代中期頃の郡家遺跡の後背地である六甲山地南麓斜面には、アカガシ亜属・シノキ属等の常緑広葉樹やモミ属、ツガ属、マツ属等の針葉樹が分布していたことが推定される。

ところで、郡家遺跡では、今回の調査区に隣接する郡家遺跡御影中町地区3次調査区でも花粉化石群集が確認されている(バリノ・サーヴェイ,1990)。その結果によると、赤生時代後期以降、古墳時代前期以前の8a層で多産していたシノキ属・アカガシ亜属が古墳時代中期の2a・3a層で減少し、逆にマツ属が増加する傾向が確認されている。両調査区における花粉化石群集は、古墳時代中期におけるマツ属花粉の増加・多産といった点で調和的といえる。ただし、古墳時代中期層準におけるマツ属花粉の産出率は、御影中町地区3次調査区で約20%、今回の調査区の図14第8層で約45%、第2層で約60%と大きく異なっている。両調査区における分析層準は、同じ古墳時代中期ながら、御影中町地区3次調査区が古土壌なす水田層、今回の調査区が水路埋土と異なっている。今回の水路埋土の第2層・第8層は、埋土の層相から、洪水性砂礫の埋積途上に静穏な堆積環境下で累重した腐植質に富む泥質堆積物と推測される。このような分析層準の堆積環境の違いが、花粉化石群集の違いに関係している可能性が高い。

以上のような御影中町地区3次調査区と今回の花粉化石群集の層位分布から、郡家遺跡周辺の森林植生は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて大きく変化し、古墳時代中期にマツ属の卓越する植生に変化したことが推定される。増加するマツ属複雑管束亜属は、瘦地でも育ち、成長が早いことから、伐採地等に先駆的に侵入し、二次林を構成する要素でもある。また、御影中町地区3次調査区では、木本花粉の占める割合が古墳時代中期にかけて減少し、林分域が縮小していることが窺える。さらに、六甲山地南麓地域の考古遺跡の花粉化石群集変遷とその分布をまとめた結果(辻ほか,2003)では、古墳時

代以降にマツ属が増加する地点が増えてくる。これらのことと、本遺跡とその周囲の考古遺跡の動態をふまえると、古墳時代中期のマツ属の増加は、人間活動による植生干渉による周辺林分の二次林化の進行を示しているものと捉えられる。また、上記した花粉化石のタフノミーに関連する分析層準の形成過程の概観から、両地点で認められたマツ属花粉の産状の差異は、堆積物の成因とそれに関係する花粉化石群集が反映する空間領域や保存状態などの違いに由来する可能性が示唆される。タフノミーに基づくと、今回得られた水路埋土の花粉化石群集は、既往の御影中町地区3次調査区の結果よりも、古墳時代中期の調査区およびその周辺の古植生をより解像度高く反映しているものと解釈される。

本遺跡周辺の考古遺跡における既往分析事例では、本遺跡東方約2kmの北青木遺跡の弥生時代～古墳時代にかけての堆積層における花粉分析結果で、マツ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科等の針葉樹とアカガシ亜属、シノキ属等の常緑広葉樹、コナラ属コナラ亜属等の落葉広葉樹が混交した森林が推定されている(新山,1999)。今回の結果は、これら既存の結果とも調和的であるようにみえるが、地形条件が異なることから、森林更新プロセスは異なっていた可能性が高い。

(2) 調査区とその近辺の古植生

ここでは、古墳時代中期の水山土壌から得られた種実遺体群、植物珪酸体群集、水路埋土の草本類を中心とした花粉化石群集、樹種同定結果から、古墳時代中期における調査区とその近辺の古植生について検討を試みる。

水路埋土の草本花粉では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等も多く認められる。これらの多くは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、その他に検出される草本類も同様の生育環境を示すものが多く認められる。

水田土壌から得られた種実遺体群では、栽培種であるイネの類の他、オモダカ科、ホタルイ属、イボクサなどの水生植物を含む草本植物が主体をなし、人里植物が主体で、本分析地点に近接する第3次調査で検出された水山や畦畔の種実遺体群に類似する(神戸市教育委員会,1990)。このような種実遺体群は、草本花粉化石群集と調和的な傾向を示す。

これらの分析結果から、古墳時代中期に調査区やその周囲では、明るく開けた草地環境で人為的攪乱の影響が強かったことが推定される。なお、畦畔北端から1個のみ確認されたキイチゴ属は、森林の林縁部などの比較的明るい林地に生育する落葉低木で、周辺域に生育していたものに由来すると思われる。

発掘調査結果をふまえると、古墳時代中期には、オモダカ科、ホタルイ属、イボクサ、ガマ属、ヨシ属といった水生植物やコブナグサ属が、地形的に低く相対的に湿潤な土壌・水文環境であった水田領域や水路部分を中心に分布していたと考えられる。微高地部分の居住域では、裸地ないしキジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、スマレ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属、タケ亜科ネザザ節、ススキ属、イチゴツナギ亜科が生育する草地であったと認識される。

一方、水路から出上った木材の樹種同定結果をみると、イヌシデ節、アサダ、クスギ節、エノキ属、ムクノキ、ケヤキ等の河畔林を構成する落葉広葉樹が多く含まれている。また、タニウツギ属、スイカズラ属、ツルアジサイ、グミ属は、林縁部等の明るい場所によく生育する。フサザクラは崩壊地に多く見られ、ヤマグルマは断崖等の険しい場所によくみられる種類である。さらに、住居跡から出土した炭化材に認められたタブノキ属は、シノキ属とともにシイ・タブ林を構成する。

これらの樹種同定結果から、古墳時代に居住域・生産域となり明るく開けた草地が成立していた調査区やその周囲をとりまく領域では、沖積扇状地上の流路沿いにイヌシデ節、アサダ、クスギ節、エノキ

属、ムクノキ、ケヤキ等の河畔林、カシ・シイ・タブなどを主体にすると思われる山麓部の森林の林縁部などにタニウツギ属、スイカズラ属、ツルアジサイ、グミ属、フサザクラ、ヤマガルマ、キイチゴ属などからなる林分が存在していたことが推定される。さらに花粉分析結果からは、沖積扇状地から山地斜面にかけて、人間による植生干渉によって、マツ林が分布拡大するような二次林化が進行していたと考えられる。

(3) 水田土壌でのイネ属珪酸体の産状

古墳時代中期の水田土壌では、短細胞珪酸体が2%程度、機動細胞珪酸体が12%前後の出現率を示す。現在の水田土壌中に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9%であるが、稲藁を堆肥として与えている水田では16%に上がるという結果が得られている(近藤1988)。今回の機動細胞珪酸体の出現率は、現代の水田耕土を対象とした調査例に近い数値であり、前述の耕作地跡よりも高い数値である。

また含量は、短細胞珪酸体が約500個/g、機動細胞珪酸体が1,500～1,700個/gであった。稲作が行われた水田跡の土壌ではイネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが多く、安定した水田稲作が行われたと推定される(杉山,2000)。御影中町地区第3次調査で検出された古墳時代中期の水田層の2a層では機動細胞珪酸体の含量が約5,600個/gであり、直下層の3a層では上位からの落込みの可能性が指摘されるものの、含量が約1,800個/gであった(古環境研究所,1990)。今回の結果は、2a層よりも少ないが、3a層と同等である。外山(2002)では、水田面のイネ属珪酸体の検出数や量が、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することを指摘している。上記した両地点のイネ属機動細胞珪酸体含量の差異については、外山(2002)の成果と関連する可能性もあり、このような観点をふまえさらに検討していくことが課題と認識される。

なお、御影中町地区第3次調査区の水田層では、ヨシ属の植物体量が多かった。今回の水路埋上では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立った。分析地点である水路は、居住域が立地する微高地上に存在しており、水田面が全域に広がる御影中町地区第3次調査区よりも乾燥した場所に近接する。本調査区における相対的なタケ亜科の多産については、このような分析地点の地形条件の差異を反映している可能性が強いと解釈される。但し、タケ亜科の植物珪酸体については、他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤,1982;杉山・藤原,1986)、他の種類よりも残留しやすいことに注意する必要がある。よって、タケ亜科植物については、分析結果で示されるほど多く分布していなかったと考えられる。

(4) 木材利用

樹種同定を実施した木材は、水路から出土した古墳時代中期の資料が大部分を占めており、他に古墳時代中期の住居跡、古墳時代後期の住居跡や周溝内から出土した資料等がある。遺構別・器種別の種類構成を表6に示す。

水路から出土した古墳時代中期の木材246点は、割材を中心に角材、角棒、加工丸材、丸杭、丸棒、割板、割杭、割矢板がある。合計30分類群が確認され、様々な種類が利用されているが、モミ属・ツガ属を中心とした針葉樹の利用が多い。広葉樹では、常緑広葉樹のアカガシ亜属、スダジイ、落葉広葉樹のアサダ、クリが比較的多い。これらの種類は、水路の堆積物を対象とした花粉分析から推定される古植生とも矛盾しない。

材質面から利用状況を見ると、割材を中心に靱性の高い針葉樹材が多く利用される一方で、重硬で

強度の高い種類（アカガシ亜属・クリ・ムクノキ・ケヤキ・サカキ）、強度は高いが割りにくいカバノキ属、アサダ、つる植物（ツルアジサイ）、大径木にならず、木材の利用も少ない種類（タニウツキ属・スイカズラ属）が認められ、様々な材質の木材が混在している。器種別にみると、割板、割杭、割材、割矢板に多く見られるモミ属・ツガ属が、丸材、丸棒などでは利用が少ないが、割材以外の器種は資料数自体が少ないこと、資料数が最も多い割材で種類数も多くなること等を考慮すると、器種による種類構成の違いは明瞭ではない。割材に多くの種類が認められることを考慮すると、割材の中でも材質などによって利用目的等が異なっている可能性がある。なお、確認された種類の中には、断崖など人間が容易に近づけないような場所に生育していることが多く、遺跡からの出土例がほとんどないヤマグルマも認められ、水路から出土した木材が様々な環境から集められたことを示す結果として注目される。

分類群 遺構・種別	古墳中期											古墳後期			古墳時代		合計
	水路											SB201	西溝内 中層	SB 206	SB 207	SK208	
	角材	角棒	加工丸材	丸杭	丸材	丸棒	割板	割杭	割材	割矢板	木材	炭化材	加工木材	炭化植物層	柱根	加工木材	
アカマツ					1												1
マツ属被藤管束亜属	1	1						1	7	1			1			1	13
モミ属				3			8	4	23	8	1						47
ツガ属	2	1			1		8	13	64	8							97
カラマツまたはトウヒ属									2								2
コウヤマキ								1	1								2
ヒノキ								1	6								7
ヒノキ科									2								2
カヤ	1				2			1	8	1					1		14
カバノキ属									3	1							4
クマシデ属イヌシデ節	1								1	3							5
アサダ					1				1	6							8
コナラ属クスギ節										2		1					3
コナラ属アカガシ亜属						2		1	1	8							12
クリ	1	1								4							6
スダジイ			1			1				4		1					7
ムクノキ									1								1
エノキ属				1													1
ケヤキ					1					2							3
ヤマグルマ								1									1
フサザクラ									1	1							2
サカキ										1							1
タブノキ属												1					1
ツルアジサイ										1							1
サクラ属										2							2
シラキ近縁種										1							1
クマヤナギ属										1							1
ゲミ属										1							1
ノブドウ													1				1
タニウツキ属						1				1							2
スイカズラ属							1										1
ガマズミ属										1							1
広葉樹											2					1	3
樹皮									1								1
合計	6	4	1	4	9	1	21	26	153	21	1	3	1	1	1	1	256

表7 遺構別器種種類構成

同じく古墳時代中期の住居跡であるSB201から出土した資料は、木材が複雑管束亜属、炭化材がクスギ節、スタジイ、タブノキ属であった。各資料の出土状況が不明であるが、これらの種類が住居内において利用されていたことが推定される。

古墳時代後期の住居跡から出土した資料のうち、SB207の柱根は針葉樹のカヤであり、強度・耐水性の高い木材を選択している。一方、SB206の炭化植物層には、つる植物のノブドウ属が認められた。今回確認したノブドウ属は径が5mm以下の細いものであり、蔓を縄等に利用できるような状況のものではない。実際に炭化物を観察した範囲では、編んでいるような痕跡は見られない。なお、炭化植物層には、ノブドウ属のほかに、組織観察ができない樹皮状の炭化物も認められ、ノブドウ属と共に他の植物素材が利用されていたことが推定される。

神戸市内では、古墳時代中期の資料について同定を行った例として、白水遺跡や玉津田中遺跡の例があるが、本遺跡周辺では同時期の資料はほとんどない。周辺の調査例をみると、本遺跡の東に約4km離れた本庄町遺跡では、弥生時代後期～古墳前期初頭とされる割材、板材、角材、丸杭、加工材に奈良い広葉樹のクスギ節、コナラ節を中心に、常緑広葉樹のアカガシ亜属、針葉樹のアカマツ、モミ属、ヒノキが利用されている（古環境研究所2003）。本庄町遺跡に近く、同じく弥生時代後期末～古墳時代初頭の杭列について樹種同定を実施した森南町遺跡では、杭にクスギ節を中心に針葉樹4種類、広葉樹9種類が確認されているが、本遺跡で多く見られたモミ属とツガ属は1点も確認されていない（三村2005）。また、東に約3km離れた小路大町遺跡の6世紀後半とされる資料のうち、杭では合計13種類が認められ、モミ属、アカマツ、クリが比較的多い（植田2003）。また、部材、板材、角材、加工材では資料数が少ないが、モミ属やコウヤマキの利用が比較的多い。

これらの木材利用状況を見ると、本遺跡の水路から出土した木材と確認されている種類に大きな違いは無いが、モミ属・ツガ属の利用状況が多少異なるようである。一方、本庄町遺跡に近い深江北町遺跡から出土した奈良～平安時代の木製品にはヒノキの利用が多いが、モミ属の利用は少なく、ツガ属については1点も確認されていない（松葉2002）。本遺跡の資料でもヒノキは確認されているが、ヒノキ料を含めても9点程度で全体に占める割合は低く、古墳時代中期の段階ではヒノキ材を大量に利用していなかったことが推定される。

5. 小結

- ・古墳時代中期に、郡家遺跡の後背地の六甲山地南麓斜面では、アカガシ亜属・シイノキ属等の常緑広葉樹やモミ属、ツガ属、マツ属等の針葉樹を主体とする森林が成立していた。
- ・弥生時代後期頃以降、古墳時代中期には、沖積扇状地から山地斜面にかけて、人間による植生干渉によって、マツ林が分布拡大するような二次林化が進行していたと推定された。
- ・古墳時代中期の調査区やその周囲では、地形的に低く相対的に湿潤な土壌・水文環境であった水田領域や水路部分で、オモダカ科、ホタルイ属、イボクサ、ガマ属、ヨシ属といった水生植物やコブナグサ属が、微高地部分の居住域で、裸地ないしキジムシロ属～ヘビイチゴ属～オランダイチゴ属、スミレ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属、タケ亜科ネザサ節、ススキ属、イチゴツナギ亜科が生育する開けた明るい草地ないし裸地が展開していた。
- ・調査区やその周囲をとりまく領域では、古墳時代中期に、沖積扇状地上の流路沿いにイヌシデ節、アサゲ、クスギ節、エノキ属、ムクノキ、ケヤキ等の河畔林、カシ・シイ・タブなどを主体にすると思われる山麓部の森林の林縁部などにタニウツギ属、スイカズラ属、ツルアジサイ、グミ属、フサザクラ、ヤマグルマ、イチゴ属などからなる林分が存在していたことが推定された。

- ・古墳時代中期の水路から検出された木製品では、モミ属・ツガ属を中心とした針葉樹の利用が多いが、重硬で強度の高い種類（アカガシ亜属・クリ・ムクノキ・ケヤキ・サカキ）、強度は高いが割りにくいカバノキ属、アサダ、つる植物（ツルアジサイ）、大径木にならず、木材の利用も少ない種類（タニウツギ属・スイカズラ属）などの様々な材質の木材が混在していた。
- ・古墳時代中期の住居跡のSB201から出土した資料では、木材がマツ属縦管束亜属、炭化材がクスギ節、スタジイ、タブノキ属であった。
- ・古墳時代後期では、住居跡のSB207の柱根は針葉樹のカヤであった。一方、SB206の炭化植物層には、つる植物のノブドウ属が認められた。

(引用文献)

- 林 昭三.1991.日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 石川 茂雄.1994.原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会.328p.
- 伊東 隆夫.1993.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81-181.
- 伊東 隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66-176.
- 伊東 隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83-201.
- 伊東 隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料.34.京都大学木質科学研究所.30-166.
- 伊東 隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料.35.京都大学木質科学研究所.47-216.
- 古環境研究所.1990.プラント・オブール分析.那家遺跡 神戸市東灘区所在御影中町地区第3次調査概報.神戸市教育委員会.53-58.
- 古環境研究所.2003.樹種同定.「本庄町遺跡 第9次調査 発掘調査報告書」.神戸市教育委員会.43-49.
- 近藤 鎌三.1982.Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書.32p.
- 近藤 鎌三.1988.十二遺跡十境の植物微体分析.鑄師屋遺跡群「一遺跡-長野黒北佐久郡御代田町「一遺跡発掘調査報告書」.御代田町教育委員会.377-383.
- 近藤 鎌三.2004.植物ケイ酸体研究.ベドログスト.48.46-64.
- 神戸市教育委員会.1990.那家遺跡 神戸市東灘区所在 御影中町地区第3次調査概報.神戸市教育委員会.88p.
- 松葉 礼子.2002.深江北町遺跡第9次調査 出土した木製品の樹種同定.「深江北町遺跡 第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書 - 葦垣野家関連遺跡の調査-」.神戸市教育委員会.107-134.
- 三村 昌史.2005.森南町遺跡第1次調査出土木材の樹種.「森南町遺跡発掘調査報告書 - 第1・2調査-」.神戸国際港都建設事業 森南第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う-.神戸市教育委員会.85-98.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志.2000.日本植物種子図鑑.東北大学出版会.642p.
- 新山 雅弘.1999.北青木遺跡の花粉化石群集.北青木遺跡発掘調査報告書- 第3次調査-.神戸市教育委員会.105-111.
- バリノ・サーヴェイ株式会社.1990.花粉分析.那家遺跡 神戸市東灘区所在 御影中町地区第3次調査概報.神戸市教育委員会.59-65.
- バリノ・サーヴェイ株式会社.2003.津知遺跡第142地点発掘調査に伴う自然科学分析.「芦屋市文化財調査報告書第46集 津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書.芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果」.芦屋市教育委員会.121-152.
- Richter I.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E.(編).2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・森井 智之・佐野 雄二・安部 久・内海 泰弘（日本誌版監修）.海青社.70p. [Richter I.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

杉山 真二,2000,植物柱胞体(プラント・オパール).辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.

杉山 真二・藤原 宏志,1986,機動細胞柱胞体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-,考古学と自然科学,19,69-84.

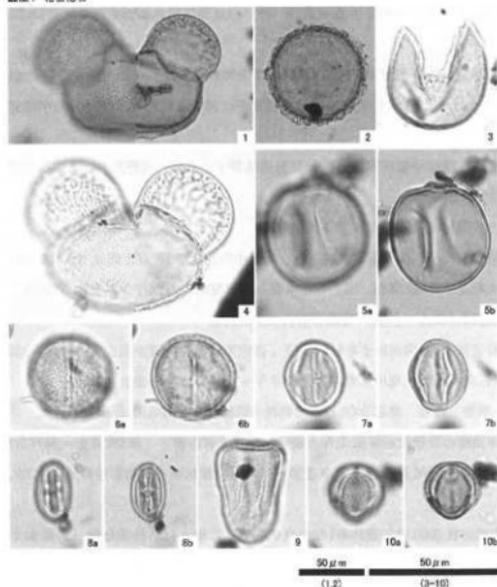
外山 秀一,2002,池島・福万寺遺跡の立地と環境,「池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区)一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編」,(財)大阪府文化財センター-A11-429.

辻 康男・矢作 健二・辻本 祐也・田中 義文,2003,芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析,「寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書-集落東端部の様相と知見」,芦屋市教育委員会,135-163.

植田 弥生,2003,小路大町遺跡出土木製品・自然木の樹種同定,「小路大町遺跡 第4次調査 発掘調査報告書」,神戸市教育委員会,45-59.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト,伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

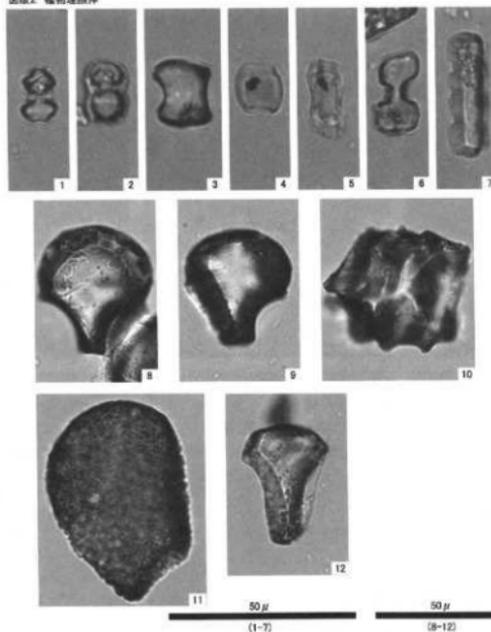
図版1 花粉化石



- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. モミ属(水路,第2層) | 2. ツガ属(水路,第8層) |
| 3. スギ属(水路,第2層) | 4. マツ属(水路,第2層) |
| 5. イナホ属(水路,第3層) | 6. コナラ属(水路,第2層) |
| 7. コナラ属アガシ基属(水路,第2層) | 8. シイノキ属(水路,第8層) |
| 9. カヤツリグサ科(水路,第8層) | 10. シモキ属(水路,第8層) |

挿図写真1 花粉化石

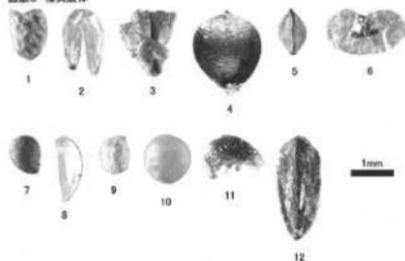
図版2 植物珪酸体



- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) | 2. イネ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -2) |
| 3. ネザサ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) |
| 5. コブツグサ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -2) | 6. ススキ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) |
| 7. イグコツナキ三科短細胞珪酸体(水田土壌 α -2) | 8. イネ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) |
| 9. イネ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -2) | 10. ネザサ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) |
| 11. ヨシ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) | 12. ウシクサ属短細胞珪酸体(水田土壌 α -1) |

挿図写真2 植物珪酸体

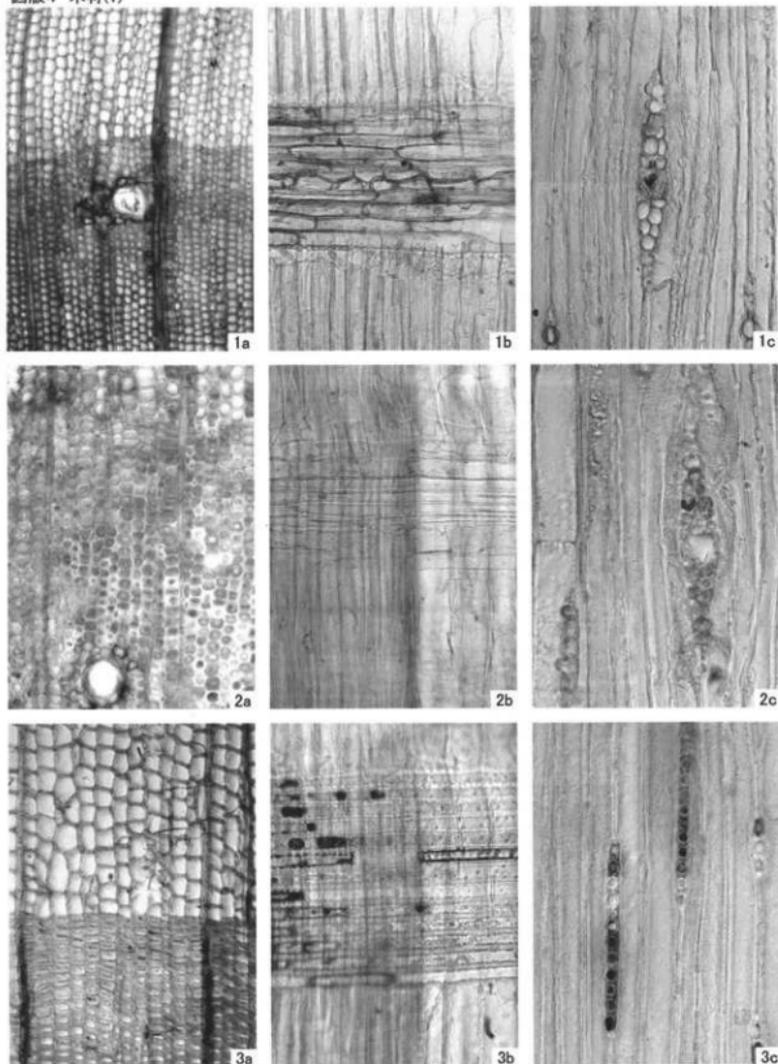
図版3 種実遺体



- | | |
|------------------------------------------------|----------------------------------|
| 1. キイチゴ属 核(α -2次陸群北域) | 2. オメガカ科 種子(α -1水田古墳遺跡群) |
| 3. イネ 籾(α -2次陸群北域) | 4. ホタルイ属 果実(α -2次陸群北域) |
| 5. カヤツリグサ科 果実(α -2次陸群北域) | 6. イボクサ 種子(α -2次陸群北域) |
| 7. キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 核(α -2次陸群北域) | 8. スズメ 種子(α -2次陸群北域) |
| 9. スズメ 種子(α -2次陸群北域) | 9. ナツグサ属 果実(α -2次陸群北域) |
| 10. イヌコウジュ属 果実(α -2次陸群北域) | 11. ナス科 種子(α -2次陸群北域) |
| 12. キ科 果実(α -2次陸群北域) | |

挿図写真3 種実遺体

図版4 木材(1)

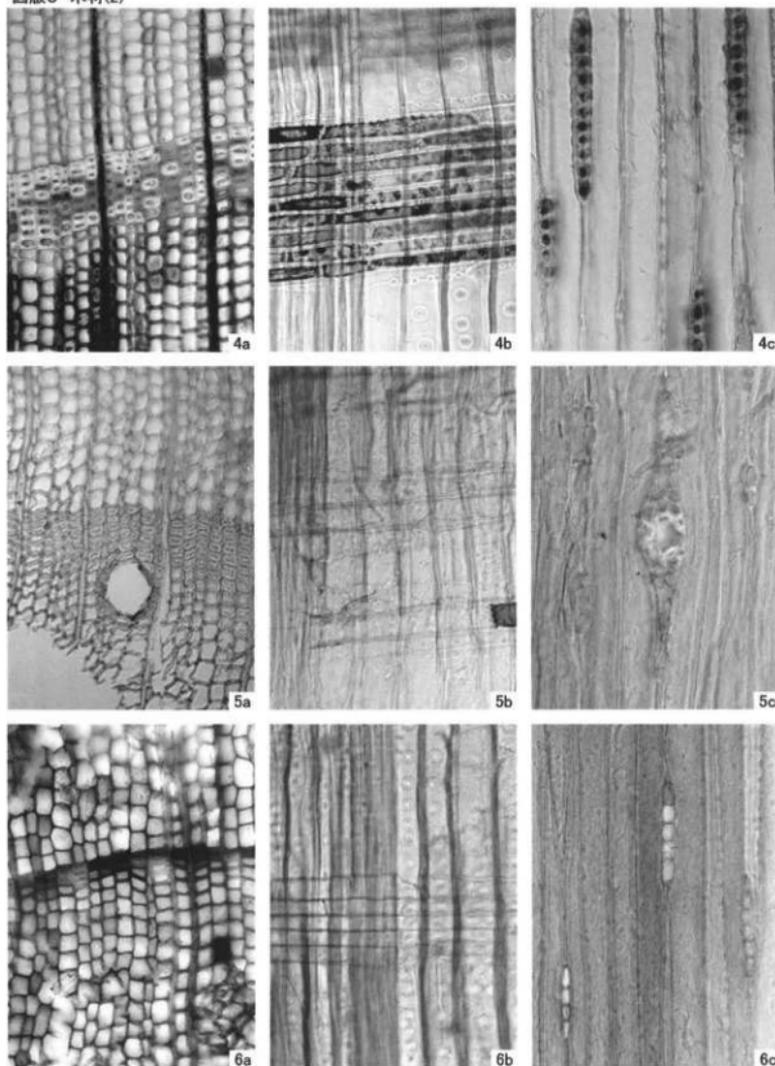


1. アカマツ(S番号35)
 2. マツ属複維管束亜属(S番号13)
 3. モミ属(S番号96)
- a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m a
100 μ m b, c

挿図写真4 木材(1)

図版5 木材(2)

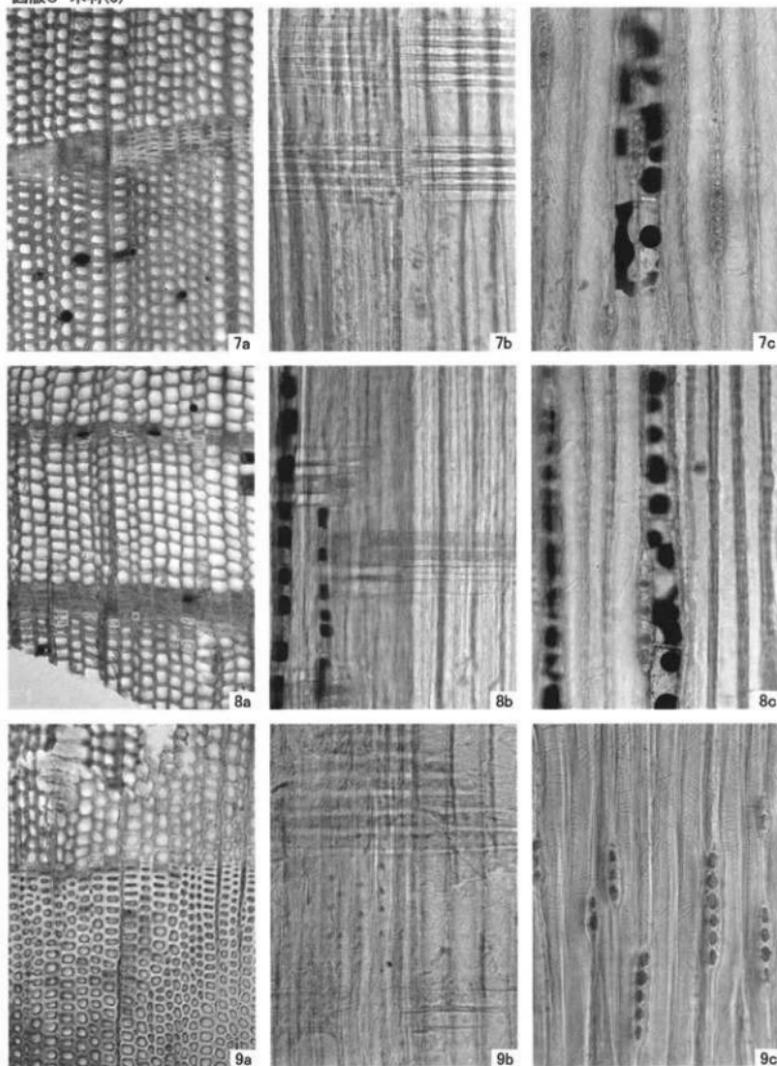


4. ツガ属 (S番号87)
 5. カラマツまたはトウヒ属 (S番号58)
 6. コウヤマキ (S番号70)
 a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m
 100 μ m b,c

挿図写真5 木材(2)

図版6 木材(3)



7. ヒノキ(S番号26)

8. ヒノキ科(S番号150)

9. カヤ(S番号15)

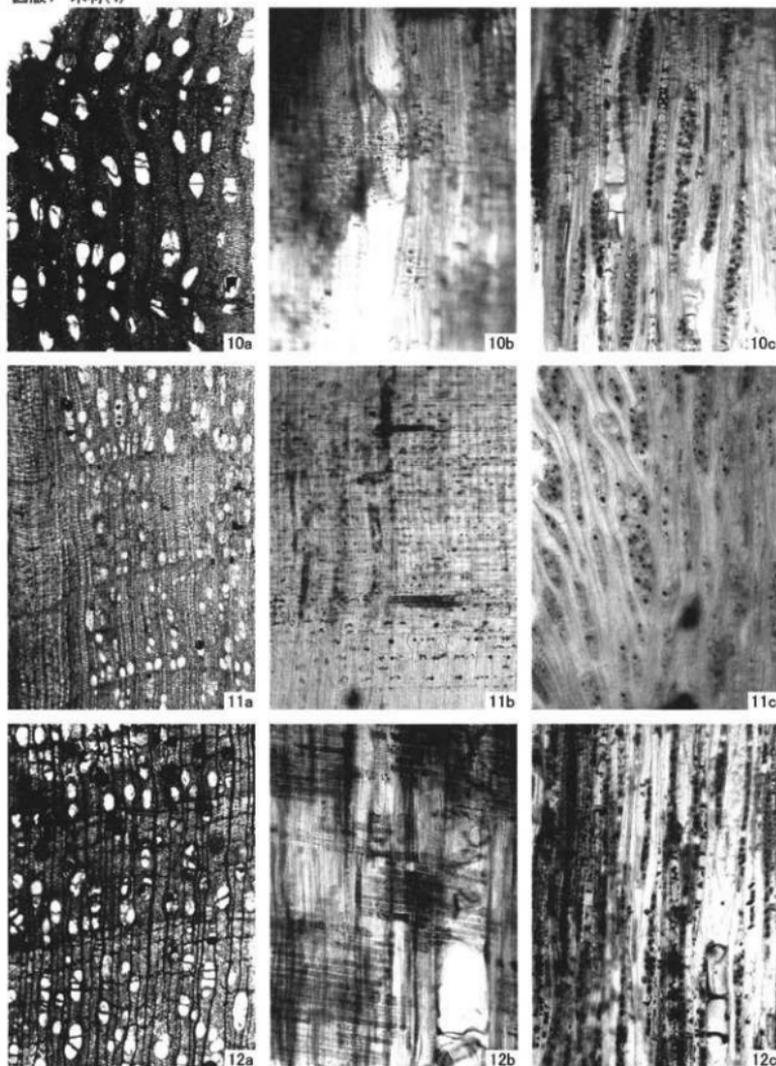
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m a

100 μ m b, c

挿図写真6 木材(3)

図版7 木材(4)



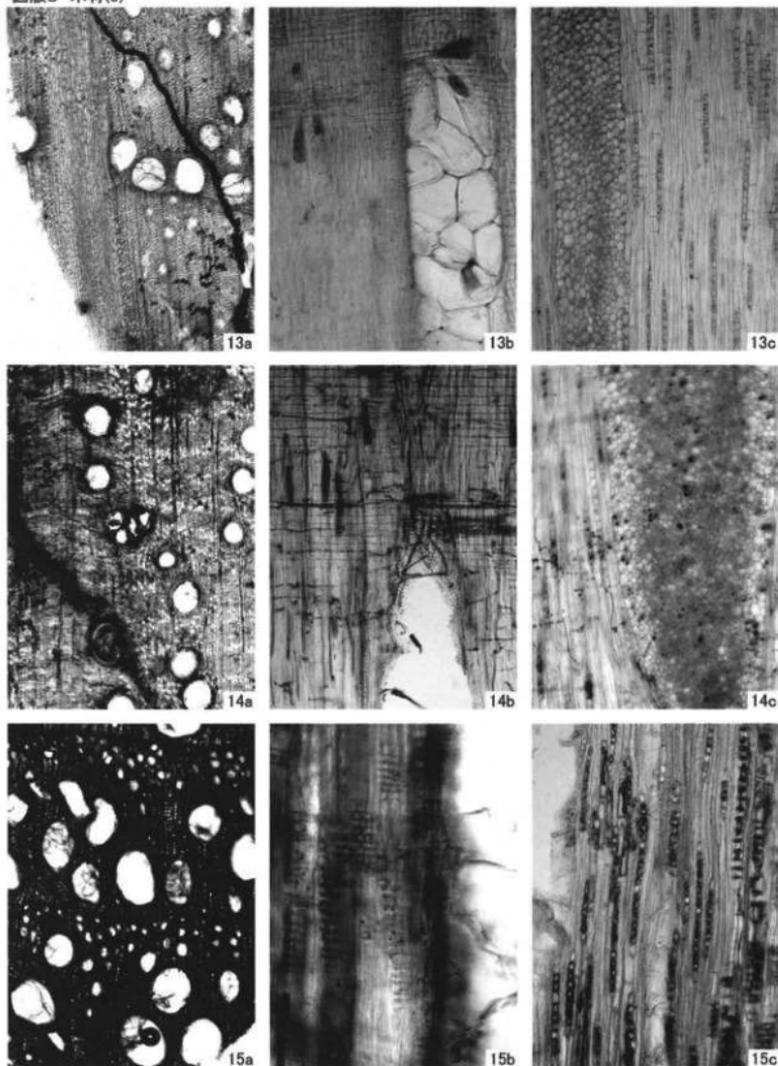
10. カバノキ属 (S番号213)
 11. クマシデ属イヌシデ節 (S番号81)
 12. アサダ (S番号134)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

300 μ ma
 200 μ mb,c

挿図写真7 木材 (4)

図版8 木材(5)



13. コナラ属コナラ亜属クスギ節(S番号40)

14. コナラ属アカガシ亜属(S番号44)

15. クリ(S番号151)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

300 μ m a
200 μ m b, c

挿図写真8 木材(5)

図版9 木材(6)



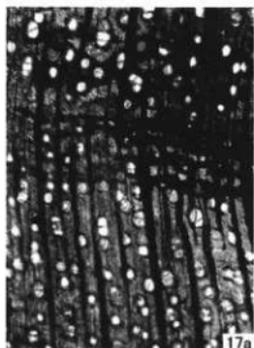
16a



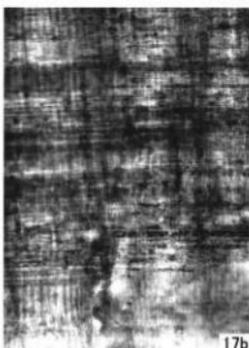
16b



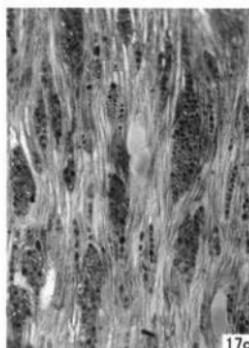
16c



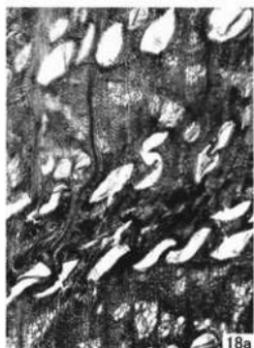
17a



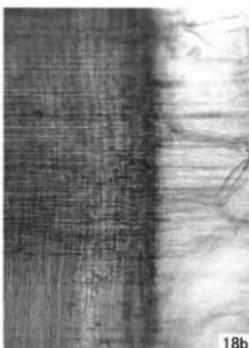
17b



17c



18a



18b



18c

16. スダジイ(S番号10)

17. ムクノキ(S番号25)

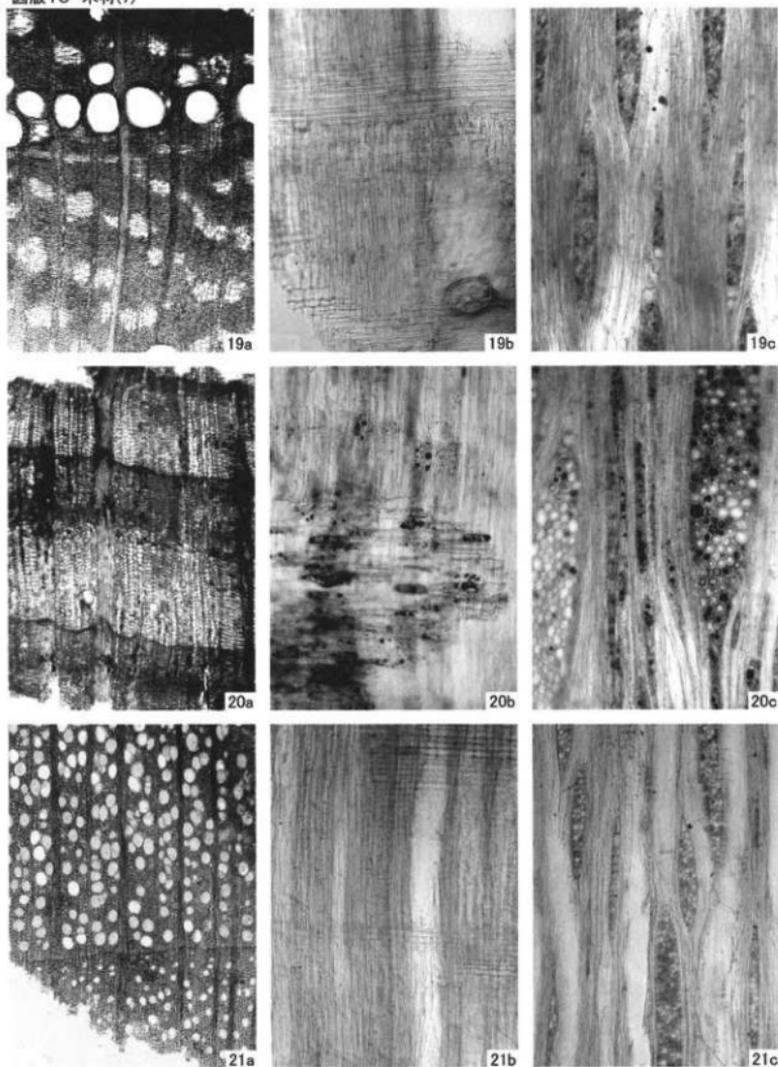
18. エノキ属(S番号116)

a:木口, b:柁目, c:板目

 300 μ m a
 200 μ m b, c

挿図写真9 木材(6)

図版10 木材(7)

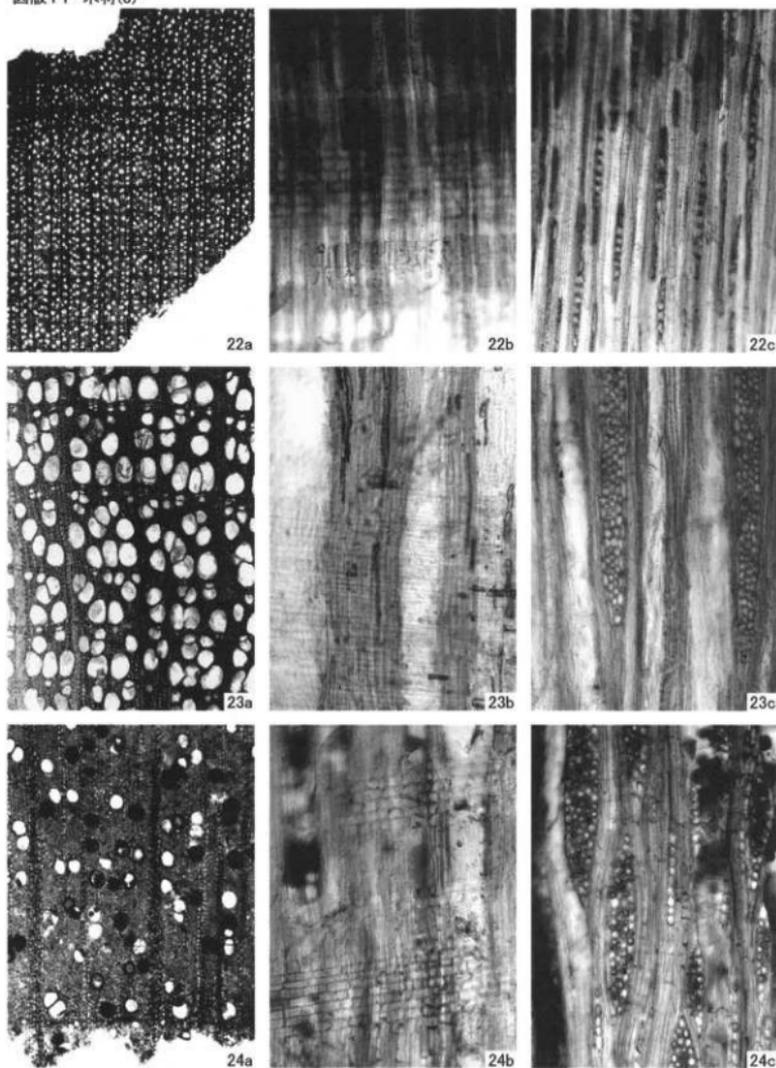


19. ケヤキ(S番号190)
 20. ヤマグルマ(S番号227)
 21. フサザクラ(S番号138)
 a:木口, b:径目, c:板目

300 μm a
 200 μm b,c

挿図写真10 木材 (7)

図版11 木材(8)



22. サカキ(S番号147)

23. ツルアジサイ(S番号98)

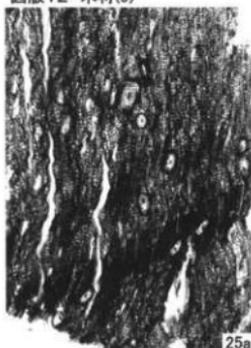
24. サクラ属(S番号55)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

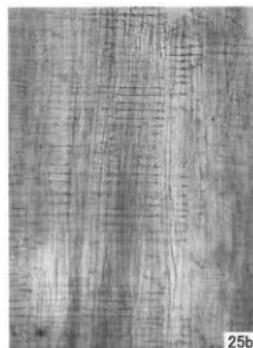
300 μ m a200 μ m b,c

挿図写真11 木材(8)

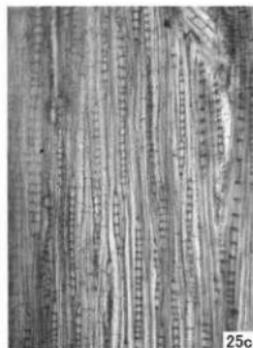
図版12 木材(9)



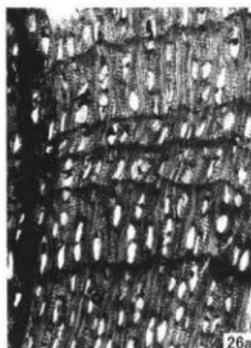
25a



25b



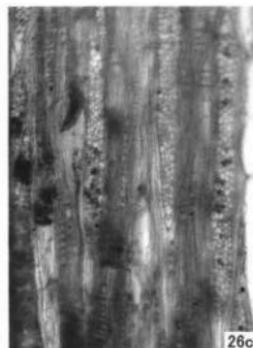
25c



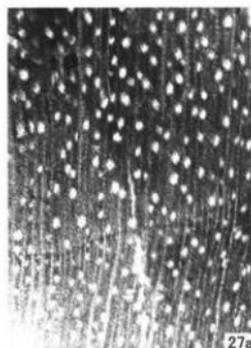
26a



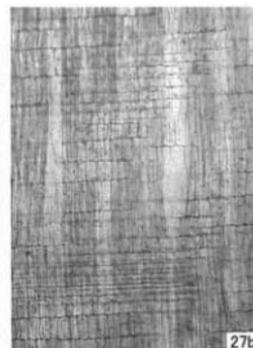
26b



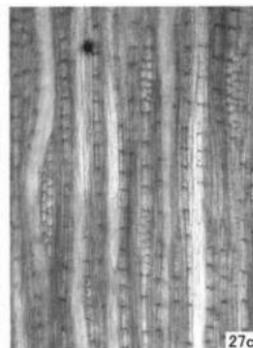
26c



27a



27b



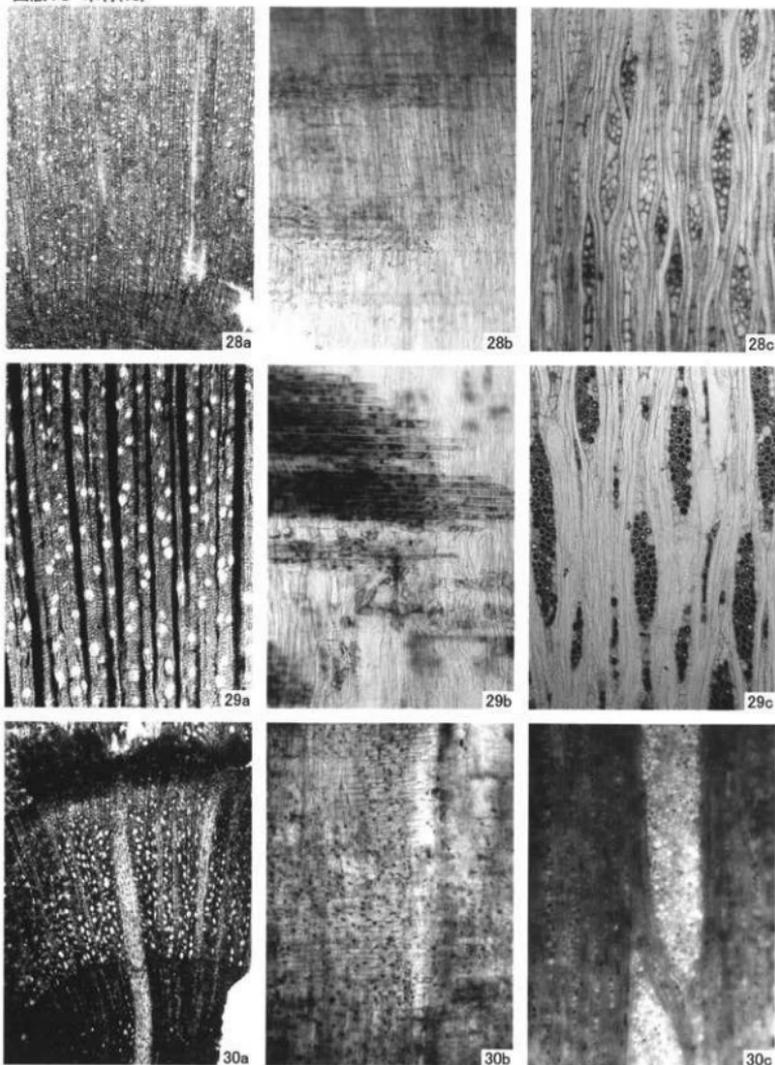
27c

25. シラキ近似種 (S番号178)
 26. クマヤナギ属 (S番号242)
 27. タニウツギ属 (S番号234)
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

300 μ ma
 200 μ mb,c

挿図写真12 木材 (9)

図版13 木材(10)



28. スイカズラ属 (S番号57)

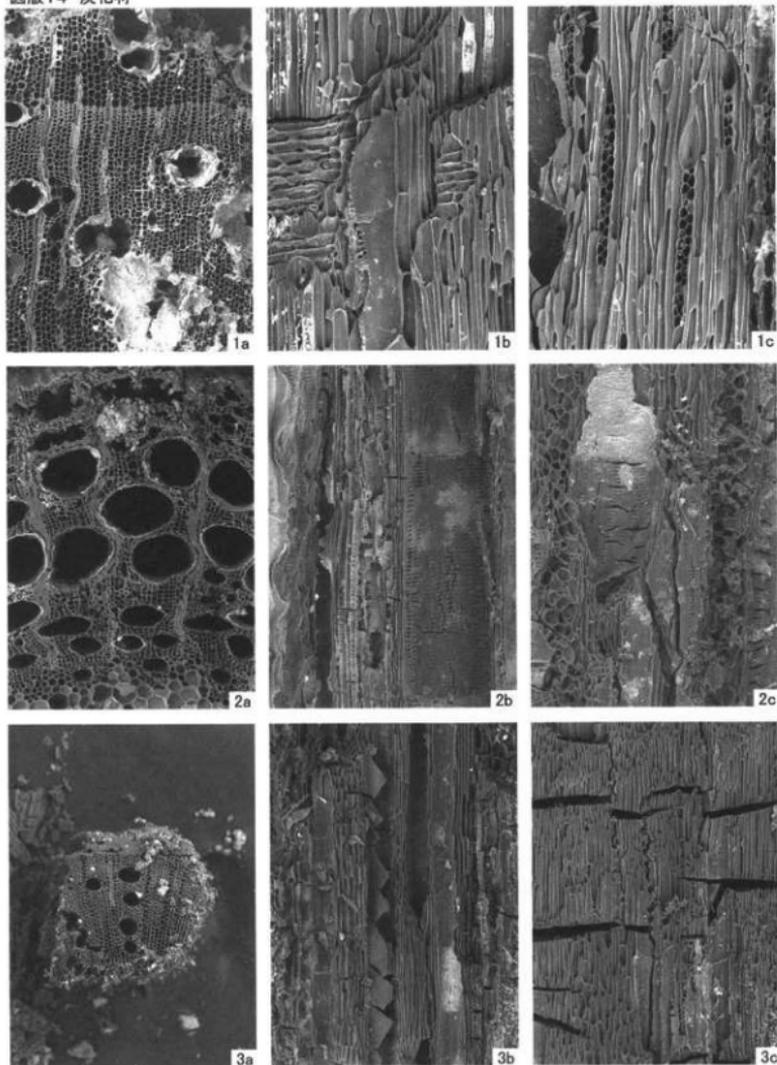
29. ガマズミ属 (S番号80)

30. グミ属 (S番号220)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

挿図写真13 木材 (10)

図版14 炭化材



1. タブノキ属(サンプル番号C-3)
 2. ノドウ属(サンプル番号2-5)
 3. 広葉樹(サンプル番号2-4)
- a.木口,b.柁目,c.板目

200 μ m a
200 μ m b,c

挿図写真14 炭化材

第7章 結語

1. 一括出土資料に見る六甲南麓古墳時代土師器の様相

(1) はじめに

前章までに見たように、本調査区第2遺構面からは土師器を中心とした良好な一括出土資料が得られた。本調査区の資料は、当該時期の土師器の一括資料としては、神戸市域で見出されたものとしてはもっとも良好かつ量的にまとまりがあるといつてよい。

これらの土師器は既存の編年にてらして、おおむね①弥生時代末（弥生Ⅵ様式）②古墳時代初頭（布留Ⅰ様式）③古墳時代中期の3時期のどこかに当てはまるものと考えられ、連続した時間軸の中で、一定の変化を追うこともある程度可能であると考えられる。

すなわち六甲南麓地域における古墳時代前期・中期の土師器のあり方とその変化の一端が本調査区出土一括資料に現れていると考えてよいだろう。その一方で、これら一括資料について、とくにその様式について考えるとき出土遺構の属性が問題となる。

一括資料の大半は土坑、あるいは住居址のどちらかから出土しているが、竪穴建物202から出土したものに顕著なように、住人が生活していた当時の、日常の痕跡を明瞭にとどめた一括資料と、次第で詳述するように日常生活とは少しかけ離れた状況で構築された可能性が高い土坑から出土した資料との間で、その様式差を単純に比較することは果たして可能かという疑問が生じる。

おそらく本調査区における土坑出土一括資料は、大半が何らかの意図にそって選択・投棄された複数の土師器の集合体である。その「何らか意図」を今単純に「祭祀行為」と断定することが適切かは別として、竪穴建物202に残されたような、偶然地下に封印された、日常生活に伴う遺物の集合とは異なる組成をもつ可能性が高い。

したがって、同じ調査区から出土した一括資料同士とはいえ、異なる属性をもつ土坑出土資料と住居址出土資料との比較によって、土師器組成の時間的な変化をストレートに読み取ることは難しいと考えている。

また、本論は六甲南麓地域における古墳時代土師器の編年を提案することが目的でもないことをあらかじめ明言しておく。

遺跡のしかもごく限られた調査範囲からの一括資料を持って、編年作業を試みるほどに著者の力量が卓越していないことがその最大の原因だが、ここでは一括資料同士の型式間の時間的前後関係の追及に重点を置くこともしていない。

本論でも既存の編年にそってある程度時系列順に一括資料ごとに羅列してはいるが、編年案とはあくまでも複数の遺跡における資料の積み重ねから得られるものである。

表題が示すとおり、本論は、六甲南麓のある遺跡のある調査区から出土した土師器群の、「廃棄の同時性」に基づいた各単位ごとの様相を描き出したに過ぎない。

なお、本論の作成に当たっては、既存の編年案として、古墳時代前期土師器編年については寺沢案³⁵⁾、古墳時代中期土師器編年に関しては辻美紀の案を参考としている³⁶⁾。須恵器編年に関しては、田辺編年³⁷⁾によっている³⁸⁾。六甲南麓地域、とくに神戸市域における弥生時代末～古墳時代初頭の編年案としては、黒田恭正の弥生時代Ⅴ様式～布留式併行期の案をベースにしている³⁹⁾。

また、本論では様式をとらえる作業の上ではとりえず寛の変化を基軸として据えている。ただし古墳時代前期および古墳時代中期との間には、須恵器の登場をもって土師器の器種構成が明確に変化する画

期が存在する。今回の調査地ではこの両期を跨いで集落が営まれていたため、個別の事象を日の当たりにした時、かならずしも甕が善種とはならない場合もあり、さらに以下に述べる型式分類から逸脱する個性的な器種も時に現れることをあらかじめ踏まえておくこととしたい。

(2) 土師器の形式および型式

a. 甕

本調査地で出土した一括資料のうち、量の多寡を問わなければ土師器甕はほぼ上記の3つの時代を通して共通に出土する形式といってよい。ただし須恵器登場以前と以降の古墳時代中期甕とでは大きく様相が異なる。

須恵器登場以前の甕は多彩で個性的なバリエーションに富み、細やかな調整技法が駆使され、口縁部の形態も豊富であるが、須恵器登場以降の土師器甕は画一的で無個性である。ここでその違いを指摘するのは両者の優劣を小唆したいのではなく、社会が土師器にあたえる意味が須恵器の登場によって完全に变化したことの現れであると考えられるからである。

本調査区出土の甕は、須恵器登場以前はその系譜ごとにⅠ弥生系甕・Ⅱ庄内系甕・Ⅲ布留系甕の3つに大別できる。この分類は、本調査区のみならず、古くは矢部遺跡において寺沢薫によって指摘され⁶⁾、六甲南麓の古墳時代初期に、これら諸系譜の土師器甕が混在することもすでに黒田恭正らが確認しているところである⁴⁾。

これに古墳時代中期土師器甕の2つの型式を加えた5型式が本調査地出土一括資料甕の大別分類となる。なお()は口縁部形態分類を示す。この分類以外に、型式にのらないものとして他産地系の甕である近江系の受け口状口縁に粗いヨコハケを施したものや、二重口縁のものなどが存在する。

甕Ⅰ 弥生系甕

体部外面をタタキで調整する。底部は平底、ドーナツ底などで、外見的にはほとんど弥生後期様式の延長線上にある。単純くの字(a1)形口縁を基本とし、くの字の口縁部の中ほどが肥厚するもの(a2)もある。

甕Ⅱ 庄内系甕

右上がりの細いタタキで体部外面上半を、タテハケで体部外面下半を調整するものが主流である。底部は尖り底を基本とする。口縁部の形態は弥生系甕に近い単純くの字、肥厚するくの字形の他、外反する口縁部のもの(b1)、外反する口縁部の口唇部を積み上げたもの(b2)、口縁部全体が内湾するものなどがある。いわゆる「河内系庄内甕」だが、くの字の口縁部は弥生系の延長線上にあり、内湾するものは布留系の影響下にあると考えられる。内面の調整はヘラケズリを主体とするが、口縁部、肩部などにヨコハケを施すものも見られる。内面のハケも弥生系の延長線上と考えられる。

甕Ⅲ 布留系甕

球形に近い体部に、内湾する口縁部を有する。口唇部はバリエーションに富み、端面を平たく水平に仕上げるもの(c1)、端面が内傾するもの(c2)、端面が外傾するもの(c3)などがある。内面にヘラケズリを施し極端に薄い器壁に仕上げ、特に頸部内面屈曲部につよいエッジを効かせて仕上げる。外面はタテハケが主体だが、肩部にのみ横方向のハケを1～2条施すものが多い。

甕Ⅳ 長胴化系甕

上記Ⅰ～Ⅲ型式の甕が弥生時代から連続とつづく系譜の延長線上にありつつ、庄内、布留系などその時々地域性と混ざり合って生み出されてきたものであるのに比べ、この型式はその製作技法、調整な

どに隔絶の感がある。

基本形は縦に長く伸びた胴部で外面は粗いハケを全体に施し、内面はユビオサエとユビナデのみで仕上げている。そのため内面は全体に著しく凹凸し、粗製という表現がふさわしく、布留系甕の執念的なまでの精製ぶりとは対極をなす。分厚いくの字に屈曲して立ち上がり、肥厚ぎみに直線または内湾して、端面がやや内傾する口縁部（d）が基本である。

須恵器の登場とともに現れる長胴化甕は、朝鮮半島由来の「かまど」が住居内に設置されたことによる変化として従来から指摘されているもので、この型式の甕そのものが朝鮮半島にその系譜をもつという指摘がある⁷⁾。

甕Ⅴ 布留式系長胴化甕

口縁部の形態や、体部の粗い調整技法は甕Ⅳ型式の長胴化したものとまったく同じであるが、体部は短く、肩が張り、肩部から尖り気味の底部に向かって急にすはまる器形の甕である。

甕Ⅳ型式およびⅤ型式のやや内湾しながら直線的に立ち上がる口縁部の形態は、布留式の伝統を継ぐという指摘があり、あるいは布留式甕の名残をのこしつつ朝鮮半島系甕と融合したものの、というのが実情に近いかもしれない。

完全に長胴化した甕が朝鮮半島系譜であると指摘される点から見れば、この甕を「長胴化系」という名称でひとくくりにはことに、論旨に粗雑さを感じるが、ここではひとまず調整技法・口縁部形態の共通性が前型式までの甕との相違より優勢である点を重視し、須恵器を伴う時代の土師器甕を包括的に呼称するものとして暫定的に用いる。

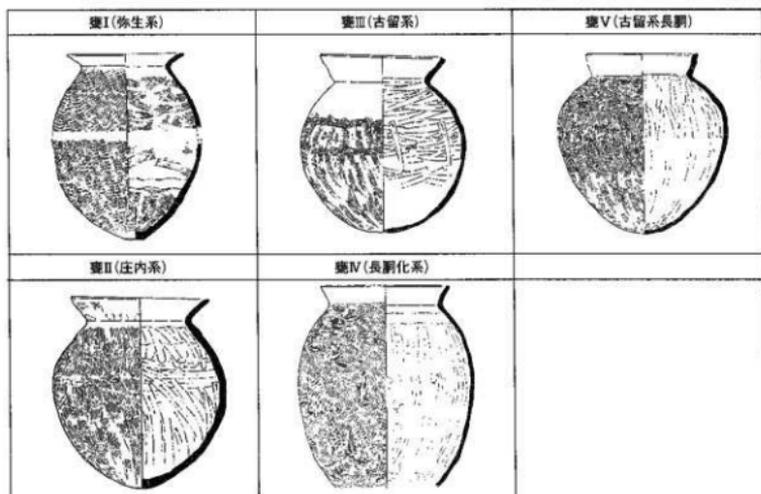


図78 甕の型式

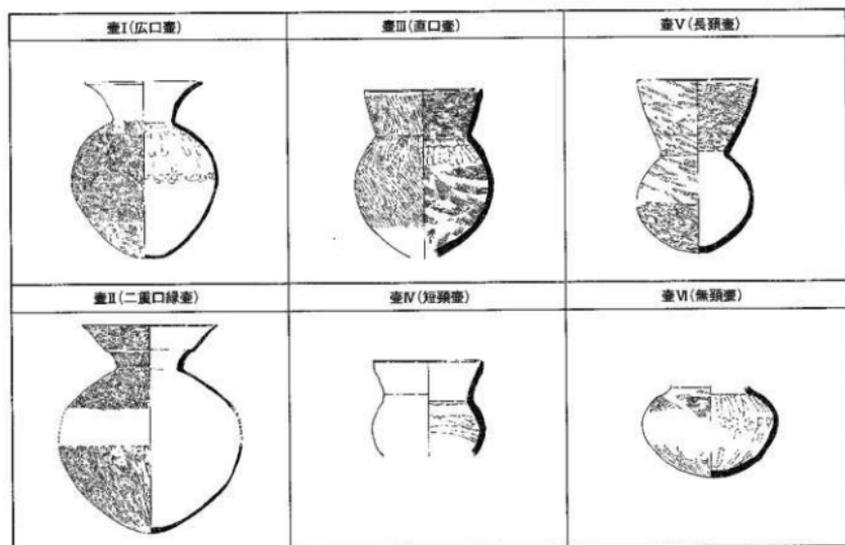


図79 壺の型式

b. 壺

以下に述べるように壺の型式は多彩である。しかし壺I～III型式に伴うものと、壺IV・V型式に伴うものとの間にはやはり質・量ともに隔絶の感がある。

おそらく壺IV・V型式が出現する時期には多くの型式の壺が消滅していたであろうと考えられ、土師器壺の出土量がI～III型式とIV・V型式とは極端に異なるのもそのためであろう。

また大型品や精製品の壺も、壺I～III型式にのみ伴うもので、壺IV・V型式に伴うものは粗製の印象がぬぐえない。

この現象は壺I～III型式が古墳時代初頭～古墳時代前期という時期のものであることを考えると、須恵器出現以前の社会が土師器にあたえる意味が変化した事の現れであると考えられる。

その他型式にのらないものとして朝鮮半島系講のいわゆる韓式系土器が存在する。

壺I 広口壺

本調査地から出土した広口壺は器高が30cmを越える大型品が多く、球形に近い体部を伴う。外面を細かなハケで、内面を丁寧なナデで仕上げた精製品が目立つ。小型のものもハケ、ヘラミガキのどちらかで例外なく丁寧な調整を施している。

壺II 二重口縁壺

器高が30cmを越える大型品とそれ以下の小程度の大きさのものもどちらも存在する。明瞭な段をもって外反する口縁部に球形ないし扁球形の体部がつく。いずれもハケ、ヘラミガキのどちらかで例外なく丁寧な調整を施している。

壺Ⅲ 直口壺

本調査地では大型品は認められず、中型品のみである。胴部が欠損しているものもあるが、ハケ、ヘラミガキのどちらかで丁寧な調整を施している。

壺Ⅳ 短頸壺

I～Vのすべての型式の壺に伴って出土しているが、大型品は認められず中・小型品ばかりである。出土例が少なく、完形品もないため、細部は不明な点が多い。

壺Ⅴ 長頸壺

壺Ⅰ～Ⅲ型式に伴い1点出土している。ゆきとどいたヘラミガキで内外面を調整した、精製品である。

壺Ⅵ 無頸壺

Ⅳ型式に伴い1点出土している。内面はユビオサエ・ユビナデといった当該型式に多用される仕上げ方法を用いているが、外面はヘラミガキおよび細かなハケで細やかな意識で作られた精製品といえる。

c. 高坏

高坏はI～V型式の壺のすべてに共伴して出土している。本調査区における土師器高坏という形式を出土量的に見ると須恵器出現以前より須恵器出現以降のものが圧倒的に多い。逆に高坏の型式変化という視点でとらえると、須恵器出現以降の高坏は非常に画一的な型式組成となる。ただし形態変化そのものは顕著であるため、古墳時代中期以降の編年作業においては、壺よりもむしろ高坏の変化に着目すべきであると指摘する研究も複数なされている。

高坏の型式分類に際しては、坏部の形態と別に脚部の形態変化への着目も欠かせないが、本調査地では須恵器出現以前の土器を出土する遺構からは、完形の高坏の出土例が少ないため脚部のバリエーションの観察が困難であった。一方で須恵器出現以降の高坏の脚部は、わずかに肥大化する変化はあるものの、基本的に円錐形の脚柱部からくの字に屈曲する裾部が付随するものみの単一型式となる。

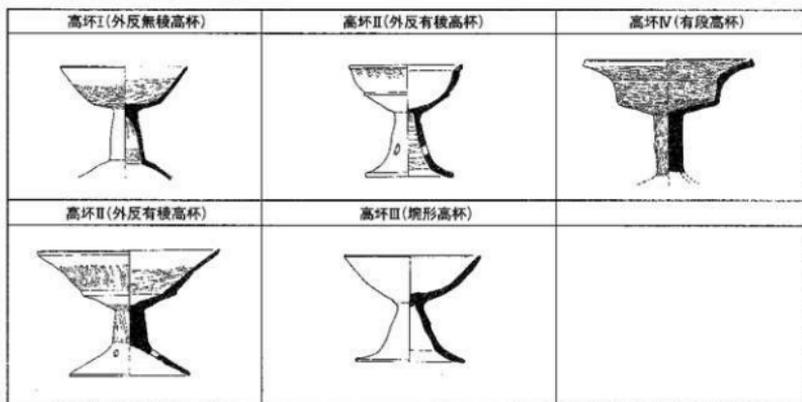


図80 高坏の型式

以上の点から土師器高坏そのものは須恵器の有無に関わらず普遍的な器種であり得たが、他の土師器同様、古墳時代中期以降の画一化した生産の枠内から抜け出すものではなかったと思われる。

須恵器出現以降の土師器高坏もまた、甕、壺同様粗製品の感があり、須恵器以前の精緻で行き届いた作りは感じさせない。

高坏Ⅰ 外反無稜高坏

甕Ⅰ～Ⅴ型式すべてに伴って出土するが、甕Ⅰ型式に伴うものは坏口縁部高が坏体部高に比してはるかに優勢である。坏部底面が平坦で、円錐形の脚柱が付随すると考えられる。

高坏Ⅱ 外反有稜高坏

甕Ⅰ～Ⅴ型式すべてに伴って出土する。Ⅰ型式の高坏同様甕Ⅰ型式に伴うものは坏口縁部高が坏体部高に比してはるかに優勢である。

ただし甕Ⅰ～Ⅲ型式に伴う高坏そのものが、Ⅳ・Ⅴ型式の甕に伴うものに比して量的にはかなり少ない。甕Ⅳ・Ⅴ型式に伴う高坏Ⅱ型式は、境形に段を施したような両者の折衷に近い形態である。

高坏Ⅲ 壙形高坏

本調査区では、甕Ⅳ・Ⅴ型式あるいは須恵器を出土する遺構に伴ってしか出土しない。ただし壙形高坏自体は弥生時代から存在する型式である。

高坏Ⅰ、Ⅱの出土数に比して出土量が多く、比較的詳細な観察が可能である。すべての高坏Ⅲ型式が、器高、口径など法量において画一的で、橙色系の色調を示すことも特徴である。

その他円錐または円柱形の脚柱部から、くの字に屈曲してひらく裾部が付随するといった共通点が挙げられるが、本調査地における個体差としては円錐部分が太短く肥大したもの、坏口径に比してアンバランスに脚柱部が長いものなどが認められる。

高坏Ⅳ 有段高坏

甕Ⅰ型式にのみ伴って出土する。中実の円柱状の脚柱部が付随するもので、ラッパ状に開く裾部を有する。中実の円柱状の脚柱部が付随する高坏は、甕Ⅰ型式にしか伴わない、弥生～庄内系までに消滅した型式である。

d. 鉢

甕Ⅰ～Ⅴ型式すべてに伴って出土する。ただし甕Ⅰ～Ⅲ型式の出土量が多いのに比べ、甕Ⅳ・Ⅴ型式に伴うものは1点のみである。

どの鉢も底部は尖り底あるいは丸底で平底のものは存在しない。大型品と小型品が存在する。そのほか托鉢壙のような形状をした鉢が1点甕Ⅳ型式に伴って出土している。

鉢Ⅰ 尖底鉢

壙形あるいは浅く皿に近い形態で直線的な口縁部のものである。外面はヘラミガキカハケで調整し、内面はヘラミガキカナデで丁寧に仕上げている。

精製品の感が強く、小型品のみで大型品は存在しない。本調査区では甕Ⅰ～Ⅲ型式にのみ伴うもので、甕Ⅳ・Ⅴ型式に伴って出土したものはない。

鉢Ⅱ 丸底鉢

鉢Ⅰ型式の壙形の底が丸くなったもの(Ⅱa)、あるいは壙形からさらに屈曲してくの字の口縁部がのびる形状のもの(Ⅱb)で、Ⅱbには大型品と小型品が存在する。

外面はヘラミガキカハケで調整し、内面はヘラミガキカナデで丁寧に仕上げている。

本調査区ではⅡb型式の大型品が1点、甕Ⅳ・Ⅴ型式に伴って出土しているが、小型品は甕Ⅰ～Ⅲ型式にのみ伴う。

鉢Ⅲ 二重口縁鉢

鉢Ⅱ型式の塊形から、さらに二重に口縁部がのびる形状のもので、甕Ⅰ～Ⅲ型式にのみ伴って1点出土している。

e. 小型土器

小型土器としては、小型丸底壺、小型器台、小型台付鉢、小型碗などが認められる。小型丸底壺に関しては、甕Ⅰ～Ⅴ型式すべてに伴って出土し、形態変化も認められる。

一方小型器台は甕Ⅰ～Ⅲ型式にのみ伴い、甕Ⅳ・Ⅴ型式の段階にはすでに消滅した器種と考えられる。

誕生当初小型器台とセット関係にあった小型丸底壺だけが、須恵器誕生後も生きながらえていく。

小型土器に関しては、実用品というより祭祀具などの性質が強く、通常の型式変化と併行しないと考えられる。

ここでは長期存続する小型丸底壺のみに焦点をあてて型式的に捉えておく。

小型丸底壺Ⅰ

くの字に屈曲する口縁部に球形の胴部が付随するもので、口径が器高を凌駕するタイプ。口縁部は内湾が基本だが、直線的なものも存在する。口縁部高が体部高にまさるものと体部高が口縁部高にまさるものが存在するが、前者は甕Ⅰ～Ⅲ型式に伴い、後者は甕Ⅳ・Ⅴ型式に伴う。

小型丸底壺Ⅱ

くの字に屈曲する口縁部に球形の胴部が付随するもので、器高が口径を凌駕するタイプ。直口ぎみの口縁部が長く長径壺のような形態のものと、口縁部が短く無頸壺のような形態のものが存在する。甕Ⅰ～Ⅴ型式すべてに伴って出土している。

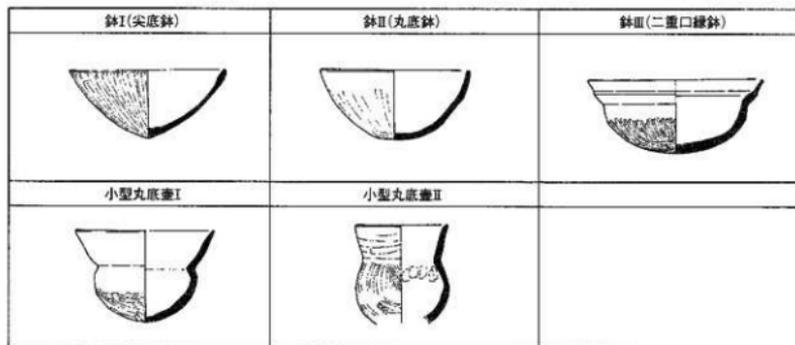


図81 鉢および小型丸底壺の型式

(4) 時期的併行関係

次に本調査区から出土した土師器を中心とする一括資料群を、上記のように大まかに型式分類した上で、既存の編年案にそって時系列順に羅列してみる。ただしこれら一括資料は、一括資料としての廃棄の同時性をもって存在すると考えている。

たとえば甕の型式をとらえてみたとき、弥生の系譜を引くもの、庄内式の系譜を引くもの、布留式の系譜を引くものというように、個々の型式はその成立にあたってすでに時代的差異が存在するのである。しかしこれらの時間的前後関係に今あえて特別な意味を与えることはせず、ある時代、ある時それらは同時に存在しえた証として一括資料ごとに一つの単位をとらえたいと思う。

以上の前提を踏まえた上で、本調査区における一括資料を4つの段階に大別して時系列順に並べたものが、図84である。

(5) 段階ごとの様相

1 段階

1段階の土器様相は、はまだ弥生時代を払拭しきっていない。甕は弥生系の平底のみで構成され、これに中実・棒状の脚柱部をもつ高坏が組み合わさる。庄内系甕が登場する以前の段階で、黒田編年のVI-2様式に該当する。

黒田はこの時期の小型丸底甕は丸底のものも存在するがまだ完全に丸底化しきっていない段階と指摘している。本調査区の一括資料でも、小型甕はまだ平底の器形を呈している。

ほとんどの器種が精細な調整技法を駆使し、丁寧に作りこんでいる。

2 段階

弥生系譜・庄内系譜・布留系譜の初系譜の甕が混在する時期である。寺沢編年の古留I様式併行期に相当する。

口縁部形態、甕体部の調整技法も3つの系譜が混ざり合っており、個々の特徴を持ったそれぞれ以外に、庄内甕の器形に弥生甕の口縁部、肩部に布留式的ヨコハケをもつというような、各系譜の要素がまざりあって一つの甕になっているものも多く見られる。

甕も多彩なバリエーションに富んでおり、大型品や二重口縁甕も健在である。

中実・棒状の脚柱部をもつ高坏は消滅し、円錐形の脚柱部にくの字に屈曲しながら開く裾が付随する高坏が登場する。この脚部の形態自体は弥生時代から存在するが、屈曲部が明瞭になり、後期式へつながる器形へ完成を見ている。坏部の器形はバリエーション豊かである。

鉢も大型品から小型品まで多彩な様相をみせる。

小型丸底甕は口縁部が発達し、口径が器高を大きく凌駕するものが日立つ。

ほとんどの器種が精細な調整技法を駆使し、丁寧に作りこんでいる。

3 段階

すでに須恵器が登場して半世紀以上が経過した段階である。TK216～23型式に併行する。

土師器甕は球形の器形にわずかに布留式の名残を感じさせるものの、画一化され、口縁部の形態は、分厚いくの字に屈曲して立ち上がり、肥厚きみに直線または内湾して端面がやや内傾する口縁部の1形態に集約されている。

段階	壺	高杯	小型丸底甕	該当する遺構	既存の編年対応
1段階			 	溝状遺物 201 上坑207	弥生VI様式
2段階	 		 	上坑201 土坑202 土坑206 上坑203 土坑210 土坑211	古留I様式
3段階		 	 	土坑206	TK216~23
4段階	 	 	 	竪穴建物 202 竪穴建物 201 平地式 建物 205 上坑216	TK23~47

図はあくまでも本調査区内での一括資料の時期差をあらわす。実際の編年の関係としては2段階と3段階の間に複数型式が存在する。

図84 一括資料同士の時期的関係

外面は粗いハケを肩部まで横位に、肩部以下は縦位に、器体全体に施し、内面はユビオサエとユビナテのみで仕上げている。そのため内面は全体に著しく凹凸し、粗製という表現がふさわしく、布留系甕の執念的なまでの精製ぶりとは対極をなす。こういった調整技法も完全に画一化されており、そこから逸脱したものは認められない。

長胴化した器形のもの、で肩部で球体の器形に布留式の名残を感じさせるもの、肩が張り、肩部から尖り気味の底部にむかって急にすぼまるものなどがある。

甕はⅡ型品がわずかに認められるものの、大型品は姿を消す。すべての型式の壺が、前段階までにくらべ数量的に著しく減少する。

高坏は円錐形の脚柱部にくの字に屈曲しながら開く裾が付随する高坏が完全に定着し、坏部は有段外反と坳形が拮抗して混在する。無後外反も存在する。まだ大型品の鉢が存在する。

小型丸底壺は口縁部が退化し、器高が口径を上回る縦長の器形のもの認められる。

4段階

TK23～47型式に併行する。甕はほとんど前段階と変わらないが、口縁部が二重口縁になったものが認められる。有段・坳形・無後外反の3型式の高坏が混在するが、若干数量的に坳形が優勢となる。脚部は基本的に円錐にくの字一形態のみだが、脚柱部が肥大化して太短くなったものが認められる。

壺・小型丸底壺ともに本調査区では存在が確認できなかった。3・4段階をとおし、全ての器種において極端に粗製化していることが大きな特徴である。

(6)変化と画期

以上のように、本調査区出土の一括資料からみた土師器の様相は、須恵器出現以前と以降で大きく様変わりしていることがわかる。特に須恵器出現以降の様相に関しては、かつて畿内の古墳時代中・後期の土師器の変遷について論じた辻の論考を大枠で追認しているものであり、六甲南麓地域が、土師器においても畿内の画一的な枠内で変化していることの追認ともなうと考えられる。

特に辻のいう古墳時代中期の両期にあたるTK216併行期とTK208併行期との間の変化、坳形高坏の優勢、小型壺の消滅なども限られた出土数の中ではあるが、本調査区の資料でも同様の現象が確認できている。

本調査区で設定した4つの段階の内、1と2段階は須恵器登場以前、3と4段階は須恵器登場以降の土師器のありようを垣間見せたが、両者の間には実に200年近い時間の空隙が存在する。

この空隙を挟み、六甲南麓の土師器は劇的とも言える変化を遂げているような錯覚にさえおちいる。なぜなら2段階と3段階とのあいだに社会にもたらされた劇的な変化の瞬間、須恵器登場期の土師器の様相を語る資料はここにはないからである。

しかし寺沢の言う布留3、4式における土師器甕の変化をみるかぎり、本調査区の資料に欠落した200年の間にも、甕をはじめとする土師器は暫時変化していたようである。寺沢の指摘するかぎり長胴化はすでに布留3式の段階で認められており、大和地方では長胴系と球形系の2種の混在はすでに布留3様式の段階から始まっていたと考えられる。

本調査区3段階の土師器甕にみたような、肩の張った器形の甕は布留式期から完全に脱却した段階から登場するもので、二重口縁の甕については布留3式からの系譜を継ぐものとみてよいだろう。

甕の調整技法における極端な粗製化に関しては、布留式を完全に脱却したどこかの段階で登場したと考えられるが、本調査区の3段階、TK216併行の段階では完全に確立され画一化したものとして現れて

いる。筆者はここに社会における土師器の意味の転換を見るのだが、その背景には土器生産体制の変化や流通機構の変化が存在し、さらにそれらを後押ししたもっと大きな社会の変化の中でとらえるべき現象であろうと考える。

(7) 小結

六甲南麓における古墳時代前期から中期にかけての土師器の様相は、その当時この地域がおかれた社会的状況を読み取る手がかりを多分に内包していることが判明したが、今回の事例は神戸市域ではまだ発表例の少ない時期の一括資料でもあり、いわば広大な風景を針の穴ほどの隙間からのぞいているようなものである。

今回の調査の一括資料は、古墳時代社会における普遍性と六甲南麓地域特有の個性とを併せ持っているはずである。普遍性については、多くの優れた論考によってすでにこれまでも描き出されてきたものを、大枠で追認する形で一部つかむことができたのではないかと考える。

一方で個性については、さらなる資料の増加と整理の機会が必要であろう。本論でのべたような六甲南麓における土師器の様相も、さらに多くの同時期・近接地域の資料の増加によって、モンテリウスの語るごとく、実証あるいは反証されていく日が近く訪れることを期待している。

〔注〕

- (1) 寺沢 薫 「畿内古式土師器の編年と一、三の問題」『奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第49冊 矢部遺跡』1936 奈良県立橿原考古学研究所 刊 所収
- (2) 辻 美紀 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究 室10周年記念論集』1999 大阪大学考古学研究室 刊 所収
- (3) 田辺 正三 『筑紫器大成』1981 角川書店
- (4) 黒田 恭正 「神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第Ⅴ様式—布留式併行期の土器様相」『森南町遺跡発掘調査報告書—第1・2次調査—』2005 神戸市教育委員会 刊 所収
- (5) (1) に同じ
- (6) (4) に同じ
- (7) (2) に同じ
- (8) (2)、(4) に同じ

〔参考文献〕

- 西 海海 「西日本の土師器」『世界陶磁全集 2 日本古代』1979 小学館 所収
- 橋本 輝彦 「近畿地方南部の土器」『考古資料大観 2 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』2002 小学館 所収
- 花谷 浩 「近畿地方の上器」『考古資料大観 3 弥生・古墳時代 土器Ⅲ』2003 小学館 所収
- 富山 直人 「兵庫県南部・瀬戸内海沿岸出土の韓式系土器」『韓式系土器研究Ⅲ』1991 韓式系土器研究会 所収
- 和田 昭吾 編 『渡来遺物から見た古代日韓交流の考古学的研究』2007
『陶邑古窯址群Ⅰ』1966 平安学園考古クラブ
- 『神戸市西区 玉津田中遺跡』—第2分冊— 1994 兵庫県教育委員会
- 『神戸市西区 玉津田中遺跡』—第5分冊— 1996 兵庫県教育委員会
- 『神戸市西区 玉津田中遺跡』—第6分冊— 1996 兵庫県教育委員会
- 『尼崎市所在 若王子遺跡』2006 兵庫県教育委員会

2. 郡家遺跡における古墳時代集落の形成と発展

(1)はじめに

第2章で述べたように、六甲南麓の古墳時代社会は対岸の大和、河内をはじめとする周辺地域と密接に関わりながら形成され発展してきたものであり、その変化は汎日本的な社会変革の中でとらえられるものである。その中に位置する郡家遺跡もその例外ではないが、より細かな視点でとらえることで、郡家遺跡古墳時代集落の個性があらわれてくると考えられる。本章では今回の調査で確認された問題点や課題などを洗い出し、必要に応じて過去に行われた調査と照らし合わせることで、郡家の古墳時代集落がどのような性質をもっていたのかについて考え、結論に代えることにしたい。

(2)祭祀か、投棄か—土坑の機能—

第2遺構面で検出した土坑26基について、土器の出土状況からタイプ分けを行うと

- A 多くの土器が破砕された上で一括投入された土坑
- B 完形品のまま土器類が納められて埋没した土坑
- C 出土状況が明確でない土坑

の3つに分けられる。Cは検討材料に乏しいものとしてここでは除外し、AおよびBタイプの土坑について考えてみると、Aタイプが古墳時代前期Bタイプが古墳時代中期の土坑と明瞭な時期差をもってとらえられる。さらに土坑内から多量の土器が出土した場合、その理由として

- ①廃棄されたものである
- ②埋納されたものである
- ③後世偶然に混入したものである
- ④貯蔵穴である

の4つが考えられるが、①、③、④であればその土坑の属性にならぬ宗教的精神活動は認められず、②は祝的習俗・祈願行為など広義の意味で祭祀行為であるととらえうるだろう。今回確認したAタイプについては、その状況から③、④の可能性は考えにくく、①か②の可能性のいずれかであると考えている。

A	遺構番号	土坑201	土坑202	土坑205	土坑213	土坑214	A
	遺物の段階	2段階	2段階	2段階	2段階	2段階	
B	遺構番号	土坑206	土坑215	土坑216	土坑217		C
	遺物の段階	3段階	3~4段階	4段階	3~4段階		
							B

図85 土坑の分類

Aタイプ土坑の特徴としては、

- ・古墳時代前期初頭の土器を出土する
- ・土器を破砕した後土坑に投入している。石も伴う。
- ・破砕した土器の破片を複数の土坑に振り分けて投入している

の3点が挙げられる。その他

- ・底部穿孔土器の破片が複数認められる（土坑201および202）。
- ・小型器台・小型丸底壺を中心とした小型土器の出土が顕著である。

なども出土土器の検討から明らかになっている。これらの状況証拠をもって何らかの祭祀的意図があると認定できるのかという点を検討しなければならないが、その場合まず、単なる投棄であれば、破砕したあとの破片をいくつかの上坑に振り分けるという面倒な方法をとったのはなぜか？という疑問が挙げられる。

また底部穿孔土器が複数認められる点については、やはり什器以外の性質があるといえるだろう。これらの点から婉曲的判断ではあるが、Aタイプ土坑については①～④の可能性のうち②が消去法的に残されると考えている。

一方Bタイプ土坑については、土器の破砕と分割という行為は伴わず、埋納なのか貯蔵の末の埋没なのかAタイプより不明確である。ここではその特徴として

- ・韓式系土器の出土が顕著である。
- ・高坏を多く伴う。
- ・ミニチュア土器を伴う。
- ・須恵器出現以降の時代でありながら、須恵器の出土量はごくわずかである。

などの特徴が挙げられるが、単に韓式系土器の出土をもってそれを土坑祭祀と断定することはできない。ただ包含層も含めた本調査区における韓式系土器すべてのうち、大半が土坑出土のものであり、土坑のものは残存状態もきわめて良好であることを考えると、これらの上坑が韓式系土器をおさめるための上坑であり、偶然の流入ではない可能性が高いと考えられる。

次に高坏の量の多さについては、須恵器出現以降の時代は土師器組成そのものが高坏に比重が傾くため、ここで単純に高坏の出土量を「普通より多い」と判断することはできない。

また、ミニチュア土器の出土については、韓式系土器とミニチュア土器という共存関係に何らかの意味があると考えたいが、一方で出土状況から「絶対に流入品ではない」という証明も難しい。

須恵器の出土量の著しい少なさについても、包含層や水路埋土内の須恵器の含有率から考えて不自然ではあるが、この現象は本調査区のほとんどの遺構にあてはまるもので、土坑に限らず建物址においても同様であり、上坑のみの特性ではない。ただ、土坑206については土器の出土状況がもっとも原位置に近い状態を保っていると考えられ、その配置などからは廃棄ではなく埋納ととらえるのが自然と思われる。

現時点では、単なる二次的な土器流入としてBタイプ土坑をとらえられるほど単純ではないものの、祭祀土坑としての決定的な証拠に乏しいことも認めざるを得ない。

ところで古墳時代の土坑祭祀では滑石製玉類を用いた例が多く見られ、玉の共伴をもって祭祀土坑と認定すべき、といった認識が広く流布しているが、この点についても検討してみよう。

土坑

遺構番号	直径(m)	深さ	形状	埴土	出土遺物の段階	図版番号	備考
土坑201	1.25	37.0cm	円形	4層	2段階	19	
土坑202	長径2.96短径2.42	43.0cm	不整形円形	4層	2段階	20	
土坑203	0.95	50.0cm	円形	4層	3～4段階	—	
土坑204	長径0.81短径30.0	12.0cm	楕円形	1層	不明	—	
土坑205	長径1.39短径1.16	45.0cm	楕円形	3層	2段階	21	
土坑206	長径0.82短径0.66	45.0cm	楕円形	4層	2段階	22	
土坑207	長径1.10短径0.85	39.0cm	楕円形	1層	2段階	22	
土坑208	1.29	29.0cm	円形	1層	2段階	22	
土坑209	長径1.06短径0.19	20.0cm	楕円形	2層	2段階	21	
土坑210	0.5	16.0cm	円形	1層	2段階	23	
土坑211	0.7	10.0cm	円形	1層	2段階	23	
土坑212	0.6		円形	1層	不明	—	
土坑213	0.7	21.0cm	円形	5層	2段階	23	
土坑214	0.8	20.0cm	不整形円形	5層	2段階	23	
土坑215	長径2.68短径1.91	45.0cm	長方形	5層	3～4段階	24	韓式系土器
土坑216	短径0.80長径不明	8.0cm	不整形円形	6層	4段階	23	
土坑217	長径0.82短径0.49	27.0cm	楕円形	2層	3～4段階	23	韓式系土器
土坑218	長径1.47短径0.60	34.0cm	楕円形	1層	3～4段階	—	
土坑219	長径1.10短径1.0	10.0cm	不整形円形	1層	3～4段階	—	
土坑220	0.72	38.0cm	円形	7層	2段階	—	
土坑221	2.37	34.0cm	楕円形	4層	2段階	—	
土坑222	0.79	23.0cm	円形	2層	2段階	—	
土坑223	0.7	16.0cm	楕円形	2層	不明	—	埴土炭層
土坑224	0.71	42.0cm	円形	4層	不明	—	

建物

	平面形(東西長・南北長)	深さ	柱数	かまどの有無	周壁溝の規模	出土遺物の段階	図版番号
竪穴建物201	4.31m×4.50m	32.0cm	2	東?	幅26cm深さ10cm	4段階	25
竪穴建物202	6.72m×6.62m	24.0cm	4	北	幅24cm深さ8cm	3段階	26～28
竪穴建物203	3.18m×2.40m	16.0cm	無	不明	幅20cm深さ10cm	3～4段階	29
竪穴建物204	5.20m×5.00m	24.0cm	4	無?	幅20cm深さ8cm	3～4段階	30
竪穴建物205	不明×7.20m	20.0cm	2以上	不明	幅28cm深さ8cm	3～4段階	31
平地式建物201	不明×4.0m	—	不明	不明	幅20cm深さ8cm	3～4段階	32
平地式建物202	7.2m×4.2m	—	無	無	幅20cm深さ4cm	3～4段階	33
平地式建物203	3.88m×2.80m	—	不明	不明	幅16cm深さ5cm	3～4段階	34
平地式建物204	3.98m×2.4m以上	—	無	北	幅40cm深さ8cm	3～4段階	34
平地式建物205	3.84m×6.0m	—	無	不明	溝20cm深さ37cm	4段階	35

溝状遺構

	長さ	深さ	幅	出土遺物の段階	備考	図版番号
溝状遺構201	19.0m以上	15.0cm	1.0m	1段階	近江系瓦	36
溝状遺構202	7.7m	5cm	1.0m	不明	溝201の続き?	—

表8 遺構観察表

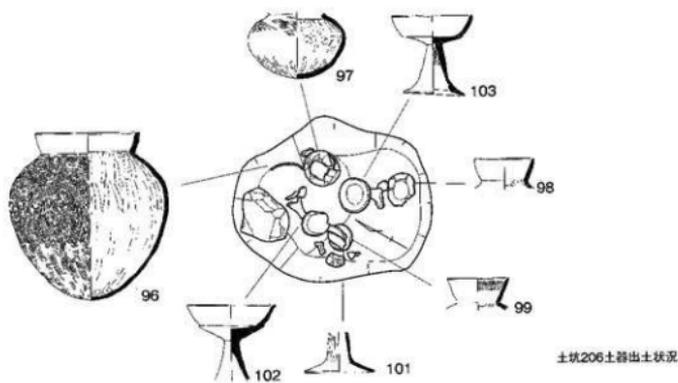
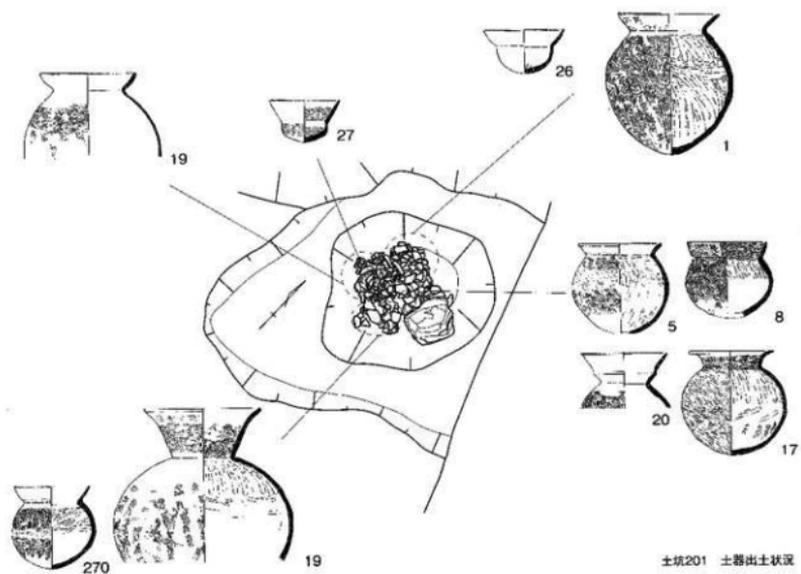


图86 土坑土器出土状况

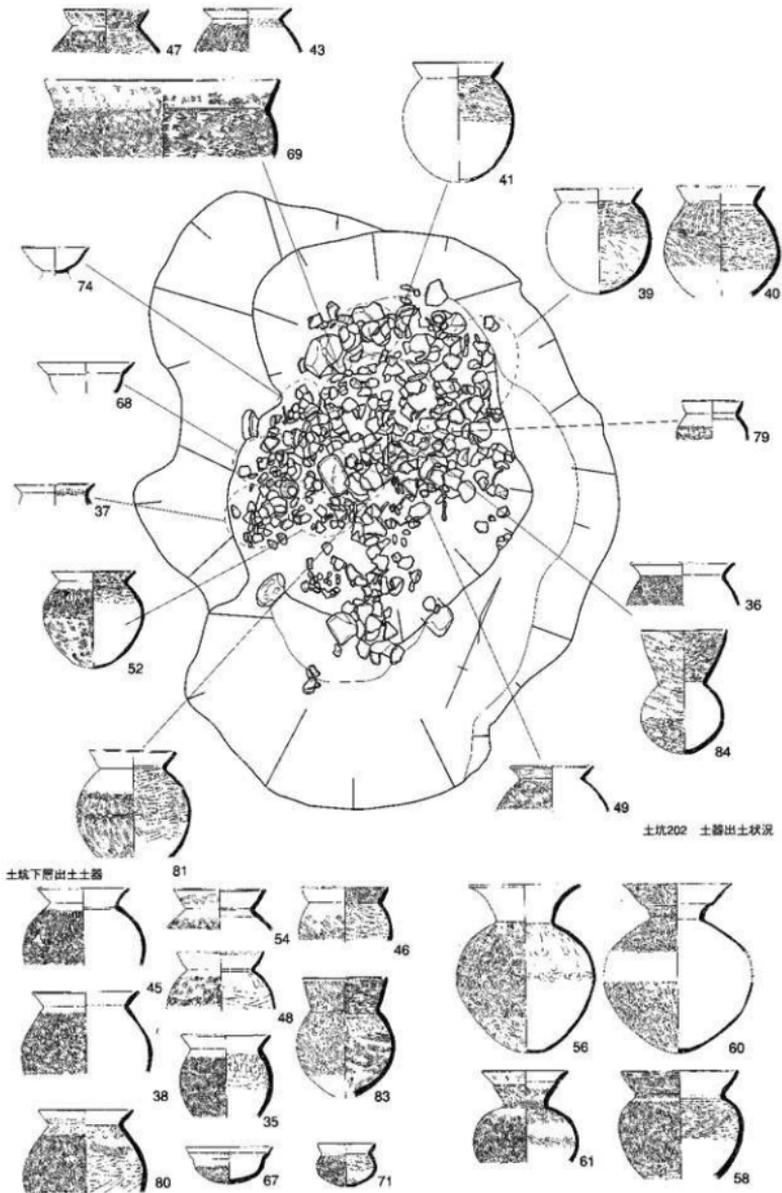


図87 土坑土器出土状況図(2)

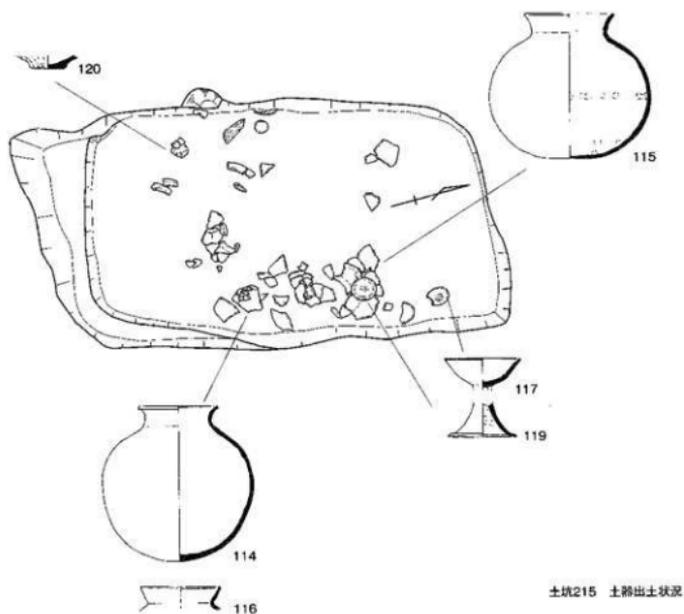
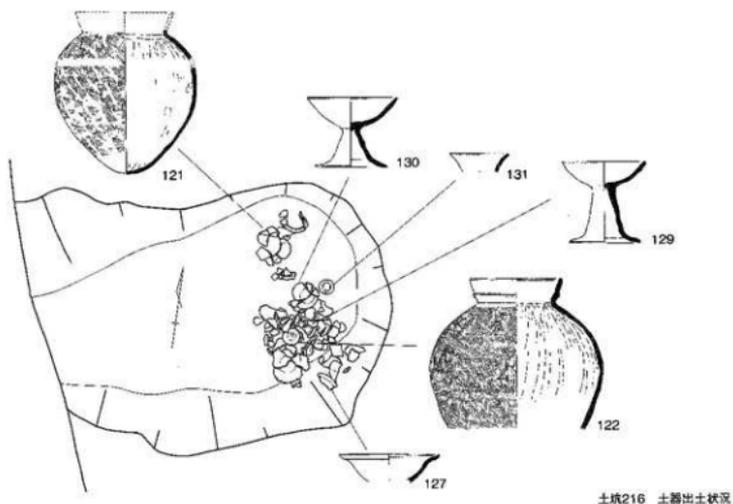


図88 土坑土器出土状況(3)

過去に行われた郡家遺跡の発掘調査でも5世紀後半の遺構から滑石製白玉を用いた祭祀土坑が確認されている例が複数あり、その多くは今回の調査地に近い御影中町一帯での調査に集中している(第29次調査、第77次調査)。したがって郡家遺跡でも5世紀後半には滑石製玉を用いた土坑祭祀が集落内で定着していたと考えられる。

近畿地方における滑石製玉類をとまう土坑祭祀の盛行は古墳時代中期以降とみるのが一般的であるが、今回の調査地でも古墳時代中期の土師器壺内に滑石製F1玉が納められた状態で出土している場所が一ヶ所確認されており、これはおそらく土坑祭祀に伴う土器であった可能性が高い。また平地式建物205とした建物址床面では高坏内に石製紡錘車が残された状態で出土しており、あるいはこれも何らかの祭祀行為の可能性もある。にもかかわらず今回確認した5世紀後半の土坑=Bタイプ土坑で滑石製玉類の出土が確認できたものはなかった。

Bタイプ土坑が祭祀土坑であるなら、集落内の近接した狭い範囲内で滑石製玉を用いた土坑祭祀と玉を用いない韓式系土器を中心とした土坑祭祀とが並存していたことになる。集落内で執り行われる土坑祭祀の形態の一つとは限らないことはいうまでもないが、Bタイプ土坑が祭祀土坑であると仮説をたて、それを検証していくならば、この異なる二形態の祭祀土坑のもつ意味の違いとは何か、を証明することが今後の課題として課せられていくことになるだろう。

以上の検討を踏まえて、AタイプはBタイプより祭祀土坑である可能性が濃厚で、Bタイプは否定も肯定もできないが、上記のような特徴があり、単なる投棄痕ではないと考えるべきではないか、ということとどまる。韓式系土器を用いた祭祀遺構の類例を集めた上で再検討する必要を痛感する。

Aタイプ土坑に滑石製玉類が伴わない点については、郡家の古墳時代集落において滑石製玉類を用いた土坑祭祀が定着する以前の祭祀形態である可能性を指摘したい。寺沢知子がかつて示したように、奈良盆地で滑石製玉類を祭具とする土坑祭祀が確認できるのが布留3式期以降であり、古墳時代前期を通じて大和政権下で生まれた祭式が、その後ゆるやかに周辺諸地域に浸透していったとすれば、布留1式併行期と見られるAタイプ土坑に滑石製玉類の出土が認められない点とも齟齬がなく、逆に過去に郡家遺跡で確認された古墳時代中期以降の滑石製玉類の祭祀土坑とあわせて考えることで、六甲南麓における土坑祭祀形態の時代変化や祭式受容のあり方を検証する資料となりうると考えられる。

(3) 住居か、それ以外か—建物の機能と年代および時期差—

第2遺構面から検出した10棟の建物址については、竪穴建物5棟と平地式建物5棟の、構造が異なる建物が混在していたことがわかった。しかし平地式住居については竪穴建物の良好な遺物出土状況と比較して著しく遺物の出土量が少なく、建物何十の時期差について出土遺物から判定することが難しい。一方で竪穴建物については以下の3点が直接証拠として確認できる。そこにそれぞれの軸方向的を加えて考察してみよう。

- ・205と202が切りあい関係にあり205→202という前後関係が明瞭である。
- ・201床面から1点だけ須恵器片が出土しており、その時期はTK208～TK23の幅におさまる。
- ・202埋土中からは1点だけ須恵器片が出土しており、その時期はTK216かその前後である。
- ・201・202がN-10°-W、204・205がN-15°-W、203がN-30°-Wに軸方向を有する。

須恵器の年代については、多数の土師器が出土する中で、わずかに1点ずつ出土した須恵器の示す時期にどれだけ信憑性があると評価するかがもっとも重要であると考えられる。ここではそこに過大な評

値を与えることを是とせず大枠でとらえ、どちらもTK216型式～TK23型式の時間幅におさまるものとし、両者の時間差は明確でないと考えることにする。次に平地式建物の軸方向については

- ・205の床面中央の落ち込み部から出土の須恵器片はTK208型式～TK47型式までの時期幅である。
- ・205がN-10°-W、204がN-15°-W、201・202・203がN-30°-Wに軸方向を有する。

となる。以上を総合して建物址群のグルーピングを行うと以下のようになる。

- A群 軸方向N-15°-W=竪穴建物205・204 平地式建物204
- B群 軸方向N-10°-W=竪穴建物201・202 平地式建物205
- C群 軸方向N-30°-W=竪穴建物203 平地式建物201・202・203

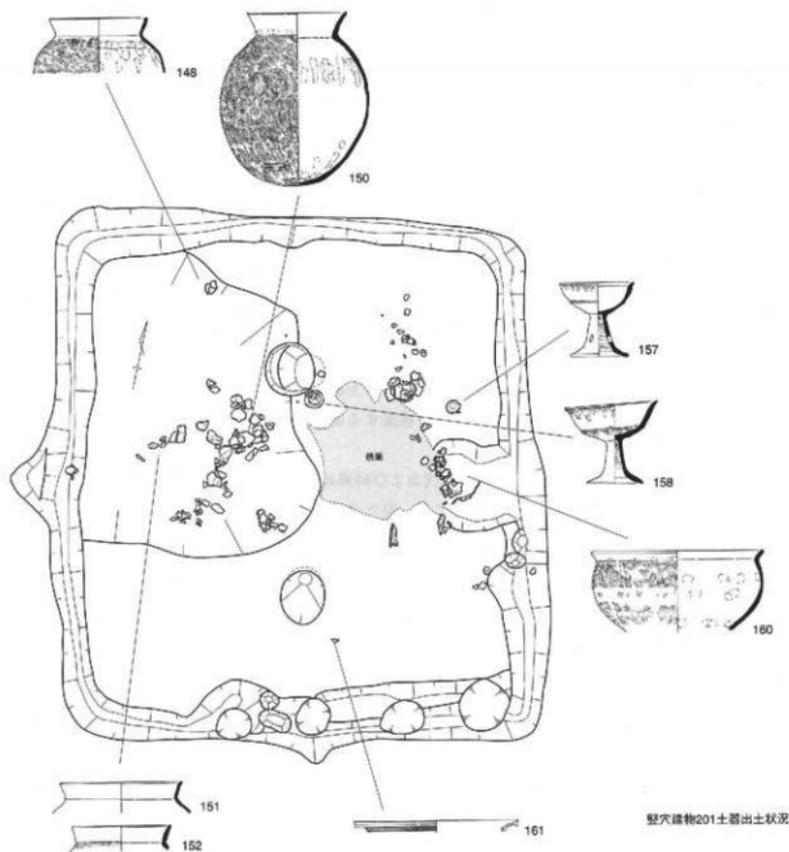


図89 建物址土器出土状況

A群→B群への移行は切りあいからもっとも確実と考えられ、C群は遺物からも遺構からもAおよびBに対する前後関係は不明である。しかしAとBの須恵器が示す時期は重なり合いながらB群がより古層を示すという矛盾があり、やはり少量の須恵器から年代を絞り込むことの限界を感じさせる。

またB群の竪穴建物向上でも、かまど位置に北かまどのものと東かまどの2種類があるが、東かまどの住居址が北かまどのものに先行するという指摘が第29次調査において報告されている。

本調査では先行するA群と考えられる平地式建物204でも北側にかまど痕の可能性が高い焼上り面が確認されており、この結果は第29次調査からの仮説と矛盾するものである。軸方向からのグルーピングを第一義ととらえるべきかどうか課題を残す結果となった。またC群同士の位置関係からも並存は不可能であり、C群自身がさらに時期的に細分可能であることは確実である。

なお、今回考えられる最古段階はTK216併行期であるが、これに先行するような須恵器の出土例あるいは遺構の検出例は、郡家遺跡全体でもいまだ稀である。第2次調査においておそらく陶器の大庭寺併行期かそれに近い定形化以前の須恵器帯が確認されていることから、今後その時期の須恵器をともなう住居址が発見される可能性は否定できないが、今のところそういった遺構の存在は確認されていない。

今回の調査地内でも、遺物包含層も含め5世紀前半にまで遡るような遺物はほとんど認められない。その状況下で切り合い関係を根拠に、A群をB群の示すTK216型式よりさらに古い段階であるという主張には客観性がないと考えられる。

以上の点から見てA、B、C群全ての建物址は、それぞれ前後に若干の振幅をもちつつもAおよびB群の示す須恵器の時期幅の最大値TK216型式～TK47型式まで、5世紀後半の約50年未満の時期幅を中心に3ないし4回程度の建て替えによって展開したものと考えるべきであろう。

では今回の調査地で確認した建物址が約50年未満の時間幅の中で営まれたことを確認したうえで、その機能について検討すると、かまど痕のあるものが3棟あることにまず着目できる。竪穴建物201・202および平地式建物204と番号を付した3棟である。これらについては建物の大きさに差が著しいが、炊事場を有する住居址の可能性が高いと考えられる。平地式建物204については、検出状態が不明瞭のため、床面を正確に検出できなかった竪穴建物の可能性も考えられる。一方竪穴建物202ではかまど痕を中心に濃厚な生活痕が確認でき、住居址であることは疑いようがない。竪穴建物203については、床全面に多量の炭化層が残されており内部で火を用いていたことは明らかにもかかわらず、明確なかまど痕が確認できなかった。この建物と平地式建物204とは平面が9㎡未満と小型であり、住居ではなく内部で火を用いるなんらかの作業場の可能性も考えられるが、明確な証拠となるものは特に確認できなかった。

一方かまど痕を伴わない上記以外の建物址について、煮炊きをしないう空間＝作業場、倉庫などの可能性も考えられるが、これもその機能を示す明確な証拠は得られなかった。ただし同一空間内に構造の違う建物を選択的に採用し、両者が並存していたことには何らかの意味があることは間違いない。それが何を意味するのかを解明することが今後の課題として残される。

特に平地式建物については、これまで郡家遺跡で確認された例がなく、今回の調査ではじめて発見された建物構造である。過去の調査で古墳時代竪立柱建物の発見例もあり、郡家遺跡では集落の中に少なくとも3種類の異なる形状の建物が存在していたことがわかる。

平地式建物の検出は非常に平面形の確認が困難で、一見細い溝あるいは竪穴建物の厨壁溝とみまごうのものであった。柱穴が伴わないことから壁立ち構造であったと考えられるが、いわゆる大壁造りにみられる痕跡は今回壁溝底面で確認できなかった。これは黒色バイラン土系土壌で検出作業が困難を極めたことに起因すると考えている。今後同様の建物が検出された場合は、竪立ち構造であるかをまず確認す

ることが必要であろう。さらに過去の調査で検出された建物址の再検討も含め、本調査区付近の居住区のみ平地式建物が存在したのか、それとも遺跡全域に存在したのか、その点も今後説明せねばならないだろう。

(4) 集落の変遷－水田、植生、自然災害－

ここまでの検討を踏まえて、さらに今回の調査地を中心に過去の調査も含めて得られた情報もとに、郡家遺跡で起こった出来事を時間的変遷にそって復元してみると以下ようになる。

- I. 弥生時代中期－すでに集落化は始まっている。集落の本体はもっと北側にあると考えられるが、土坑が残されていることから今回の調査地周辺も活動領域ではあった。
- II. 弥生時代末－今回の調査地では溝状の遺構を造り、中に土器を納める。なんらかの祭祀である可能性がある。溝に納められた土器の中には近江系のものが含まれている。集落本体は依然もっと北側である。
- III. 古墳時代前期初頭－土坑祭祀が盛行した可能性が高い。集落の南端部では大地に土坑を多数穿ち、土坑内に土器を破砕して投入する祭祀が定着していたのではないかと考えられる。本調査区付近にはこの時期の建物址が皆無であることから、居住域以外の空間と認識されていた可能性も高い。
- IV. 古墳時代中期－集落を貫く自然河川の形成に伴いこれを加工して水路化する。水路を挟んで低地部に水田を開墾、高地部に居住区が形成される。水田の開墾によって人口も増加し集落は拡大化する。

それまで居住域ではなかった集落南端部にまで住居を造るようになる。生産力が向上したことで首長を中心とした支配層はそれまで集落内で行っていた造墓活動を集落の東に移し、住吉宮町で大々的に開始する。

この時期韓式系土器が多く出土することから、渡来系文化をルーツに持つ一定数の集団が集落内に存在したと考えられる。大和に祖系を持つ滑石製玉類を用いた儀式もこの段階ですでに定着している。

この時代2～3回以上の洪水災害に見舞われ、洪水のたびに水路の水深は浅くなり続ける。南端まで拡大していた居住域は50年程度で別の場所に移動したと見られ、放棄された南端部の住居の上にはやがて遺物包含層が堆積しはじめるが、南での水田経営は継続していた可能性が高い。地震痕跡が多数残されていることから、この時期大型地震にみまわれたとみられ、あるいは居住区の移動および集落縮小の原因とも考えられる。
- V. 古墳時代後期－集落はじまって以来最大の洪水災害にみまわれ、水田埋没。生産基盤を失い一旦集落としての機能は大幅に縮小したか、停止した可能性が高い。
- VI. 奈良時代－掘立柱建物が建てられるなどしてふたたび集落として再生を果たす。古代山陽道に近く、あるいは兔原郡衙が存在した可能性もある。この時代の建物址は複数確認されているが、今のところ郡衙そのものは確認されていない。郡家の集落自体は、奈良時代を超えて以後の時代も長期にわたり集落として継続していくこととなる。

以上のように郡家遺跡では弥生時代中期には集落の形成がすでに始まっており、古墳時代前期にかけて徐々に発展し、古墳時代中期に最盛期が訪れると考えられる。水田の開墾を原動力とした集落の拡大である。御影中町一帯で古墳時代前期の住居跡が見つかった例はなく、おそらく古墳時代前期の集落は御影町御影・御影町郡家などの北側を中心に居住域が展開され、中町一帯は居住域以外の空間として認識されていたのではなかろうか。今回の調査では土坑群が多く見つかっており、これを祭祀土坑と証明できれば、古墳時代前期には集落の南端部がある種の祭祀空間であった可能性も生じる。

古墳時代中期である5世紀後半、この約50年程度がもっとも集落が拡大した時期とみられ、居住区は南端の御影中町一帯まで達し、遺跡の範囲全域に建物址の分布が認められるようになる。東隣する住古宮町遺跡において、この時期70基を越す古墳群が造営されているが、郡家の集落を生産基盤とする集団による造墓活動であると考えられる。住古宮町古墳群はTK208型式の時期に造墓が開始されTK23型式をピークにTK47型式までは盛んに古墳が作られるがTK10型式の段階で一気に減少するという曲線をたどる。これは郡家遺跡における古墳時代集落の消長とほぼ一致するもので、古墳時代前期からTK216型式ごろまでに集落の基礎を築いた第一世代の首長層がTK208型式ごろから造墓活動を開始したのではなかろうか。それまで集落内に求めていた墓域が生産力の拡大と人口増加に伴い、集落外へと発展したものと考えられる。

集落の拡大の原動力となったのは、集落南端部における水田地帯の開墾である可能性を検討したい。現在郡家遺跡はJR神戸線の軌道を挟んで南北に二分されるような形で存在するが、これまで現住所御影町御影、御影町郡家など遺跡の北半で多く調査が行われてきた。対する南半は1回あたりの調査規模が大きめの傾向はあるものの、調査例が少ない。にもかかわらず今のところ水田址が確認されているのは、第8～2次調査において城の前で6世紀後半のものが確認された以外には、2号線以南の御影町中町で実施された今回と第27次および第70次調査の3ヶ所だけである。このことから水路として利用可能な自然河川の形成に伴い、集落の最低地帯を水田化して利用したものと考えられる。ただし遺跡の範囲の最南端で行われた第4～5次調査では水田層が確認されておらず、一定の標高の範囲内で東西方向に長く帯状にのびる水田地帯が形成されていた可能性が考えられる。これまでに確認された水田址は国道2号線に沿ってほぼ遺跡の範囲の東西両端まで広がっており、この部分だけでも3.5～4 ha程度の水田域を確保していたと考えられる（これは推定できる最小の範囲なので、今後水田の範囲がさらに厳密に確定できればもっと広い可能性も考えられる）。

本調査区で行った古植生分析によると、古墳時代中期に郡家周辺の森林植生が大きく変化していることがわかった。花粉分析からは伐採により集落周辺がマツ属を中心とした二次林に変化したものと推測され、古墳時代中期の水田開墾と集落の拡大を自然科学的手法からも裏付けたとみてよいだろう。

また水田の経営は同時に自然災害との格闘という招かれざる副産物も生み出したとみられ、水路埋土は3～4回におよぶ洪水性進積層をとどめている。水路が古墳時代中期～後期半ばまでの100年程度の存続であったことを考えれば、洪水はかなり頻繁に集落をおそっていたようである。六甲南麓では古墳時代中期に限らずもっと以前から、またそれ以降も多くの洪水あるいは土石流災害の痕跡が認められ、ある意味地形上の宿命ともいえるが、古墳時代中期の集落を頻繁におそった災害は、単なる自然災害ではなく、あるいは大規模な伐採によるものとも考えられる。

さらに郡家遺跡ではこれまで多数の地震痕が確認されており、今回の調査でも古墳時代中期の遺構面と一部包含層を切り裂く形で多数の噴砂痕ないし地割れ痕と見られるものを検出している。本調査区の北東近接地で行われた第29次調査で寒川旭氏が今回のものと同質の地震痕を詳細に調査しており、5世

紀末～6世紀中ごろに大規模な地震が発生し、直後に洪水に舞われたと結論付けている。

本調査区で確認した建物址はどれも洪水砂ではなく包含層により埋没していることから見て、洪水→洪水（→洪水）→地震・洪水→大洪水といった災害プロセス（5世紀後半から6世紀初頭の50年程度に繰り返されたものである）のうち、地震が起こったあたりで御影中町付近まで拡大していた居住区は放棄され、これを契機に集落の小規模化が始まったのではないかと考えられる。

ただし水田を覆う洪水砂層から出土する土器から見て、水田そのものが埋没して放棄されるのは6世紀後半と考えられる。水田近くの居住区に人がすまなくなった以後も、水深が浅くなり以前のような水量は確保できなくなった水路を抱えつつも水田経営は継続していたようである。

本調査区ではTK47型式を超える時期を示す建物址は確認されておらず、放棄された建物の上には良好な包含層が堆積していく。包含層上にMT85型式併行期頃と思われる古墳状の方形区画が残されており、29次調査でも6世紀後半の居住址などが確認されていることから、この時期まで集落は中期より規模を縮小しつつ存続していたと考えられる。しかし6世紀末、郡家のみならず隣の住古宮町遺跡一帯でも痕跡が認められるほどの規模で大洪水がおこり、水田は完全に埋没した。それまでの度重なる災害にもなんとか持ちこたえた集落も、この大洪水で壊滅的な被害を受けたのではないかと考えられる。

(5) 韓式系土器-結びにかえて-

以上のような形で今回の調査を含めた過去の調査成果から、郡家遺跡の古墳時代集落に何がおこったかを仮説も交えて概観した。最後にもう一度整理しておこう。

郡家遺跡の古墳時代集落は前期から暫時発展の方向にあり、TK216型式前後、5世紀半ばに最盛期を迎える。TK208型式の時期に造墓を開始する住古宮町古墳群が集落の墓域であるとすれば、造墓集団の第1世代が頭角をあらわすのもそれ以前であり、両者の活動は符合している。

集落拡大の原動力となったのは集落最南端での大規模な水田開発とみられ、生産力の向上と人口の拡大にともない周辺の植生が変わるほどの森林伐採が行われたと見られるが、同時にこれが度重なる土石流や洪水災害の遠因ともなった可能性が考えられる。TK47型式の時期を越えて本調査地で住居が造られた痕跡はなく、古墳時代前期同様、居住区は集落の北側へ後退したと考えられる。

つまりTK216型式からTK47型式までの約50年程度が集落の最盛期だったことになるが、この時期郡家遺跡では多くの韓式系土器の出土を見ており、濃密な渡来系文化の痕跡をおおむね。今回の調査でもやはり韓式系土器の壺を埋納した可能性がある上坑215をはじめとして、韓式系土器を伴うこの時期の土坑が複数確認できる。

郡家遺跡でこれまでに確認された渡来系文化の要素としては、直接的なものとして韓式系土器のほか今回確認された平地式住居の存在もその範疇と考えてよいだろう。その他かまどを伴う堅穴建物や滑石製模造品を用いた土坑祭祀なども、奈良盆地を増殖とする半島由来の習俗とされ、広義の意味では須恵器や土師器甕の長胴化までも渡来系の要素といえる。しかしかまどや長胴化した壺、須恵器、土坑祭祀などは由来を半島にもつものではあるが、すでに広く列島に定着した習俗として郡家遺跡にもたらされた可能性が高く、2次的要素ととらえるべきである。1次的要素としてはやはり韓式系土器そのものの出土が多いことと、平地式建物という構造物があることの2点ではないだろうか。

森北町遺跡で報告されているように、六甲南麓には古墳時代中期初頭の段階ですでに韓式系土器の出土を見ている。今後彼地で韓式系土器を出土する遺構が複数発見される可能性が高いが、今のところ郡家遺跡ほどにまとまって出土を見た例、明確な遺構に伴う例は市域でも他にない。そういった意味でも、郡家遺跡は「渡来人の住所地」として特定できる可能性が最も高い遺跡とっていいだろう。

多くの優れた渡来人（帰化人）研究によって、半島内の政治的圧力で押し出された集団が日本に到来する三回の波があることがすでにわかっている。そのうちの2回目（波、雄略・欽明紀にあたる5世紀末～6世紀初頭と、郡家遺跡に韓式系土器が登場する時期が符合し、また集落規模の拡大がピークを迎える時期とも符合する。結語に代えて、この3つの現象には関連性があるという仮説を提起したいと思う。ただし本遺跡で出土するのはあくまで韓式系土器であって半島から直接もたらされた韓式土器ではない。このことから郡家遺跡に渡来人そのものが直接移住を果たしたとは考えにくい。

渡来人の集団流入による半島文化の招来と吸収の結果、技術革新と社会変革が促進されたことは、4世紀末以降大和政権の勢力範囲一帯で広く見られた現象である。首長連合体として出発した大和政権は半島技術の積極的な採用によって支配力の強化を実現していく。

六甲南麓域では渡来人の住所候補として他に森北町遺跡や本山北遺跡、芦屋市寺田遺跡などがあげられるが、おそらく郡家遺跡同様、これら集落の首長たちも大和政権の構成員として渡来系技術・文化の導入の恩恵に浴したと考えられる。たとえば土木技術にすぐれた渡来系氏族が土地の開発に寄与したとされる遺跡が大阪平野に残されている。このことから想像をたくましくすれば郡家遺跡発展の原動力となった水田開発を支えた陰にも、渡来系集団の技術があったかもしれないと言えるが、今のところそれを証明できるような発見はなく仮説の域を出ない。

郡家遺跡で出土するのは、韓式系土器であって韓式土器ではない。このことからおそらく数世代を経て在地化していく途中の渡来系集団の痕跡をわれわれは見ただけではないかと思われる。

古墳時代中期・5世紀半ばから後半にかけて、彼らは現れた。今回の調査地など御影中町周辺がもっとも濃厚に韓式系土器を出土することからみても、この付近が彼らの具体的な居住地であった可能性が高い。彼らは一度奈良盆地を経由してやって来た大和政権の掌握下にある集団だったかもしれないが、土器の状況から推測するに、彼らだけで氏族を構成するほどの大集団ではなく、そこから分岐した二世三世グループといったより私的な集団だったのではないだろうか。

彼らは郡家の集落において渡来系氏族としての出自にこだわったり、集落内で支配者層となるなどの道は選ばなかった（選ばなかった？）ようである。なぜなら作古宮町古墳群にみられる墓制には、渡来系氏族としての出自を誇示するものは何もない。彼らは緩やかに集落内の圧倒的多数である在地系住民と混交し、やがてその中に同化していったと考えられる。今回の調査で我々が見たものは、在地集団の集落として始まった郡家遺跡に、古墳時代中期に渡来系のルーツをもった人々が受容され、同化していくプロセスそのものであり、まだ同化しきっていない状態の痕跡ではないだろうか。

六甲南麓における渡来系集団の受容過程はおそらくいくつものパターンが存在したと見られる。芦屋市城山・三条古墳群の例のように、後期まで渡来系氏族としての出自を維持し、造墓集団となりえたものもいたし、集団を維持したまま転出していったものもあったかもしれない。武庫川や芦屋川流域には多くの連、村主の姓を冠した渡来系氏族の伝承が残されており、彼らは古代律令期まで渡来系のルーツを維持し、諸藩氏族として官人層化していった集団であろうと思われる。その一方今同郡家遺跡で見たように、古墳時代中期～後期という比較的早い段階で在地化していったものも多いたはずである。

彼らは前者のように文字や伝承に残らない存在である。しかしこのような存在があったからこそ、多くの渡来系技術が速やかに列島内に定着し、技術革新や社会変革を押し上げる力となったのではないだろうか。そういった視点でとらえてみると、今回の調査結果には六甲南麓のみならず、日本文化の基層ともいえる部分の形成過程を読み解く上で、重要な要素が多く含まれているように感じられる。

今回の調査は広い郡家遺跡の中の一点にすぎない。郡家遺跡という長い調査経歴を持つ遺跡に与えられた課題は、これまでの成果を整理し、咀嚼し、かつての集落の姿を生き生きと再現するための情報を

引き出すことである。膨大な調査成果の大半が点のまま互いに結びつかず、ドットが地図を埋めていくだけで時間が過ぎていくことを良しとせず、全てが一つの環の中で有機的に結び合わされた時、そこにはわれわれの想像をはるかに超えた、多様で意外性に満ちた祖先の姿が描き出される予感がある。その可能性は、小さな点にすぎない今回の調査結果でさえ、端々から溢れ出ているように感じられた。

つたなく粗い検証と仮説であり、はなはだ不十分な形ではあるが、多くの先達諸氏の力添えもありなんとか本書を世に送り出すことができた。この場を借りてご指導、ご教示くださった全ての方への感謝を記すとともに、一日も早くこの遺跡が新たな息吹を得て、ふるさとの財産としてより多くの人々に長く愛されるよう周知されていくことを願い文末とした。

郡家遺跡第83次調査にあたり石野博信、上原善通、檀上重光、和田晴吉の先生方より、お忙しい中現地までご足労いただき、ご指導・ご教示を賜りました。文末ではありますが改めてここに記し、重ねて厚く御礼申し上げます。

〔参考文献〕

- 寺沢 知子『王権の祭祀とマツリ』『考古資料大観 10 弥生・古墳時代 遺跡・遺構』2004 小学館
 寺沢 知子『祭祀の変化と民衆』『季刊考古学 第16号 古墳時代の社会と変革!』1986 雄山閣
 柴田 昌二『高地性集落と山住みの集落』『考古資料大観 10 弥生・古墳時代 遺跡・遺構』2004 小学館
 大貫 克彦『弥生・古墳時代の玉』『考古資料大観 9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』2002 小学館
 河野 一隆『石製模造品』『考古資料大観 9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』2002 小学館
 酒井 清治『渡来人の移住と模倣土器』『季刊考古学 第24号 土器から読む古墳社会』1988 雄山閣
 西田 敏秀『朝鮮半島と古代の枚方』『群像大王と渡来人』1998 森浩一・上田正昭編 大巧社 刊
 鎌木義昌・亀田修一『神戸市森北町遺跡出土陶質土器・軟質土器』『古文化談叢 20集』1989
 上原 善通『水田の考古学』1991 東京大学出版会
 平野 邦夫『婦人人と古代国家』2007 吉川弘文館
 段 照麟『兵庫の中の古代朝鮮』1985 神戸新聞出版センター
 武田 幸男 編『古代を考える 日本と朝鮮』2005 吉川弘文館
 『季刊考古学 第96号 古墳時代の祭り』2006 雄山閣
 関西大学文学部考古学研究室 編『八十塚古墳の研究 関西大学文学部考古学研究 第7冊』2002
 神戸市教育委員会『住吉町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書』2001
 大阪府立弥生文化博物館『大和王権と渡来人 平成16年秋季特別展』2004

写 真 图 版



写真12 II区水路(左) 竪穴建物201(右) 検出状況 西から



写真13 II区水路内木質遺物出土状況 北西から



写真14 Ⅲ区水路検出状況 南から



写真15 Ⅳ区水路北岸 検出状況 西から



写真16 II区土坑201土器出土状況 南から



写真17 II区土坑202（手前）土坑205（奥）土器出土状況 東から

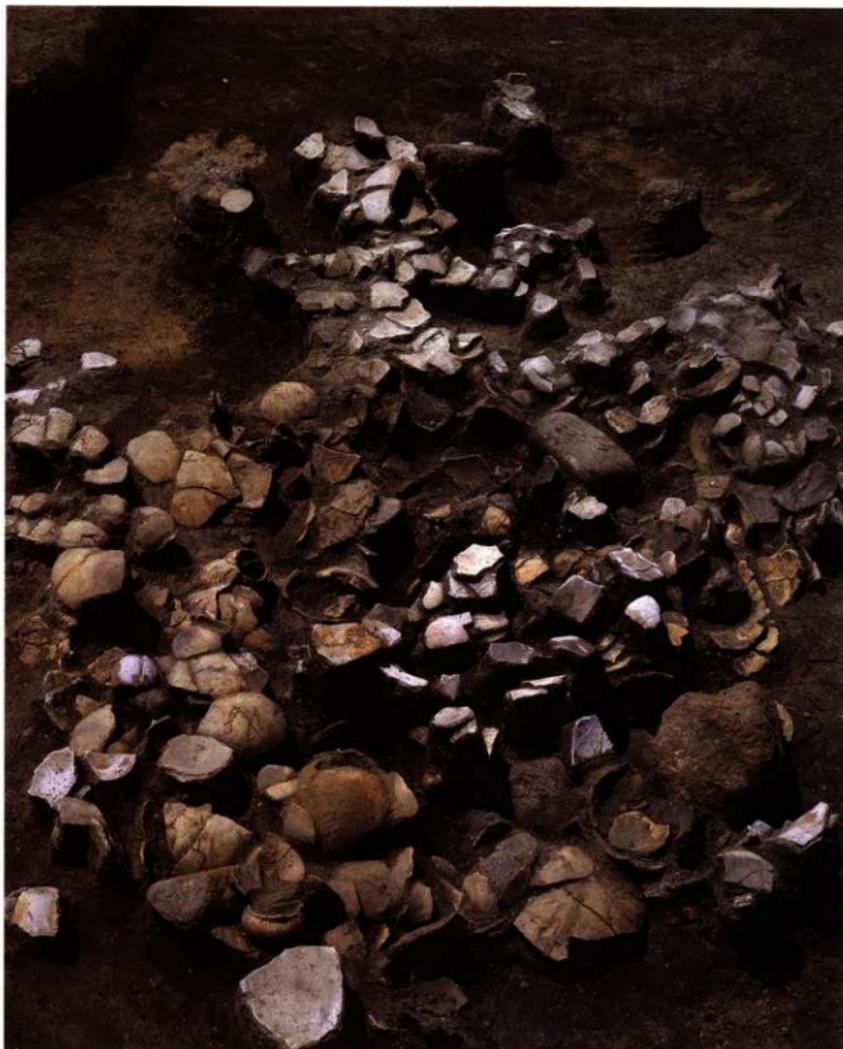


写真18 II区土坑202土器出土状況 東から



写真19 II区水路(左)溝状遺構201(右)検出状況 東から



写真20 III区壁穴建物201土器出土状況 西から



写真21 IV区竪穴建物202検出状況 南から



写真22 IV区竪穴建物203検出状況 南西から

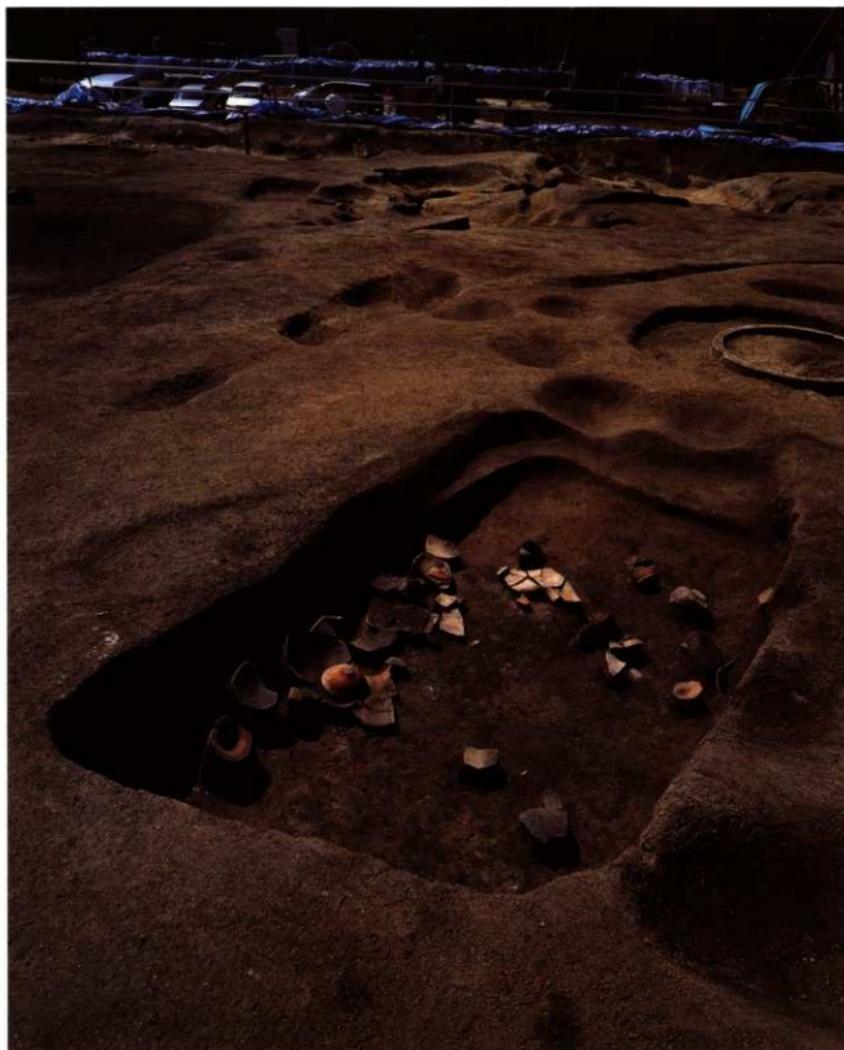


写真23 IV区土坑215韓式系土器出土状況 北から

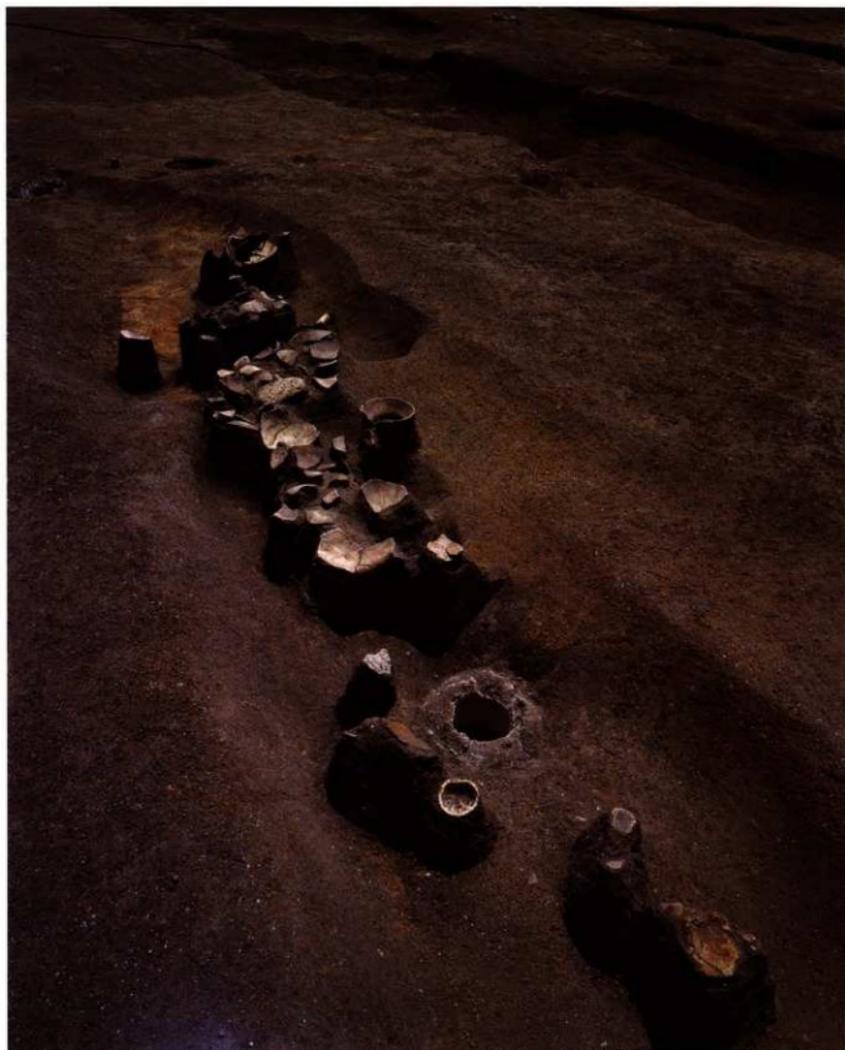


写真24 III区溝状遺構201土器出土状況 北東から

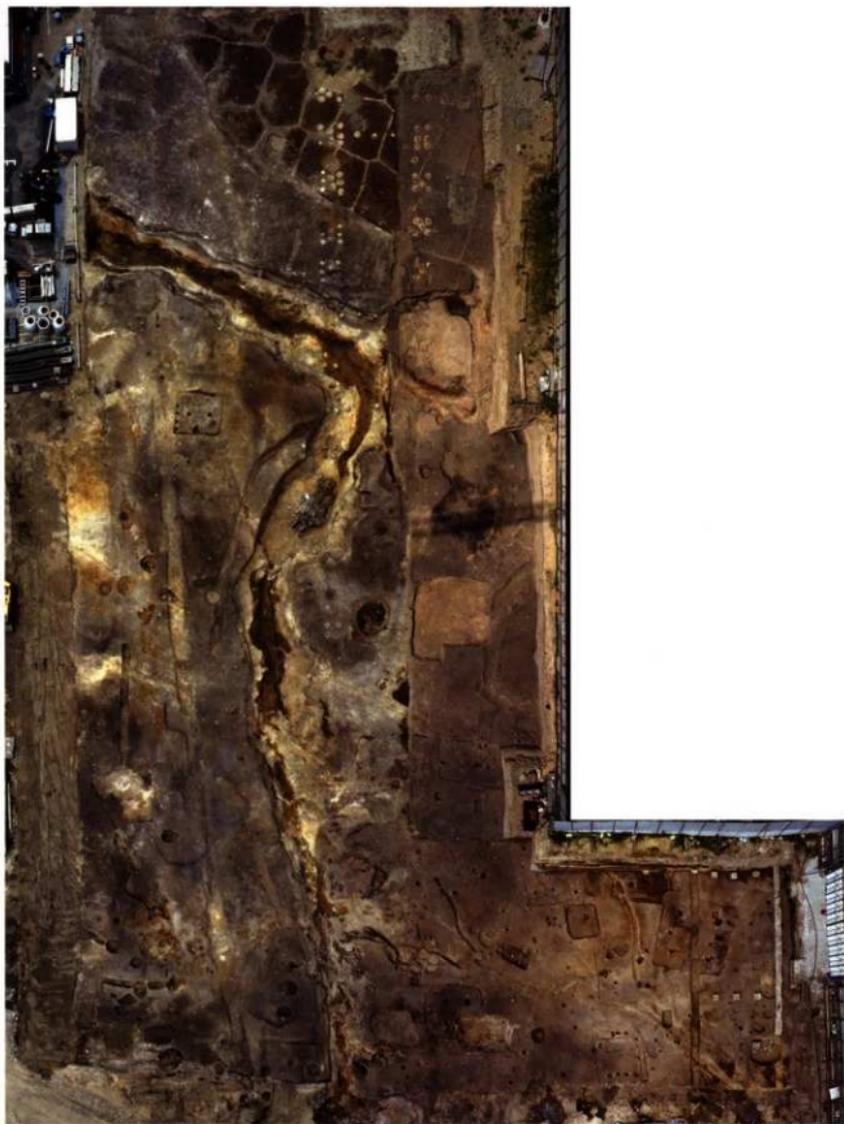


写真25 調査地全景 (空中写真・モザイク)



写真26 第2遺構面出土土器



写真27 土坑201出土土器



写真28 土坑202出土土器



写真29 土坑214出土土器



写真30 土坑215出土土器轉式土器



写真31 土坑206出土土器



写真32 溝状遺構201出土土器



写真33 竖穴建物201出土土器



写真34 竖穴建物202出土土器



写真35 Ⅲ区水路 木質遺物出土状況 南西から



写真36 N区水路北岸土器群出土状況 南西から



写真37 N区水路北岸土器群出土状況 西から



写真38 N区水路北岸土器群出土状況 北西から



写真39 N区水路北岸土器群出土状況 北西から



写真40 IV区水路北岸土器群検出状況 南西から



写真41 IV区水路北岸土器群検出状況 南西から



写真42 Ⅲ区水田 畦畔および水口検出状況 北西から



写真43 V区水田検出状況 北西から



写真44 V区水田大畦畔検出状況 南から



写真45 III区水田 畦畔検出状況 北東から



写真46 III区水田 畦畔検出状況 北東から



写真47 III区水田 畦畔検出状況 北東から



写真48 III区水田 人足痕検出状況 北西から

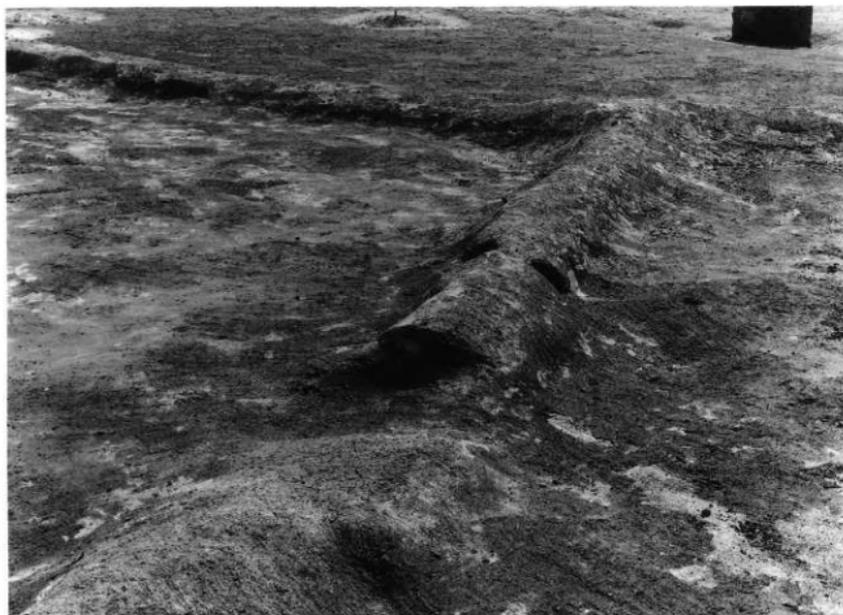


写真49 Ⅲ区水田 水口検出状況 北東から



写真50 V区水路内堆積状況 (北壁) 南から



写真51 Ⅲ区竪穴建物201 (手前)水路 (中)水田 (奥) 西から



写真52 Ⅲ区竪穴建物201土器出土状況 北から



写真53 Ⅲ区竪穴建物201完掘状況 東から



写真54 IV区竪穴建物202かまど及び炭化材検出状況 北西から



写真55 IV区竪穴建物202かまど検出状況 南西から



写真56 IV区竪穴建物202かまど 支脚柱出土状況 南西から



写真57 IV区竪穴建物203炭化材検出状況 北西から



写真58 IV区竪穴建物203完掘状況 北から



写真59 IV区竪穴建物204完掘状況 西から



写真60 IV区竪穴建物205完掘状況 南から



写真61 IV区平地式建物201・202（左奥・左）竪穴建物203（右）土坑215（右奥）検出状況 西から



写真62 IV区平地式建物201検出状況 北から



写真63 V区平地式建物205土器検出状況 北西から



写真64 V区平地式建物205完掘状況 北西から



写真65 V区平地式建物205土器出土状況 北から



写真66 V区第2遺構面全景 東から



写真67 V区水田検出状況 西から



写真68 II区土坑群検出状況 西から



写真69 II区土坑202(手前)土坑205(奥)検出状況 東から



写真70 II区土坑202完掘状況 南から



写真71 II区土坑206土器出土状況 西から



写真72 II区土坑207土器出土状況 西から



写真73 II区土坑211土器出土状況 南東から



写真74 IV区土坑214土器出土状況 南東から



写真75 IV区土坑214・土坑213検出状況 南から



写真76 IV区土坑216土器出土状況 北東から



写真77 IV区土坑217土器出土状況 南から



写真78 IV区第1遺構面全景（手前は掘立柱建物101）南から



写真79 N区掘立柱建物101-22 土器出土状況 東から



写真80 N区第1遺構面 南東から



写真81 V区第1遺構面全景 東から



写真82 V区方形区画土器出土状況 南東から



写真83 I区第1遺構面全景 南から



写真84 I区第2遺構面全景 南から



写真85 土坑201出土土師器 甕



写真88 土坑201出土土師器 甕



写真86 土坑201出土土師器 甕



写真89 土坑201出土土師器 甕



写真87 土坑201出土土師器 甕



写真90 土坑201出土土師器 甕



写真91 土坑201出土土師器 壺



写真95 土坑201出土土師器 壺



写真92 土坑201出土土師器 壺



写真93 土坑201出土土師器 壺



写真96 土坑201出土土師器 壺



写真94 土坑201出土土師器 壺



写真98 土坑201出土土師器 壺



17

写真99 土坑201出土土師器 壺



19

写真100 土坑201出土土師器 壺



24

写真101 土坑201出土土師器 鉢



25

写真102 土坑201出土土師器 鉢



26

写真103 土坑201出土土師器 小型丸底壺



27

写真104 土坑201出土土師器 小型丸底壺



28

写真105 土坑201出土土師器 小型丸底壺



29

写真106 土坑201出土土師器 小型丸底壺



30

写真107 土坑201出土土師器 小型器台



40

写真111 土坑202出土土師器 甕



39

写真108 土坑202出土土師器 甕



41

写真112 土坑202出土土師器 甕



43

写真109 土坑202出土土師器 甕



42

写真110 土坑202出土土師器 甕



52

写真113 土坑202出土土師器 甕



56

写真114 土坑202出土土師器 壺



60

写真117 土坑202出土土師器 壺



57

写真115 土坑202出土土師器 壺



61

写真118 土坑202出土土師器 壺



58

写真116 土坑202出土土師器 壺



62

写真119 土坑202出土土師器 壺



63

写真120 土坑202出土土師器 壺



70

写真124 土坑202出土土師器 小型丸底壺



65

写真121 土坑202出土土師器 高坏



71

写真125 土坑202出土土師器 小型丸底壺



75

写真126 土坑202出土土師器 小型器台



67

写真122 土坑202出土土師器 鉢



77

写真127 土坑202出土土師器 小型鉢



69

写真123 土坑202出土土師器 鉢



78

写真128 土坑202出土土師器 小型台付鉢



80

写真129 土坑201-202接合資料 土師器甕



82

写真132 土坑202-205接合資料 土師器甕



81

写真130 土坑201-202接合資料 土師器甕



83

写真133 土坑201-202接合資料 土師器甕



81

写真131 同上 底部穿孔



84

写真134 土坑201-202接合資料 土師器甕



96

写真135 土坑206出土土師器 甕



97

写真138 土坑206出土土師器 無頸壺



102

写真136 土坑206出土土師器 高环



105

写真139 土坑214出土土師器 小型丸底壺



106

写真140 土坑214出土土師器 小型丸底壺



103

写真137 土坑206出土土師器 高环



110

写真141 土坑214出土土師器 鉢



112

写真142 土坑214出土土師器 小型土器



85

写真145 土坑205出土土師器 甕



114

写真143 土坑214出土韓式系土器 壺



86

写真146 土坑205出土土師器 甕



91

写真147 土坑208出土土師器 甕



115

写真144 土坑214出土韓式系土器 壺



93

写真148 土坑208出土土師器 甕 (近江系)



122

写真149 土坑216出土土師器 甕



136

写真152 土坑217出土韓式系土器 鉢



137

写真153 土坑216出土土師器 ミニチュア土器



129

写真150 土坑216出土土師器 高杯



140

写真154 土坑217出土土師器 鉢



141

写真155 土坑217出土土師器 鉢



130

写真151 土坑216出土土師器 高杯



147

写真156 壘穴建物201出土土師器 甕



150

写真157 豎穴建物201出土土師器 甕



148

写真160 豎穴建物201出土土師器 甕



149

写真161 豎穴建物201出土土師器 鉢



157

写真158 豎穴建物201出土土師器 高坏



162

写真162 豎穴建物202出土土師器 甕



158

写真159 豎穴建物201出土土師器 高坏



168

写真163 豎穴建物202出土土師器 鉢



167

写真164 竖穴建物202出土土師器 高坏



169

写真165 竖穴建物202出土 製塩土器



180

写真166 竖穴建物204出土土師器 小型丸底钵



197

写真167 平地式建物204出土土師器 (混入品) 钵



196

写真168 平地式建物204出土土師器 (混入品) 甕



198

写真169 溝状遺構201出土土器 甕



200

写真170 溝状遺構201出土土器 甕



199

写真171 清状遺構201出土土器 甕



204

写真174 清状遺構201出土土器 高坏



201

写真172 清状遺構201出土土器 甕 (近江系)



205

写真175 清状遺構201出土土器 小形丸底甕



203

写真173 清状遺構201出土土器 高坏



307



309



308



306

写真176 韓式土器



320

写真177 平地式建物205出土紡錘車



321

写真178 玉類



331

写真179 竪穴建物202-1柱穴出土 砥石



332

写真180 土坑214出土 砥石



281

写真181 掘立柱建物101-22柱穴出土土師器



278

写真182 方形区画出土須恵器 提瓶



279

写真183 方形区画出土須恵器 提瓶



280

写真184 方形区画出土須恵器 瓶

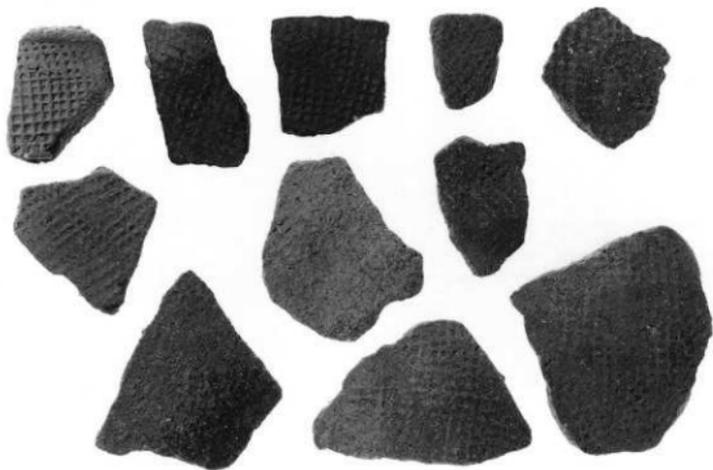


写真185 第2遺構面出土韓式系土器



写真186 水路出土木質遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぐんげいせきはくつちょうさほうこくしょーだい83じちょうさー							
書 名	郡家遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	第83次調査							
編 著 者 名	石島 三和(編・著) 中村 大介(第5章第7節3項)							
編 集 機 関	神戸市教育委員会							
所 在 地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480							
発行年月日	平成19年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
<small>さんけ</small> 郡家遺跡	<small>ひょうごけん</small> 兵庫県神戸市東灘区 <small>みかげなかまち</small> 御影中町3丁目	28100	01-5	34度 42分 50秒	135度 15分 18秒	平成19年4月9日～ 平成20年3月31日	第1遺構面 4,950㎡ 第2遺構面 4,498㎡ 延べ<9,456㎡	商業施設 建設に伴 う
	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落遺跡	古墳時代中期		住居址 水田 水路・土坑		土師器・須恵器・韓式土器		
要 約	神戸市東灘区に所在する郡家遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡だが、そのうち古墳時代の遺構がもっとも量的に顕著な集落遺跡である。今回の調査では古墳時代前期および古墳時代中期の遺構面(第2遺構面)と古墳時代後期および奈良時代までの遺構面(第1遺構面)の2面を検出した。そのうち第2遺構面からは、韓式系土器を伴う土坑や埴輪跡、古留1式併行の祭祀跡の可能性が高い土坑などを確認したほか、水路、水田といった当時の集落景観を復元する上で重要な要素が多く確認された。							

郡家遺跡
第83次発掘調査報告書

2008年3月31日

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL. 078-322-6480
印刷 デジタルグラフィック興
神戸市中央区弁天町1-1
TEL. 078-371-7000